

弱くてニューゲーム

双子うさぎ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二度目の人生は縛りプレイだったー

前世の“ 霊幻新隆 ” はチートレベルの最強超能力者だったけど、現世では超能力が消えていた。超能力なしでもなんとか頑張つて色々奮闘し、原作の“ 霊幻新隆 ” になっていくー

pixivにも投稿してます。

※2021/10/19、アニメ3期制作決定きたー!!!! やったー!!!!

※2023/07/02、連載再開。亀更新ですみません!!!

!!!!!!

目次

ある超能力者の話	1
ある無能力者の話	34
ある霊能者の話	65
ある詐欺師の話〔上〕	121
ある詐欺師の話〔中〕	211
ある詐欺師の話〔下〕①	299
ある詐欺師の話〔下〕②	389
ある霊幻新隆の話①	506

ある超能力者の話

彼には世界がひどく陳腐なものに見えていた。

草木も眠る丑三つ時。

辺りに光はなく、暗闇に包まれていた。

虫の音一つしない静寂の中。

唐突に光が浮かび上がる。

柔らかな薄明かりに照らされ、周囲の様子が露わになっていく。現れたのは異様な霧
囲気を発する廃屋だった。コンクリート造りの三階建ての建物で、玄関の壁には「○×
病院」の文字が彫られている。

廃墟の前で佇む人間が一人。

光源を揺らしながら、そびえ立つ廃病院を見上げる。

「……ここが噂の場所か」

死んだ魚のような目が印象的な男だった。

20代半ばに見える長身瘦躯。灰色のスーツを着こなし、一見すれば会社帰りのサラリーマンのように見える。

しかし彼の手には鞆はなく手ぶらだった。

何より普通の会社員が深夜の廃病院に一人きりでいるわけがない。

男は眠そうにあくびをしながら、廃病院の敷地内へと足を踏み入れる。

立ち入り禁止の看板を無視し、玄関の扉を開く。

建物内へ入った途端、前触れもなく男の周囲で小さな破裂音と共に青白い火花が散る。

「静電気か？」

男が訝しげな声を上げたときだった。

ちようど男が立っている場所の真上、頭上の天井から突然に。

“~~~~~!!”

判別不能な言語を喚き散らしながら、何かが出現した。

それは人の形をした真つ黒な化け物。胴体部分は人間と変わらないが、頭部が胴体の2倍もある。歪に膨張した顔に目も鼻もない。ただ一つだけ口だけはあった。

人一人丸飲みできそうな巨大な口が。

鋭く尖った歯を剥き出しに、大口開けた化け物は獲物めがけて襲いかかる。

化け物の叫び声に反応して、天井を見上げた男は、化け物を視認する。

「あー……これはダメか？」

棒立ちになったままその場から動くことをしない。

化け物の口が男を飲み込かけた時。

閃光が迸り、大きな破裂音が周囲に木霊した。

砂塵が朦々と舞い上がる中、旋風が生まれ視界が開けてくる。

さきほどまで確かにあったはずの病院はなく、後には瓦礫の山ができあがっていた。

旋風の中心には、先ほどの男が立っている。

男の周囲にはいくつもの光球が浮かんでおり、周囲を照らす電灯の役割を果たしていた。

大きくその場で伸びをした男の体が宙に浮く。

男の体はどんどん上へ上がっていき、病院を見下ろすほどの高さまであがる。

「やっぱりこうなるか。まあ、人の言葉話せない時点で怪しかったもんな」

やる気なしに自身の頭をかきながら、ため息をつく。

ため息が吐き出されたタイミングで、男の周りに散らばった瓦礫の山がぶわりと一斉に浮かぶ。

残像が見えるほどの凄まじい速さで瓦礫が空を飛び交う。

「今回もハズレか。期待してたんだけどな」

映像の巻き戻しのように、瓦礫が元の建物へ姿を変えていく様を退屈そうに眺めながら、男は大口開けてあくびする。

さらに二回ほど男があくびをした頃には、全てが元通りに直っていた。

「……帰って寝るか」

足下にみえる病院を男は暫し眺めるも、興味を失ったように病院から目をそらし、一言ほつりと呟く。

「……つまんねー」

男の姿は一瞬ブレた後、忽然といなくなった。

同時に光源も男と共に消失し、周囲は再び闇に包まれる。

最初から何もなかったかのように、男がそこにいた痕跡は全て消えた。

高層ビルの最上階にあるスイートルーム。

全面ガラス張りになったその部屋は360度、外の光景がよく見える。

暗闇に浮かぶ人工の光の群はさながら天の川。

しかし部屋にいる者は美しい夜景をみていなかった。

巨大なベッドに寝つ転がり、何も無い白い天井をぼーっと眺め続けている。

俺は何をやってるのだろうか。

一人自問自答しながら、悶々と何か考え込んでいる。

「……はあ」

自分の納得いく答えは見つからなかったらしい。

陰鬱なため息をついた後、灰色のスーツを着たままの男は緩慢な動作で上体を起こし

た。

ボリボリと自身の頭を掻きながら、ベッド脇に備え付けてある冷蔵庫の扉を開き、水入りペットボトルを取り出す。

一緒に入ってたガラスコップも手に取った男は、ペットボトルの水をコップに注ぎ始めるも、ふとした拍子で、男の手からコップが滑り落ちる。

水の入ったガラスのコップは床にぶつかる直前、弧を描くように浮き上がった。

コップからこぼれた水も大小様々な丸い球となり、コップと一緒に空中遊泳している。

まるで無重力空間のように。

不可思議な光景に男は驚くことも感動することもない。

何故なら目の前の現象は、男にとって見慣れたものだった。

男の手の中にコップが収まり、こぼれた水もコップの中へ吸い込まれていく。

そして何事もなかったように、コップを傾け水を飲む。

男の名前は靈幻新隆。

彼の正体は会社員でも富豪でもない。

生まれつきの超能力者、ナチュラルだった。

超能力を發揮したのは、彼が生まれてすぐのこと。

彼は産声をあげるのと同時に、あらゆるものを宙に浮かした。

医療器具、椅子、棚、母親や医者、看護師たち。

病院の中だけでない。

その日、世界は地上にある全てのものが宙に浮かぶという、前代未聞の超常現象に見舞われた。

当時を知る人がいうには、世界滅亡の前触れだの根拠もない噂があちこちで飛び交い、世界中が大混乱になりパニックだったという。

さて、世界全てのものを一時的に浮かすという、とんでもない力を發揮したこの赤ん坊。

赤ん坊の持つ力はサイキネシスだけではなかった。

自力で満足に動けず、喋ることもできない赤ん坊は、声をあげて泣くことで自分の存在を周囲にアピールし、自らの欲求を満たそうとする。

しかし霊幻新隆は他の乳児と違い、泣いたりしなかつた。
なぜなら。

“ お腹すいた ”

“ 抱っこしてほしい ”

“ ねむい ”

これの欲求を直接伝えることができたから。

それも自分の近くにいる大人の脳内へ直接テレパシーで。

たちが悪いことに飛ばすのはテレパシーだけではない。

確実に自分の要求が通るように催眠波を受信した大人が、甲斐甲斐しく赤ん坊の世話をしている。

今も発したテレパシーと催眠波を受信した大人が、甲斐甲斐しく赤ん坊の世話をしている。

常に快適な状況に、赤ん坊はご満悦した様子で笑っていた。

周りにいる大人は自分の世話をみてくれる都合のいい存在。

世話をしてくれるのなら、親でも他人でもどうでもいい。

“ 親が我が子に与える無償の愛 ” など、超能力を使えばいくらでも誰からでも好きな

だけ作れるのだから。

倫理観、道徳。

そんなもの、生まれて間もない赤ん坊にあるはずもない。

あるのは本能的な欲求のみ。

それが満たされるためなら手段は問わない。

別にこの赤ん坊に限った話ではなく、他の赤ん坊だってそれは一緒だ。

ただその手段が泣くか超能力の違いだけである。

もつともその違いが決定的な差だったが。

こうして赤ん坊は一度も泣くことなく、すくすくと大きくなっていった。

乳児の時点で既に言葉を覚えるより先にテレパシーを使い、歩く前に自身の体を浮かして空を飛ぶことを覚えていたが、成長し自我がはつきりしてくると、より頻繁に超能力を使うようになっていく。

周りのものが全てが遊び場であり玩具そのもの。

自分に備わった強大な超能力を使ってやりたい放題だった。

道路を走る車を次々に浮かせ、玩具のミニカーのように遊んだり。

またあるときは、映画に登場した空中都市を真似して、調味市丸ごと空中に浮かせた。しかしどれだけはた迷惑な行動しても。

人々は蜘蛛の子散らすように逃げるだけで、誰も叱つたり注意しなかった。触らぬ神に祟りなしとばかりに、周りの大人は知らんぷり。

桁外れの力を持った子供の悪戯を注意できる大人は一人もいなかった。

誰からも注意されず、野放し状態の子供の行動はさらにエスカレートしていく。その結果――

学生服を着た少年が何やら熱心に本を読みながら横断歩道を渡っていく。

歩行者信号が赤色でも気にせず。

信号無視した少年に向かって、けたたましいクラクション鳴らしながら大型トラックがつつこむ。

激しい衝突音が周囲に響きわたる。

遠巻きに眺める野次馬のざわめきと遠くで聞こえる救急サイレン。

無惨にひしゃげた車体は横倒しになり、タイヤが空回転していた。

一方、トラックにぶつかったはずの少年はというと。

「へえ、こんな力の使い方もあるのか」

全く意に介してなかった。

トラックをバリアではじき返した少年は周囲を気にする様子もなく、本を読み続けている。

ちなみに手に持つてる本は異能者バトルマンガ。

「試してみるか。お、これも面白そう」

気になるページを見つけては、嬉々としてペンでマークをつけていく。

彼は自らの超能力を開発、訓練することにハマッていた。

ただ物を浮かせるだけでなく、様々な使い方を模索し研究する日々。

なお参考にしたのは、映画や漫画などのフィクション、創作物だった。

面白そうだと思えば挑戦してみても、会得していく。

人の身に余るほどの強大な力を持った少年。

力に振り回され苦勞する日々を送ってる思いきや、この少年、自分の力を完全に

コントロールしており、暴走させたことは一度もなかった。

漫画の中ででてくるあらゆるタイプの超能力も、見様見真似ですぐに自分のものにして

てしまう。

何でも器用にこなし、特に応用力は突出して優れていた。

今も本片手に、新たな超能力を開花させ発動させている。

霊幻の掌に浮かんでるのはゴルフボールサイズの黒い球。

「楽勝」

ニヤリと笑った後、用なしといわんばかりに、作り出した黒い球を乱雑にポイとその辺に放り投げると、その場から一瞬で姿を消す。

少年がいなくなり、後に残ったのは黒い小さな球のみ。

ふよふよと風に揺られるシャボン玉のごとく、頼りなげにゆつくりと地面へ落下していく。

チョンと地面に接触するや否や、黒い球は弾け、凄まじい圧力が 周囲一帯に広がる。数秒後、地面には数百メートルにわたって、巨大なクレーターができていた。

霊幻新隆。

彼は“超能力の天才”だった。

レポートで自宅に戻った霊幻は、鞆をひっくり返し中身を床の上にぶちまける。

教科書やノートの他に広がるは、バラバラと散らばるあらゆる超能力に関する書籍やコピー。

学校の教科書やノートに目もくれず、超能力関連のものだけを拾い上げ、軽く目を通して用済みと判断した資料を片っ端からパイロキネシスで燃やしていく。

その途中、参考資料に紛れて、一枚の紙が滑り落ち、霊幻の目に映った。超能力で浮かせ、自分の眼前まで持っけていき確認する。

それは“進路希望用紙”。

学校のHRで担任から配布されたものだった。

第一希望、第二希望、第三希望がかかる大きな欄が設定され、欄の中に文字は何もかかれていない。

霊幻は小馬鹿にしたように鼻で笑いながら、紙を指ではじく。

弾いたのを合図に、紙が一気に燃え上がった。

灰すら残さない高温で焼き尽くすと、霊幻はベッドに寝っ転がる。

将来の進路？

霊幻の口の片端は歪にあがっていた。

放課後、教室内で将来について、色々話してクラスメートたちを遠目で眺めながら、そのとき霊幻は内心嘲笑していた。

周りの連中は進学だの就職だの色々言ってるが、そんなの俺には関係ない。

普通の人生なんてまっぴらごめん。

クツクツと声をあげながら、ベッドの上で一人、靈幻は笑い続ける。自分には輝かしい未来が待っているのだと、疑うこともなく。

学校卒業と同時に、靈幻新隆は調味市から姿を消した。

靈幻がまず最初に目指したのは「世界最強の超能力者」。

超能力研究で異能者バトルマンガを多くみた靈幻は、マンガの主人公や他のキャラに強い憧れがあった。

世界最強になろう。

そう一念発起した靈幻は武者修行という名目の世界旅行をはじめた。

どこかに超能力者がいると聞けば、レポート使って飛んでいき、また超能力者の情報がないときは、全世界に超能力者だけがキャッチできる思念をとばして、反応あった場所へ片っ端から当たっていくなんて無茶苦茶なこともやって、出会った超能力者に

片っ端から勝負を持ちかけた。

色々な超能力者たちと熱いバトルを繰り広げ、互いに切磋琢磨し強くなっていく。

そんな熱い展開を期待してた靈幻だが、現実は全く違っていた。

誰も自分と勝負してくれない。

靈幻と顔を合わせた瞬間、皆が一樣に顔色を変え、戦意喪失してしまうのだ。

他の超能力者たちは靈幻の纏うオーラで自分との圧倒的な実力差を悟り絶望し、戦う前から白旗をあげる。

特に力が強いとされる超能力者ほど、靈幻のチート的な強さに気づき無謀な戦いを避ける傾向が顕著であった。

そのため勝負の結果はいつも靈幻の不戦勝。

まれに靈幻の勝負を受けたり、奇襲しかける者もいたが、それらは靈幻の実力すら見極められない雑魚でしかなかった。

結局、特段、激闘を繰り広げることなく、靈幻新隆は「世界最強の超能力者」になった。

「……なんか違う」

「世界最強」の称号を得ても、靈幻の心には空しさしか残らなかった。

吹き抜けになった巨大ホールに多くの超能力者たちが集まっていた。

皆が一様に頭を下げ、その場に跪く姿はまさに圧巻の一言に尽きる。

そんな彼らを見下ろすように、数段高い場所から豪華な椅子に座つてる若者が一人。

頬杖をついたまま、自分の部下たちを眺めてる。

傲岸不遜の態度で椅子に腰掛けてるのは「世界最強の超能力者」。

霊幻新隆の姿がそこにあつた。

世界中をまわり、名実ともに「世界最強の超能力者」となった霊幻新隆がが次に目指したのは――「世界征服」だった。

強い超能力者探して世界中旅した霊幻は、はたと気づいたのである。

俺より強いやつがないなら「世界征服」……楽勝じゃね？

思い立ったら吉日とばかりに、霊幻はその場の勢いとノリで「世界征服」をはじめめる。

世界中に洗脳波を流してはい終了。

○月×日■時△分、靈幻は「世界征服」を成し遂げた。

全世界の人間すべて、俺の思うがままに動かせる。

フンと自慢げに鼻を鳴らした世界の支配者、しかしその上機嫌も長くは続かなかつた。

額にしわを寄せ、頭を抱え込む。

「……なんか違う」

マンガの悪役がやる「世界征服」ってのはもつと大がかりで壮大なものである。

こんなお手軽簡単三分クッキングみたいに完了させるのダメダメ、よしやり直そう。

全人類にかけてた洗脳を解いた靈幻は二回目の「世界征服」へ向けて準備を始めたのだったー。

二回目の「世界征服」のため、靈幻はこれまで会ってきた超能力者たちに再コンタクトして、スカウトをしだす。

「世界征服、一緒にやってみないか」と。

多くの超能力者たちは、この誘いに乗った。

それができるだけの力をこの男が持つてることを知っていたから。

中には誘いを断る者もいたが、大多数は靈幻と共に「世界征服」することを選んでいる。

かくして「世界征服を目指す超能力者集団」がここに誕生した。

「世界征服」計画は順調に進んでいく。

なにせ世界の超能力者の大半がこの「組織」に所属しているのだ。

並の人間が束になってかかっても、超能力者に勝てない。

あるときは町を占拠し我が物顔で闊歩し、またあるときは大国の首脳を拉致し無茶な要求を呑ませたりなどやりたい放題。

店を襲撃し金品を奪ったり、気に入らない人間を超能力で痛めつけたりと、私利私欲のために力を行使していた。

なお、組織運営に関しては、トップの靈幻は関与していない。

人事や仕事振り、計画など諸々全て部下たちに丸投げし、自身は豪華な椅子にもたれかかったまま、千里眼で「世界征服」計画を遂行するメンバーを観察していた。

地面を這う蟻の群を観察するがごとく。

「超能力を持つてない人間など生きるに値しない！我々“選ばれた特別な人間”がこの世界を征服し支配すべきなのだ！」

車を凹ませ破壊しながら、怯える民衆たちへ得意げに演説している部下たちの光景を

暫し観察してた靈幻は、ため息をつく。

「……なんか違う」

思い描いてた「世界征服」と。

もう一度ため息をついた後、靈幻はテレポートを発動させその場から消え去った。

廢墟と化した街の中心にいた人々は凍り付いたようにその場から動けずにいた。

街を占拠していた略奪者たちが演説してた最中、突如空から何か出現する。

ゆつたりと地上に降りてきたのは人間、明るい髪をした青年だった。

救世主でなく、新たな略奪者かと誰もが絶望にうちしがれたそのときだった。

事態は思わぬ方向へと動く。

突然現れた青年がこの街を占拠してた超能力者たちへ向けて手を翳した瞬間。

超能力者たちが吹っ飛ばされた。

勢いよく近くのビルに衝突し、轟音と共に民衆たちの視界から消える。

状況が飲み込めずにざわめく民衆たちをよそに、青年は肩をすくめ空を仰ぎながら、

ぼそりと一言呟いた。

「やーめた」

その声に合わせて、巨大な旋風が青年を中心に巻き起こり、渦巻いたそれは周囲へ広がっていき街すべてを飲み込んでいく。

街の住民たちは咄嗟に目を瞑り、身を守るためうずくまるがいつまでたつても衝撃がこない。

訝しげに思いつつも、おそろおそろ目を開けた先に見えたのは。すべてが元通りになった、見慣れた町並みが広がっていた。

「本当……つまんねえ」

アジトへ戻った霊幻は豪華な椅子に座ったまま瞑目し、本日何度目になるか分からないため息をつく。

なにもせずみてるだけの状況に嫌気がさしてきた。

「潮時だな」

部屋に「飽きた」とだけ書いたメモ一枚だけを残して、霊幻は「組織」のアジトから姿を消した。

ボス自ら「組織」を抜け出すなど前代未聞の出来事だろう。

その後、「組織」が「世界征服」をどうしたのか。

ボスがいなくなつたのなら、「組織」は自然消滅？

それとも他の奴がボスになって続けるのか？

組織を抜けた霊幻にとつて、もはやどうでもいいことである。

ただ一つ霊幻が学んだこと。

他人任せの「世界征服」は面白くなかつた。

その事実のみである。

「組織」のボスを辞めて、一人になつた霊幻はふらりと生まれ故郷の調味市へと戻つてきた。

特にあてもなく町中をぶらぶらと歩いていくうち、ふと立ち止まる。

街路樹の前で、小さな女の子がジャンプしていた。

ピョンピョンと跳びはね、必死に上へと手を伸ばしてる。

木の枝にはピンクの風船が引っかかっていた。

「……」

無言で風船に向けて手を翳す。

フワリと風船が独りでに浮き上がり、ゆっくりと下に降りていく。

自分の手元まで引き寄せた霊幻は、目を丸くして驚いてる女の子に

「ほらよ」

ぶつきらぼうに風船を手渡した。

普段の霊幻なら、他人のためなんかに動かない。

この行動はただの気まぐれだった。

しかし。

「ありがとう！」

ペアッと満面の笑みで女の子にお礼を言われたとき、ストーンと何かが腑に落ちた。

「ああ、俺が求めたのはこれだ」と。

そうか、なんだそうだったんだ。

俺は——「ヒーロー」になりたかったのか！

新たな人生目標をみつけた霊幻は、瞬間移動、テレポートを使って世界各地を巡り始

めた。

「ヒーロー」、それは悪と戦う存在である。

これまで培ってきた超能力を駆使して、「世界最強の超能力者」は「正義のヒーロー」として活動した。

マフィアがいるアジトを丸ごと消滅させたり、贈賄なんかやつてる政治家を洗脳して悪事をテレビの前で吐かせ。

他にも紛争地域では常に弱い者の味方をし、民衆苦しめる独裁者はやつつける。

世の中は悪に溢れており、戦う相手に困ることはなかった。

たとえ表向きは善人ぶっても、テレパシーで心を読めば裏の悪事なんてすぐわかる。

せつせと悪人退治してるうち、霊幻の活動は人々の間で話題になった。

霊幻がどこかで悪人退治していると、その様子がネット上にあがり、人々から賞賛されたのである。

マスコミにもとりあげられ、一躍有名人になった霊幻はまんざらでもない表情でテレビの取材に応じた。

これで俺は「人とは違う特別な存在」になれたんだ。

空虚だった霊幻の心は満たされ、幸せの絶頂にいた。

しかしその絶頂は長く続かない。

どれだけ悪人退治しても世の中から「悪」がなくならないのだ。マフィアのアジトを一つ壊滅しても、別の場所にまた新たなアジトは生まれ、汚職政治家は牢に入ってもすぐに釈放され元の政界へ帰ってくる。

紛争地域で肩入れた勢力は一時的にその地域で支配側になっても、長くは維持できず内部崩壊して消滅した。独裁者が消えた後、その国が迎える未来は新たな独裁者の誕生か、泥沼の内戦。

これでは颯ごっこ、きりが無い。

どうしたものかと、内心ため息つきながらも、テレビの取材を受けてた時だった。

周囲から悲鳴があがる。

なんだ？

一体何事かと声のした方へ顔を向けると、大振りのナイフ構えて男が突進してくる。

「死ねえ!!」

叫びながらナイフを振りかざし、霊幻へ突き刺そうとする男に対し、狙われた本人は平静そのものだった。

「ああ、すみません。話の途中で。ええと、何の話でしたっけ？」

パンパンと服の埃を払い、一息ついた後、霊幻はにこやかな笑顔でキャスターに話しかけるも。

「ひっ……！」

キャスターは何故か青ざめた顔で、後ずさりして霊幻から距離をとっていた。どうしたんだ一体？

訳がわからず首を傾げる霊幻の耳に、声が聞こえた。

野次馬の一人が呟いたその声が。

「なにも殺すことはないだろ」

その声を皮切りに、人々の声があがる。

「みたか？あんな簡単に人の体を……」

「怖すぎる、なんだよあれ」

「人殺しだ」

こいつら、何言ってるんだ？

さつきまで俺のこと「救世主」とか「英雄」って讚えてたのに。

殺されそうになったからやり返しただけだろ。

フツフツと沸き上がる怒りの中、霊幻はその言葉を確かに聞いた。

「化け物」

プツン。

その日、靈幻は「ヒーロー」から一転、「大量殺戮者」となった。

テレビの前で大失態やらかした靈幻は、すぐさま超能力を使ってテレビ中継映像を抹消し、偽装工作をしようと考えた。

しかし。

「……」

結局何をするでもなく、そのまま現状を放置し、靈幻はその場から立ち去った。

その後「ヒーロー活動」は辞め、人の多い場所へ行かなくなった。

代わりに足を運ぶようになった場所は、「人外」の存在が噂される呪われた心霊スポット。

同じ「化け物」なら、話が合うかもしれない。

そう期待しつつ、禁断地へ足を踏み入れ、人ならざる者に会いへ行く。

しかし大概はガセ情報ばかりで、滅多に遭遇することはなかった。

稀に本物がいたとしても、「化け物」だからか自我がほとんどなく無差別に人を襲う奴らばかり。

「……つまんねえ」

心霊スポット巡りは長続きすることなく、すぐに終わった。

拠点に使用してるホテルの一室で、霊幻は一人目を閉じ嘆息する。

結局、俺はなにものにもなれなかった。

カチカチと時計の音が聞こえる。

周囲に人の気配は感じない。

誰もいないのだろう。

ホテルの中だけじゃない。おそらくこの街の中全員待避してるんだろうな。

ゆつくりと口の両端が持ち上がる。

核爆弾投下、5分前。

既に感知していた。

俺を抹殺するために世界が動いてることに。

4分前。

街全体を包むようにバリアが張られており、バリアの外側にはうじゃうじゃと人が配置されている。

全員武装してる兵士か超能力者ばかり。

俺が逃げないための措置か。

3分前。

それでもこの場を切り抜けるのは難しくない。

核爆弾食らっても「世界最強の超能力者」の俺がバリアを展開すれば余裕で生き残るだろう。

2分前。

でも俺は何もしない。

もうどうでもよかった。

これ以上生きてても面白いことはないだろう。

1分前。

世界中飛び回り、また特別な存在になりたくて、色んなことをやってみた。

でも。

「世界最強の超能力者」になっても仲間はずれで、孤独でつまらなかった。

「世界征服」しても達成感はまるでなかった。

「ヒーロー」になっても俺は「本物」になれなかった。

10秒前。

一体何がダメだったんだろう、何が間違ってたのだろう。

5秒前。

わからない、誰も教えてくれなかった。

1秒前。

ああ、そうか俺は――

0秒。

全てが真っ白に染まり、そして――何も感じなくなつた。

で、俺の人生終わったのはいいんだが、どうなってるんだよ。

真っ白な天井を見上げながら、心の中でぼやいてる。

ぼやけた視界の端に写るのは、小さな小さな手。

俺の意志で握ったり開いたりを繰り返してる。

そう、今の俺は生まれたばかりの赤ん坊になっていた。

この状況はつまりあれだよな？

前世の記憶を持ったままの転生。

まさか本当に来世があるとは思わなかった。

それもまた同じ「靈幻新隆」とか……いやなんでだよ。

周りにいる大人たちの会話から、自分が「靈幻」の子供だと判明したのだ。

「靈幻」という名字はそうあるものじゃないし、俺が「靈幻新隆」なのは間違いないだ

ろう。

……俺、ゲームは二週目しない派だって言うのに。

と嘆いたところで仕方がない。

腹も減ったし、食い物……ミルクよこせ。

そうテレパシーで指示を送った。

すぐにもほ乳瓶持った看護師がくるだろうと思っていたのだが。

……あれ？

誰も反応しない。

念を送ったはずなのに、俺の目の前を何事もなかったように看護師が通り過ぎていく。

力弱くしたかと気を取り直して再度強く念じる。

だがしかし。

またも別の看護師が素通りしていった。

え、どうなってんだよ。

仕方ない、こうなったら自分で取りに……へ？

テレパシーを諦めて、念動力で自分の体を浮かそうとするも、体が全然持ち上がらない。

え、なんで、嘘だろ!?

何度も何度も念じてみるも、結果は変わらずじまい。

訳がわからず、頭の中がパニックになった俺は。

「あう……おぎやああー！」

普通の赤ん坊のごとく、声をあげて大泣きしたのだったー

霊幻新隆。

二回目の人生は。

全ての能力を失った、弱くてニューゲームだったー

↓T o b e c o n t i n u e d

靈幻新隆

前世ではチートレベルの世界最強超能力者だった。強さのイメージは常時1000%+他のあらゆる超能力を自在に扱える感じ。前世の記憶があるため、人生イージーモードと思いきや、めっちゃ超能力に依存しまくってたせいで、人生ハードモード状態になつてる。割と樂觀主義なのは、前世で無双チートライフしてた影響。

これくらい平気だと樂觀視してちよくちよく死にかけてる。

ある無能力者の話

「前回までのあらすじ」

靈幻「超能力でやりたい放題の人生だったが、死んで転生したら超能力なしの“弱くてニューゲーム”だった」

晴れやかな天気が続き、心地よい風がふきつける。

暑くもなく寒くもないこの時期は、外で遊ぶにはうってつけであった。

カラフルなペンキで塗られた、様々な遊具に群がりはしゃぐ子供たち。

滑り台で遊ぶ子、砂場で穴掘りを楽しむ子、友達とかけっこする子、おままごとする子、遊び方は千差万別だが、共通していえることは、皆が皆、屈託のない無邪気な笑顔で楽しんでいた。

だがしかし。

あちこちで楽しげな子供の笑い声が聞こえる中、

「……」

子供たちの輪から外れ、無言でブランコ漕いでる子供が一人。

日本人には珍しい色素の薄い髪した男の子で、胸元の名札には「れいげん あらたか」とかいてある。

靈幻新隆。

一見、どこにでもいる普通の子供だが、彼には前世の記憶があつた。

同じ“靈幻新隆”として生きてきた記憶が。

いや厳密に言うならば、今の自分と前世の自分は違うかもしれない。

なにせ前世の“靈幻新隆”と今の“靈幻新隆”には決定的に大きく違う点がある。

その違いこそ、彼にとつて致命的なものだった。

俯いた靈幻の足下にボールが転がってくる。

「……」

コロコロと転がり、自分の足にぶつかって止まったボールに対し、靈幻は拾うことなくそのままボールを見つめた。

顔をしかめ、まるで睨みつけるように。

風もなく、足下に止まったボールは微動にしない。

10秒ほどボールを凝視するも、靈幻は何か諦めたようにため息を吐いた後、ブランコから下りて思い切りボールを蹴った。

勢いよく飛んだボールは地面を数度バウンドしながら、ボール遊びに興じてた子供たちの元へ戻っていく。

「……」

再びブランコに座った靈幻は、またボーツと空を眺め出す。

真つ青な空に白い雲が浮かんでる。

ピーヒョロとトンビが鳴きながら、空を飛んでいく。

今日は天気がとて面白い。

こんな日に空が飛べたらどれだけ気持ちがいいことか。

遙か上空を悠々と舞うトンビを羨ましげに眺めながら、子供は何度目になるかわからないため息を吐く。

「……はあ」

5歳の子供にあるまじき死んだ魚のような目で、一人うちしがれる。

ああ、なんてことだ。

まさかー超能力が使えないなんて。

嘆く靈幻のそばをひゆるりと風が吹き抜けていく。

どうしてこうなった。

弱くてニューゲーム

前世の“ 靈幻新隆 ”は超能力者だった。

それも普通「？」の超能力者じゃない。

物を浮かすサイコキネシスは勿論のこと、あらゆるタイプの超能力を自在に操ることができた。

手で物を掴む感覚で物を宙に浮かし、歩く要領で空を飛び、人と会話しながら同時進行で心の声を読む。

そして常にバリア「大型トラックがぶつかっても軽々はじき返すほどの強度」を自分

の周りに張り巡らしていた。使える超能力の種類は数知れず。

底なしともいえるエネルギーは枯渇することなく、まさに使いたい放題、やりたい放題の超能力ライフを送ってきた。

それがいつたいたいどうしたことか。

また同じ“霊幻新隆”に転生したと思ったのに。

超能力が使えなくなった。

それに気づいたのは、霊幻がこの世に生まれてすぐのこと。

何も考えず、いつも通り、普通に超能力を使おうとするも何も起こらなかったのだ。

そのへんにいる看護師にミルク持つてくるよう洗脳波出してみるも、看護師は何も持つてこず、そのまま目の前を横切っただけ。

何度も試してみるも、誰も自分の元へやってこない。

それならば自力でミルクを調達しようと、自身の体を動かそうと念動力を発動させようとするも、手足が無意味にバタついただけで、1ミリも体が浮くことはなかった。

え、どうなっただ一体。

一向に超能力が発動せず、手応えが全くないことに焦った霊幻はツーツと背中に冷た

いものを感じた。

まさか。

テレパシー、サイキネシス、テレポート、サイコメトリーe t c.

思いつく限りの能力を片っ端から発動させてみた。

だがしかし。

……嘘……だろ……？

何も起こらなかった。

力を上手くコントロールできてないとかそんな次元の話じゃない。

超能力を使ったという実感もなければ手応えもないのだ。

何よりもさつきから感じ取れない。

自分の力の気配が。

まさかこれは……超能力が消えてる……？

いや、そんなことあるわけがない！

その考えを否定しようと、何度も何度も念じる。

浮け！

浮け！！

浮け!!!

浮け!!!

しかしどんなに強く頭の中で念じても、どれだけの時間費やしても、超能力が発動することは一度もなかった。

疲れ果てた「肉体的には全然使っておらず元氣なままだが」霊幻は、虚ろな目で白い天井を眺める。

もう、認めざるをえない。

俺は——超能力者じゃなくなった。

その事実を受け入れた瞬間。

心臓を鷲掴みにされたような衝撃が霊幻に走った。

霊幻にとって超能力とは体の一部。

当たり前のように存在し、意識せずとも自然と使えるものだった。

想像してみてもほしい。

もし突然目が見えなくなったら？何も聞こえなくなったら？声
たら？体が動かなくなったら？
が出せなくなっ

そんな状態に陥ったら、誰でも平常心ではいられなくなるだろう。

今まさに、霊幻の心境はその状態だった。

いつたいたいどうすればいい。

予想だにしない事態に霊幻は途方に暮れる。

無意識のうちに張つてるバリアもなく、危険物を排除するためのサイコキネシスも発動しないし、周りの人間をコントロールする術もない。

まして今の姿は、生まれたばかりの赤子。文字通り、完全無防備、ノーガード状態なのだ。

「あー……うー」

こんな風に言葉すらろくに話せないし。体だつて少しだけ手足をばたつかせる程度の動きしかできない。

すべてがおそろしく感じた。

早急に問題を解決せねば。

しかし。

「ばぶう……」「かといつて今の状態じゃ、何もできねえ……よなあ」

寝返りすらできない生まれたての赤ん坊に何ができようか。

……。

……。

……。

……まあ。なんとかなるだろ。

人間、急に面倒になることはよくある。

眠いし寝よう。

グツナイ、お休み世界。

……スヤア。

霊幻新隆は考えることを放棄した。

未来のことは未来の俺に任せよう。

前世の記憶を継承しているなら、その記憶を頼りに二回目の人生は“強くてニューゲーム”になるのが自然の流れであろう。

しかし“霊幻新隆”は違った。

……超能力以外のまともな知識がない。

超能力があるからと高をくくって勉強をサボり続けたツケがまさかこんなところで出てくるとは。

何やってんだよ前世の俺。

テスト勉強せず超能力開発ばかりしてるし。

当日のテストのときは透視、予知、洗脳、時間停止……おいおい超能力をカンニングの道具に使うな、普通に勉強しろよ。

前世の記憶を思い返すたび、過去の自分に突っ込みを入れる。

そして唯一記憶の中に残ってる超能力関連の知識をひとしきり思い出した後、今世の霊幻新隆は深い深い……ため息をついた。

……役にたたねえ。

前世で培ってきた知識——超能力の扱いや制御法なんて、超能力者じゃなくなった今

世の“靈幻新隆”には無用の長物でしかなかった。

激しくいららない、雑学トリビア知識よりもいらん。

説明書や攻略本はあるのに、肝心のゲームが手元にならない状態である。

全然楽しくないし、むしろ腹が立つ。

結論、前世の記憶で“強くてニューゲーム”は無理だった。

……まあ、なんとかなるだろ。

大多数の人間は前世の記憶などもっておらず、まっさらな状態で生まれてくる。

そいつらと同じスタートラインに立ってるってだけの話だ。

前世が超能力者ということだけで、これからの人生に支障がでるわけでもあるまいし。

大丈夫だ、問題ない!!

ーと、思ってた時期が俺にもありました。

自分のあまりの惨状に思わず遠い目となる。

想像以上にノー超能力ライフは過酷だった。

ポタ……ポタ……と地面に赤い水滴が落ちていく。

「……いつてえ……」

鼻腔を伝って、鉄臭い味が口いっぱいに広がり、その不快さで霊幻の顔が歪む。
ああ、くっそ、またかよ。

もう何度目になるかわからない、顔面からの地面ダイブ。

一人うめきながら、ポケットからティッシュを取り出す。

やけくそで鼻の穴にティッシュを突っ込み、どっかり地面に座り込む。

ヒリヒリと痛む鼻を撫でつけながら、自分の体を見回す。

体のあちこちに見える、白いガーゼと包帯の数々。

指にはいくつか絆創膏が巻かれ、満身創痍といった様相だった。

「……」 歩く、って、こんなに変、だったんだなあ」

まさかこれほど自分がー運動音痴だったとは。

いやもう運動音痴の範疇を超えてるって、何だよこれ。

一人頭抱えて悩んでる靈幻は知る由もなかった。

超能力に依存すればするほど、超能力を使つてない自然体の状態は普通の人間よりも弱体化するという事実を。

使わなければ体は鈍る、これ自明の理なり。

まして「世界最強の超能力者」であり全てを超能力でまかかってた靈幻の場合、その傾向は如実に現れた。

段差どころか石も何もない平たい地面でもすつ転び、なんとか普通に歩くことができても、今度は壁や障害物を避けられず正面衝突する。

さらに注意力も散漫で危機回避力が著しく低かった。

何故こんな散々たる結果になってしまうのか。

これら全て、前世で超能力を多用したことによる弊害だった。

何もない場所でよく転ぶのは、生まれたときから常に超能力を発動させたため。本来、身につくはずの平衡感覚はなく、代わりに念動力で体のバランスを保つてたからであらう。

壁や障害物にぶつかるのは、分厚い強固なバリアで身を守つてた名残のため。体にぶつかる前に、バリアと接触して障害物の方を弾き飛ばしたり破壊してたからだ。

そして注意力が散漫で危機回避力が著しく低い理由は、著しく低い理由はずばり。

前世で無双チートライフしてたせいである。

強大な超能力を有してた靈幻にとつて全てが些細なこと。

何か問題や危機が発生しても超能力のゴリ押しで解決したため、思考が非常に大ざっぱでまさに危機意識0%。

実際、車にぶつかる直前まで靈幻は危険に全然気づかなかつたし、眼前に迫った車を見ても全くといっていいほど恐怖を感じなかつた。

大型トラックと衝突しても無傷どころか逆に車を大破してたのだから。

そう余裕こいてたが、はたと気づく。

今の俺……バリアがないんだつた／（o^o^）＼

車を止めるための念動力を發動させることも、時間を停止することも普通の人間には絶対に不可能。

靈幻がその事実気づいたところでもう遅い。バーンと景気よくはね飛ばされ、靈幻の体は宙に舞う。

ぐるりと視界が反転し刹那、空が見える。

……ああ空が青い。

すぐに空は見えなくなり、凄まじい早さで視界が切り替わっていく。

最後に見えたのは地面。固い地面へと勢いよく叩きつけられ、尋常じゃない激痛が全

身に走る。そしてそのまま靈幻の視界は暗転した。

このままだと俺……マジで死ぬ。

病院のベッドの上、全身包帯ミイラ状態になった靈幻は本気で危機感を抱いた。生死の境を三日間さまよったミイラは固い決意する。

……これからは何事も注意深く、安全第一で行動しよう。

靈幻新隆の座右の銘が“安全”になった瞬間であつた。

長い入院生活も終え、普通の生活に戻つた靈幻。

それまで“なんとかかなるだろ”精神で何事も適当だった彼だったが、流石に命の危険にさらされたことで、常に“安全”を意識して行動するようになった。

何事も慎重に事を行い、また常に危険を考慮し、無鉄砲な行動は弁える。

その努力の甲斐もあつてか、靈幻の怪我する頻度も少なくなつていき、包帯やギブスの数は減っていく。

ほどなくして靈幻の体から全ての包帯がとれ、綺麗な無傷の体へ戻った。

しかしようやく人並みになれた、よかったこれで一安心・・・とはいかない。

もう一つ、靈幻にとって早急に解決しなければいけない問題がある。

「……どう人と接すればいいんだよ」

そう、今の自分ー今世の“靈幻新隆”は対人能力、コミュニケーション能力がとてつもなく低かった。

自分では普通に会話してるつもりでも、相手の地雷を見抜けず盛大に踏み抜いて相手を怒らせてしまったり、またあるときは、オブラードに物言うことなく容赦ないキツイ言葉で相手を傷つけ泣かせてしまう。

友達が全くできず、女子たちからは総スカン。

なんでだよ。

何故そのような事態に陥ってしまったのか。これまた前世の“靈幻新隆”が「何でもできる超能力者」だったが故の悲劇であった。

相手が一体何を考えてるのか気になれば直接心読むことができたし、自分の意にそぐわない場合なら、洗脳で変えてしまえばいい。

赤子の時から既に人を操る術を会得していた靈幻は、他人とともなコミュニケーションをとることはほとんどなかった。

そうやって生きてきたせいで、靈幻には人に合わせたたり共感する力はなく、ただ自分の主張を押し通すのみ。

これでは人とまともなやりとりはできない。

また前世の“靈幻新隆”神のような強大な力を持ってたせいか、他の人を対等としてみておらず、一緒に行動どころか一人行動がスタンダード。

そもそも人と接する機会が極端に少なかった。

孤高の存在、といえば聞こえはいいが、今にして思えば前世の俺、完全ぼっちじゃねーか。

この現代社会、人と関わらずして生きていくことは不可能に近い。

このまま嫌われ続けて最悪命狙われることになって事態にでもなってみろ。

今の俺は簡単に死ぬんだ、前世みたいに人に恨まれ殺される「※人類の敵として核爆弾落とされた」なんて一回経験すれば充分だ、二回も味わってたまるか。

ここは是非とも、潤滑に人と付き合う術を早急に会得する必要がある。

前世の“靈幻新隆”なら超能力で全て思い通りに事を運ぶことができた。

反則的な超能力があった前世ではそれでよかったかもしれないが、今世ではそうは問屋がおろさない。

しかし今の“靈幻新隆”はどれだけ気持ちを集中させても、相手からなにも感じ取れ

ず、意のままに操ることはできなかった。

当たり前だ、そんな力はもうないのだから。

まずは相手がなにを考へどう行動するのか理解する必要があるな。

人の心理に関する書籍を片っ端から集めまくった。

心理学の専門書はもちろんのこと、ビジネスで使える会話術、果てには異性にモテる方法が載った雑誌。

収集した大量の本を元に、霊幻は人心掌握術の研究を始めた。

僅かな表情の変化や何気ない仕草から情報を読みとり相手の心理状態を予想し、相手に合わせた会話を心がける。

その作業はかつての自分が実行してた1ー1状況に依じて使い分けてた超能力を彷彿させた。

だからだろうか？

“歩行”などの体の使いこなしの訓練よりも、会話術や心理学に関して、ことさら熱心に霊幻は勉強し研究していく。

そしてその努力の甲斐もあって、霊幻の対人能力は飛躍的に向上した。

いや飛躍的どころじゃない、超極めている。

驚異的な観察力と巧みな心理戦で誰にも負けないじゃんけん必勝法を編みだし、誰が

相手でも弁説で言い負かすほどの会話術を手に入れた。

やったぜ。

そしてふと考えた。

今の俺は心を読むことはできなくても、人の仕草や表情を注意深く観察すれば、推察することができるし、洗脳はかけられなくても、話術で巧みに誘導し、己の望むように話を進められるようになっていく。

もしかして他の失ってしまった超能力も……何かで代用できるんじゃないか？

それは超能力を全て失ってしまった霊幻が今世で初めて芽生えた“希望”だった。

思い立ったが吉日。

前世で使えてた超能力の代用を求め、霊幻はあらゆることに挑戦し、色んな知識や技術を手に入れようと奔走した。

あるときは身を守るバリアの代わりに護身術、またあるときは素早い身のこなしをつけるためにもぐら叩き。

様々な分野の知識を満遍なく頭の中に叩き込み、様々な情報を蓄積していく。

超能力の天才は、その他の分野でもその器用さと応用力が健在だった。

霊幻の器用さは遺憾なく発揮され、会得した知識や技術を組み合わせ、様々な場面ににおいて応用する。

幾ばくの時が過ぎていき。「靈幻新隆」は見違えるほど成長した。かつて歩けば壁にぶつかり転んだ傷だらけだった少年はもういない。人と話すたびに憎まれ嫌われ、爪弾き者になった青年は変わった。何事も器用にこなし、マルチに対応できる大人へと。

よしこれで大抵の問題は対処できる。

自分の手に負えないときは公的権力に頼ろう。警察は善良なる一般市民の味方だ。

そう段取りを考える靈幻だが、その顔は浮かない。

脳裏によぎる前世でみた光景。

超能力で破壊された町の惨状だった。

「……生き残れるかな……俺」

靈幻が危惧していること、それは超能力者との遭遇であった。

ある日突然、超能力集団が世界征服で町を破壊にしてくるかもしれないし、暇を持って余した超能力者が、おもしろ半分で見境なしにサイコキネシス発動させるかもしれない。

その際飛んできた瓦礫が直撃して頭パンしたら一巻の終わりだ。

他にも上から車が降ってきてそのままペチャンコに圧死したり、石礫の嵐でズタズタに切り刻まれたりとか、考えたらきりがねえ。

とぼちりくらって死ぬなんて俺はごめんだ！「※前世では加害者側だった靈幻」
前の俺よりも長生きしてやる……！

超能力者相手では、俺の培ってきた知識や特技などあまりにも頼りないが、ないよりマシだ。

まずは俺の話術で相手の警戒とバリアを解かせて不意打ちで一発くらわせる。そして相手が怯んだ隙に畳みかけるように対話に持ち込む。

俺の弁説が通じない相手だったら……逃げよう。

命あつての物種、身の安全を守ることが最優先である。

よしこの方法でいくぞ！

心の中で固い決意した靈幻。

しかし靈幻の心配をよそに、世界は平和だった。

ある日突然、全てのが宙に浮くことはなかったし、どこぞの超能力者軍団が町を暴れることもなく、また超能力者がニュースや新聞で取り上げられ話題になることもない。

超常現象など起こることなく、淡々と日常が繰り返される。

あれ……？

一向に現れない超能力者の存在に、霊幻は首を傾げる。

気になった霊幻は過去の新聞を漁ったり、ネット掲示板など駆使して過去から現在の最新情報まで集めてみる。

と、ここで衝撃的な事実を知った。

超能力に関する情報はオカルトのように取り扱われ、現実にあるものとして扱われていなかったのである。

どうなってるんだ一体。

霊幻の知る前世の世界は、超能力は当たり前のように存在しており、超能力者は自分以外にも大勢いた。

事実、前世では数百の超能力者たちと遭遇してる。

二十うん年間生きてきて、超能力者に一人も会ってないなど可笑しい。頭を捻ってるうち、霊幻はある一つの仮説をたてた。

ここは“超能力”がない世界かもしれない。

ああ、そう考えたなら辻褄があう。

俺の超能力がなくなってたのは、“超能力”が存在しない世界だから、世界に合わせ

て消滅したんだ。

前世の世界だと、超能力は世間に周知されており、超能力者も珍しくなく、超能力を生かした職業なんてのも普通にあつた。

だがこの世界では“超能力”は信じられていない。

これまでずっと超能力者に会ってないことが何よりの証拠じゃないか。

ということ、この世界に超能力者はいない、以上、証明終わり！

あー、よかつたよかつた。

これで俺も何の懸念もなく人生謳歌できる。

前世と違って真面目に勉強していた今世の霊幻新隆は学校を卒業後、旅にでることもなく大手企業へ就職した。

入社後もマルチな才能と類まれな話術を駆使して、同期の中でも一番の出世頭となり人生、順風満帆。

不安なことなどあるはずもない。

このまま“安全”に日々を過ごせばいいんだ。

“平凡”な——“何も代わり映えのなくそつままない”人生を。

「……なんか違う」

俺の座右の銘は“安全”だが、こんな“安全”な人生求めてない。

俺は何かになりたいんだ。

一体何になりたいのかは俺自身わからない。

それでも俺は――前世でなれなかった”何か”になりたくて仕方がなかった。だから――

数年後。

霊幻は会社を辞めた。

そして――霊幻新隆は小さな事務所を立ち上げる。

その名も”霊とか相談所”、霊能事務所だった。

その事務所の所長になった霊幻は自らを「今世紀最大の霊能者」と称して、客の依頼を請け負うようになる。

普段は客に對しのらりくらり、適当な対応しつつも、持てる知識と技術をフル活用し、問題解決していく。

こんな風に

「家にガタがきてるのか、よし補強しよう」

「写真に変なのが写ってる？パソコンで修正しとくか」

「体が重い？マッサージしとけば凝りもほぐれるだろ」

前世で培った超能力の代用として身につけた様々なスキルは、とても役だった。

除霊方法が適當？

別にいいじゃねえか。どうせ幽霊なんていないんだし。

超能力と一緒に、前世にはあつたはずの靈感もなくなつた靈幻に、靈の存在は視認できなない。そのせいで、靈幻は思いこんでいた。

超能力同様、この世界に“幽霊”は存在しないのだと。

仮に“幽霊”がいたとしても大したことないだろうと。

だからポルターガイスト、心靈写真、幽霊、心靈現象などなど。実際に体験してもはっきり目に見えても。

「前世でも塩まいたら勝手に靈が溶けたし……お、これ安いな。徳用塩にしよう」

と大量に塩を買い込み、除霊パフォーマンスのとき、盛大にまき散らしたりと、超適

当にやっていた。

“ 霊とか相談所 ” というあまりに胡散臭い名前のせいか、霊幻の特技でどうにか誤魔化せる騙しやすい客ばかり。

たまに体が妙に疲れ重くなっても。

「疲労が溜まったか？ 休みの日にマッサージ行ってみよう」

と、全く気にせず過ごしたり。

体が透き通った血塗れの長い黒髪の女と目が合っても。

「最近疲れ目がひどいな……」

と、目の錯覚だと思いこんでいた。

そんななんちゃって霊能者を始めて1年後。

一人の少年が “ 霊とか相談所 ” を訪れた。

「僕……超能力者なんですけど」

ランドセルを背負った少年がそう話したとき、霊幻はそれを信じてなかった。

だってここは “ 超能力 ” がない世界なのだから。

さっさと追い払おうと少年に口を開きかけーやめた。

「出て行け」という代わりに「中、入れよ」と事務所の中へ招き入れる。

何故か少年をほっとけなかったのだ。

おっかなびつくり入ってきた少年にソファへ座るよう促し、自身は給湯室へ行き二人分のお茶を用意する。

コポポと湯飲みにお茶を注ぎながら、霊幻は小さく息を吐く。

少年の思い詰めた顔がまるで、昔の自分を思い出させた。

圧倒的な力を手に入れ、孤独だった前世の自分を。

そんなことあるはずなのに。

「ほら、熱いから気をつけて飲めよ」

ぶつきらぼうにお茶の入った湯飲みを少年に手渡す。

まあどうせ暇だし……適当に相手してやろう。

コトリとテーブルに湯飲みをおくと、霊幻は悩める少年のために語った。

俺も似たようなことで悩んだと。

……実際は今世でも前世でも“超能力”で悩んだことはなかったが。

他にもペラペラと調子のいいことを自信満々で話した。

超能力は個性の一つだの、大事なものは人間味だの、薄っぺらな綺麗事ばかり。

しかし少年はひどく感動していた。

目を輝かせ、一つ一つの言葉に頷いてる。

……こいつ素直というか、騙されすぎだろ。

なんか誰かに騙されて利用されそうだなと、内心少年の心配しつつも、語り続ける。語り終えたあと、ポンポンと少年の肩を叩き、笑いかける。

さあ納得したなら帰った帰った。

なんかまた来そうな少年の空気を察し、そうはさせるかと霊幻が追いつき返そうとしたときだった。

淹れたお茶が熱すぎて、勢いよく湯飲みから手を離す。

あ、やべえ！

慌てて手を伸ばすも間に合わない。

湯飲みが床に落ちる。

そう、思った時だった。

ピタつと時間が止まったように、湯飲みがその場に留まる。

……え？

まさか力が戻ったのか？

思わず自分の手を確認するも、力の気配は何もない。

困惑する霊幻をよそに、止まった湯飲みはこぼれたお茶とともに、逆再生のような動きで元に戻っていき——少年の手の中に収まった。

.....は？

靈幻新隆は知らなかった。

超能力者は超能力者同士、ひかれ合う性質があるということに。

前世の自分は“超能力者”だったからこそ、多くの超能力者と出会ったという事実
に。

そして彼は知らなかった。

前世の世界で“超能力”が周知されてたのは——“靈幻新隆”の存在が深く関係し
てること。

“靈幻新隆”が生まれたその日、世界全てのをサイコキネシスで浮かせたこと
で、世界は“超能力”の存在を認めざるをえなくなったのである。

また超能力者の彼は、自重することなくおおっぴらに超能力を使いまくったため、他

の超能力者たちも自身の能力を隠さなくなった。・

そう、一人の“超能力者”の存在が、その世界の“超能力者たちの歴史”を大きく変えたのだ。

しかしこの世界は違う。

よくも悪くも世界に大きな影響を与えた“超能力者”がいないため、超能力は今まで通り世間に周知されておらず、超能力者は秘匿された存在。

世間に認められてるか認められてないか、ただそれだけの違い。

そうここは、この世界は――

“超能力”が存在する、前世と変わらない世界だったのだ!!

こうして靈幻新隆は超能力を持つ少年、影山茂夫――モブと出会い、彼の師匠となった。

モブと共に様々な事件に首突っ込んだり、巻き込まれたり、波乱万丈な日々を過ごすようになるのは、もう少し後の物語であるー。

……え、マジで？

弱くてニューゲーム

↓To be continued…?

ある霊能者の話

「前回までのあらすじ」

霊幻「変わったのは世界でなく俺だった……あと超能力者の弟子ができた」

とある雑居ビルの一角にある小さな事務所の中。

机を挟んで小学生の子供と、20代半ばの青年が対面していた。

子供は内向的で大人しそうな見た目であり、一方青年は髪が明るく、スーツ姿のどこか胡散臭い雰囲気してる。

第三者からみれば、奇妙に思える組み合わせだろう。

青年——霊幻新隆はおもむろに胸の前で指を組み、少年——影山茂夫の目を見据える。

厳かな空気纏った霊幻は、大きく息を吐いた後、ピンと人差し指をあげた。

「とりあえずお前を弟子にするにあたって、いくつか聞きたいことがある」

「は、はい」

一体何を聞かれるのか。

茂夫は緊張した面もちでピシッと背筋を伸ばす。

「まず、お前の超能力はどんなのだ？」

「スプーン曲げたり、物を浮かせたりできます」

「サイコキネシスか。世界全部……とまでいかなくてもいいが、調味市丸ごと浮かせて○ピユタみたいにできる？」

「ま、丸ごと……やったことないです……」

「物を浮かす以外で他に何の能力があるんだ？ テレパシー、テレポート、治癒、精神操作、肉体強化、サイコメトリー、パイロキネシス、未来予知、時間停止とか色々あるけど」

「じよ、除霊はできるけど、そういうのはできない……」

「超能力は常時発動してるのか？ バリアを24時間欠かさず張ってたりとかさ」

「ずっとは疲れて使えなくなるから、使いたいときに……」

茂夫の話を聞いて霊幻は、ふーっと大きく息を吐くと、どっかりソファに背中を預ける。

なーんだ、身構えて損したぜ。

「その程度なら大丈夫だ。俺が力の使い方教えてやるよ」

「ほ、本当ですか！」

パアツと顔を明るくさせる茂夫に、靈幻は鷹揚に頷く。

「大船に乗ったつもりで任せろ！」

茂夫に向かって霊幻はビシッと親指あげてみせる。

もつと凄い力を持つてるかと危惧したが……あーよかった、たいした力持つてなくて

!!

自信満々に言い放った靈幻の言葉を聞いて、茂夫は安心したらしく、それまで思い詰めてた顔が嘘のように消えていた。

キラキラ目を輝かせ、尊敬の眼差しで靈幻を見上げている。

「あのっ、お兄さんのこと、師匠って呼んでもいいですか？」

「おう、いいぞー。じゃあ俺もお前のこと……名前じゃ味気がないな、なんかあだ名とかないのか？」

「友達からはモブって呼ばれます」

「んじゃモブって呼ぶぞ。で、力の使い方教えるといったが、超能力の開発でもするか？」

話を聞いている限り、モブの力は……かなり弱かった。

何せ町を丸ごと浮かせることもできないし、超能力のスタミナもない。

さらに使えるのがサイコキネシスだけとはあまりにも頼りなさすぎる。

せつかくだし、前世の俺流超能力開発術でも伝授してやろうじゃないか！

内心茂夫のことを哀れみつつも、どうにかしてやろうとやる気を出す霊幻だったが、茂夫の言葉は霊幻にとって意外なものだった。

「僕……師匠から力を暴走させない方法を教わりたいです」

「ふむ、力の制御か」

このとき霊幻新隆は思った。

あれ、超能力って普通、制御できるもんじゃねーの？

前世の“霊幻新隆”は超能力者だった。

しかし前世の記憶を辿ってみるも、生まれたときから死ぬまで、一度もコントロールを失敗したことがない。

「師匠？」

なにやら難しい顔で考え込んだ霊幻を、茂夫は心配そうに声をかける。

「もしかして……できないんでしょっか」

途方に暮れたような顔で泣きそうになってる茂夫をみて、霊幻は慌てて口を開く。

「いやそんなことないぞ！大丈夫なんとかしてやる！」

モブ自身、自分の力を怖がってるが、俺から言わせればそんなの気にするほどでもない。

暴走させてもモブの力じゃたかがしれてる。

力加減ミスって地球が木っ端みじんになることも、洗脳波強くしすぎて人類全員の頭パーンになるリスクもないだろう。

せいぜい町が壊滅する程度なら問題ナツシング。

とはいえ、いくら弱いといつても、超能力持っていない普通の人間相手に使えばそれは凶器になるしな「ついでに俺も死ぬ」

それに万が一他の超能力者たちと戦闘になった場合、弱いモブだと負けて怪我したり最悪死んでしまう可能性がある。

とにかく戦闘を避けることを徹底して叩き込んでやらねば、モブが危ない。

「師匠の俺に任せとけ！」

今の俺は超能力者じゃないが、モブの力弱いしーーなんとかなるだろ!!

今世で初めて出会った超能力者の少年、影山茂夫。

前世では弟子などいなかったが、まさか超能力失った今世で超能力者の弟子ができるとは。

人生、何が起こるか分からないもんだ。

そう、しみじみ思いつつも、霊幻は真剣な顔で同じく真剣な顔でじつと見つめる茂夫に懇々と諭す。

「いいかモブ。はつきり言おう。残念ながらお前の力はそこまで強くない！」
「そう、なんですか？」

他の超能力者に会ったことないので、よくわからないけど……と首を傾げる茂夫に、
霊幻はやれやれと言わんばかりにため息をついてみせた。

「まあ、他に比べる人がいないなら、自分の強さなんて計れないもんだ」

俺も前世の俺という比較対象がなければ、モブの強さはわからなかったけどな！と心
の中で付け加えておく。

「たとえばモブ、お前がゲームの主人公で旅に出たばかりだとする。その状態でラスボ
スに出会ったら戦うか？」

そう霊幻に問われ、モブはふるふると首を横に振る。

「今のモブはそのゲームの主人公状態なんだ。力の使い方を鍛えれば強くなれるが、お
前はその初期状態のままでもいい。そんなお前が万が一ラスボス——別の超能力者と
出会ってしまった場合……どうしたらいいと思う？」

「えっと、戦ったら負けちゃうから……逃げる？」

モブの答えに霊幻は満足そうに頷く。

「うむ、それが正解だ！もし超能力者に会ったら戦っちゃ駄目だぞ。そのときは手を
出さず、バリア張って攻撃を防げ。そして隙をみて即撤退、逃げることだ！周りの大人、

できれば警察、お巡りさんに助けを求めるのが一番だな」
「わかりました」

茂夫はコクつと頷き、素直に靈幻の言葉を受け入れる。

「かといつて、自分より弱い超能力者なら戦つていいつてわけじゃないからな。そもそも超能力つてのは人に向けていいものじゃない。いいか。よく聞け」

一旦言葉を切つた後、靈幻はひたと茂夫の顔を見据える。

「俺達は人とは違う特別な力を生まれ持つたわけだが、決して自分を特別な存在だと勘違いしてはいけない」

前世の俺はそうやって勘違いして自滅した。

魅力の本質は人間味。

超能力なんて勉強ができる、足が速いとかいった特技の一つでしかない。

そのことに気づかず、超能力に依存し内面を磨くことなく、好き放題にした前世の俺は結局何者にもなれなかつたし、満たされない空っぽな人生だった。

モブには同じ轍を踏ませたくない。

「力に自信を持つのはいいが驕つてはいかんぞ。俺達の力は使い方次第で凶器にもなる。刃物と同じだ」

そう教えてやる大人がいなかつたから、前世の俺は間違えてしまったんだ。

だから今世でもし超能力者に会ったら、教えてやろうと心に決めてた。

「刃物でやつちやいけないことといえれば何だ？」

「人に向ける……？」

「よくわかってんじやねえか。肝に銘じておけ」

二つと口の端をあげ、霊幻は茂夫に笑いかける。

「人を傷つけるのでなく、人を助けることで力を使う。それが特別な力を持つ俺達のモラルだ。力の制御ができてないなら尚更、気をつけないと危ないぞ」

「はい師匠」

真面目な顔で茂夫は何度も頷き、小さく「人に向けて力を使わない……」と繰り返して呟く。

よし、ちゃんとモブに伝わったようだ。

「よろしい！そういうや除霊できるって言ってたが……確か幽霊もみようと思えばみえるんだよね？」

霊幻の問いに茂夫は数度目を瞬く。

「みえますけど……あの師匠」

もじもじと何か言いたげな様子だった。

「どうした？」

トイレか？と暢気にたずねる靈幻に対し、モブは不思議そうに小首を傾げる。

「師匠の背中にくっついてる悪霊、そのままにしていいんですか？」

けっこう師匠の生気吸ってますけど指摘する茂夫に、靈幻は笑顔のまま固まる。そして冷や汗が全身を流れ出す。

最近体だるいと思ったら、俺、つかれてたのか！疲労的な意味じゃなくてとりつかれてる的な意味で！

「というか悪霊、普通に存在するのによ！」

そりゃそうか、超能力があるなら幽霊や呪いなんかあっても不思議じゃねーよな！

ということはあるか、今まで見えてた幻聴や目の錯覚、妙な体の疲れも全部悪霊、呪いのせいだったのか？

「師匠？」

怪訝そうなモブの声に、ハッと我に返った靈幻は瞬時に取り繕う。

「今世紀最大の霊能力者っぽい貫禄ある顔で重々しく話す。」

「……モブよ。これはお前を試したんだ。お前の力がどの程度あるかを。視える力はあるようだな。じゃあ次だ、悪霊を消してみろ」「訳※早く悪霊消してくださいお願いします」

「はい」「師匠からのテスト……頑張らなきゃ！」

霊幻の言葉に全く疑うことなく、若干緊張した面もちで茂夫は霊幻に向かって手をかざす。

バシユン

実際にそのような音は鳴らなかったが、それくらい体の疲れが一気になくなったのを霊幻は感じた。

「消しました」

「よし、よくやったぞモブ！」

満面の笑みで茂夫をを誉めちぎる。

そして心の中では感謝の嵐を送っていた。

超能力者にありがとう！

「だが修行はこれからだ。お前がちゃんと力を使いこなせるよう訓練しないとな」

ひとまず俺の仕事を手伝わせるか。

悪霊相手なら力加減ミスっても問題ねえし、力のコントロール訓練にうってつけだな「何より俺が助かる」

サイコキネシス自体は色々応用きく便利な超能力だし、そのへんもアドバイスしてやろう。

モブの力は前世の俺には遠く及ばない。

きっと他の超能力者よりも弱いだろう。

しかし元世界最強超能力者だった俺の弟子になったのも何かの縁。

前世の俺ほどじゃなくても、一人前の超能力者にしてやらねば！

「頑張ろうなモブ！」

「はい！」

これが前・最強超能力者“ 霊幻新隆 ”と現・最強超能力者“ 影山茂夫 ”のファーストコンタクトである。

弱くてニューゲーム 3

超能力者“ 影山茂夫 ”を弟子にするも、霊幻の生活は意外にも大きく変わることはな

かった。

仕事は普段通り、適当にのらりくらり依頼人を騙し言いくるめて終わり。

ただちよつとだけ変わったとするなら、どうしても誤魔化せない“本物”のときには最終兵器モブを呼び出して、除霊させることになったことだろう。

除霊という行為に関して、茂夫は非常に優秀であった。

どんなに大きくてグロテスクな悪霊と対峙しても、手こずることなく、簡単に消し去ってしまう。

また色々な霊能者に見せてもお手あげだったという呪いのアイテムすらも、手をかざして数秒で綺麗さっぱり元通り。

いやー、モブを弟子にして本当によかった！

ほくほく状態の霊幻だった。

もちろんただモブに投げっぱなしにしてはいない。

悪霊の溶かし方やバリアなどはちよくちよくアドバイスする。

特にバリアに関しては、たとえば相手が自分より弱い相手でも必ず張るよう、口を酸っぱくして教え込んだ。

前世では無能力者や格下超能力者相手に余裕ぶっこいて、不意打ち一発でダウンし負けた超能力者を山ほど見てきたからな。

アホすぎるだろ超能力者。

特に自分の力に絶対の自信持つてる奴ほどその傾向が強い。

超能力者を倒そうと思ってる諸君、いきなり不意打ちパンチは有効だぞ。是非一度試ししてくれ。

あとついでにバリアは俺の分まで張るようにと頼んだ。でないと俺死んじゃう。

自分で張らないんですか？と聞かれたから、俺のバリアは強力すぎて周囲のものまで消し飛ばしてしまうからなと答えといた。

実際、前世の俺が張ったバリアも当たったものすべてを弾き飛ばし、時には瞬間蒸発させてたから嘘ではないな、うん。

除霊やバリア以外にも念動力を使って高速移動する練習もさせたが、途中気持ち悪いとモブがギブアップしたので、やめた。

モブ自身、酔うからもうやりたくない……と泣きべそかいたしな。

ついでに他の超能力も開花させようとしたが、モブが他の超能力に目覚めることはなかった。

本当モブのやつ、超能力のセンスないな……力も弱いし可哀想。

霊幻の超能力開発プログラムは早々に打ちきりとなり、結局茂夫は除霊以外で超能力を使うことは殆どなくなっていったのだったー

おおむね、平和な日常だった。

時にはモブの人生相談に乗ってやり、またあるときには超能力の訓練と称して除霊させる。

超能力者との遭遇はモブ以降、全くない。

もしかしてモブ以外に超能力者はいなのだろうか。

それを確認する術は今の俺にはない。

超能力者じゃなくなったから、全世界に超能力者だけがわかる電波とばせなくなったし。

まあ、少なくとも世界征服狙う超能力集団はいないだろう。

前世の俺は悪の組織のボスやってたが、今の俺は善良な一般人。

あの頃の俺みたいに超能力で世界征服できる力があったが、他の超能力者ではまず無理、不可能だ。「俺の場合、本当に世界征服できる力があったが、他の超能力者ではまず無理、不可能だ。今思い返すと前世の俺、凄かったんだ……超能力だけは」

そして月日は流れーランドセル背負つてた小学生は学ランを着た中学生となつていた。

靈幻が適当に始めた靈とか相談所は潰れることなく、今も続いている。

今日は悪靈がいると噂される呪いのビルへ依頼人たちと一緒に向かう。

珍しく本物の案件にぶち当たり、とりあえず懐に隠し持つてた食塩袋を景気よく悪霊めがけて、靈幻は激しくまき散らして見るもー

「スーパで売つてる食塩じゃねえか。清めた塩じゃねえと効かねえよ」
効果は全くなかった。

馬鹿な……靈が塩に弱いというのは俺の思いこみだったのか？

いやいや前世ではちゃんと悪靈、溶けたぞ。

塩に溶けるタイプと溶けないタイプとがいるのか悪靈つて。

と、考えても埒があかない。

今、俺ができることは一つ。

「……ま、塩で溶けないんじや仕方ない。最終兵器を呼ぶか」

ポチポチ。

「あ。モブ。悪いけどすぐ来てくれないか？」

除霊はすぐに終わった。

中学に入ってから、茂夫の生活サイクルは小学校のときとほとんど変わらなかつた。

学校が終わればそのまま家に帰宅し、もし霊幻に呼び出しされたら現場に急行して除霊を済ませる。

何か悩み相談ができれば、自分から相談所を訪れ、霊幻に話を聞いてもらい色々なアドバイスをもらう。

何かしたいことも特になく、のっぺりした毎日を送る。

このままでいいのだろうか。

なんてことを悶々と考え始めた茂夫に転機が訪れた。

そして茂夫は自分の意志で新しいことを始めることを決意する――

「で、結局入部したのかよ、その電波部という変な部活」

ばつかなあと半笑い浮かべる霊幻だが、霊幻の言葉を否定するように茂夫はふるふるとう首を横に振る。

「いえ、入部したの脳感電波部じゃなくて肉体改造部です」

そう言いながら、ぱくりとおやつとして出されたたこ焼きを口の中に放り込む。

「肉体改造部う？」

「体を鍛え、いい筋肉を作るための部活だそうです」

「なんでそんな部活に入ったんだよ」

怪訝そうに眉を顰める靈幻の顔を見つめた後、茂夫はゆっくりと口を開く。

「僕は……」

このまま何も変わらない日常でなく、新しいことをやってみて自分を変えてみたいんですと、言葉足らずながらも、率直に自分の気持ちを靈幻に伝えた。

「そういやモブも中学2年、14才か。」

「ハフハフと熱々のたこ焼きと格闘しながらも靈幻はふと思う。」

「14才、それは青春まっさかり、自分探ししたくなるお年頃である。」

「これといった趣味もなく、学校とバイトの往復する毎日。」

「それではあまりにも味気ない青春だ。」

「何かやってみたいことに挑戦することは悪くないだろう。」

「バイトに支障でない範囲でならこちらとしても特に問題ない。」

「ただ一つ懸念すべきことは……。」

「おまえ超能力者なんだから、筋肉つける必要ないんじゃないか？」

なんでその部活を選んだかという点である。

その気になりやダンベルどころか鉄骨くらい余裕で持ち上げられるだろうにと突っ込む霊幻に、茂夫は暫し黙り込んだ後、ぽつりとつぶやいた。

「もう……超能力に頼った生き方はしたくないんです」

生まれつきの超能力者である茂夫は、自分でも意識せず自然に超能力を使っていた。考えるよりも先に超能力が発動し、気づけば超能力に依存してしまふ。

それじゃ駄目だ、ちゃんと自分の力で立って生きられるようにしなきゃ。

超能力以外の自分の魅力を見つけたい！

ぎゅつと握り拳をつくり、切実に訴える茂夫に、口の端にソースつけたまま、かつこいいキメ顔しながら霊幻は力強く頷く。

「そうだな、超能力に頼りすぎるとろくな目にあわんから、その考えは大事だぞ！」
前世で頼りまくったせいで今世で苦労しまくってる人」

霊幻に自分の考えを肯定され、茂夫の顔は明るくなる。

「そうですね！ やっぱり筋肉あるとモテますよね！」

僕の考えは間違ってたなかつた！と喜びを顔に表す茂夫を、霊幻はにっこり笑いつつ
も、心の中で突っ込む。

一番の理由は「モテたい」かよ！
いかにも思春期の男子中学生らしい理由だった。

靈幻に部活入ったことを報告して翌日。

「師匠はテレパシー使えますか？」

ふらつと相談所にやってきた茂夫は、開口一番、新聞読んでる靈幻にそう尋ねた。

「テレパシー？」「今の」俺はちよつとできないな。靈の声は聞くことはできるんだが「※嘘」

「でも何で急に？」と聞き返す靈幻に「なんとなくですよ」と顔色一つ返ることなく淡々と答える茂夫。

しかし、茂夫の目が一瞬僅かに泳いだのを靈幻は見逃さなかった。
「心を覗きたい相手がいるのか」

一般的な男子中学生がテレパシー使いたいと思う対象は。

……ははーん。

靈幻はピンときた。

伊達に对人能力スキル極めてない。

「女か」

「!?」

霊幻に心の内を見事に当てられ、茂夫の顔に動揺が走る。

「おやおやモブ君わかりやすいねえ」

読んでた新聞をくるくる丸めた後、霊幻は訳知り顔に物を言う。

「ま、モテたいのは全男子中学生の共通観念だから恥じることはないぞ。かくいう俺もモテたくてしようがないしな」

うんうんと頷きつつ、霊幻は一人空しきを感じていた。

というのも、今世の“霊幻新隆”はさっぱりと言つていいほど女性にモテないからである。

何故だ。

なお前世の自分は問題外だから除外しておく。

モテるモテない以前に、女性を口説くよりも先に洗脳してたし……うわ最低すぎる前の俺。

霊幻の顔はイケメンと言っても差し支えないくらい整つてる方であり、また対人能力を磨く過程でモテる恋愛心理テクニクやスマートな会話術などもマスターしている。

しかし悲しいかな、霊幻新隆は女性に縁がなかった。

何故だ「大事なことだから二回言いました」

なお、靈幻がモテない理由は、靈幻の怪しすぎる見た目「茶髪にスーツという変な組み合わせ」に胡散臭い職業「靈能者」、そしてホスト並に口が上手すぎるため、返って女性が警戒し近づかないからである。

また靈幻の学生時代を知る者たちの間では既に悪評「性格がねじ曲がりすぎて複雑骨折してるなど」が広まつるため、靈幻の存在自体敬遠されている。

……本人はそのことに全く気づいてないが。

茂夫が帰った後もしばらく、靈幻は一人自分のモテなさに嘆き落ち込んだ。

日も暮れ、辺りは真っ暗になった時間帯。

最後の客も帰り、夕飯用にテイクアウトしたハンバーガーセットを一人食べてた靈幻の元に、帰ったはずの茂夫が戻ってきた。

その表情は明らかに暗く、どんよりしている。

一体何事かと靈幻が聞くより先に茂夫の方から口を開く。

悲愴な面もちで「空気が読めるようになるにはどうすればいいですか」と。

だがしかし。

「空気が読めるようになりたい？そんな上等な処世術お前には無理だろ」

霊幻はバツサリ切り捨てた。

ズココーとドリンク吸いながら、何いってんだこいつ的な目で茂夫をみる。

「空気が読めるのは常識と経験がある奴だけで存在が非常識なお前には」

俺が完璧に空気読めるようになったのも、大人になってからだし。

なまじ前世でテレパシーと洗脳能力あったから、今世ではお前よりも超絶ハイパー空気読めなくてすげー苦労したんだぞ。お前はまだいい方だよモブ。中学、高校と学年で一番いけ好かない奴ランキングぶつちぎり一位を六年連続とつた俺に比べれば。おかげで今でも中学高校から同窓会の誘いはかかってこないし、たまに呪いの手紙も匿名で送られてくるんだぞ。そんな俺でもなんとかやってこれたんだ、お前もきつと大丈夫だよ、うん。

「何を今更な事でへこんでんだよ」

「……僕のノリが悪いせいで楽しそうな人達の空気が台無しになった」

「なぜお前がそいつらに合わせる必要がある？お前の人生の主演はお前だろ」

まあ、かといって好き放題するのもアウトだけだな。

霊幻の脳裏に浮かんだのは、前世の自分が超能力でやりたい放題してた過去の記憶、黒歴史のオンパレードだった。

……死にたい。

モブの手前、かっこいい師匠を装おうと、身悶えしたくなる衝動を必死に抑え、平穏な顔でハンバーガーにかぶりつく。

いくら自分の人生の主役は自分だといってもあれはやりすぎだ。

人様に迷惑かけるのダメ、絶対に！

「……僕のせいでそのグループはなくなってしまうたんです。みんなで笑っていただけなのに」

「お前の空気の読めなさは破壊的だからな」

こともなげに言つてのける霊幻の言葉に、茂夫はさらにズーンと落ち込む。

茂夫のあまりの落ち込みように、何かあったことを察知した霊幻は、どうしたでしょう、詳しく話してみると茂夫から事情を聞き出したーそして。

「……成程。典型的なマインドコントロールだ。救いじゃねえ。ただ依存させてるだけだ」

茂夫からあらかた聞き終えた霊幻は大きなため息をつく。

「集団心理を用いた詐欺に多い手口だがハイパー空気が読めないお前には効果がなかった」

独学で心理学学んでる最中、宗教関連の書物も読み漁ってたため、集団心理を利用し

た新興宗教にありがちな手口に関しても詳しくかった。

しかしモブ、いくら何でも素直すぎるぞ。

モテるようになるって誘い文句で、怪しい宗教勧誘にあっさり引つかかるとは。

超能力の使い方より、詐欺に騙されない方法でも教えておくべきだったか？

まあ、そのへんはおいおい考えておくとして。

「つまりモブ。お前は今日お前にしか助けられない人を偶然助けた、ということになるな」

口に食べカスいっぱいつけたまま、霊幻はニツと笑った。

「……」

茂夫は何も喋らない。

ポテト食うかと差し出す霊幻に、こくりと無言で頷きながらも手を伸ばす。

モグモグと貰ったポテトを口に運び食すその顔に、さっきまでの思い詰めた暗い表情はもうなかった。

モブ 0%

霊とか相談所には色んな仕事が無い込んでくる。

悪霊退治、呪い解除、そして――心霊写真のお祓いも立派な仕事の一つ。

パソコンにデータを取り込み、CGソフトを用いて写真を不自然なく合成処理するも、勢い余って依頼人の眉を消してしまい、さらに修正するかとマウス操作してるときだった。

「師匠。今朝からこの霊がくつついてるんですけどどう思いますか？消した方がいいかな？」

自分に憑いたこの悪霊をどうすべきか。

心霊写真の合成処理に奮闘してる霊幻に、茂夫は意見を仰ぐ。

いったん作業を中止し、茂夫の方へ顔を向ける。

じーつと茂夫をみた後、霊幻は平然と答えた。

「弱すぎて俺には見えん」

は!!?

悪霊の形相が凄いことになってるが、残念ながら今世では全く霊感がない霊幻にはその顔は見えていない。

「ちなみにその悪霊はどこで拾ってきたんだ？」

「昨日話した宗教のところ。消したつもりだったんですけど、まだ残ってて、僕に憑い

てるんですよ」

「なんて名前だ？」

「エクボです」

「ふーん。エクボ、ねえ」

ぽりぽりと自身の頬をかきながら、前世の記憶を辿っていく。人を洗脳して自分の配下にする悪霊……俺の記憶にはないな。

過去の記憶を思い返しても、脅威になるような悪霊はいなかった。

というかいつもバリア張ってるから、オート除霊モードになって、視認する前に消し飛ばすからまともに視たことないんだよなあ……。

数十人程度しか洗脳できないみたいだし、下級悪霊だな。

エクボって名前にも聞き覚えがないし。

そもそもモブに勝てない時点で弱っちいだろ……洗脳もできなかったみたいだし……うん、やつぱり雑魚だ！

「お前にとつちや肩にてんとう虫が付いたレベルだろ。好きにしろよ」

モブは空気が読めない。しかしそれは裏を返すなら、確固たる自分がある証でもある。悪霊に唆されて悪事するような馬鹿な真似はしないだろう。

「よかったね。害がないなら消さないでおくよ」

「……」

エクボの顔が得もいわれぬ表情になってるが、残念ながら今世では無能力者である靈幻にはわからなかった。

翌日、新聞の一面で謎の竜巻が発生したという怪奇現象が載り、靈幻はその記事を目にするも――

「超能力者でも暴れたのか？」

まあ、規模も小さいし大したことないかと、特に気にしなかった。

靈能者は危険と隣り合わせの職業である。

悪霊や呪いという精神的な危険もあるが、ときには

「ようクソジジイ！隠し金庫のパスワードを教えやがれ！」

このように依頼人から刃物を突きつけられ脅されることもあるのだ。死んだ父親と話がしたいという依頼人の願いを叶えるべく、降霊術「ただの演技」した結果がこれである。

「俺の誕生日だったような……」

「とぼけんね！アルファベット13文字だろうが！」

適当に誤魔化してみるも、逆上した依頼人はさらにヒートアップ していく。

「俺はその金で一生暮らすんだよ！」

喚き散らす依頼人に、霊幻は慌てることなかった。

「OH！思い出しマーシタ。パスワードは」

騒がず非常に落ち着いて

「H A T T A R A K I N A S A I だ！」

依頼人に対し、見事なアツパーカットをお見舞いした。

霊幻の拳をもろに受けた依頼人は、もんどりうって床に倒れ込む。

「しまった、依頼人の意識がログアウトした」

息はあるものの、ピクピク痙攣しており、起きる気配は全くない。

これでは依頼料が貰えんと、霊幻は大きなため息をついた。

警察でも呼ぶか。

「氣絶したんですかこの人……?」

受付で靈幻たちのやりとり見守ってた茂夫が、床で伸びてる依頼人を見つめる。

「ああ。けどまあ正当防衛だ」

パンパンと手を叩きながら、靈幻はこともなげに答えた。

やりすぎると過剰防衛だが、今回は相手が刃物を突きつけてるし、俺は素手で対抗したからな。何か格闘技やってたら俺の方が問題になるパターンもあるが、少林寺拳法緑帯程度なら突つかれることはないだろう。

万が一訴えられたら、完全論破して逆に金をむしり取ってやる。

「正当防衛……」

靈幻の“正当防衛”発言を聞いて茂夫の顔が曇る。

「正当防衛だったら相手の髪の毛を刈り取って、服を剥ぎ取って、プライドへし折って友達なくさせて、通ってる学校破壊してもいいんですかね……?」

真顔でえげつないこと暴露した弟子に

「どうやってたら正当防衛でそこまでできるの?」

靈幻は即突っ込んだ。

何がどうなってその結果になったんだよマジで。

靈幻の心の声でも聞いたかのように、茂夫はポツポツ語り出す。

「僕の超能力はたまに勝手に勝手に動き出すんです。それも僕の意識が無い時に……」
寝ぼけてうつつかり使っちゃったのかよ。

超能力者あるあるだな。

俺も朝起きたら辺り一面瓦礫の山になってたこと、何度かあったなあ……

いや不可抗力なんだよ。

俺は別に何もやってなく、ただ寝てる間も発動してるオートバリアが作動しただけであつて、俺の寝込み襲った連中が全部悪い。

「こんな力もう持っていたくない……」

使えなくなったらそれはそれですげー苦労するぞ。

「マイナス面ばかり見るな。刃物は使いようだろうが。な？」

落ち込んでる茂夫を励ますように、霊幻は言葉が続ける。

「自分を殺すな。お前を生かせるのはお前しかいないんだ。信用しろ。お前は大丈夫だ」

超能力は自分の一部なんだ。ちゃんと受け入れてやれ。

塩。

それは古来より魔を祓い、浄化させる清めのアイテム。

普段霊幻が愛用「？」してるのは博多の塩だが、何も使う塩はこれだけではない。

パスタや肉にもよく合うヒマラヤ産の岩塩を使うことだってあるのだ。

暴走アロマ特急

それは依頼人の心と体をリラックスさせ美容効果てきめんの旅へと誘う霊幻の必殺技。

岩塩のゴツゴツを利用したマツサージで強張った筋肉をほぐし血流を良くし、蒸気で温めたタオルを顔に被せて霊の視覚干渉をシャットアウト。アロマオイルでリラックス効果を高めると共に霊が苦手なお香を焚くものであり。

「なんだか若返った気がします」

依頼人の見た目も心も若返らせる効果がある。

ふう、なんとか対応できたぜ。

今回はガチなやつじゃなくて助かったが、モブが約束の時間を無断で破るなんて初めてだ。次会った時は説教だな。

なおその頃茂夫は――弟が超能力に目覚めたり、途中謎の襲撃者に襲われ、さらにその襲撃者に弟を誘拐され、弟を取り戻すため組織のアジトへ乗り込んだりと――てんやわんや忙しかった。

弟子が大変なことになってることなど露知らず、暢気に店じまいしてた霊幻だが。

ブルルル……ガチャ。

「はい、霊とか相談所――あ、これは茂夫くんのお母様！」

電話の相手は茂夫の母親からだった。

「いえいえそんな、お世話ってほどのことしてませんよ。むしろ茂夫くんには随分助かってますから！え、茂夫くん家に帰ってないんですか？」

話しながらもちらりと窓を見やる。

既に日は落ち、辺りは真つ暗だった。

「いえ、実は今日、こちらに来る約束してたんですが、茂夫くん来なかったんですよ。ええ、はい、こちらでも探してみます、はい、では」

ガチャン。

電話を切り、靈幻は盛大にため息をつく。

「いったいどこをほつつき歩いてんだが。」

しかも戻ってきてないのはモブだけでなく弟もまだ帰ってきてないという。

兄弟二人で夜遊びか？

いや、弟くんは生徒会に入ってたって優等生だってモブが話してたからそれはないだろう。

「……もしかして、二人で秘密の超能力特訓してるのか？」

モブの弟、超能力開花してないみたいだし。

中学生といえど修業とか特訓に憧れる年頃だもんな。

前世の俺も無駄に超能力研究したし、今世の俺だって人並みの身体能力になろうとあらゆる部活の体験入部した。

というか超能力の訓練したいなら、俺に声をかけてくれたらいいのに。

これが親離れならぬ師匠離れか……。

ちよつぱり寂しく思いつつも、懐から自身の携帯を取り出し確認するも着信もメールもない。

「……GPS機能つけててよかったな」

ポチポチ携帯操作し、茂夫の現在位置を確認した靈幻は、タクシーで現場まで向かう

のだったー

〇〇分後。

タクシーから降りた霊幻は怪訝そうに眉を顰める。

「あいつこんな所で何やってんだ？」

たどり着いたのは人気がない山奥だった。

超能力の練習ならもっと開けた荒地地でやりなさい。こんな山奥でするもんじゃないぞ。

自然大切に！

時折GPSで茂夫の位置を確認しつつも、てくてく歩き続ける。

どれくらい歩いただろうか。

茂みをかきわけ進んだ先に、建物が見えた。

鬱蒼とした山の中に場違いなほど大きな近代的な建物である。

「なんだこれ」

建物の雰囲気、形は、前世の自分が創設した組織のアジトを彷彿させた。

「超能力研究所とか何かか？」

まあ何でもいい。早くモブを連れ戻さないと。

モブに何かあったとあれば、モブの一時保護者失格だ。

臆せずその建物に近づいていく。

中の人達と出くわすも、問題なく中へ入ることができた。

意外とオープンな組織なんだなあ。

部外者の俺にも懇切丁寧な態度だし、この様子ならモブたちも大丈夫だろう。

と、思ってたら悪いこともやってた。

超能力者の子供を拉致監禁とかいい大人失格だろ。

「いや……ボスの指示で……」

なんかもごもご言い訳してるが……はあ？

「誰かに指図されたからって外道かましていいわけないだろうが。下つ端気質も極まるとただのカスだな」

侮蔑たつぷりに言い捨てる靈幻に、組織の構成員たちの顔色が悪くなる。

「そ……そんな……俺達はボスを信じて……」

「ばっかやろー!!」

靈幻の一喝が周囲に轟く。

「お前らそんなんでトツプに立ったところで」

頭に浮かぶは、前世で見た光景。

「自分達が踏み荒らしてきた汚い景色しか残らないぞ」

超能力者たちが暴れ回り、廃墟と化した町並みだった。

千里眼でその光景を見て、言いようのない不快感があるも、その不快の正体は何なのか、そのときはわからなかった。

しかし今ならその不快に思った理由がわかる。

「何がしたいか知らねえが、マナーを守った上で頂点とるから気持ち良いんだろが！」
組織に勧誘したいなら、拉致監禁の洗脳教育じゃなくて、真つ当な超能力者養成所として募集しろ。

超能力研究してるなら、もっと社会の役に立つことしやがれ。

「反省して改めろー！」

超能力悪用すんな！

……もしこの場に前世の霊幻を知る者がいたならばこう突っ込むだろう。

お前が言うな。

その後霊幻はあつさりと茂夫と再会することができた。

「よーモブ。お前こんな所で何やってんだよ。弟も一緒じゃねえか。どうした？」
見たところ五体満足だし、変な実験とかもされてなさそうでよかったよかった。

後はモブたちを家に送らねえとな。

モブの親御さんにも後で連絡しよう。

モブと弟以外にもう一人いるが……これは。

「カツ……彼は友達か？」

頭すげえ。

この少年が実はモブが正当防衛した相手で、落ち武者ヘアーを隠すために不自然なほど増毛したカツラを被っていることなど露知らず、最近は大変なカツラが流行してるんだなあと、霊幻は特に気にしなかった。

「ここに閉じこめられているんです！僕達を解放してください！」

そうカツラの少年、もとい花沢が必死に霊幻に訴える。

「なんで閉じこめてんだよ……」

近くにいた構成員の一人に事情を聞くと、素直に答えてくれた。

機密事項らしく、ごによごによ小さい声で。

モブたちも組織の一員にするつもりだったらしい。

あと、この部屋にいと超能力が使えなくなることもついでに教えて貰った。

なんで大人しく部屋にいるのか不思議だったが、超能力を封印する部屋なのか。

あれ、でも可笑しいな。前世の俺も一回その部屋に入ったことあるが、普通に壁壊して脱出したぞ？他にも能力無効にするアイテムとか使ったことあるが、全然効果なかったんだよなあ……。

効力は個人差があるのか？

まあ、それは置いておいて。

「だからさあ。お前からそれ犯罪だろ」

モブたちまだ中学生だぞ、義務教育もまだ済んでない子供を拉致監禁して洗脳教育施すなど言語道断だ。

責任者出てこい！

霊幻の望みはすぐ叶った。

「君誰？」

ぞろぞろと構成員たちやモブたち連れて出口に向かっている途中、廊下の先でぱったりと遭遇する。

「先に名乗れよ。犯罪者集団が」

人数は4人。

ガスマスクのチビにスーツ着たメガネ、壺抱えたオカマに、肩パットしたマント男……サーカス集団かよ。

「超能力者結社「爪」第7支部の遺志黒。で、君は？」

全身黒装束の子供「？」はじろりと霊幻を睨みつける「ガスマスクで顔は見えないが
雰囲気的に」

子供「？」もとい遺志黒の問いに、霊幻はビシッと自分を指さし

「元・世界最強超能力者で」今世紀最大の霊能力者・霊幻新隆様だ！よくチェックし
け」

華麗に自己紹介&宣伝した。

しかし「爪」なんて組織の名前なんて聞き覚えがないぞ。

なるほど。前の世界では俺が創設したが、この世界では俺の代わりに別の奴が超能力者結社つくったのか。

いったいどんなヤツがボスになってるんだろ。

案外、俺の部下だったやつがボスになってたりしてな、ハハハ。

「我々のボスなんじゃ!？」

ここにきてようやく霊幻が自分たちのボスじゃないことに気づいた構成員たちが驚愕の声あげる中、最初に行動したのは。

「小鳥と言えど私を差し置いてボスなんて……極刑！」

遺志黒だった。

ゆらりとオーラが溢れ、放出された力が遺志黒の周囲にたちこめる。

「何言ってるんだこのチビ。てめーなんか少林寺拳法緑帯の俺様が　ちよちよいのちよ……」

凄まじい光と爆音が霊幻の目と鼻の先で破裂した。

「え？何これ」

俺、攻撃されたの？

「霊専門の師匠は下がってて」

間一髪バリアを張って霊幻を守った茂夫が平然と放った言葉に、霊幻はちよつとシヨックを受けた。

俺、戦力外かよ。

てかあのチビ、俺の後ろにいる仲間たちも一緒に消す気か。

上に立つ者ならちゃんと部下に大切にしろ「※前世では組織にノータッチで部下を大切どころか放置してた人」

「支部長！俺達まで死んでしまいます！」

必死に訴える構成員に、遺志黒は冷たく言い返す。

「知らないよ。君達のボスはその男なんですよ」

「そ、そんな……」

支部長の遺志黒に見捨てられ、涙目の構成員たちに向かつて靈幻は叫ぶ。

「お前ら部屋に隠れてろ！ビッグになるならこんな所で死んでられないだろ！」

超能力者の戦闘にバリアも張れない一般人が巻き込まれたら、その結果は火を見るよりも明らか、避難誘導させねば！

靈幻に促されて、逃げていく構成員たちを靈幻も後を追う。

「つか俺も行くけど」

前世の俺ならいざ知らず、今の俺はバリア張れないからな。

また生死の境をさまようなんてゴメンだ。

安全確保安全確保。

だがしかし。

「うわ！天井が！」

無情にも天井が崩れ落つこちた瓦礫の塊が靈幻の行く手を阻む。

「君達は逃がさないよ」

霊幻たちの方へゆっくり近づくと遺志黒たちに、霊幻の顔はひきつる。

もう、なんだこの状況は！モブ以外の超能力者なんてマジでいたのかよ！

これまで他の超能力者の存在はいるかもなー程度の認識だったが、実際目の当たりにすると、思ったよりも心の衝撃が大きい。

見たところ大した力は持ってなさげなのがまだ救いか。

そんなこと考えてる霊幻をよそに遺志黒は霊幻たちを守るよう前にでた茂夫に力を
使う。

突然体にかかった凄まじい圧に、茂夫はたまらずその場に膝をつく。

同時に茂夫を中心にビシビシとコンクリートの床にヒビが入り円状に凹みが生じ、茂夫の体は地面にめりこむ。

「私の力に耐えるなんてなかなかやるな。重力を上げてみようか」

そう、遺志黒が茂夫に向かってさらに圧をかけようとしたときだった。

「対超能力者ドロップキック！」

超能力者には不意打ちが効果的。

霊幻の持論は正しかった。

超能力者に対して思いっきり跳び蹴りをかまし、物理攻撃で遺志黒を吹っ飛ばした霊幻は、静かな口調で茂夫に言う。

「モブ。お前こんな奴等と超能力で争う気か？」

幸いお互いそこまで力は強くない。

ここで暴れてもたかがしれてる。

せいぜいこの建物が壊れる程度だろう。

だが超能力は。

「危なくて人に向けるもんじゃねえって話したよな？」

簡単に人を傷つけー殺すことができる。

「ルール破るのか？」

靈幻に諭され、茂夫の表情が陰り俯く。

茂夫の様子に見かねて、律が靈幻に向かって叫ぶ。

「僕を助けるために仕方なかったんだ！」

「……モブ」

もう誰かを傷つけない。

それは相談所に来始めた頃、どうして力の制御を教わりたいか理由を尋ねた靈幻に対

し、茂夫が答えた言葉。

なのに。

「お前、そんなに追いつめられてたのか」

そんなモブが人に向けて超能力を使っていた。
弟のために。

「辛かったな」

すごく苦しかっただろ。

「……こいつは人との対立が大の苦手なんだよ。ましてやお前らみたいな大人がな」

スウと息を吸った後、霊幻は遺志黒たちに向かって啖呵を切った。

「弟子に余計なストレス溜めさせんじゃねえよ！」

状況は最悪だった。

相手は自分と同じ大人、ひとまず不意打ちで一発殴って冷静にさせた後、話し合いに持ち込めば一旦この場は収まるだろう。

そう考えてた霊幻の心算は外れた。

「呪玩。この剣はプラスチック製のおもちやだが長年帯刀し呪いをかけ続けることによつて威力を持つようになった」

スーッ着たメガネ。

「私が育てた悪霊ちゃんズ。あなたにどうにかできるかしら」
壺を抱えたオカマ。

「幽体術。俺は自由自在に幽体離脱しさらにそれを分身させるこゝとができる」
肩パットしたマント男。

「黒玉。散らばる重力に引つ張られバラバラになるといい」

ガスマスクのチビ。

各々戦う気満々で、話し合いに応じる気配が全くなかった。

なんでだよ。

お前等が戦おうとしてる相手、自分よりもずっと年下の中学生たちだぞ？

子供相手にマジになっちゃってるこいつらは――世界征服を本気で主張しちゃってるこの連中は――大人になれなかった子供だ。どうしてそうなった。答えはわかる。

こいつらは――昔の俺だ。

「こゝは一旦逃げるぞ！ 相手するなモブ！」

モブを戦わせてはいけない。

そう判断した霊幻が、茂夫に指示するも。

「影山君！全力を出してくれ！」

超能力を使い、激しい戦闘繰り広げてる花沢が叫ぶ。

相手の猛攻をしのぐも、徐々に防戦一方になっていく花沢に、茂夫の顔が強ばる。

「やめろ！反撃するな！」

茂夫が今何を考えてるのか霊幻は瞬時に察知した。

「ここは大人の俺がなんとかするから！」

超能力もつてない一般人がどうにかできる状況でないことは、俺自身よく理解してる。

でも、それでも絶対的に。

「モブはあいつらと同じ土俵に立つ必要はねえぞ！」

人を傷つけるために力を使わせてはいけない。

しかし、敵側の攻撃はどんどん激しさを増していき、それに応戦してる花沢や律がそれぞれ茂夫に助けを求める。

殺意のある相手に本気で対抗しろと。

律……花沢君……霊幻師匠……みんなを死なすわけにはいかない……僕が本気で戦

うしかないんだ……

目の前で傷ついてく仲間たちの姿に、茂夫の中である感情がわき起こる。

それは相手と同じ感情——殺意。

大切な人達を守るためにはたとえ相手がどうなつたつて

茂夫が感情に身を任せようとしたそのときだった。

「やめとけモブ……お前が苦しくなるだけだ！」

茂夫の顔を両手で包み込んだ霊幻が、まっすぐ茂夫の目を見つめる。

ずっとそばで見してきた。

誰も傷つけたくない、こんな力持っていたくないといつも苦悩してたモブを。

おまえ、積極的に力を研究することも、練習し努力もせず、それどころかできるだけ

使わないようにしてたよな。

超能力のセンスもないんだ、無理に使わなくていい。

「嫌なときはな、逃げたつていいんだよ！」

茂夫にそう強く訴えながらも、霊幻は己の現状に歯噛みしていた。

俺に超能力があれば一瞬で大人しくさせられるのに。モブと違って完璧に力の制御ができる俺なら、殺意持った相手でも殺すようなへまはしない。精神おこちやまなあいつらに教育的指導して説教してやる。

ほんの少しでいい、前世の俺ほどの力じゃなくていいんだ。

少しの時間だけ、俺に力が戻れば！

そう霊幻が強くなるときだった。

手を伝って何かが体の中へ流れていく。

……これは。

28年振りに感じたオーラの気配だった。

どうして今更。

「師匠！」

茂夫が叫ぶのと同時に、霊幻は背中に大きな衝撃を受ける。

肩から縦に長くまるで斬られたように。

まあ、そりやそうだよな。

無防備に背中見せたらチャンスと思って攻撃するわな。

どこか他人事のように考えながらも、前のめりになつて倒れ込む。

コンクリートの床を両断できるほどの切れ味を持った刀で斬られたら一巻の終わりである。

普通の一般人なら。

霊幻流、超能力者の鉄則その1。

「びつくりさせんなよ！マジで斬られたと思ったじゃねえか」
常にバリアは張ること。

たとえ自分より弱いやつが相手でも。

力が宿った瞬間、バリアを展開していた。

考えるよりも先に、無意識で。

何事もなかったようにひよいと起きあがった靈幻に、斬った本人も周りも啞然とする
ああ、この感覚、懐かしいなあ。

首めがけて飛んできた攻撃もバリアで無効化され、ただのプラスチック刀が当たった
程度の痛みしか感じない。

そのまま素手で刀を取り上げ、パキリと真つ二つに割る。

襲ってきた悪霊もパンチ一発で消滅させ、四方八方から同時に攻める敵の分身たち
も、少し腕を振りかざしただけで、跡形もなく消し去った。

ふむ、前世の時よりも力は劣ってるが、この際贅沢は言ってられん。

「なんてことだ……まだこんな実力者が世の中には存在するのか……消さなければ。世
界征服の邪魔立てをされては困る！」

遺志黒の周りに数え切れないほどの黒玉が出現する。

なんて数だ……

大丈夫か……？

花沢と律が心配げに靈幻の方を見るも、靈幻自身は全然焦りを感じなかった。それどころか内心安堵までしていた。自分の見立ては正しかったと。

やっぱり思ってた通りーこいつらの力は弱い！

手品レベルの強さ程度しかないのに、本気で世界征服できると思ってるとは笑止千万。

今の弱体化した俺でも十分対応できる。

さて、あいつらを大人しくさせて教育的指導してやるか。

世界征服夢みちやってる馬鹿どもに、まずは目を覚まさせ、現実に生きるってことを教えてやらねえと。

「大人に任せとけ」

久しぶりに、体の調子がいい。

その後の展開は皆が知つての通りである。

第7支部との戦いから数日経過したある日の昼下がりに。

霊とか相談所はいつもどおり、閑古鳥が鳴いていた。

相談所には霊幻一人だけ。

「……」

新聞を広げ、一見すれば記事に目を通してようだが、実際は新聞など読んでいなかった。

“私達は特別だ！他の人類より上位の生命体だよ！”

それは数日前、遺志黒が主張していた言葉。

みつともなく喚きちらし、いかに自分が特別であるかを声高にスピーチするその姿は、昔の自分と重なって見えた。

超能力の強さで言えば、前世の自分は遺志黒と比べものにならない。

誰よりも圧倒的なーそれこそ“神”の力を持っていた。

“社会社会って……そっちの尺度で作られた共同体は私に適さない！力を持って生まれた私が力を振りかざして何が悪い！”

生まれついた力を自分のために、好き放題使いまくって。

“世界を変えて何が悪い！こんなに優れてるのにどうして認めてくれないの？”

世界を変えてみようとした。

でも。

所詮、どんなに特別な力があつたって人は人。それ以上でもそれ以下でもない。

はあと大きなため息をついた後、「で、お前がここに何の用だ？」自分の上に漂ってる

緑の悪霊に尋ねる。

「茂夫に頼まれて来ただけだ。貧血起こして除霊手伝えないってさ」

力を宿した影響か、霊幻の目にはしっかりとエクボの姿が視えていた。

「てかお前もう茂夫必要ないんじゃないか？目覚めたんだろ超能力に」

そう指摘するエクボに、霊幻は大きく肩をすくめる。

「馬鹿言え。あれは全部モブの力だ」

一時的に力を借りただけで、相変わらず自分の体には何も残っていない、俺はー

空っぽのままだ。

「あれをきつかけにお前が見えるようになったただで前と何も変わらん」

この先もずっと俺は「弱いまま」だろう。

未来予知の力はもう使えないが、そう強く確信した。

「またただの詐欺師に戻ったのか」

「人聞きの悪い悪霊だな」

お前なんか一瞬で消し飛ばす力はあつたんだぞ。前世の俺は！

しかしモブ来れないのか……それなら。

「よしーじゃあお前手伝え」

丸めた新聞紙の先をエクボに突きつけニヤリと笑う霊幻に、エクボが「はあ？」と嫌

そうな顔をつくる。

「なぜ俺様がてめえのヘルプを？」

「そのためにお前を超越したんだろ。欠勤連絡だけなら電話でいいし」

今日はモブの代わりにしっかりと働いて貰うぞ。

「マジかよ……俺様を何だと思ってるんだこいつら」

まさか自分がパシリに使われたとは思ってなかったのだろう、頭を抱えて呻く悪霊に、霊幻は不思議そうに「え？お前モブの使い走りだろ？」と首を傾げる。

それともモブのペットだったか？と揶揄する言葉に、エクボはピキリと青筋立てて叫

んだ。

「上級悪霊だつーの！」

思わぬところで超能力者結社と遭遇したが、もう関わることはないはずだ。何人かの超能力者とは連絡先交換して、就職やら生活に関しての相談事にはアドバイスしてやって、ちゃんと社会復帰できるようにサポートはしてやるつもりだけど。

だいたい超能力で世界征服なんてどうやってするつもりなんだよ。
力を見せびらかして恐怖で人を支配する気か？

そんなの土台無理な話だろまつたく。「※全人類の精神支配して世界征服完遂した人」

まつ、こつちから首突っ込まなければ、巻き込まれることもないだろう。

面倒事はもうゴメンだ。

今の俺は前世の俺と違って、超能力も霊感もないただの善良なる一般市民。世界規模の問題は警察や軍に任せようではないか、ハツハツハ。

なんて暢気なことを考えてた霊幻は知らない。

自分の知らない水面下でー

「もしもし。第7支部？潰されたよ」

「外部のエスパーが攻めてきて幹部は全滅。支部長の遺志黒さんもたいしたことなかった。下っ端構成員に至っては敵にまんまと懐柔されちまった」

「シヨウ何を言ってる。視察の経過報告を聞いているんだが」

「あなたの自慢の組織全然世界一じゃねーぞ。遊んでないで早く日本に來い。バカ親父」

「ああ。近いうちにな」

事態が進んでおり、そう遠くないうちに自分たちが巻き込まれることになることを――今世では未来予知できない靈幻には知る由もなかった。

ピッ。

「もしもし。今大丈夫か？運動できて汚れてもいい格好で90分後に集合な」
ツチノコ捕まえて報奨金ゲットだぜ！

↓T o b e c o n t i n u e d ?

ある詐欺師の話【上】

「前回までのあらすじ」

霊幻「マツタケ旨かった」

霊とか相談所には従業員がバイト一人しかいなかった。

しかもそのバイトこと影山茂夫は中学生であり、いつでも呼び出せるわけではない。よって相談所の戦力が増えることは霊幻にとって悪くない話だった。

たとえそれが人じゃなく悪霊であっても。

緑の人魂、エクボ。

かつて「笑」という可笑しな宗教団体で人々を洗脳し教祖をやっていた悪霊である。

エクボの目的は全人類を支配する神になること。

その野望を叶えるために茂夫の力を利用してやろうと、エクボはあの手この手でしつこく悪事を唆しているものの、良くも悪くも人に流されない茂夫には全く効果なかった。それどころか茂夫にパシリ的な扱い「自分の代わりに霊幻の仕事を手伝わせる等」されてる始末である。

上級悪霊の俺様が何でこんなことを……と最初の方はブチブチ文句言ってたが、ずっと茂夫に憑いても暇なのか「基本茂夫はエクボを無視してる」時々相談所に顔を出すようになっていた。

今日も部活で来れなくなった茂夫代行として霊幻の出張除霊に同行し、現在廃墟で悪霊退治の真っ最中である。

「すごいやエクボってモブに憑いてるんだよな？」

「ああ？なんだよ急に」

うどうぞ蠢く悪霊たちを次々と口の中に放り込み食らう様は完全ホラー映画にでてくる悪霊そのもの。

エクボが噛み砕いたり、引きちぎるたびに、食われてる悪霊が悲鳴をあげてるのが余計ホラー感に拍車をかけていた。

一言で表すならキモい、その一言に尽きる。

……やっぱり除霊はモブに任せの方がいいな。

除霊はなるべくモブを呼ぼうと心の中で決めつつも、前から気になってたことを霊幻はエクボに尋ねる。

「何故お前はモブに固執する？悪巧みをしたいなら、全く靡かないモブより別のやつ探した方が早いんじゃないか？」

霊幻の問いに対し、エクボは小馬鹿にしたように笑う。

「はっ、これだから力のないどノーマルは」

最後の悪霊を食い終え、豪快なゲップを吐いた後、エクボは霊幻の目の前まで滑空する。

「この際はつきり言つてやる。シゲオはそこらの超能力者とは格が違う。お前なんかに騙され使われていい奴じゃねえ」

ふんすと体を膨らませて、霊幻に対し凄む。

「俺様と手を組んで世界の頂点、神になるべき男なんだ！」
「いや無理だろソレ」

モブはクラスの中心的存在でなく、教室の隅にいるような大人しい地味なタイプなのだ。

仮にモブがこの悪霊と手を組んで神様になったところで。

モワモワと靈幻が想像したもの。

それは――

〃……〃

ずらりと並んだ信者たちの前で、一言も喋らず顔面蒼白で石像のごとく硬直してる茂夫の姿だった。

全人類の前で演説どころか、学校のスピーチもダメだろ。

「モブは普通の中学生なんだ。変なことに巻き込むんじやねーぞ」

「シゲオが〃普通〃？〃特別〃の間違いだろ」

何言ってるんだこいつと訝しげな様子で靈幻をみるも、ああそうかと何やら納得した後、やれやれと言わんばかりにわざとらしいため息をつく。

「ノーマルで靈感も超能力もないお前にシゲオの凄さなんてわかるわけもねーか。」

ハンと鼻で笑うエクボに靈幻はムツと顔をしかめる。

「失敬な。モブの強さはちゃんと把握してる」

「嘘こけ靈感・超能力ゼロのインチキ詐欺師」

いや本当に理解してるぞ。

あいつは「前世の」俺よりも弱い。

「と、に、か、く！俺様はシゲオの力で神様になるんだ！」

俺様の邪魔するなよ！と牽制する悪霊を霊幻はしらりと冷めた目でみる。

「モブの力、私利私欲のために利用しようとするな」

特別な力は世のため人のために使うものだ！

ビシッと悪霊に釘を差す霊幻に対し

「お前にだけは言われたくねえ！」

緑のボディを真っ赤にしながら、エクボは心の底から叫んだ。

ーなんてやりとりがあったなあ……。

前世の俺ですら悪霊とまともな会話などしたことなかったというのに、まさか悪霊と世間話する日が来るとは。

全く人生一体何が起こるのがわからない。

一度終わったはずの人生、やり直してきたと思ったら、何故か弱くてニューゲームだったりするし。

超能力使えない縛り状態で超能力者の弟子ができるは、なんか変な超能力者集団に絡

まれるなど波瀾万丈な人生である。

人生山あり谷あり、一寸先は闇とはよくいったものだ。

とはいえ、昔の俺ならいざしらず、今の俺は特別な力を持たないただの人間、一般庶民。

これ以上おかしな事件や現象に巻き込まれることもないだろう。

そう樂觀視してたが、俺の考えは甘かった。

今世の俺は前世の無敵最強チートな超能力者様ではない。小石一つも浮かせることができない一般ピープルであり、千里眼も未来予知も使えない。よって俺の予想、直感といったたぐいはいとも簡単に外れる。

今陥ってるこの状況も、想像すらしていなかった。

意識せずため息が漏れる。

視界の端に見えるは両手両足に幾重にも巻き付いた植物の蔓や根。

雁字搦めに拘束され宙づり状態になった靈幻は一人心の中で突っ込んだ。

触手プレイとかエロ同人かよ。

弱くてニューゲーム4

世の中にはいまだに科学では解明できない怪奇現象が確かに存在する。

人々はそれらと出くわした時なす術もなくただ恐怖の闇に突き落とされてしまう。

そんな混沌とした闇に一筋の光を差すべく日々戦い続ける者達がいた。人は彼らをこう呼んだ。

“ 霊能力者 ” と。

そしてここにその霊能力者に救いを求める者が一人。

「あれは間違いない……この世のものじゃなかった……」

暗い表情で男は目の前にいる青年に語り出す。

己が体験した怪奇現象を。

「畑に異常が起きるのはいつも収穫前なので、夜中気になって様子を観察しに出たら……」

一瞬躊躇うように口ごもるも、男は意を決したように口を開いた。

「私の畑の上で何者かがくねくねと踊っていたんです！」

そのときのことを思い出したのか、男は小さく身震いしつつ、陰鬱なため息を吐く。

「翌朝農作物は全て枯れ果てていました……」

植えてたキャベツ全滅ですと嘆く男の話に耳を傾けつつ、

「……」

青年は無言で出された茶をズズつと啜る。

「暇つぶしに始めた畑ですが3年も立て続けにこんな具合だとさすがに気味悪くて……今度の収穫時期もそろそろです……そこであなたに電話したんです。霊能力がある方に解決を委ねてみよう……」

どうでしょうか先生。

不安げな表情を浮かべてる男に、青年は鷹揚に頷きながら「正しい判断です」とにっこり微笑む。

「この怪事件、必ずや解決してみせましょう。」

今世紀最大の霊能力者、霊幻新隆が!!」

“畑に巣くう何かを退治する”依頼を引き受けた霊幻は、さっそく調査に乗り出し

た。

作物が駄目になる原因は一体何なのか。

俺が超能力者だったら即問題解決できたんだけどなあ……。

超能力で加速的に生長させることができるし、枯れてしまった植物も治癒の応用使えば復活できる。

しかしこれはあくまで例外中の例外。

広大な畑の再生など複数の超能力を完璧に使いこなし、膨大なスタミナを擁する超能力者じゃないと不可能な芸当である。

さらに言うならこの方法は一時的なもの、根本的な解決にはなっておらず、来年、再来年、不作は続く。

そもそも今の俺、超能力者じゃないしな。

まずは地質調査から始めるか。

そして調べた結果。

「俺なりに調べてみたが肥料や土には問題なさそうだ」

手に持ってた畑の土を地面にパラパラと落とした後、霊幻はフウと一息ついた。

「そうなる俺にはお手上げだからな……どう思う？モブ」

自分の隣に立っている弟子——影山茂夫に意見を仰ぐ。

「だからいきなり呼び出すのやめてくださいって」

学校帰りなのだろう、学ランと学生鞆持ったままの茂夫が靈幻に文句を言った。

まあいいじゃないか俺とお前の仲だろ？と靈幻は茂夫の文句を受け流しつつ、よっこらせと立ち上がる。

土・肥料に問題なく野菜自体もカビや病気でダメになったわけでもない。

となると野菜が枯れた原因はやはり依頼人がみた。畑でくねくねしてた変なやつか。

畑の上でくねくね踊る生き物……。

「大根の妖精の仕業かもな」

ぼわわんと靈幻の想像に浮かんだのは、畑の上でくねくね踊る白い妖精だった。

「そんなのいるんですか？」

「いないとは断言できないだろ」

緑の悪霊がいるんだ、白い妖精がいたって不思議じゃない。

ツチノコはいなかったけど。

「それに悪霊より妖精の仕業の方が何か許せるだろ」

「はあ」

はたから聞けば何とも気の抜けたやりとりを二人がしていると。

「ん？何か動いたか？」

視界の端で何かが移動するのを靈幻は感じ、畑の方へ視線をやる。

広大な畑の中、生き物の姿はどこにもない。

唯一あるとすれば、ぽつんと立ったカカシがあるだけである。

気のせいかと靈幻が首を傾げる横で、「確かに弱いけど靈気がありますね」と同じよう

に畑を視てる茂夫。

靈気があるってことは妖精じゃなくて悪霊の方か？

靈幻が口を開きかけたときだった。

何の前触れもなく突然カカシが動き出す。

“ 昼の会話も聞こえてきたぞ……わしを退治するだと？ ”

そうカカシが喋ると同時に、ギョルギョルと高速回転を始める。

何か仕掛けてくる気か。

「モブ。早いとこ終わらせちまおう」

時刻はもう夕方。

モブの一時保護者として暗くなる前にモブを家に帰さなければ。

「はい」

靈幻の指示に従い、茂夫はカカシに向かって力を発動する。

瞬間、茂夫たちに襲いかかろうとしてたカカシは、茂夫の力で吹き飛ばされ爆散した。バラバラと雨のようにカカシの破片が畑を降り注ぐ。

「終わりか？」

意外と呆気なかったなどのんびり感想を漏らす霊幻に、同じく緊張感ない茂夫が答える。

「はい。かかしに入ってただけで害はそんなになかったんじゃないかな」

何はともあれこれにて一件落着。

さつさと依頼人に報告して報酬……報酬は来年の収穫物の30%貰える。

これで食費が浮く。

など心の中で霊幻が悪どい算段していたときだった。

突如爆音を立てながら畑の土が盛り上がり、マグマのように噴出する。

いや土が盛り上がっただけではない。

「あ——」

霊幻の体は勢いよく吹っ飛ばされ、天高く舞い上がる。

視界がぐるりと反転し、霊幻の目にはどこまでも広がる空が見えた。

何か凄いデジャブ。

そのまま地面に落下して激突と思いきや、霊幻の体は宙に留まったままだった。

いや正確に言うなら、植物の蔓に絡まり、拘束された状態で。

“ここはわしの土地じゃ。何人にも渡さん”

上級悪霊くねくね

植物の蔓や根でできた、数メートルはあろうほどの巨人の姿で、拘束してる霊幻と茂夫「バリアで防げたはずだが律儀に捕まってる」を睨んでいる「目はないが雰囲気的に」悪霊の主張に拘束されたままの霊幻が叫ぶ。

「だったら権利書を見せろ！収穫まで育てるのにどれだけの手間がかかると思ってたんだ！ひねくれた嫌がらせだな！」

お百姓さん「依頼人は趣味で作ってるけど」が時間と手間かけて作った尊い作物を枯らして無駄にするとか、くねくねした見た目に違わず、心もくねくね曲がってやがる！

“畑で育った野菜の生気を吸い取ることはできる。ちゃんとわしの糧になつとるわ”
金払わず無断で野菜の生気吸うとはなんて悪霊だ！

「野菜泥棒め、モブ！ぶっ飛ばせ！」

「はこ」

そう茂夫が返事すると同時に、体に巻き付いてた蔓が見えない力で引きちぎられ、茂夫の体は自由に動けるようになる。

しかし。

「やるな小僧……だがもう一人の方は凡人と見た！」

やっべ、バレた。

霊幻の体に巻き付く蔓の数はどんどん数を増していき、霊幻を覆い隠していく。体に食い込んで地味に痛い。

パイロキネシスで一気に燃やしてえ……

もしここにいる霊幻新隆が前世の“霊幻新隆”だったなら、周囲一帯のもの全て、何もかも焼き尽くすことができただろう。

しかし悲しいことに今の霊幻はくねくねが言つてた通り、ただの凡人。

無能力者である今世の霊幻新隆には対抗手段がない。

モブも使えるのは念動力だけでパイロキネシス使えないんだけど……どうすんだコレ。

完全に視界がなくなる直前まで、霊幻は茂夫と悪霊の戦いを観察していたが。

モブが何度も植物に向かって力を当てても、悪霊が操つてる植物の蔓は尋常じゃない数があり、いくら引きちぎっても焼け石に水といった様子で苦戦しているようだった。

こういう時一つの超能力しか使えないと不便だよな。

無限に増殖する植物操作系と物理破壊系のサイコネシスとでは相性が悪い。

植物破壊しても悪霊は痛がってないし、これはあれだ。

植物に憑依してるわけじゃなく、本体は別にあつて外から植物を操ってるタイプ。

と、冷静に分析ながら弟子の戦いを見てた霊幻だが、その行為は長く続かなかつた。

霊幻を包み込む強固な植物の檻で何も見えなくなつたからである。

真つ暗な視界の中、植物の蔓で全身拘束された霊幻は身じろぎすらできない。

俺の人生これで終わりか……前世よりも少し長生きしたが短かつたな。

せめて苦しまずに逝きたい。

触手プレイからの苗床エンドはマジ勘弁。

……いや待てよ。

自分ではどうしようもないこの現状に半ば諦めかけてた霊幻だが、あることを思い出した。

モブの力はサイコネシス。

サイコネシスならー”あれ”ができる……！

前世の記憶、超能力者としての知識を。

あーあー、弟子よ、師匠の声を聞くのです。悪霊を倒すにはー

つらつらと茂夫に向けて、悪霊の退治方法をメッセージを送り終え、これで一安心、ふうやれやれと一息ついた霊幻。しかし数秒後、はたと我に返る。

今の俺、テレパシー使えないじゃねーか！

茂夫に携帯で連絡したわけでなく、ただ頭の中で念じたただけだった。

いや頑張つて念じ続けたらモブに通じるかもしれない。

蔓で身動きできない状態で携帯は使用不能、分厚い植物の檻の中、大声で叫んでもモブに届く可能性は限りなく低いだろう。

しかし希望を捨ててはならない。

俺もモブもテレパシー使えないけど、師弟の絆パワーとか何やらで奇跡が起こって心を通じ合い、そして師匠の助言で見事敵を打ち倒す。

少年マンガならお約束な展開、今こそ奇跡よ起これ！

届けーモブに俺の声とーどーけー！

うーんうーんと霊幻が必死に念じていると。

「ん……あれ？」

体を縛ってた植物の蔓がしゆるしゆると力を失ったように解けていく。

同時に真つ暗だった空間に光が溢れる。

隙間なく覆ってた植物の檻が解除されたのだ。

「植物が動きを止めた……?」

もしや。

靈幻がバツと勢いよく振り返った先に見たのは。

「植物に命令してみたんです。悪霊より強い念波を送り込んでみたら操ることができました」

植物の根っこを掴んでる茂夫の姿だった。

やった奇跡が起こった!

見たか悪霊、これが師弟の絆パワー!!

“植物に念波を送ってジャックしろ”という俺のメッセージ、無事モブに届いたんだな!

サイコキネシスとは意志の力だけで物質を動かす能力。

モブがやってみせたのは、その意志の力を外側だけでなく生物の内部に干渉し操作する、サイコキネシスの応用技だった。

なお人に念波を送れば相手を思うがままに動かせたりできる。

所謂“洗脳”である。

ただしモブにはそのことについて教えていない。

洗脳して人を操るなど人としてやってはいけない倫理観の欠いた最低な行いだから

だ。

悪用ダメ、絶対！「※洗脳で世界征服した人」

“くそ……小僧！植物への支配を上書きしおつて！”

操つてた植物の大半を茂夫に乗っ取られ、それまで余裕の表情だった悪霊の顔に怒りと焦りが現れる。

これで形勢逆転、反撃開始だ！

「終わったか？」

「はい。もう霊気は感じません」

悪霊くねくねは無事モブの手によって退治された。

ミッシヨンコンプリート！

とぼつちりでなんか俺、ぶっ飛ばされたけど……まあ気にしないでおこう。

悪霊とモブが植物使った怪獣大乱闘！みたいな戦いしたせいで、畑はめちやくちや、作物も全部おじやんになっていた。

全部悪霊のせいだって依頼人に報告しておこう。

「俺のアドバイスのおかげだな！」

師匠の凄さ、思い知ったか！

鼻高々に主張する靈幻に、茂夫は不思議そうに首を傾げる。

「師匠のアドバイス？」

「俺が放った念話で悪霊を倒せるようになっただろ」

「いえ、師匠の声は届いてないです」

「……」

「テレパシー使えないって自分で言ってたじゃないですか」

「……」

「……」

二人の間にひゆるりと風が吹く。

「……そうだったな」

ついと茂夫から視線をそらした靈幻の視線の先には何も無い。

どこまでも広がる空があるのみ。

カーカーカー。

どこかでカラスが鳴いている。

時刻は夕暮れ時。

西の空には真つ赤な夕日が浮かんでいた。

「……帰るか」

「は、」

夕日に染まった畑に写った二つの影法師がゆらりと動き、やがて畑から姿を消していった。

「なんですかそれ」

無事、悪霊くねくねを退治した翌日。

いつものように相談所へ顔を出した茂夫の目に映ったのは、床に並んだ複数のプランターだった。

「家庭菜園を初めてみた。うまくいけば食費の節約になるだろ」

野菜ソムリエ資格持ちの俺なら大丈夫大丈夫。

超能力なくてもなんとかなるだろ。

「報酬の収穫野菜は木っ端みじんになつてしまつたが、代わりに土や肥料や野菜の種をもらい受けた。お前にもほら。前回のバイト代だ」

そう言い、靈幻が茂夫の手の平にポンと乗せたのは、お馴染みの1000円硬貨三枚でなくロー

「ブロッコリーの種」

ゴマ粒のような種が入った小さなビニール袋だった。

「ブロッコリーは体にいいぞー。100g食べれば一日に必要なビタミンCが摂れるし、他にも葉酸、ビタミンE、ビタミンK、カリウム、食物繊維といった色んな栄養素が豊富に含まれている。特に成長期であるお前にとって野菜摂ることは大事なことだ。好き嫌いせずちゃんと食べるよ」

「……」

「ついに現物支給に……」

普段の時給300円も大概ひどいが、まさか報酬が現物支給「野菜の種」になるとは。「……ありがとうございます」

じーつと手の中にあるブロッコリーの種を見つめながらお礼を言う茂夫の姿は物悲しかった。

哀愁漂う弟子に気づいてるのか気づいてないのか「あえてスルーしてる可能性大」
「ああそうだ！こつちにミニトマトの種を植えたんだが、試しにこれにエネルギーを送って野菜成長させてみるよ」

そう言い霊幻が指さした先には、植木鉢がテーブルの上にちよこんと置いてあった。当然芽は出ていない。

トマトが収穫できるまで約二ヶ月かかる。

超能力使えばその期間すっ飛ばせるのだ、使わない手はないな！

霊幻の指示するがままに、茂夫が超能力を発動する。

「おおおおー！」

ドキュメンタリー番組でみる植物の高速再生動画のごとく、によきによきと芽が生え成長していく。

そこからはもうあつという間。

僅か数秒たらずで真っ赤な実が成った。

鈴なりにぶら下がったミニトマトに、霊幻の目が爛々と輝く。

「すげー！これは新たなビジネスの予感！」

これからの時代、農業ビジネスは儲かる！

「どれどれ……」

うきうき気分で、できたばかりのミニトマトを口に放り込むも。

「……まじっ！」

ミニトマト 旨み0%

赤く熟した外見とは裏腹に苦みとえぐみを凝縮したひどい味だった。

なまじ見た目が見るからに完熟してて美味しそうだったから余計ダメージが大きい。
見た目詐欺だ。

「……………このミニトマト、持って帰っていいぞ」

「え」

「部屋にでも飾っておけ。かつてトマトは食用でなく観賞用として用いられてたんだ。
何ら不自然じゃないぞ、うん」

「はあ」

霊幻の新たななるビジネス計画は頓挫した。

超能力で作った野菜はまずい。

霊幻にとってそれは、前世では知り得なかった、衝撃の新事実だった。

う、嘘だろ……………？

つまりあれか、前世の俺はくっそまずい野菜を得意げにドヤ顔で量産してたのか？

うわあああ。

新たに増えた黒歴史に靈幻は悶絶する。

さらに「靈幻にとつて」悪いことは重なるもの。

なんとあのモブに彼女できた「何か妙に機嫌よく除霊するモブに対し冗談半分で彼女でもできたのかとカマかけたら、わかりやすく動揺した」

本来なら初彼女おめでとうと祝福し、彼女と長続きする方法など伝授してやるのが師匠の仕事だろう。

だがしかし。

モブだけは、モブだけは！俺と同じ彼女できない仲間だと安心してたのに！

この裏切り者ー！

己の黒歴史ダメージによって既に心の余裕がなかった師匠は一人地団駄を踏んでいった。

中学生相手になんと大人げない。

とはいえ、靈幻も立派な社会人、大人である。

何日も時間かけて自分の気持ちに折り合いをつけ、人生の先輩らしく恋愛相談「※恋愛経験ないため、雑誌で見つけたそれっぽい情報を頭の中にたたき込んだ」に乗ってやろうと意気込むもー

「彼女？別れました」

時既に遅し。

師匠の出番はなかった。

え、マジで？

はえーよ、まだ一ヶ月も経ってねーだろ。

しかも話を聞くに、円満な別れ方だったらしく、彼女とはその後普通に友達として接してるといふ。

え、マジで？ 「二回目」

空気読めなくてコミュ力に問題ありな、あのモブが？

というかモブが人間関係のことで、俺に頼らず自分で解決したの、これが初めてなのでは？

自分の知らないところで、弟子が成長してる。

師匠として喜ばしい出来事のはずなのに。

「……」

何故か素直に喜ぶことができなかつた。

世の中平和が一番である。

毎日どこぞの超能力者が好き放題に暴れまくり、荒くれ者たちが徒党を組んで我が物顔で町を闊歩するような世紀末など、頭のイカれたバトルジャンキー以外誰が望むだろう。

無敵の超能力を持つていた、昔の自分ならいざ知らず、今世のようなただの一般人と化した今の自分なら尚更、その想いは強い。

前世では考えられないほど、穏やかで平和な日々が続くこの日常、大事にしなれば罰があたる「※前世ではひっきりなしに襲撃を受けてた&24時間フルタイムで自動バリア発揮してたせいで、霊幻の周囲だけ毎日台風状態だった」

しかし、かといってこの状況もなんだかなあ……。

椅子の背もたれによりかかったまま、ぼへーと窓の外を眺める。

目に映るは澄み切った青い空と白い雲。

力の抜けたあくびをしつつ、視線を外から部屋の中へ戻す。

客もおらず、少し離れた受付所にはモブが陣取り、のんきに漫画 を読んでいる。

朝からずっと閑古鳥が鳴いており、今日やったことといえば、仕事と何も関係のないネットサーフィンと、たこ焼き食べたことのみ。

「あー……暇だなー」

口の端に青海苔くつつけた靈幻の姿は完全オフモード、やる気0%である。

「靈に悩んでる人がいないってことじゃないですか」

完全だらけてる大人に視線を移すことなく、平坦な口調で茂夫が答える。

靈幻と茂夫以外、誰もいない相談所。

「平和だなーおい」

「平和ですね」

命の危機にさらされることなく、安全に人生過ごせることは喜ばしい。

大多数の人はその意見に賛同するだろうーが。

「だがこれじゃ食えん！」

人の不幸ごとで飯食ってる“靈とか相談所”にとって、町が平和なことは死活問題だった。

「このままだと今月赤字だなあ」

「……バイト代ちゃんと払ってくださいよ」

独り言で呟いたつもりだったがモブのやつ、耳聴く聞いてたらしい。

いつの間にか読んでた漫画を閉じ、じとりと俺のこと睨んでいる。 1

現物支給「野菜の種」のこと、まだ根に持つてるのかよ。

ラーメン奢ってやったんだからそれでチャラにしろ。

しかしどうしたものか。

従業員しかいない事務所で小さなため息をはく。

客がこなければ仕事にならない。

となれば。

「何かこつちから動き出さないと……」

売り込みは営業の基本だ。そうと決まったなら行動あるのみ。

カチカチとマウス操作してネットで情報収集を始めた。

霊幻が打ち込んだ検索ワードは――

「『都市伝説』?」

「ああ。お前もその手の話を友達としたことがあるだろう?」

「ないですね」

同意することなくふるふる首を横に振り否定する茂夫の格好は、いつもの制服でなく

私服姿。

とある休日、電話で呼び出し受けた茂夫は、呼びつけた張本人である靈幻と共に電車に乗っていた。

「今向かつてる」深爪町」と何か関係あるんですか？」

「関係大ありだぞモブ。都市伝説が流行つてる地域はそういう雰囲気にもまれやすい人種が多い。つまり除靈依頼が山ほど埋もれてるって寸法だ」

カモれる客は多ければ多いほどいい。

「不幸探しにイキイキしてますね」

「飛び込み営業の基本は笑顔だ！」

そう笑顔で答える靈幻だが、どう見ても邪気100%の完全詐欺師スマイルだった。

「あの……もしかして靈能力者さんですか？実は相談したいことがあって……」

靈幻の読み通り、出張靈能相談始めて早速、やつれた様子の女性が話しかけてきた。

顔に覇気がないな……目に薄ら隈もできてるし、寝不足か？

しまった、アロマキャンドルとマツサージオイルは相談所に置いたまままだ、暴走アロマ特急が使えない。

カウンセリングでなんとかなるか？と内心焦るも、女性の悩みは不眠症などではなかった。

立ち話では何だからと近くのファミレスで女性の話を聞くことになったが、どうも女性性は靈感がある体質で、ここ最近街全体が嫌な気に覆われているのが気になってるらしい。

部屋に盛り塩置いてなんとか生活してるが、一向に嫌な気はなくならず、気が滅入ってるのだという。

「私氣づいたんです。嫌な感じが大きくなったのはこの街で急激に広まってる都市伝説のせいだって……」

暗い表情で語る女性に対し、ふむふむと相づちを打つ。

「人面犬。ダツシユ婆。赤いレインコート。あとは……ひき子さん、ですね？」

「ええ、そうです！その四つの都市伝説！」

「あらかじめ〃都市伝説〃についてリサーチしてた霊幻がちらちらと都市伝説の名前を挙げると、女性が勢いよく声をあげた。

「お願いです！これらの都市伝説を消し去ってください！」

必死にそう訴える女性に対し、霊幻は自信たっぷり胸を張り、いつものように安請け合いました。

「この靈幻新隆にお任せください！必ずや消し去ってみせましょう！」
「……」

なお実際に問題解決するのは大見得切った靈幻でなく、その隣で黙々とフライドポテト食べ続けてる茂夫である。

「で、どのコースにしましょう？土日はこのパック」

女性に料金コースを説明する靈幻の横で「あ」と声があがった。

「どうしたモブ、何か気になることがあるなら言ってみろ」

都市伝説に関する事か。

その場に緊張が走り、張りつめた空気が漂う。

「師匠」

暫し沈黙が続いた後、茂夫はゆっくりと口を開く。

「ケチャップのお代わり、もらってもいいですか？」

山盛りに詰まれてたはずのフライドポテトは、いつの間にか半分ほどに減っていた。
あんま食うなって言ったのに……。

町に蔓延る都市伝説を解決するなんて、本音を言うならばぶつちやけ面倒くさい。それも一つでなく、四つもとかやる気が萎える。

しかし依頼を引き受けた以上、泣き言なんて言ってられない。

今月の家賃がかかってくるんだ、仕事のえり好みなんかしてられっか。

誰かを呪い殺すといったド外道な依頼は断るが。

モブの教育に悪すぎる。

はあ……前世の力があれば、ここいら一帯丸ごと浄化してはい終了お疲れ解散つてできたのに……無い物ねだりしても仕方ない。

「まずは現状把握、情報収集から始めるか」

女性を選んだのは本気のＣコース、一番高いコース。

顧客満足度をあげることで、後のリピーターにつながる。

手抜きはできない、この依頼、必ず成功させねば。

そのために必要なものは――

ちらつと後ろを見やる。

霊幻の視線の先にいるのは、霊とか相談所の最終兵器モブともう一人。

「驚いたぞ。まさか引き受けるとはな。しかも成果報酬2万円だと？うちは基本料20万円からだぞ」

首から大きな数珠をかけた小太りの男だった。

霊幻と同業者、つまり詐欺師……ではない。日輪霊能連合とかいう謎の組織に属する霊能力者であり、妙な成り行きで現在霊幻たちと共に行動している。

当然女性の話もファミレスで一緒に聞いていた。

「この案件なら正式に見積もれば50万円……」

一人納得いつてない様子で何やらブツブツ呟いている男に対し、霊幻の口片端がニヤリと小さくあがる。

「……人海戦術、人手だ。」

「まーお前にも手伝ってもらおうけどな。ほら行くぞ。うかうかしてたら日が暮れる。」

えーと……森林丸？」

「森羅万象丸だ！俺は手伝わんぞー！」

名前を間違われ憤慨する森羅に霊幻はまあまあと宥める。

「一緒に話聞いてたんだから逃げんなよ。分け前やるからよ。二手に分かれて聞き込み調査だ」

そう言うなり、霊幻は相手に口を挟ませる隙を与えず、素早く自分の名刺を手渡した。「お互い報連相を怠らないように！」

靈幻流交渉術その1。

勢いで協力させる。

「……ふん。仕方ない。慈善事業と思って手伝ってやる」

元より人がいいのだろう、靈幻の強引なやり口に腹を立てつつも、森羅は渋々といった様子で名刺を受け取り、ポケットにしまい込む。

よし人手確保、これで仕事の効率が上がる。

ズンズンと巨体揺らしながら去っていく森羅の後ろ姿を見送りつつ、靈幻一人ほくそ笑む。

俺の読み通り、押しに弱く流されやすい性格だったな。

あとは念のため。

「モブ。エクボはいるか？」

保険かけておくか。

「エクボ。呼んでるよ」

「んだよ！お前と話すのうんざりで見えないモード強めてんのに」

茂夫に促され、スウと緑の人魂ことエクボが出現する。

あ、最近姿見せないと思つたら。俺がウザいみたいに言うなよ。いつもモブに無視されて可哀想だから、仕方なく話し相手になつてやつてただけだ。寂しすぎて成仏しない

ようにな!

「そう邪険にするなよ。仕事仲間だろ。それより」

霊幻がくいと背後を親指で指す。

指した方向にいるのは。

「あのデブをそのステルスモードで尾行しといてくれ」

「なんで俺様が……逃げたら逃げたでほっとけよ」

嫌そうに顔をしかめる悪霊に「いいや」と霊幻は至極真面目顔で首を振る。

「あれは多分真面目なマニユアルバカだ。」

教本にない想定外の事態に出くわして、あたふたする光景が目には浮かぶ。

「だからこそあいつに危険が及んだら指示した俺のせいになっちまう」

何かよくわからん組織に属してることとは、その組織がしゃしゃりできる可能性もあ

る。慰謝料や損害賠償を請求されるとか冗談じゃねえ。

なおも渋ってる様子のエクボに「頼むよエクボ」とだめ押しでお願いするモブ。

「事故はない方がいいから」

「わかつたよ……ギブアンドテイクな。茂夫もそのうち俺様の頼みを聞いてくれよ!」

深いため息をついた後、悪霊はスウーッと空気にとけ込み消えていった。

エクボがついてるなら最悪死ぬことはないだろう。

万一に備えての保険をかける。

人生において非常に大切なことだ。リスクヘッジはビジネスの基本！

千里眼持ちで常に危険察知でき、なんでもできる力を持つているなら、その場その場でこり押せばどうとでもなるけどな「事実それで誰も俺のこと殺すどころか傷一つつけられなかった。最期の核爆弾もわざと食らったし」

だがそんなの持ち合わせてない一般人は、あらゆる危険を想定し、前もって備えておかないとな！安全第一！

今の俺は前世の俺と違つて慎重な男なのだ。

その証拠に事務所もちゃんと火災保険に入つてる。

これである日突然何者かに放火されて全焼しても超安心！

「よし、俺たちも聞き込み始め……どうしたモブ？」

「師匠」

そう霊幻に呼びかける茂夫の声は普段のおっとりした口調とまるで違う。

「依頼人の言つてた通り、この街なんかおかしいですよ。本当にいるかもしれません」
気をつけてくださいと忠告する茂夫の姿をみて霊幻は静かに悟る。

あ、この依頼、ガチめにヤバイんだ。

生暖かい風がひゅうと駆け抜けていく。

灰色の雲に覆われた空という視覚的効果も相まって、靈感などないはずなのに、何か妙な胸のざわつきを感じさせた。

街に巣くう4つの都市伝説。一筋縄ではいかなさそうだ。

なあモブ、この辺一带全部除霊とかできない？え、無理？ああそう。

“人面犬”

リストラされて自殺した中年男性の霊が犬に憑依したものかと言われている。繁華街でゴミ箱を漁っており、声をかけると「ほつといてくれ」と言う。

霊幻と茂夫、二人がまず最初に取りかかったのが、この都市伝説だった。

人面犬の目撃情報がある場所へ向かった二人がみたものは。

「これが人面犬か」

「マジックですね」

黒いマジックで悪戯書きされた犬だった。

「デマ情報だったのか」

「いや。これが人面犬だ。噂の正体なんてこんなもんだよ」

人懐っこい性格なのだろう、突然やってきた二人に対し吼えることなく、人面犬「仮」は無邪気に尻尾を振っている。

よしよし可愛いなこいつ「なでなで」。

「あれ？俺らの人面犬小屋に誰かいつぞ」

「見物料取ろうぜ」

愛嬌ある人面犬「仮」を思う存分撫でてた靈幻だが、ぞろぞろと小学生と思われる少年3人がやってきたことに気づき、撫でてた手を止める。

「この犬誰が飼ってるの？」

そう尋ねる茂夫に、小学生の一人がこともなげに答えた。

「この家のじいさん」

「目が悪いから落書きに気づかないのさ」

野良犬ならまだしも「いや野良でもよくないけど」、人様の飼ってる犬に手を出し悪戯書きとはとんでもないクソガキ連中だ。

悪びれた様子もなくへらへらと笑ってる子供、もとい悪ガキたちに対し、靈幻は目を剥いて怒鳴りつけた。

「コルアガキ共！またこの犬に顔書いたらブチのめすからな!!」

「殴った後で言ったよこいつ」

「PTAに訴えてやる」

食らった拳骨がよほど痛かったらしい。悪ガキたちは目に涙浮かべて殴った霊幻を恨めしげに睨む。

「おーおー好きにしる。世の中にはお前らクソガキを堂々と叱れる大人が必要なんだよ」

誰からも叱られず好き放題してるとなあ……将来ろくな大人にならないぞ!!

「教師に使った手がこの鈴木太郎に通じると思うなよ!」

ビシつかつこよく言い切る霊幻のそばで、茂夫はボソつと小さな声で呟く。

「でも偽名使うんですね」

世間体は気にする霊幻だった。

人面犬は存在してなかった。

ではどうやって問題解決するか。

「テロルを洗ってくれるって?ご親切に。そんなに汚れてたのかい?じゃあ頼もうか

ね」

靈幻が取った行動は飼い主に許可をとり、犬を洗うことだった。落書きが消えて普通の犬に戻れば、人面犬の噂もなくなるだろう。

「ほらテロル。物騒な名前にして尻尾振ってやがる」

本当警戒心全くないなこいつ。

そんなんだからクソガキ共に落書きされるんだぞ。

「さてとビフォーアフターの写真で調査報告しないとな」

手にスポンジと犬用シャンプー持ち、いそいそと洗う準備にとりかかる靈幻の顔は嬉しさがにじみ出ている。

「師匠って犬好きなんですか？」

「んーまあな」

鼻歌交じりで袖をまくりあげる。

あいつら素直で人懐っこいし。

前世では色んな動物相手によく会話したもんだ。「ぼっちで寂しかったからじゃない、断じてない」

楽しげな様子でゴシゴシ洗い始めた靈幻の姿をぼーっと眺めてた茂夫だが、ふと何かを思ったらしく「もしかして」と声をあげる。

「師匠、最初からいたはずらつてわかつてたんですか？」

「当たり前だ。お前人の顔した犬でも探してたのか？」

世に蔓延る都市伝説なんて所詮眉唾物。

ツチノコも宇宙人だっているわけがないもんな、はっはっは。

あ、いや宇宙人はいるな。

面白半分で宇宙と交信したら本当に宇宙人きた。

それもなんか触手いっぱい生えたキモイエイリアン。

しかも最悪なことにそのエイリアン、いきなり分裂増殖したと思ったたらそのまま地球侵略しはじめて、危うく人類滅亡するところだった。

いやあ、ははは。軽い気持ちで宇宙人呼び寄せたらいけないな！

とまあ、昔の話はそれくらいにして。

この世界はは前世の世界ほどオカルトが身近ではない。

世に広がる不可思議な話の殆どが偽物、空想の話である。

残ってる都市伝説3つもガセで終わってほしかったが。

ブルル……ピッ。

「SOSだ。おひきさんに襲われてる」

世の中、そう甘くはいかないようだ。

すぐに携帯を切り、モブに声をかける。

「行くぞ。おひきさんが出たらしい」

保険かけておいて正解だった。

エクボから緊急要請を受け、二人は現場へ急行した。

たどり着いたのは、人気のない林道。

晴れた天気であれば森林浴が楽しめそうだが、生憎空は今にも雨が降りそうな曇り空であり、不気味な心霊スポットにしか見えない「実際幽霊は出てるからあながち間違っていないが」

おまけに薄らと霧が立ちこめてるせいで、余計ホラーっぽい雰囲気醸し出している。

エクボ「体は森羅」は林の奥にある池のそばにおり、刃物を持ったおどろおどろしい雰囲気的女性に襲われていた。

あと数センチで顔に刃物が刺さる、まさにその瞬間。

女性体が勢いよく吹っ飛び、近くの木に叩きつけられた。

木にぶつかった衝撃でぐにやりと歪み崩れる姿は明らかに人ではない。

「エクボありがとう」
守ってくれて。

念動力を発動し弾き飛ばした茂夫がエクボにお礼を言う隣で霊幻はこっそり安堵の息を漏らす。

ふう、最悪の事態は免れたか。間に合ってよかった。

と、それはそれで良しにするとして。

「おー！あれがおひきさんか。本物か？写メで証拠にしないとな」

若干テンション高めで霊幻が携帯構えるも。

「あれ？画面に映らねえ」

本物の心霊写真撮れると思っただのに。

どうしたものかと霊幻が頭悩ませたときである。

うずくまっていた悪霊が急に起きあがったと思ったら、人間ではあり得ない動きで跳躍し、そのまま木々の間に入り姿を消していった。

「逃げやがった！」

写真はNGだったか!?都市伝説のくせに性格シャイかよ、あ、噂じゃ虐められっこだから案外そうなのか？

「あれは噂から生まれた怪物だ。本物とか偽物とかじゃ分類できねえ」

そう靈幻に説明するエクボの顔は険しい。

どぼんと大きな水音が轟く。

池に逃げ込んだようだ。

「とうとう？」

「多くの人間の想像力、恐怖や好奇心を媒介にしてこの世に出現した。あの容姿も強さもすべて人間が設定したんだ！」

よかつた。ひどい虐めを受けて自殺した女の子なんていなかったんだな！

なんて言ってる場合じゃねえ。

「イメージが実体化してるってのか」

「そうだ……おひきさんを知ってる我々では除霊できない」

あ。森羅のやつ起きた。

体ズタボロだけど、死ぬよりマシなんだから俺のこと訴えるなよ。

いやそれよりも。

「え？なんで？」

俺たちでは除霊できない？

「お前にも噂を聞いて震えあがった子供時代があるだろ」

「ああ……そうだな」

超能力使えない状態でそんな化け物と出くわしたらどうしよう、恐怖で震え夜しか眠れなかったものだ。

「夕方の下校中におひきさんが現れて児童を連れ去り沼に引きずり込む。サンタクロースを信じなかった俺でも雨の日の街角でふと意識した時には鳥肌が立ったな……」

懐かしい思い出である。巷で流行ってたおひきさんの対処法とか必死に覚えたなあ……結局使う機会はなかったけど。

あ、今なら使えるのか？

「恐怖の象徴に対し恐怖を抱いている者の力は糧でしかない。俺の霊力も効かなかった。奴は恐怖する者の力を利用して大きくなっていく。攻撃は逆効果だ」

ということはおひきさん〴〵に恐怖持つてる俺が撃退法やっても意味がないのか。ちえつ、せつかく退散呪文覚えたのに。

「仕方ないモブ。一旦引くか……なんだこりゃ!？」

いつの間にか周囲一帯、濁った泥に浸食されていた。

動こうにも粘着質ある泥に足をとられ、身動きできない。

その間にも池から泥が際限なく溢れ続けている。

猛烈に嫌な予感が……。

100%的中する超直感とは違う類のものだが、こういう嫌な感というものは普通の

人でもよく当たるもの。

大量の泥と共に“おひきさん”が池から現れた。

いや、これを“おひきさん”とっていいのだろうか。

「でっけえ〜!!」

もう女性の原型は殆ど残ってない、泥の化け物だった。

以前倒した巨大くねくねに遜色のないデカさである。

特撮怪獣かよ。

巨大おひきさんが咆哮あげると、その声に共鳴したように周りに湧いてた大量の泥が一斉に霊幻たちめがけて押し寄せてくる。

ヤバイ。

泥津波に吞まれたら一巻の終わりだ。

万事休す。

このまま全員お陀仏か!?

そのときだった。

一人沈黙してた茂夫がスツと皆の前に立ち、念動力を発動させる。

茂夫の手から放出された力は化け物の攻撃を蒸発させるどころか、そのまま化け物の体に風穴を空けていく。

だが敵は普通の悪霊じゃない。

「モブ！お前の力も吸収されちまうらしいぞ！」

全身泥まみれの霊幻が、慌てて茂夫を止めるも「いや！ちよつと待て！」とエクボが何かに気づく。

本来なら茂夫の力で修復するはずの化け物の肉体がぼろぼろあっけなく崩れていた。

「効いてる効いてる！そうか……茂夫都市伝説とか流行とかそういうみんな盛り上がる噂話から隔離されてんだよ」

巨大なおひきさんの体は茂夫の力で分解され、蒸発し消えていく。

おひきさんに苦戦することなく、圧倒的な力で倒す茂夫の姿は非常に頼もしい、頼もしいがー。

「要するにみんなの話題についていけない。だからおひきさんの何が怖いのかも知らねえつてよ！」

「……」

あまりにも悲しい強さだった。

モブ……おまえつてやつは。

“おひきさん”

白いボロボロの服を着ていて、出会った人を肉塊にするまで引きづり回すという。彼女は人間だった時、酷いいじめを受けており、その恨みから子供を捕まえては引きづり回すらしい。

このように“おひきさん”は数多ある都市伝説の中でも特に危険で恐ろしい存在なのだが。

「雨の日に出るお婆けでしょ？怖くはないよね」

無事“おひきさん”を退治した後、あらためて霊幻から“おひきさん”の話聞いた茂夫の第一声がこれである。

「わかってねえな。おひきさんってのは握力が500kgあつて一度捕まると脱出不可能で1000mを20秒で泳いで……」

おひきさんがいかに怖い存在であるか身振り手振り加えて力説する霊幻だが。

「なるほど！そういうキャラなんですな」

“おひきさん”の凄さは茂夫に全く伝わらなかった。

「版權フリーの二次創作みたいなレベルで認識してるな……お前もうちよつと驚いたり怖がったフリしろよ。だから話題に入れてもらえないんだよ」【※経験者】

本当よくそれで彼女ができたな。

「前は人に合わせなくてもいいって言ったのに……」

「大人になると社交辞令が重要になってくんだよ」

個性も大事だが協調性も身に付ける。

それが社会で生きるってことだ。

いや本当マジで大事。

こうして深爪町の都市伝説問題は無事解決した。

残り2つの都市伝説はどうなったかって？

“ 赤いレインコート ”

雨の中、全身身に付ける者が赤色で町をさ迷い歩く。もし赤いレインコートを見てしまえばその人は死んでしまう。ただし、何か赤い色の物を身に着けていれば、命は助かるそうだ。

↓ 露出狂の変態

“ ダツシユ婆 ”

深夜の高速道路を車で走っていると、窓を叩く音。

そこには車と同じ速度で走るお婆さんの姿。

ここで、お婆さんに追い抜かれた車は事故を起こすらしい。

↓ランニング日課してる婆さん

……まあ、都市伝説の正体なんてものは、大抵そんなものである。

今回の仕事は色々と収穫の多いものだった。

都市伝説の問題解決して依頼人も大満足。

その後も何かと霊とか相談所を鼻屑にしてくれてる。

さらに森羅万象丸とは連絡先交換し仲良くなった。

超能力者の伝手はあったが、完全霊能力者となると、この森羅万象丸が初めてである。

人脈は多くて困ることはない。

これから色々頼りにさせてもらおう。使える者はとことん使うのがオレ流だ。

新しくホームページ開設したし「あの」おひきさんを退治した！という宣伝文句つ

き」、「これからたくさん客がくるはず！

“都市伝説”は霊とか相談所に新たな人の縁をもたらしたー

「……」

「おまえまだ落ち込んでるのかよ」

茂夫に大きなトラウマも。

「部活で走り込みしてるのに……お婆さんに負けた……」

どんまい。

その日はやけに仕事^がが舞い込む一日だった。

「ふざけんな！ 遠方からわざわざ来てやったつてのに」

霊とか相談所に、客の怒号が響く。

このペテン師、詐欺師！ここにくるまでかかった交通費払え！

こめかみに青筋立てて、唾まき散らして喚く男に、所長である霊幻は何度目になるかわからないため息をついた。

霊とか相談所のホームページ。その反響は意外に良く依頼される内容も本格的な除霊が増えつつあったものの、その分中にはとても引き受けられないような依頼が舞い込むこともある。

この男の依頼も、そうした”引き受けられない”ものだった。

「うちのホームページ見たのならわかるでしょう。うちは呪い解く専門であつて、呪う仕事は請け負ってません」

“人を呪う”など、真つ当な霊能力者がする仕事ではない。

「はあ？ ふざけんな、俺がやれつていつてるんだから、さっさとやれよ！」

霊幻の断り文句を聞いて、ますます男の機嫌は悪くなり、怒鳴り散らす声量も増していく。

あーもう面倒くさい。一体何回事じこと言えばいいんだ。

暖簾に腕押しとはまさにこのこと。

このまま男が居続けると迷惑だし、何より今ここにモブがいるのだ。呪いとかクレーマーとか、子供の教育に悪い。

こうなったら。

「わかったわかった……しようがないな……やりますよ。ただし今日だけですよ。責任は一切取れませんからね」

霊幻流仕事術その2。クレーマーは適当に言いくるめて追い出す。

「呪いを込めたアレです。それを持っていけばいつか何か起きるでしょう。お代はいりません。ただし決して他言はしないように」

「呪い」と書いた紙を手渡しながら厳かにそう忠告する霊幻に、男はニタリと笑う。悪意100%の嫌な笑みで。

「信じてるけどよ……もし俺を騙してるなら」

貰った「呪い」の紙をポケットの中にしまい込みつつ、男はじとりと霊幻をみる。

「あんた、呪うからな」

底の知れない濁った目で。

ボタンと扉が閉まり、男がいなくなったことを確認した後、霊幻は深く深く息を吐いた。

「やっと帰った……呪いたいほど憎い相手がいるつつうのはわからなくはないがな」

ダンスで足の小指ぶつけるたび、ダンスに呪いあれていつも念じてる。

まあ昔は足の指どころか顔面ぶつけてたから、それよりマシになった方だけど。バリアない生活マジ不便。

「師匠にもいるんですか？」

人に対してってことか？

「いやいいいけど。お前いんの？」

「呪いたい人……」

顎に手を当て、思案し始める。

「……いや、そんな深く考えんでも」

一秒、二秒、三秒――

「……」

まだ考えてる。

「……え？」

まさかいんの？

ツウと嫌な汗がこめかみを伝って流れた。

お、俺じゃないよな？ブロッコリーの種そんなに嫌だったか？!

「……」

長い沈黙の末、茂夫が出した答えは。

「いませんね」

「溜めんなよ！ビビらせやがって！」

お前、呪おうと思つたら、マジで呪えそうだから怖えーんだよ！

前世の俺なら常に張つてるバリア「物理攻撃だけでなく呪いや精神攻撃も弾くすぐれもの」でそのまま呪詛返しできたけど、今の俺は物理的にも精神的にもノーガード、ガバガバ状態、受けたら一発アウトさよなら世界である。うん。人間、誰かに恨まれないよう清く正しくいきるのが一番だな！

「でもさっきの人あれでよかつたんですか？」

「本当に」呪いをかけたわけじゃねえから心配すんな。あの紙持つても実害は出ない」

「……」

誰も不幸にならないから安心しろと告げるも、弟子の顔は晴れることなく曇つたままだった。

「たといえそれが嘘でもあの人のの中では他人に呪いをかけたことになつてる。一生そのまま生きていくのかな？それってとても怖いことなんじゃ……」

あのおっさんがどうなろうと俺の知ったこつちやないが、モブは気になるようだ。

妬み誰かを蹴落とす行為自体不毛であり、己の首を絞めてるだけにすぎない。

人呪わば穴二つつて、格言があるしな。

それにしても。

「珍しいな……こいつが自分の考えを持って意見するなんて……いや、こいつには何か強く引つかかるものがあつたんだ。俺が何かを見落としている？」

ちらりとモブの方へ視線をやると目があつた。

「……」

ついと視線をそらす。

自分の適当さ、いい加減さを見透かされたようで居心地が悪かつた。

ガチャリ。

「すみません、ホームページ見てきたんですけど……」

霊とか相談所つてここで合ってますか？

男と入れ替わるようにやってきたのは、若い女性だった。

立て続けに依頼がくるなんて珍しい。

おどおど不安げな様子でこちらを見てる依頼人に対し、霊幻は瞬時に営業モードへ切

り替えた。

「はい！霊とか相談所へようこそ！ご依頼ですね、さき、どうぞ中へ！」

ニコニコ愛想良く女性を出迎える。

「は、はい……」

女性はしきりに周囲を見渡し何かを警戒してる様子で、そわそわ 落ち着きがなかった。

霊幻に促され応接ソファに座っても、体から力は抜けず、強ばってるのがわかる。

これは初めて入る店に緊張してるだけではないな。何かに怯え神経尖らせてる人の特徴だ。

「モブ、コーヒーじゃなくてハーブティ用意してくれ」

クッキー缶に入ってるティーパックのやつだ。依頼人に聞こえない小声で霊幻は茂夫にそう指示した後、くるりと女性の方へと向き直り、にっこり微笑む。

「霊とか相談所は、どのようなお悩みごとでも真摯に向き合い解決します。もちろん、お客様の依頼内容に関して他言いたしませんのでご安心を。ああでも、人を呪いたいといった依頼に関しては受け付けませんので」

その辺はご容赦をと、苦笑してみせる霊幻をみて、女性の強ばってた体から少しだけ力が抜ける。

暫し沈黙が続く。

うーん、こちらから聞き出すか。

霊幻が口を開きかけた時。

「実は……」

女性は重い口を開き、ぽつりぽつり語り出した。

誰かにずっと見られている。

食事しているとき、友達と電話してるとき、お風呂からあがったとき。

部屋で一人くつろいでるときに唐突に前触れもなく、それは始まる。

全身なめ回すように、じいっと。

どこからか感じる、おぞましい視線。

粘つく不快なそれは、吐き気を催すほど気持ち悪い。

どうして。

部屋には誰もいない、誰もいないはずなのに。

誰かにずっと見られている。

「もう私、怖くて……」

そのときの恐怖を思い出してか、女性はわなわなと体を震わせていた。

「なるほどそのようなことが」

女性の話に神妙な顔で頷きつつ、横に立つてる茂夫にこつそり「何か見えるか」とたずねるも「特に何も感じません」と返され、霊幻は思案する。

彼女本人に異常はない。

それに話の内容からして霊の仕業というよりこれは――

「一度部屋を見せて貰ってもよろしいですか？」

百聞は一見にしかず。

何か痕跡が見つかるかもしれない。

慌ただしく店の戸締まりをし、急遽、彼女の住むマンションへ赴くこととなつた――

五階立てのよくあるマンスリーマンション。

建物自体は新築というわけでもないが、かといって幽霊が出そうなおどろおどろしい雰囲気があるわけでもない。

自室へ通された霊幻は、ざっと部屋を見渡し周囲をチェックする。

備え付けの家電と家具に、女性の私物と思われる可愛らしい小物の数々。

曰く付きの呪いアイテムが飾ってあるわけでもなく、一見すればごく普通の部屋だ。窓が段ボールで覆い隠されたり、壁のあちこちに御札が貼ってなければ、の話だが。

「最初はストーカーかと思つて警察に相談したんです。でもどうも人間じゃないみたいで……」

ため息まじりで話す女性の表情は陰鬱そのものだった。

「警察の人に調べてもらつたんですが、誰か侵入した形跡とかなくて、結局見られてると感じてるのは気のせいだろうと突き放されて私……どうしたらいいのか悩んで」

今にも泣きそうな声で、女性は切々と現状を訴える。

「ずっと誰かの視線を感じるし……凄く気味が悪いんです」

「こないだは窓から覗いてたんです！」

そうヒステリックに叫びながら、女性は窓を指さした。

既に窓は段ボールで塞がっており、外の様子は何も見えない。

「ふむ……。ちよつと失礼、確認しますね」

女性に断りを入れてから、段ボールを剥がし、窓を開ける。

「5階でベランダもなし……。成程な。」

下をのぞき込むと、はるか下に地面が見えた。

上下左右の外壁も、ぱつと見足場はなく人が侵入できるような経路はない。

ふむふむ。

「エクボいるか？」

「なんだよ」

スウとエクボが現れる。こいつ、また見えないモード「強」でいやがった。たく、そんな嫌そうな顔するなつて。不細工な顔がさらに不細工になるだけだぞ。

「ちよつと窓周り調べてくれ。屋上にロープの跡でも残ってるかもしれない」

女性の部屋は最上階。

屋上からロープで降りて外から覗き見してる可能性も0じゃない。

「なんで俺様が……」

「悪霊いたら食つといてくれよー」

ぶつくさ文句言いながら出て行ったエクボに霊幻はひらひら手を振って送り出した後、一人手持ち沙汰になつてる茂夫にたずねる。

「モブ。何か感じるか？」

「はい。ほんの少しですけど」

今回の依頼は“本物”か。

しかし少ししか感じないということは——この部屋に霊は憑いてないことになる。もしくは決まった時間に出現するタイプの霊とかか？

「ないない。何の痕跡もねえよ……て何窓閉めてんだこら——」

なるほど。見えないモード弱めると透過できなくなるか。

どうでも豆知識が増えた。

幽霊も意外と不便なんだな。

「あーはいはい、悪かった悪かった」

プンスカお怒り状態のエクボを宥めつつ、窓を開けてやりながらも霊幻は目まぐるしく頭を回転させる。

人的痕跡は見つからず、霊的痕跡があるなら、うち案件だ。

でもなあ。

幽霊の犯行にしては……やることが妙に人間くさい。

「被害内容はストーカーのそれで間違いない……幽霊が生きた女に興味持つのって何が目的なんだ？」

「さあな。性欲が残ってる霊は結構レアなケースだろうな。そもそも生殖機能ないしな」

「恋に必ずしも性欲が伴うか?……お前とこんな話したくない」

「こっちの台詞だ馬鹿野郎」

悪霊と恋愛話とか何の罰ゲームだ。

こういう話は夜のバーで色気100%のお姉さまとしたい。

げんなりと気落ちしたときだった。

突如部屋がガタガタ揺れ出す。

地震という可能性もあるが、タイミングから考えるに。

「これは……ポルターガイストか!」

例の霊が現れた!て、うわ、駄洒落になっちゃった!

親父ギャグが自然と出てくるあたり、俺もおっさんの仲間入りか!?!いやまだ俺三十路

はいつてない、ギリ若者の範疇だ!

「どうしよう……きつと怒ってるんだわ。霊媒師さんをここに呼んだこと……」

内心焦ってる「違う意味で」霊幻の隣で、女性は今にも泣き出しそうだった。

依頼人の精神ケアしたいところだが、今はそれどころでない。

ガイストを何とかせねば。

このポルター

靈幻が茂夫に除靈の指示を送ろうとしたそのときだった。か
部屋の隅でへたり込んでた女性が突然声をあげる。

「いやー!!窓の外!!」

女性の叫びにつられ、一同が窓をみる。

窓の外には――

「――」

人の影があつた。

ベランダのない5階の窓の外に。

白くてぼんやりとしたまさに幽霊そのもので、こちらをじつと見ながら、不気味に笑っている。

こいつが元凶か!

「モブ!蒸発させろ!」

いつもなら、靈幻の指示にすぐさま応じる茂夫だが、普段悪霊を祓う力を放つてその手は、外の幽霊に向かって翳されていない。

僅かに眉根を寄せ、茂夫は困惑したような顔で己の師匠に告げる。

「これは……生きた人間ですよ」

窓の外にいる“何か”の正体を。

生きた人間?!……生き霊か!!

おそらく幽体離脱でもして、女性の私生活を覗き見してたのだろう。

犯人の正体は超能力が使える人間だったのだ!

超能力「幽体離脱」を悪用するなんて……なんてふてえ野郎なんだ!

とっ捕まえなければ!

「やはりストーカーか……くそ!姿を消しやがった」

急いで窓を開けて外を確認するも、影も形も残ってない。

いったいどこいった!?

能力者の力量にもよるが、生き霊はそんなに遠くへ飛ばせない

「離れすぎると肉体と繋がってる生命の糸が切れて本当に死んでしまうため」

この近辺に奴はいるはず。少なくともこの町のどこかにいるだろう。

すぐさま茂夫に生き霊の気配を追うよう霊幻が指示する前に茂夫がハッと何かに気

づいたように声をあげ、それを聞いた部屋にいた一同は皆、大きく息を呑んだ。

「隣の部屋だ!」

いや近すぎじゃね?

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

真つ昼間に、けたたましいピンポンの音が鳴り響く。

居留守使つても無駄だ、さっさと出てこい！

近所迷惑などお構いなしに鬼ヤイムを繰り返すこと数分。

ガチャつとようやく隣の部屋から人が出てきた。

現れたのはジャージ姿の見るからに陰気な空気を出してる男。

「……確かに幽体離脱で人様の生活覗き見したのは悪かったよ……」

ばつが悪そうにボソボソくぐもつた声で言い訳してる。

滑舌悪いな、もっとハキハキ喋れ。

「でも僕本気で一目惚れしちゃったんだー！」

先ほどまでの謝罪モードはどこへやら、完全開き直った様子で男は女性に言い寄る。

「……」

なお言い寄られてる女性は絶句してた。どん引きである。

当然の反応といえるだろう。

しかし男はそのことに全く気づいてない。

「本気なんだよ……僕は彼女と付き合うんだ！邪魔すんなよブツ殺すぞー！」

と靈幻に啖呵を切った男だが。

「ああ？」

靈幻流防衛術その4。陰気で根暗野郎と対峙するときは、まず先に威圧し相手の威勢を削ぐ。

身長180近い靈幻に凄まれ、男は一瞬怯むも、「このー！」とやけくそ気味で突進する。

フツ、馬鹿め！その動きは見切った！

男の突進を華麗にスツと避け、そのままカウンターで男を地面に押さえ込む。

「この陰気な出歯亀が……！」

ギリギリと腕を捻りあげ、男が逃げないよう拘束する。

対超能力者戦用にと覚えた護身術がこんなところで役立つとは。人生、何が役立つかわからないものだ。

「痛い痛い痛い！暴力反対！助けてー！警察呼ぶぞこのやろー！」

ハン、少林寺拳法緑帯の俺に勝てると思うなよ！

しかし超能力者ってみんな肉体軟弱すぎるだろ「俺も含めて」筋肉ムキムキの超能力者とかいないのかなー。

いるのなら是非とも見てみたい。

など、ちょっと油断したのが悪かったのか。

火事場の馬鹿力なのか、霊幻の拘束を振り払い、男は女性の元へ這いながらにじりよる。

「すいませんでした！僕が悪かった！もうしません！どうか許してください！あなたを好きな気持ちは本当に真心なんです！」

土下座し、必死に自分の気持ちを訴える男。

だがしかし、返ってきた女性の答えは男の望むものではなかった。

「本当に……本当に超キモいわお前！」

女性 嫌悪100%。

台所にいる黒い虫でもみるような女性の恐ろしいほどまでの冷たい視線に

「!!」

男は完全に心が折れ撃沈した。

「……」

夕暮れ時。

閑静な住宅地に赤いサイレンの光が煌めく。

とあるマンションのエントランス付近にパトカーが止まっており、何事かと数人の野

次馬たちが遠巻きで眺めている。

「ストーリーカー行為を怪奇現象のせいにしてしようとしたんだな」

全く、救いようのないアホ男だったと、霊幻は肩をすくめる。

その後、女性にトドメの一撃を食らい、完全意気消沈した男を再度取り押さえ、ストーリーの現行犯として警察を呼んだのだ。

男はもう抵抗する気力もないようで、大人しく警官についていく。

パトカーに乗せられるストーリーカー男を遠目で見送りつつ、霊幻は満足げに頷いた。

これで依頼人も安心してあの部屋に住めるだろう。

いや本当、やつの使える超能力が幽体離脱でよかった。

もし洗脳だったら被害者の女性も自分が操られてることにも気づかず、ストーリーカー野郎の良いように扱われてたかもしれない。

まったく。超能力を己の欲望のために使うとは、超能力者の風上にもおけないな！

あのストーリーカー野郎も、陰でこそ覗き見するのではなく、真摯に女性と向き合いアタックしてれば、また結末も違っていたかもしれない。

想いを伝えたいのなら、超能力に頼らず、自分の口からちゃんと言えばいいのにな。相手がテレパシストでもない限り、思ってるだけじゃ何も伝わらないぞ。

いや本当マジでそう思う。

「真似すんなよ茂夫」

そう茂夫に釘を差す悪霊の隣で、うんうんと頷く元超能力者。

普段の茂夫なら、他者の忠告に対し「わかった」と素直に了承する。しかしこのときの茂夫は違っていた。

「なんで……正体が悪霊か人間かでこんなに違うのか……わからない……」

依頼してきた女の人。

ストーカーが幽霊だと思つてたときは、あんなに怯えてたのに。

「本当に……本当に超キモいわお前！」

犯人が人間だとわかつた瞬間、嫌悪丸出しで男をなじっていた。

どうしてあんな極端に反応が変わるのだろう。

人と霊に違いなんてー

「モブ………？」

悶々と何か悩んでる弟子に、霊幻はまた引つかかりを感じた。

「今日はやけにいろいろ考えてるなこいつ……後で話を聞いてみるか」

何かに疑問を持つて、色々思考することは悪いことではない。

思考放棄して他人に物事の判断任せつきりなど、他者にとつて

いいカモ、都合

のいい駒として使われるだけだ。

「よし！一旦戻って帰り蕎麦でも食うか」

つとめて明るい声を出して、絶賛考え中のモブの肩を軽く叩く。弟子の悩みを聞いてやるのも、師匠のつとめである。

1日に2件も仕事をこなせば十分、今日はもうこれで店じまいだ。さて、どこの蕎麦にするか、あ、駅前蕎麦屋のクーポンあるからそれ使おう。

足取り軽く事務所へ向かう霊幻の頭は既に仕事オフモードだったが。

「あー来た来たー」

「待つてましたよー」

雑居ビルの前で、ちやらい若者数人が待ちかまえており、霊幻の姿を確認するや否や、テンション高めに声をかけてきた。

うわあ、マジかよ。

「おい。バイト拘束時間なげーぞ」

「1日で3件……ホームページ効果だな」

効果ありすぎるのも考えものだ。

若者の人数は3人。

男2人、女1人で、見た目的にまだ大人ではないが、未成年にも見えない。おそらく大学生だろう。

どんな相手でも最初に話だけはちやんと聞くのが“霊とか相談所”のモットー。ひとまず彼らの話を聞くため、事務所の中へ入れたのはいいが。

「へー、霊能事務所ってこんな感じなんだ」

なんか普通ー、つまんなーいと文句言いながら、パチパチと勝手に仲間と写真撮るケバい格好した女の子、略してケバ子。

そしてケバ子の隣にいるメガネの男は、ケバ子と一緒にあってウエーイと騒いでいた。

ただの冷やかしなら、さっさと帰ってくれ。

蕎麦が待ってる。

「で？ 依頼内容は？」

いつも依頼人に対して胡散臭い笑顔浮かべてる霊幻に珍しく、スンと真顔での応対だった。

話聞く前から既にやる気ゼロの霊幻だが、若者たちは大して気にした様子はない。

3人のリーダー的ポジションだろうチャライ金髪男、略してチャライ男が

「卒業前に思い出作りしたいんすよー。で、流行の心霊スポット行ってみんな写真撮りたいつて感じで？」

と、霊幻に依頼内容を伝える。

「そうそうー、心霊スポットとか映える感じじゃーん？」

チャラ男の後ろで写真撮り終えたケバ子が話に割り込み、そのケバ子の隣でメガネがへらへら笑っていた。

友達と遊び半分で心霊スポットにいくつて、それ死亡フラグ。

ここがB級ホラー映画の世界なら、こいつら冒頭で死んでるモブ1、モブ2、モブ3だな。

「なんかあつたらヤバいんでー」

幽霊いたらよろしくー。

と、なぜかキメ顔みせるチャラ男。

それをみてケバ子がキヤーキヤー騒いでメガネがバカ笑いしてる。

「遊びか……まあ否定するつもりもないが」

友達とワイワイ馬鹿騒ぎするのもまた、青春の1ページ。

人様に迷惑かけない範疇ならそこまで目くじらをたてるつもりもない。

前世の俺がやってきたことに比べれば可愛いもんだ「※ひどすぎて詳細話せないレベ

ル」

しかしこいつらの場合、ちよつと不安がある。

仲間と馬鹿騒ぎを楽しむ人種つてのは、高確率でトラブルメーカーだ。

仲間と一緒にいることで変に気が大きくなるのか、増長し色々やらかす。

そんな光景を俺は過去に散々見てきた。

霊幻の脳裏に浮かんだ光景、それは。

“超能力を持つてない人間など生きるに値しない！我々”選ばれた特別な人間”がこの世界を征服し支配すべきなのだ！”

超能力で好き放題町を破壊し暴れ回つてたかつての自分の部下たちの姿だった「まあ、組織運営にはノータツチで人事も全部ほかのやつに任せっきりだったからあいつらが部下という認識は薄いけど」

……仕方ない。これも社会貢献の一環だ。頭パツパラパーな大学生たちが人様に迷惑かけないよう、変なことしないよう、監視役のつもりで行くか。

「日時と場所は？」

来週の日曜とか既に何件か予約入ってるが、肝試しなら時間的に夜だしそのへんは問題ないだろう。

まずはその行く心霊スポットについて情報集めておかないとな。心霊スポットが実

はヤクザが裏取引に使う場所で、人を遠ざけるためにあえて幽霊の噂を流していた、なんてパターンもある。

あとその日は遅くなるだろうから、前もってモブの両親に連絡してー
つらつらと頭の中で計画立ててた靈幻だが。

「今からつす！外に車止めてあるんで！」

チャラ男のこの一言で、脳内で組み立ててた段取りは全て無駄になった。

「こいつら内定なさそう」

日は沈み、夜の帳がおりている。

電灯も立ってない真つ暗闇の山の中。

一台の車が走っていた。

舗装されてないでこぼこ道を、ガタゴト車体を揺らしながら。

「本当に20分で着くのか？もう30分経つけど」

鬱蒼とした木々が次々に通り過ぎていく様を眺めつつ、隣で運転してるチャラ男にた

ずねる。

大丈夫大丈夫、心霊スポットすぐそこですから！車で20分なんすよ！

写真撮ったらすぐ帰るんで、さき、早く乗っちゃってください！と急かされ、渋々モ
ブも連れてチャラ男たちの車に乗り込んだというのに。

「あと30分くらいかかるかもです」

……こいつの言葉、信じるんじゃないか。

後悔先に立たず。

「蕎麦食いに行けないかも」

腹いせに時間外手当という名目で報酬に十加算しとこ。

「それで、目的の心霊スポットってのはどんな噂があるんだ？」

「あー、実は俺らもよく知らないです。適当にネットで近場の心霊スポット検索して
ヒットしたんでー、でも何も情報なしで行ったほうが楽しいっしょ！」

また死亡フラグ立ててるなこいつ。

油断して前情報なしで敵地「心霊スポットなど生きた人間にとって敵地のようなもの
だ」に行くなど、自殺行為のなものでもない。

慢心していいのはどんな状況でも即対応できる完璧パーフェクト超能力者だけだぞ
全く。

それからさらに20分経過し。

「うおー！霧囲気怖えー！」

ようやく、目的の心霊スポットにたどり着いた。

それは山奥にある一軒家、だったもの。

屋根に穴があき、外壁はどこどころ崩壊してた。

なるほど。確かに出そうな霧囲気はある。

「霊の気配は？」

テンションあがりまくって、わいわい騒いでる若者たちをよそに、霊幻は茂夫に霊の有無を確認する。

「少しはあるけど……」

「流行りの心霊スポットって程じゃねえな」

茂夫とエクボ、双方の意見を聞き、霊幻は心得たと言わんばかりに頷く。特に悪さするやつじゃなければ、放っておいて問題ない。

心霊写真も撮れたら撮れたで連中も喜ぶだろう。

「はい。じゃあさっさと写真撮ってください」

早く用件済ませて帰ろう。

「ていうか撮ってくんない？」

「……」

「激しく断りたいが依頼人だし仕方ない」

これも仕事のうちだ。

ケバ子から渋々カメラを受け取り、シャッターを切ろうとする。

「はいチー……」

「あ。フラッシュよろしくです」

「はいチーズ」

パチリ。

薄暗い廃墟に、カメラのフラッシュ音が響く。

これで若者たちの思い出の一枚は撮れた。

「そろそろ行かないと。弟子も中学生なもんで」

モブたちが変なアジトへ行って帰りが遅くなったときは、親御さんすごく心配してたからな。

「はーい。あざーっす」

「えーと。報酬の件なんですけども」

今回は特に何も起こりませんでしたので、お代は〇円でいいですよ。とコース最安値

の金額「十蕎麦代」を言おうとした靈幻だが。

「え！報酬!？」

「報酬ってマジ何の事？」

先ほどまでテンション高く廃墟探索楽しんでた若者たちの声色が変わる。

「はい？依頼のですけど」

あーなんか嫌な予感がする。

「何も起きなかつたし靈能力者さんだって何もしてないわけじゃないっすか！この場合お金払う必要マジあるんすか？」

「それって詐欺ってやつじゃん？」

「それじゃ詐欺じゃん詐欺！」

と、馬鹿三人組による詐欺だ詐欺だの大合唱。

いやいや、時間拘束してる時点で支払い義務が発生するの、大学で習ってこなかったのかよ。経営者だって1日客がこなくても従業員に給料支払わないといけない。一昨日とかまさにそうだった。一人も客が来ず、モブと一緒にたこ焼き食って終わったけど、ちゃんとバイト代出したんだぞ【※時給300円】

げんなりしつつも、いやだからね、と猿でも理解できるように懇切丁寧に経済の仕組みを教えようとするも。

詐欺、詐欺、訴えてやる、ネットに晒すだの喚くばかりで人の話をちつとも聞きやしない。

挙げ句の果てには。

「支払い拒否からの……現場解散だど？」

山奥に置き去りだ。

これ、下手したら警察案件だから、よい子の皆は真似すんなよ。

「起きたな。不測の事態」

どうすんだよ霊幻と、非難がましい目で俺を見てくるエクボ。

あーはいはい、あいつらの行動読めなかつた俺が悪い悪い。

報酬前払いにしとくべきだった。

「仕方ない。公道出てタクシー拾うぞ。蕎麦はなしだ」

ここからどれだけ歩けばいいんだが。

はあ……テレポートできないのマジ不便。

その後、霊幻たちは運良く山を攻めてたトラックの運ちゃんに拾ってもらい、無事、下山することができたのだったー

霊能者という胡散臭い職業に就いてると、依頼人が仕事に難癖つけて金払わないなんてこともよくあることである。

犬に噛まれたとでも思って忘れるか。

あいつらの内定、全部落ちますように。

若者たちの不幸をこっさり心の中で願いつつ、霊幻はすっぱり気持ちを切り替えた。もうあいつらとは顔合わすことないだろう。

そう、思っていた霊幻だったが。

「え？心霊写真が撮れた？」

「はい……それでまたお願いがあるんです……」

再び、あの若者たちが霊とか相談所にやってきた。

たく、どの面さげてここにやってきたんだが。

そもそも、心霊写真撮りたくてあの廃墟に行ったんじゃねーのかよ。

「そんなに気になるなら塩でも撒いとけよ。ボランティアはやってないんだ」

なんならわけてやるぞ。お徳用サイズの。

「すみませんでした！お金は払います！」

後生です助けてください！と勢いよく頭を下げて懇願するチャラ男と愉快的仲間たち。

こいつら……俺が依頼引き受けるまで梃子でもここから動かない気だ。

はあと盛大なため息をはく。

全く仕方ない。

「……内容は？」

「これからもう一度あの心霊スポットに行つてこの写真に写つてる幽霊を消し去つてください！」

またあの廃墟に行くのかよめんどくせー。

「その写真を除霊することはできませんけど？別に現場に行かなくても」

「無理です！こういうのが存在するつてだけで気持ち悪くて！消してください！」

一度見つけたGは始末するまで安心できないタイプか。

だったら最初から肝試しするなど説教したいが、それは仕事が終わった後でやろう。

「除霊依頼ですね。じゃあコースを説明するので……」

「高いやつでお願いします！」

まいどあり。

前回の分も合わせて依頼料ぼったくってやろうとも一瞬考えたが、それは大人げないのでやめといた。

再びあの心霊スポットへ向かい走行してる車の中。

「……………」

昨日は馬鹿騒ぎしてた学生たちだが、今日の彼らは誰も口を開くことなく、完全お通夜モードで車内はとても静かだった。

「また呼び出されたな。昨日は日曜潰れたしキレていいんだぜ」

この悪霊を除いて。

ぶんぶんモブの周りを飛び回って、俺の悪口言ってる。

やかましい、俺だって二日続けて中学生を夜に連れ回したくなかったつーの。

暗い山奥にひっそりと存在する朽ち果てた廃墟。

月の光に照らされ、ぼんやり浮かぶ様は幻想的でもあり不気味な光景でもある。

「……………3人います、別に悪い霊じゃなさそうですけど」

じつと、廃屋の前を見つめながら茂夫が隣にいる霊幻に伝えた。なお大学生たちは車のそばで怯え震えながら待機してる。

……こいつら、いざとなったら俺たち見捨てて逃げる気だ。

「まあ依頼人が怖がつてるからしようがねえな。除霊してやれ」

たとえ客がいけ好かないやつでも、しっかり依頼こなすのがプロの仕事である。

面倒くさそうに頭をかきながら、霊幻はいつもの調子で茂夫に除霊を頼んだ。

これまでの茂夫なら、霊幻に除霊を頼まれるとすぐさま悪霊に向けて手を翳し、淡々と流れ作業のように除霊をする。

だがしかし。

「じよ……除霊する必要ないですよ。悪さしないって言ってますし。家族ですし」

この日の茂夫はいつもと違っていた。

「モブ？」

茂夫の視線はひどく泳いでおり、呼吸も浅く速くなっている。

それは極度のストレスに晒されてる人の典型的な特徴だった。

茂夫の異変にいち早く気付いた霊幻が、何事か声をかけようとするも、それよりも先に怒号が轟く。

「ちよつと！必要あるから頼んでるんですけど！」

「気味悪くてしょうがないんだよ！」

「悪さするしねえは関係ねえから！つーか金払うって言うてんじゃん！」

大学生連中のヒステリックな叫び声に、霊幻は顔をしかめながらも、様子の可笑しい茂夫に言葉を投げかける。

「モブ。どうしたんだ？今まで散々悪霊を消してきたじゃねえか」

それが今になってなんで急に。

「この人達は平和に暮らしたいだけなんだ……僕がそれを壊すことなんてしたくない……」

「私たちが本当に困って依頼してるんですけどー！」

ちよつと黙っててくれませんかねお客さん。

ケバ子が悲劇のヒロイン気取ってぎゃんぎゃん騒いでるが、連中に呪いはかかってない。それはモブやエクボが確認済みだ。

本当に偶然、やつらの写真に幽霊が映り込んだだけなのだろう。

とはいえ仕事は仕事。

「依頼人の要望は最優先するものだ」

客からのニーズに応え、顧客満足度をあげることは、商売するにあたって重要なことだ。

だが霊にも生者と同等の尊厳があるとしたら。

「本当にそこで家族3人が慎ましく暮らしているだけなら……？」

そこで土足

で踏み入って強制退去させるなんてそんな外道をモブに強いるわけにはいかん」

そんなド外道は“俺”だけで充分だ。

「が、依頼人の恐怖心も本物だ。どうする？プロとして。依頼人より幽霊を尊重するの か？」

仕事をとるかモラルをとるか。

ふうと一度深呼吸し気持ちを落ち着かせる。

「モブ。霊はまだ何か言ってるのか？」

「……」

顔を俯かせたまま、モブは何も答えない。

でも。

「震える程除霊したくないみたいだな」

モブの想いは痛い程までに伝わった。

「そんなにか……OK。わかった。除霊はよそう。俺だって命令してるわけじゃないんだ。別にいいんだぞ？自分の感情に従って」

後のことは師匠の俺に任せとけ。

ちゃんと連中いいくるめて、納得させるから。

「そうそう。もつと気楽に判断しろよ。茂夫は強えんだからよ」

靈幻とエクボが茂夫に気遣う言葉をかける。

しかし。

「わからないんだきつと……ああ……これはきつと僕にしかわからないんだ……」

茂夫の顔は苦しげに歪んでいた。

ぎゅつと自身の胸ぐら掴んで、ぎゅうと身を縮こまらる。

自分にしかわからないっていったいどういう意味だ？

超能力者だからか？いや元超能力者の俺でも今のこいつの気持ちかわからない。

いったい何がそんなにモブを苦しめてる？

「だって……感情に任せていいわけがないんだ……気楽になんて……僕が……この家族を守りたいと思っってしまったら……今度は依頼人が怪我をするかもしれないだから」唇を噛みしめ必死に感情を押さえ込もうとする茂夫の姿をみて、靈幻はようやく気が付いた。

茂夫がなぜここまで追いつめられているのかその理由を。

そうか。モブは——“俺”じゃない。

だからこんなに悩んで苦しんでいるのか。

「いつまでやってんだよ！バイトのガキぐらい言う事……」

チャラ男が悪態つきながら、霊幻の胸ぐらを掴もうとしたときだった。

「うわっ！」

何かが勢いよく撒かれ、チャラ男を含め、大学生たちは驚いたように声をあげ、あわてて腕で顔をガードした。

おそるおそる彼らが目をあげ、振ってきた何かの正体を確かめる。

「何すかこれ……塩？」

「今ので除霊は終わりだ」

困惑してるチャラ男たちに、霊幻はにべもなく言う。

「え!?ちよ待てよーほんとかよ!?今ので……」

霊幻の雑な除霊に文句いいかける彼らだが。

「終わりだ」

霊幻の迫力に押され。

「……はい」

それまで喚いてた大学生たちはシユンと猫を借りてきたように大人しくなった。

彼らは互いに顔を見合わせた後、気まずそうにそそくさと車の中へ乗り込んでいく。

そんな彼らの様子を気にすることなく、霊幻は自分の失態にぎりつと歯噛みした。

「そういうことか……どうして気付かなかったんだ！」
なにがモブの師匠だ、くそっ！

「あいつは普通の人よりできる事が多いんだ。見えてる世界が遙かに大きい。呪いも
霊もモブの日常と繋がってんだ」

それはかつて超能力者だった前世の俺も同じ。

霊なんかくつきりはつきり見えすぎて、肩に乗っけてるタイプのマスコットと見間違
えたくらいだ。

「人間もそれ以外もあいつにとっては同じような距離にある」

今の俺がこれまで様々な悪霊に出会っても、平静を保っていられたのは、そうした前
世の記憶があるおかげ。

でも。

霊や人と同じ目線にたち彼らに寄り添おうとしたモブ。

霊も人も区別なく邪魔な奴は全て排除してきた“俺”。

根本的なところで、俺たちは違っていた。

だから俺はモブの苦悩に気付けなかった。

「帰るぞ。蕎麦でも食うか？」

慰めるように、ポンポンと軽く背中を叩きながら、大学連中の車へ向かうよう促す。

「はい……」

ズズッと鼻をすすりながら、モブは消え入りそうな声でこくりと頷き、俺の隣を歩き始めた。

……本当ごめんな。

その日の蕎麦は特大エビ天のトッピングをつけてやった。

今思えば。

この頃からモブは変わりだしていたかもしれないー

↓続く

ある詐欺師の話【中】

悪霊祓いはとにかく金がかかる。

霊能者に相談するだけで数万、実際に除霊を頼めば数十万、さらに高名な霊能者にお願いと百万を優に超えてしまう。

世間ではぼったくりと糾弾されるほど高級な価格設定されてるのが当たり前なこの業界で。

一番高い除霊でも2万円ぽつちという、前代未聞の価格で除霊を執り行う霊能者がいた。

どの組織にも属さずフリーで活動してる霊能力者“霊幻新隆”

しかもそんな価格破壊と言える値段なのに、除霊成功率が非常に高いらしい。

今世紀最大の霊能者を自称してるが、果たしてその実力は本物か。

同業者たちの間で“霊とか相談所”が噂されはじめた頃。

「はく。これが個人の持ち家なのか」

噂の霊能者は彼らの前に姿を現した――

東京ドーム〇個分と例えても違和感がない超広い庭に、これまたドラマに出てきそうな洋風のでっかい豪邸。

「でっけえ家だなあ」

感嘆を漏らすのは、灰色のスーツ姿と一見すれば普通のサラリーマンに見える格好した青年。そして。

「大きいですね」

まだ中学生と思われる少年が青年と同じ感想を呟く。

セレブには全く見えない庶民オーラ100%な二人に、正面門で直立不動で立っていた、いかつい顔した黒スーツの男が厳しい視線を向ける。

「……招待状は？」

男に聞かれ、青年——靈幻は懐から一通の白い手紙を取り出し、無造作に手渡す。

「……」

上質な紙で綴られたその手紙を、男は隅々まで念入りに確認すること十秒。

「どうぞ中へお入りください」

と男は厳かな声で二人を中へ通した。
資産家として知られる浅桐正志氏の邸宅に。

家の中も、外観に違わず豪華絢爛だった。

吹き抜けの玄関ホールには巨大シャンデリアが吊され、深紅の絨毯が床一面に敷き詰められている。

部屋に飾ってる調度品はどれも目玉が飛び出そうな金額っぽいアンティークものばかりだった。

「どうぞこちらへ。私の後についてきてください」
執事と思われる燕尾服姿の初老の男性が現れ二人に指示する。

男性の案内で、二人は玄関を抜け、長い廊下を歩き「ここでお待ちください」と通された部屋は大広間だった。

それも普通の大広間ではない。

一般住宅が何個も入りそうなんだっ広い空間に調度品といったものは一切なく、天井も二階、いや三階くらいの高さはある。

四方の頑丈そうなコンクリート壁や薄暗い照明も相まって、これはなんとも

「なんとも怪しいとこだな」

そう言いながら思わずため息がでたのは仕方ないことだろう。

有名な資産家から仕事のオフアールがきた時点で、きな臭いとは思ってたけど。ホームページ効果で多少知名度はあがったものの、ビッグな客がくるほど“霊とか相談所”は有名になっていない。

怪しいのはこの空間だけではない。

中には既にたくさんの人が集まっていた。

インディアン、僧侶、宣教師、修道服などなど。

どれもこれも奇妙キテレツな格好した者ばかり。

むしろ普通の格好してる自分たちのほうがこの場では浮いている。

「見るからに胡散臭い雰囲気をもとってるな。多分同業者だ」

あんなコスプレ衣装で客取れるのかと首を捻ってる霊幻の隣で茂夫は思った。

「師匠も人のこと言えないのでは？」

この場にいるいかにもな格好もアレだが、スーツ姿で霊能力者というのも大概怪しい。

「ようーお前ら」

聞き覚えのある声が二人の背後から聞こえた。

声のした方へ向き直り、その人物の姿を目に入れた茂夫が声を上げる。

「あ。森羅万象丸さん」

都市伝説の件で知り合った霊能者、森羅万象丸だった。

「よお、元氣そうだな。体の調子は戻ったか？」

軽口叩く靈幻に、森羅は「おうよ」とぐつと腕に力を入れ力こぶをつくってみせる「脂肪に隠れて力こぶ自体は見えないが」

「おかげさまでな。まあ、あの後数日間全身筋肉痛で動けなかったが、今はこの通りピンピンしてる」

「よかった。元氣そうで」

「おお、坊主じゃねーか」

あのときは助かったぜ、ありがとよと森羅が茂夫に向かってニカつと笑ったときだった。

「森羅君。誰だねその男は？」

しわがれた老人の声が3人の耳に届く。

声のした方へ3人が振り返ると、僧侶の恰好した小柄な老人が、屈強な男数人従えてそこに立っていた。

「浄堂様！」

老人の顔をみるや否や、森羅の顔がキリっと引き締まる。なるほど森羅の上司か。

森羅の態度をみて、霊幻は瞬時に二人の関係を把握する。

そーいや森羅のやつ、日曜連休連合「※日輪霊能連合」に所属してると言ってたな。つまりこの爺さん、日曜連合のトップか。

「以前悪霊相手に共闘したことのある霊幻新隆というフリーの霊能力者です」

森羅がそう浄堂に霊幻のことを紹介したときだった。

周囲の空気がざわつく。

あれが噂のフリーで活躍しているという……

ホームページでおひきさんを退治したとか書いてあったが

まさか本当に？

ひそひそと小声で囁きあいながら、じろじろと値踏みするように見てくる同業者たち。

「おお。君が例の。おひきさんを退治したとデマを！吹聴しているという」

こら爺さん、デマの部分を強調して言うな。

俺だって証拠の写真、ホームページのトップに載せたかった。

何もかも心霊写真撮らせてくれなかったおひきさんが悪い。

「よろしくー」

嫌みを笑顔でスルーしつつ、握手するため手を差し出した霊幻だが。

「フーン！」

浄堂は大きく鼻を鳴らし、握手することなく、霊幻たちに背を向けてわざと派手に足音を響かせながら去っていった。

「なんだか不機嫌そうでしたね」

「年とると高血圧になって、カツカしやすくなるんだ。お前はまだ若いから大丈夫だろうけど、食生活には気をつけろよ」

「部活の先輩から〃いい筋肉ができる食事メニュー〃教えてもらってそれを家で食べてます」

「意外と本格的な部活なんだな〔筋トレばっかする脳筋連中の集まりと思ってた〕後でそのメニュー俺にも教えてくれ」

「はっ」

日輪霊能連合のトップである浄堂麒麟にあからさまに嫌われても、全く気にしないどころか、のんきに己の弟子と思われる少年と食事談義に花を咲かせている霊幻に、森羅を含めた同業者たちは皆一様に思った。

この男、ただ者じゃない。

靈幻 凶太き100%

ほどなくして。

「よく集まって下さいました先生方。私は皆さんが本物の靈能力者であることに疑いを持つておりません」

靈能者たちを集めた張本人、浅桐正志その人がこの場に姿を現した。
会社ホームページに載つてた写真と同じ顔……本人で間違いないな。

何十人も靈能者が集まつてる中、臆せず堂々たるその様は流石日本有数の株式会社アサギリホールディングス代表といえる。

しかし。

「……写真よりも顔色が悪いな」

觀察力が鋭い靈幻は浅桐氏の変化を見逃さなかつた。

「しかしこの中に娘を救える方がいらつしやるかどうか……ここから先はどうぞ内密に」

彼の背後にあつた壁が無機質な機械音と共に、上へあがつていく。壁の向こうに見えたものは。

「私の娘、浅桐みのり14歳です。マジックミラーなので向こうからは見えません」
部屋の中心に置かれたベッドに横たわる一人の少女の姿だった。

「……」

白いパジャマ姿の彼女は眠つてるのか、瞼を閉じており身じろぎ一つしない。しかし一番異様なのは、少女のか細い手足に枷がついてることだろう。

「ちよつとやりすぎなんじゃねえか……?」

霊能者たちの間からそんな声があがったのも無理はない。

そんな非難の声に対し「……これもやむ得ない処置なのです」と沈痛な面もちで浅桐氏は深い息を吐いた。

「最初は私も信じてなかつたんですよ……霊など。しかしいくら心理カウンセラーや精神治療の権威にあたつてみた所でまるで効果はない。彼女の中には悪霊が入つてしまったのです。先生方にはそれを退治していただきたい」

娘を救つてほしいと切々と訴える浅桐氏を横目に、霊幻が茂夫に確認をとる。

「どう思う?」

「今の所これっぽっちも感じませんね」

霊の気配はなし、となると。

「思春期の精神的疾患が妥当な所だな」

そう茂夫に話しながらも、霊幻は疑念を抱いていた。

果たしてあの“浅桐みのり”が心の病気になるのかと。

浅桐氏の一人娘“浅桐みのり”。ここにくる前から彼女のことは既に知っていた。

いや、浅桐氏について調べてたら、自然と情報が集まってしまったと言った方がいいかもしれない。

親の権力笠に着て、やりたい放題の我がまま娘。

それが浅桐みのりという人物についての総評だった。

父親である浅桐氏も一人娘のことは溺愛してるらしく、彼女を相当甘やかしてるという。

もちろん、ネットにある情報がすべて真実とは限らない。

これらの噂だって、金持ち妬んだ誰かが根も葉もない悪評をバラ撒いただけということも十分あり得るし、たとえばあの悪評が真実だったとしても浅桐みのりが己のしたこと

にひどく後悔して心が病んでしまったという線も考えられる。

それならまだいい、霊関連じゃないなら本職の人にバトンタッチだ。

最悪なのはー

「金目に糸目はつけません！救ってくれた者には特別な報酬を用意する！」

何にせよ。

「よーしーじゃあ今回も俺達がスパ一つと解決してやるか！」

直接彼女と話してみて、確かめるしかない。

「なあモブ。お前にもポーナスやるよ。いつもの給料の10倍」

娘に激甘な資産家が出す報酬、さぞかし大金になるだろう。

「ポーナス……初めてだ！」

それもバイト代の10倍なんて。

目をキラキラ輝かせる茂夫に、エクボ「実はずっといた」は冷静に突っ込む。

「つか今までが少なすぎんだろ。10倍っていつても3000円ぽちじゃねーか、茂夫騙されんな」

はいそこ、余計な茶々入れない！

「じゃあまずは俺から」

「待てい！抜け駆けは許さんぞ！」

しれっと一番最初に行こうとする靈幻にめぐとく気付いた森羅が待ったをかける。森羅が声をあげたのを皮切りに他の靈能者たちも俺が先だと騒ぎ出す。

「皆さん！そう慌てずに！じゃんけんで決めるといふのはどうでしょう？」

暴動一步手前になつてゐる状況に、慌てて浅桐氏が順番の決め方を提案した。

「あ？ジャンケン？」

ジャンケン。

それは和の精神を大事にする日本ではもつともポピュラーで平和的な解決法であり、年齢、性別、体格、靈感などのハンディキャップがなく、“運”で勝者が決まる。

「それなら公平だな」

「いいだろう」

「だな」

靈能者たちも皆一様に納得したようで、騒ぎも収まった。

「よし！俺はパーを出すぞ」

高々と宣言する靈幻に、近くにいた靈能者が訝しげな顔をする。

「あ？」

「なんだその宣言は？」

「やっぱりチョコキを出す」

「いやだからさ……」

一部でよくわからないやりとりはあったものの、ジャンケン大会は始まった。

結果——

霊幻は優勝した。

「すごい……どうやったんですか？」

初戦敗退した弟子が目を丸くしてる。

「心理操作、相手の視線、手の角度、腕の引き、観察、他色々でじゃんけんは勝てるんだ
よ」

それもこれはただのじゃんけん必勝法じゃない。

かつて超能力者だった俺が編み出した究極最強のじゃんけん必勝法なのだ。超能力者の思考パターン「自身の思考を自己分析」も計算にいれている。そう。

「じゃんけんなら誰にも負けねえ自信がある！」

たとえ相手がテレパシストでも!!

例え心読まれてもそれを逆手に、相手の考え見抜くのが今の俺だ「多分」

「ふふーん。じゃあお先〜」

ギリギリ悔しそうに歯ぎしりする霊能者たちの間を、霊幻はふふんと得意げな笑み浮かべながら、悠々と歩いていった。

霊能者たちの集団を抜け、嚴重にロックされてる扉の前にたどり着く。

「精神的疾患を初対面の素人がケアするのは厳しい……」

独学で心理学研究してカウンセリング技術はかなりの腕前だと自負してるが餅は餅屋、本職のカウンセラーに任せるのが一番だ。

側に控えてたSPの男に無言で領き合図を送る。

霊幻の合図を受け、男は壁のボタンを押し、扉をオープンした。

開いた扉を確認し、霊幻は部屋に向かって歩き出す。

「……で俺ができるのはあくまで霊能者としてだけ」

「……」

部屋の主である浅桐みのりは既に目覚めており、ベッドに腰掛けていた。

ネットでみた彼女の写真は、勝ち気そうな表情が印象的だったが、今この場にいる浅桐みのりは、その面影が全く残っていない。

目に生氣はなく、虚ろな表情をしていた。

ひとまず彼女から少し距離をとってからベッドに腰掛け、親戚のお兄さんのような親しみある優しい声で彼女に挨拶する。

「こんにちは「そう。いつも通りだ」」

まずは小手調べだ。

「なんで閉じこめられてるのかわかる？」

「ここでの会話は部屋のどこかにある盗聴器で、向こう側にも聞こえるようにしてあるが、逆に向こうの会話はこちらに聞こえない。」

霊幻の問いに、彼女は暫く黙ってたが、おもむろに語りはじめた。

「私……わからないの。パパ最近おかしいのよ……」

「お父さんが？」

少し驚いたように声をあげる霊幻に、彼女は顔を俯かせたまま震える声で続ける。

「少し前からアタシを閉じこめたりベッドに縛り付けたり……怖い顔で睨んだり叩いたりもするのよ……」

素早く彼女の体へ視線を走らせる。

ゆったりとしたパジャマと太い枷で彼女の肌は殆ど見えなかった。

「いろんな大人達を連れて来ては私の体をべたべた触らせたりもしたのよ」

思春期の女の子なら耐え難い仕打ちだろう。

「お父さんを信じちゃ駄目よ。最近まで何かに取り憑かれたみたいにおかしいの。アタシが呪われてるとか悪魔に乗っ取られてるとか言い出したのよ……」

お父さんが、ね。

「そりやちよつと反抗期もあつたかもしれないけどここまでするなんて異常よ！」

両手両足の自由奪つて部屋に閉じこめるなど人間扱いではない。

「私……ずつとこのまま出られないのかな……ねえ……霊能者さん。これ外してくれない？痛くてしょうがないの」

そう言い、彼女は目を潤ませながら両腕をスつと持ち上げてこちらに差し出してきた。

……

。

「お父さんに聞いてみるよ」

にっこり微笑みつつ、少女との会話を切り上げた。

部屋を出て、扉が完全に閉まったのを確認してから、肩の力を抜き大きく息を吐く。

は……緊張した。

「どうだった？」

そばの壁によりかかって待ってた森羅が、霊幻に所見を求める。

「ふむ……」

霊幻は顎に手を当て、難しい顔で考え込む。

……どうしたものか。

「調べるまでもない。あの子は正常じゃよ」

その言葉を発したのは霊幻でなく、日輪霊能連合のトップ、浄堂麒麟だった。

「なんだ?!? どういうことだ!」

「彼女に悪霊が憑いた可能性はゼロだということだ」

何より彼女から悪霊の気配を感じない。

浄堂の言葉に、他の霊能者たちも「確かに」「感じないな」

「おまえは?」「俺もそうだ」と口々に言い始める。

「これだけの人数が集まっているのに、誰一人として悪霊の気配を感じていない。やはり

浄堂様の言うとおりに」

「いや! そんなはずはないんだ!」

私を信じてくれ! と訴える浅桐氏だが、もはや彼の言い分を信じてる者はいなかった。四方八方から冷やややかな視線を向けられ、浅桐氏は言葉を詰まらせ口をもごもごする。

「問題があるのはあなたでは? 家族の変化に対応できず認めようとしな」

「挙句霊や悪魔の仕業と言ひ張る」

霊能者たちの間で次々と浅桐氏への非難の声があがる中。

「お前ら依頼人に何言ってるんだ。ありやタチが悪いぞ。間違いなくクロだ」

そうあっさり言つてのけたのは、一番最初に浅桐みのりと会話した靈幻だった。たく、さつそく悪靈に騙されてやんの。

気配遮断なんて下級悪霊でも普通にできるだろうに。現にほら、ここに下級悪霊代表のエクボが現在進行形でやつてる。相手が年端のいかない女の子だからって、みんな目が曇ってるぞ。

「根拠は？」

森羅の言葉に、靈幻は小さく肩をすくめる。

「アレと話せばわかる。子供と会話してる気がしなかった」

こちとら子供と接する機会が多いんだ、それも彼女と同じ中学生の子と。相手が本当に14才の少女かどうかなどある程度会話すれば判断がつく。

だいたい爽やかイケメン「自称」の俺と話して、お年頃の女の子が照れたり頬を染めたりせず、眉一つ動かさず淡々としてる時点で可笑しいだろ。

「とか言つて報酬を独り占めしたいだけじゃ？」

疑惑の目を向ける霊能者の一人に、靈幻は冷静に言い返す。

「あの子に騙された奴は帰った方がいい。まんまと取り込まれるぜ。一人称がコロコロ変わったパパと言つたりお父さんと言つたり」

自我が安定しないのも、悪霊憑きの大きな特徴。

そしていまこの状況……かなりマズい。

そのことを伝えなければ。

「それと俺はただ話をしたただけなのに彼女は俺を霊能者と言った」

医者やカウンセラーと間違うことはあっても、霊能者などと言うはずがない。

他のコスプレ集団と違って、俺は……普通のスーツなのだから。

「つまり……うちの会話が筒抜け……」

そう霊幻が言い掛けたときだった。

盛大にガラスが割れる音がすると同時に、砕けた大量の破片が霊幻たちめがけて降り注ぐ。

「っ……!!」

咄嗟に腕で顔を庇う。

雨霰と飛んでくるガラス破片。

その中の一つが霊幻の頬をかすめるも、腕でガードしたおかげなのか、それ以外の怪我はしなかった。

あつぶねえ、危機一髪！

警戒してなかったら、まともに食らうところだった。

どでかい穴のあいたマジックミラーの壁。

そこらじゅうに飛び散ったガラス破片。

床には無数のガラス片と共に、少女と話してたはずの霊能者が白目を剥いて倒れる。

ついさつきまで和やかなじゃんけん大会してた空気などもうどこにもない。

「化け物だ……」

どこからともなく、そんな声が漏れる。

集まった霊能力たちは突然の出来事に対応できず、その場で固まっていた。

「師匠！」

「俺は大丈夫だ。それより」

頬の血を手の甲で乱暴に拭いながら、ガラス片が飛んできた方向へ視線を向ける。

「……」

壁を破壊した張本人、浅桐みのりがそこに立っていた。

「フ……ふふふ、はははは!!」

愉しそうに、嘲るように、狂ったように。

静まりかえった空間で、少女が笑い声をあげる。

その姿は誰の目からみても“異常”だった。

「化けの皮が剥がれるのが早かったな」

もつとしらを切るのかと思っただぜ。

「フフ。見破られたのならもういい。私をこの娘から追い出してみろ！」

ニタリと歪んだ笑みを浮かべ、少女に取り憑いた何かは高らかに宣言した。これだけの霊能力者に囲まれてこの余裕綽々の態度。……俺も似たようなこと、前世で言ったなあ。

「誰か娘を助けてやってくれ！とにかくあの悪魔を追い出してくれれば報酬は惜しまん！」

床にへたり込んでた浅桐氏は必死に声をあげ霊能者たちに訴え叫ぶ。

「2億でも！5億でも！」

浅桐氏の叫びを合図に、霊能者たちの除霊大会は始まった。

そして。

霊能力者66人中、38人が除霊に挑み――

「飽きてきたな」

悪霊は健在だった。

ダメージを受けた様子は全くなく、退屈そうにあくびまでしてる。

わかるよ。その気持ち。

俺も前世のとき、襲撃者相手にそうだった。

「このままだと出番が回ってくるぞ。ウォームアップしとけ」

モブのターン「46番目」がくる前に除霊タイム終了するかと危惧してたが、その心配はなさそうだ。

うちとしてはありがたいが、大丈夫かこの業界。

ここに集まってる連中、俺と同類「詐欺師」ばかりというオチだったらシャレにならないぞ。

「筋トレみたいな言い方ですね。ないですよそんなの」

そんなことないぞモブ。超能力の出力は気分によって変わってくる。要は気持ちの問題なんだ、もっとテンションあげていこうぜ。

ああそれと。

「あの悪霊、エクボより格上だから気をつけろよ」

霊幻の思わぬ助言に、茂夫の目が数度瞬く。

「どうしてわかるんですか?」

茂夫の問いに、霊幻はずいと壊れたマジックミラーの壁を指さす。

「あんな分厚い壁越しに会話盗み聞くレベルの聴力強化やってんだ。やつが本気で暴れたら死人がでる」

「なるほど。わかりました」

「しかしまだ終わらねえのかよ」

いい加減みてるこつちも飽きてきた。

なおも続く無意味な除霊風景を眺めていた霊幻だが、ふと隣で浮かんでるエクボの異変に気付く。

「どうしたんだエクボ？えらく怯えてんな」

「チワワ？」

こころモブ、エクボがそんな可愛いわけないだろ。チワワに謝れ。

「まだ間に合う……この案件から手を引け！」

ふるふる震えながら警告するエクボに、二人は顔を見合わせる。

これまでエクボと多くの除霊をしてきたが、このようにはつきりと除霊そのものを制止することはこれが初めてだった。

「お前らも名前ぐらいは知ってるだろ！最上啓示！」

“最上啓示”

かつて霊幻が“霊とか相談所”を立ち上げる際、参考にした霊能力者の一人だった。

既に彼は故人だが、オカルト雑誌にもたびたび“最上啓示”の話題が出ており、オカルト業界に属するものなら知らない者はいないだろう。

しかしエクボは語る。

彼の本当の素顔は――金次第で人を呪殺する呪術師だったと。

売れっ子霊能者の正体が金で人を殺す呪術師って、どこのハードボイルド小説だよ。事実は小説よりも奇なりとはよくいったものだ。

しかも。

「ありや本人だよ！世紀の霊能力者最上啓示！その成れの果てだ」

霊能力者が悪霊になるとか何の冗談だ。世も末だな。

それも生きてるときから悪霊取り込み続け……え、生身で悪霊食ったの？
勢いよく悪霊もとい最上の方へ視線を向ける。

「……」

最上は相変わらず霊能力者による除霊を大人しく受け続けていた。

意外とノリいいな。流石、元バラエティ番組レギュラー出演の人気霊能者タレント。
いやそれよりも。

死後からじゃなく生前から悪霊取り込んでたの？マジで？すげえ。

前世で一度興味本位で悪霊かじってみたことあったが……この世の味と思えないほど、凄まじい破壊力のまずさだった。

どれくらいまずかったかという……食った瞬間意識が飛び、気付いたら世界は氷河

期になつて「どうも無意識で地球のマグマに干渉したらしく、世界中の火山噴火させ
てた」、危うく人類も恐竜と同じように絶滅しかけたくらい滅茶苦茶まずい。

そんな劇物を大量に食つて悪霊になつた最上、マジばねえ。

など、霊幻の中で最上の評価があがつたタイミングで。

「ようやく順番が回つてきたようだ。まったくじゃんけんが弱くて参つた」

この場にいた霊能者たち一同が待ち望んでた人物が悪霊の前に姿を現す。

お、あの爺さんの番になつた。

「往生……せいー!!」

浄堂は悪霊に対し声を張り上げると同時に、体から目映い光を迸せる。

「浄堂様の本気だ!」

「勉強になる!」

浄堂のお付きと思われる男達が口々に感嘆の声を上げる中、浄堂がさらに奇声をあげると、溢れ出る青白い光は稲妻のように走りそしてー

「ー」

少女の身体を貫いた。それも体の中心、胸の部分に直撃する。

終わつたか? それにしても。

「お経を唱えたり塩撒いたりしないんだな」

まあ塩じや安定さに欠けるか。溶ける悪霊と溶けない悪霊といるし。などのんきに見物してた霊幻たちだった。

「この程度で……おい教えてくれ。こいつのどこが大物なんだ？」

悪霊は消えるどころか浄堂の体に乗っ取ってしまった。

人間とは思えない妖怪じみた動きをしながら、もの凄い早さで茂夫たちに向かって突っ込んでくる。

「うわっ来る！」

「逃げろ茂夫！」

あまりのキモ、異様さに一瞬超能力を使うことを忘れ思わず怯む茂夫だったが。

「対被憑依者飛膝蹴り！」

代わりに動いたのは霊幻だった。

浄堂の鳩尾に強烈な一撃を加え、意識を強制的に飛ばす。

霊幻の膝蹴りをもろに受け、浄堂「最上」は為すすべもなく大の字に倒れ込む。

不意打ちノックアウトは悪霊相手にも有効だった。

しまった、ついやつちまった！

このままで俺、暴行の現行犯で捕まる、誤魔化さなければ!!

「やい悪霊！俺の勘だとお前の正体は最上啓……」

とりあえず意識のない浄堂に向かって、凄腕の霊能者っぽく話す霊幻だが、その口上は途中で途切れ、代わりに

「ぐっ……」

苦しげに呻く声が霊幻の口から漏れ出た。

「私を知っているのか？」

いつの間にか最上は浅桐みのりの体に戻っており、見えない死角から霊幻の首を掴んでいた。

なんつー馬鹿力……これだから身体強化系は嫌なんだ。

小手先のテクニクなど圧倒的なパワーの前では無力でしかない。

「何が目的で女の子に取り憑いてんだ……？生前もロリコンだったのか？」

今こいつの意識は俺に向けられてる。

俺が引きつけてる隙にモブ、なんとかかしてくれ。

酸欠で苦しい中、なんとか口の片端をあげ最上を挑発する。

「……」

しかし最上はそれに反応することなく、ギリギリと首を絞め続ける。

成人男性である霊幻の体を軽々と持ち上げる最上の力。

それは。

「止まらないー！」

茂夫の念動力の制止を超えるものだった。

やべえ……意識が……。

既に視界はぼやけ、思考はまともに働かない。

後少しで霊幻の意識が落ちる、そのときだった。

「みのり。もうやめなさい。パパが一緒にいてやるから」

優しく諭す声と共に、浅桐正志は自分の娘を抱きしめた。

「……」

父親に抱きしめられ、浅桐みのりの動きが止まる。

娘に父の声が届いたのかー否。

血飛沫が宙を舞う。

目を大きく見開く浅桐氏、それを何の感情もこもらない目でみてる浅桐みのり。

身体強化が施されたその腕は。

「刺した……！」

人体を貫通させるのに、十分な威力を持っていた。

「……」

少女の顔には何の感情も浮かんでない。

無表情のまま、彼女は深々と突き立てた己の腕を引き抜き、淡々と浅桐氏の体を突き飛ばした。

どさりと浅桐氏が床に倒れ込む。

仰向けに倒れ込んだ彼は動かない。

浅桐氏の腹を中心に、大きな血だまりがじわじわと広がっていく。

その光景はまるで悪魔に捧げられた生け贄のようだった。

「嘘……だろ……」

霊幻は呆然と呟く。

既に首絞めから解放されたというのに、息がまともにできない。

まさか、こんなことが起きるなど。

あり得ない、いくら最上啓示がすごい悪霊であっても。

体の支配権は体の持ち主が圧倒的強い権限を持つ。

“浅桐みのり”の体を使ってる限り、その父親である浅桐氏を殺すことなどできるはずがないのだ。

“浅桐みのり”である限り、彼女の家族を傷つける行為などたとえ意識がなくても体が拒否反応を起こす。

これは——ただの憑依、乗っ取りじゃない。

悪霊に憑かれた娘が父親を刺す。

眼前で起こった惨状に、周囲の霊能者たちの間で恐慌が起きた。

「人が死ぬなんて聞いてないぞ！」

「こんなの相手してられるか——！」

「逃げろ——！」

「助けてくれ——！」

もはや除霊どころではない。

それまで破格の報酬につられ、嬉々として除霊してた時と打って変わり、今度は、我先にと出口へ殺到しこの場から逃げようとした。

しかし。

「どこに行こうっていうんだ？」

悪霊はそれを許さなかった。

つい先ほどまで霊能力者たちの除霊「おあそび」に大人しく付き合ってたのが嘘のように、彼らを掴んでは投げ飛ばし、まるで嵐のごとく暴れ回る。

「とんでもない有様だな……」

本来地獄にいる魍魎を退治するはずの霊能力者たちが、揃いも揃って阿鼻叫喚の地獄に陥つてるとは、ちよいと皮肉が効きすぎて笑えない。

「モブ。肩は温まつてるか？」

順番的にはまだまだ先だが、もはや順番など誰も気にしないだろう。

「はい……全然温まつてないけどやるしかないのはわかります」

頼んだぞ。 “ 霊とか相談所 ” の最終兵器。

除霊は困難を極めた。

何せ相手は素手で壁を破壊し、大人数をまとめて吹っ飛ばすことができる、動く兵

器そのもの。

普通の人間が太刀打ちできる相手ではない。

それなら直接彼女に触れず、動きを止めてしまえば。

「ほう。誰かはわからないが優れた念動力者だな。確かに体の関節は可動域以上に動かすことはできない」

茂夫のサイコキネシスで一時的に浅桐みのりの動きを制限することに成功する。

しかしそれも。

「だが人形の関節はどうだろう？動けるよ……」

悪霊には無意味だった。

バキボキと嫌な音が周囲に響く。

彼女の腕が足があらぬ方向へ曲がり、顔から鼻血が流れる。

「あの子の体が！」

やむなく茂夫は力の発動を止め、彼女の体は自由になった。

「わかったか？この体に負荷をかけても何の解決にもならん」

それなら力づくで悪霊を引きずり出す……！

再び発動させたサイコキネシス。

茂夫の全身から放出した力の光は、浄堂のものより遙かに目映く強い。

「みのりさんから……出ていけ！」

力の波動が彼女に当たり、その衝撃で彼女の体から禍々しい何かが出現する。

どうやって少女の体に入ったのか不思議になるほど、際限なく溢れ出るそれに、茂夫は全力で力をぶつけた。

上級悪霊エクボ、上級悪霊くねくね、おひきさんといった強敵相手をも溶かした茂夫の強力な力。

しかし。

ーニタリ。

少女は不気味に笑う。

茂夫の力を全身で受けたにも関わらず、何事もなかったように。

悪霊はなおも浅桐みのりの体に居続けていた。

「失敗した！」

「師匠……状況がもつと悪くなりました……」

顔色悪く除霊失敗を報告する茂夫に、悪霊はため息をはく。

「そうみたいだな……ありや憑依じゃない、最上啓示は浅桐みのりに魂レベルで同化してる」

たとえるなら、“最上啓示”は風呂場のしつこいカビ、地中深く根を張る雑草。

中まで浸食してるから表面だけ削り取っても、葉っぱの部分だけむしり取っても、根っこの部分が残り消えないのだ。

よほど“浅桐みのり”の魂「土壌」は悪霊“最上啓示”と相性がよかったらしい。ネットの情報は本物か。あの娘、どれだけ性格が腐ってんだか。

しかしこれはまずい。

「モブより強いってのか……？」

「はい……」

うちの最終兵器でも無理だったとは。

これはもう仕事降りるのも考えておくか。

お金払ってくれる依頼人も倒れたし。

素直にお家へ帰してくれそうな雰囲気ではないが、そこはこの俺、交渉術のプロフエツシヨナルにお任せあれ。

交渉材料はすでにある。

生前から悪霊食つてるといふことは、奴は相当な悪霊グルメ。

前世の俺が実際に現地へ行って確認した、世界の激ヤバ「世界基準」心霊スポット6選の情報で見逃してくれるはずだ！よしこの作戦でいこう。

など密かに作戦練ってる霊幻を余所に。

「ハハハ！終わりか小僧？」

悪霊は高笑いし暴れていた。目に付いた霊能力者たちを片っ端から捕まえては投げ飛ばしたりと、やりたい放題である。

もう誰にも止められない。

周囲には絶望ムードが漂っていた。

「奴はなつていたんだ……望み通り最強の悪霊に！まあ……死んで成仏できなかつたら改めてよろしくな」

素晴らしいながらポンとモブの肩を叩く、諦め100%のエクボ。

「縁起でもねえぞー！」

来世で弱くてニューゲームとか一回で充分だ。

しかしどうしたものか。

単純に力の出力をあげて、体の中から根こそぎ全て消してしまうのが一番手っ取り早い方法だが、“最上啓示”は“浅桐みのり”と融合してる状態。

雑に浄化してしまえば最悪、浅桐みのりの魂まで悪霊と一緒に消し飛んでしまう。そうなつてしまえば“浅桐みのり”は魂の消えた空っぽの廃人、生きた死人と成り果てる。

一度混ざったジュースは元に戻せない理論だ。

「正攻法で“浅桐みのり”は救えない。

「そっか……みのりさんの中に入って内側から悪霊を追い出せば……」

「そう、正攻法では。」

「アホか！ 生身の人間がどうやって他人の中に入るんだよ！」

「幽体離脱だよ……」

「以前のストーカー野郎がしたことか。」

「成程な……だがその間お前の肉体は無防備になるぜ」

「モブに魂分割のやり方、教えておくべきだった。あ、いやでもまだ思春期の子供じゃ自我が分裂する危険あるから教えなくて正解か。」

「それに幽体になった所で侵入を拒絶してくるぞ」

「“浅桐みのり”と融合してる”最上啓示”の力が最大限発揮できるのは、彼女の精神世界の中。」

「さらにいうなら現実世界と精神世界とでは力の使い勝手も違う。」

「ただでさえ、悪霊のホームグラウンドなのに、精神訓練もまともにやってないモブでは分が悪すぎる。」

「下手すれば悪霊に取り込まれ”影山茂夫”という自我が消えることもあり得るんだぞ。」

なのに何故彼女を救おうとするんだ。

女の子見捨てるのは、倫理的にどうかとは思うが、そもそもここまで悪霊と融合したのは、彼女自身の問題が大きい。

悪霊は自分とよく似た性質の人間に好んで取り憑く。

“浅桐みのり”が“最上啓示”に目をつけられたのは、たまたま、でない。自分と同じ“匂い”に引き寄せられて“浅桐みのり”を選んだのだ。

我が俣放題やりたい放題のろくでなし娘と娘を甘やかしきちんと教育できなかった父親。

これは二人が招いた災い、自業自得でしかない。

ろくでなしなんて救う価値無いだろ？

茂夫はテレパシストではない。よって霊幻の胸中など知る由もなく。

ただ一人、覚悟を決めたように、緑の悪霊の目をまっすぐみだ。

「でもやるしかないんだ。エクボ。少しの間憑依して僕の体を守ってくれないかな？」
とんでもないことを言い出した茂夫に、頼まれてた当人と傍らで聞いてた霊幻双方が

同時に驚愕の声をあげる。

「はあ!？」

「いやいやそれはやめとけモブ!こいつそのまま乗っ取るぞ。多分」

お前の体使って、新しいカルト宗教始めちゃったらどうすんだ。

全世界に、ドヤ顔した教祖様スタイルのお前の姿が晒されるぞ。

思春期まっさかりのお前にそんな羞恥プレイ耐えられるか？

「……」

いくらモブの体を狙ってるといっても、こんな形で体を預けられるとは思いません。かっただろう。

「どういふことかわかってんだろうな……へへ……」

悪い笑みをつくってるつもりだが、その顔はひきつっている。

「マジでエクボを信用するのか？」

再度確認する靈幻に、茂夫は笑う。

「きつと大丈夫ですよ」

「……」

モブに全幅の信頼寄せられ、悪霊はばつが悪そうに黙りこむ。

「ちよつと変わったかこいつ？ いや……自分を換えようとしているのか？」

何事も受け身で消極的だったモブが、こんな風に誰かを救うため、自らアイデアを出し、また他者を信用し協力する姿勢は悪くない。

……。

エクボから精神世界へのダイブ方法を聞き終え、幽体離脱の準備を始めてる茂夫に、
靈幻はいつになく神妙な顔つきで「なあモブ」と声をかける。

「本当に、浅桐みのり」を助けるつもりか？」

自分の命を賭けてまで。

「浅桐みのり」は偶然悪霊に憑かれた可哀想な女の子じゃない。あの子は」

「師匠」

モブが俺の言葉を途中で遮る。

おそらく、俺がその先何言うのか知っててわざと。

モブ自身薄々感づいてはいるのだろう。

何せ悪霊や呪いと身近に接して生活してるのだ。

あれらの習性など、本能的に理解してても可笑しくない。

それでもモブは。

「だったら尚更、あの子を助けない」

ハッキリそう答え、そして凄く凄く小さな声でぽつりと呟いた。

人は変わるんだ、チャンスさえあれば。

俺に向かつて言ったのではない、おそらく独り言のつもりだったのだろう。
でも。

「……」

自分に言い聞かせるように呟いたモブの小さな小さな声は、俺によく届いた。

準備は整った。

後は作戦通りに動くのみ。

作戦と言うには、あまりにも稚拙で運任せでしかない計画だ。

失敗するリスクの方が高いし、俺にも危険が及ぶ可能性もある。

でもやるしかない。

弟子が文字通り命張って頑張るんだ、師匠の俺が体張らなくてどうする。

震える体に叱咤し、大きく深呼吸し気持ちを落ち着かせる。

大きく息を吐くのと同時に体の震えは止まった。

既に幽体離脱に成功し、ふよふよ浮いてる霊体のモブに話しかける。

「師匠からのアドバイスだ」

小さく咳払いし、できうる限りのかっこいい師匠顔をつくって。

「悪霊に負けるな。お前はお前。自分をしっかりと持て」

俺のアドバイスに、霊体のモブはこくりと頷く。

エクボも準備完了の合図をこちらに送る。

「よっしゃ行くぞお前ら！」

霊とか相談所、除霊再チャレンジだ。

そして――

予定通り、茂夫は浅桐みのりの体の中へ侵入した。

茂夫の霊体が入ると同時に、浅桐みのりは電池が切れたように、その場から動かなくなる。

その隙に霊幻たちは浅桐みのりを縄でぐるぐる巻きにして拘束した。

ひとまず暴れてた彼女が大人しくなり、その場に一時的な平穏が訪れる。

後は浅桐みのりの精神世界から茂夫が帰ってくるのを待つだけだが――

「駄目だ。こりや茂夫負けたぞ」

おいこら悪霊。諦めるの早すぎだ。

「まだ30分も経ってないだろ」

全然焦った様子もなく、のんびり待機してる靈幻に、エクボ「体は茂夫」は血相を変えて叫ぶ。

「かかりすぎだ！普通は1分もありや終わるもんだろ」

それは一般的な掃除「除霊」の場合であつて、“最上啓示”の場合だと話は変わってくるじゃん。

何せやつは浅桐みのりと融合した、頑固な汚れシミ。

一度こびりついたカビはなかなか落ちないし、雑草だつて根っこから引っこ抜くのも大変苦労するものだ。

まして清掃業者「モブ」は新人「精神世界初心者」なんだ、時間かかっても仕方がないだろう。

「このままじゃあいつの自我は崩壊する。死ぬってことだ！」

「モブは自分の力で解決できる男だ。俺と違ってちゃんと強い部分がある」

俺と違って、何でもかんでも超能力に頼らず、自分を律する強い意志がモブにはある

んだ。

悪霊の甘言に惑わされない、しつかりとした自分を持っている。

その弊害で周りの空気読めないところもあるけど。

何事もバランスは大事だな、うん。

「甘めーよ。次に奴が目覚めたら今度こそ皆殺しだ！」

「そうなたら俺の体使って最上と対抗してくれ」

「阿呆か！ドノーマルのてめーの体借りたところで焼け石の水にもなりやしねーよ！」

「いやいや器としていいと思うんだ。俺は俺だし。」

「まあこの程度のピンチで俺を使うのも勿体ないな。もつと世界がヤバい時じゃねーと」

「やっぱ体貸すのナシなどへらへら笑う霊幻に、エクボのイライラゲージは限界まで高まる。」

こいつ、危機意識がまるでねえ!!

どんな人生送ったらこんな脳天気になつんだよ!

悪霊と一般人の認識のズレなのか何なのか、とにかく話が合わない。

だからこいつと話すのは嫌なんだ!

さらに時間は過ぎていく。

その間、茂夫の体を使つて、エクボが壁に大穴を開けることに成功した。「それまで最上の力で外へ出られないよう閉じこめられていた」

我先にと外へ逃げ出す霊能力者たち。

やがて人はいなくなり、残つてるのは拘束された浅桐みのり、影山茂夫「中身エクボ」そして。

「逃げねえのか？もう茂夫を助け出すのは不可能だ。どうして残る？」

その場に留まつて、何事もなかったかのように携帯いじる霊幻に、悪霊は訝しげな表情を浮かべる。

エクボの認識だと、この霊幻新隆は茂夫の力を利用してただけの男。

その茂夫が使えず、自分の身が危ないとなつたら、すたこらさつさと逃げるのが詐欺師の常套手段だろうに。何故こいつは残つてる？

悪霊の疑問に、霊幻は即答する。

何でもない、普通のことのように。

「信用してるからだ」

あいつはまだ負けてない。絶対帰ってくる。

「この状況で……そんなに馬鹿だったのか！」

信じられないものをみるような目で見てくる悪霊に、霊幻は口の片端をあげて笑う。

「ああ。馬鹿だと思うぞ。お前もここまで他人に信じてもらえたのは初めてだろ？モブは俺たちを信用してるんだ。馬鹿だからな。あいつはまだまだ利用できる。そう思ったら逃げてる場合じゃねえだろ」

あいつが一人前の超能力者になるまで利用し続けてやる。

霊幻の言葉を聞いて悪霊は「はあ……」と諦めのため息をはく。

師弟揃って馬鹿なやつらだ……俺様も人のこと言えねえけど。

「気が変わった。俺様も残る。待つても茂夫は戻って来ねえ。俺様が一肌脱いでやるぜ」

俺様、茂夫の助太刀してくる。

そう宣言した悪霊に、霊幻は携帯画面を注視したまま、ひらひら手を振って了承した。

「おう、そんじゃ頼んだ」

モブ一人だけじゃ掃除「除霊」大変だもんな。猫の手も借りたいほど忙しいに違いな
い。下級悪霊でもないよりマシだろう。

やる気満々で浅桐みのりの中へダイブしようとするエクボに、霊幻は静かな口調で声をかける。

「モブに会ったら聞いていてくれ」

「何だよ急に改まって」

真剣な顔でズイと携帯画面をエクボに見せつけた。

「ドリंक、オレンジとコーラどっちがいいか」

エクボの目に映るは、とあるハンバーガー店の携帯クーポン画面。

ピキッ。

「知らねーよー！」

悪霊はそう全力で叫んだ後、思いつきし霊幻の頭を叩いたのだった。

茂夫に引き続き、今度はエクボも浅桐みのりの中へ突入する。

茂夫もエクボもいなくなり、残されたのは霊幻一人のみ。

霊幻は待った。

己の弟子を信じて。

刻々と時間は過ぎていく。

静かな時の中。

霊幻は一人待ち続けた。

そしてー

「君は選択をした。その生き方が正しいかどうか遠くから見ている……」

除霊は成功した。

長い時間かかったが、悪霊が支配する精神世界という圧倒的不利な状況下、モブは見事悪霊に打ち勝つてみせたのだ。

今日の前には“浅桐みのり”の体から追い出され、弱々しい霊体の“最上啓示”がいる。

まだ消滅してないとは。どんだけ悪霊を食い溜めてんだこいつ。

なんかモブを監視する的なストーリーカー発言もあったが。

「思わぬ収穫だったわ。ありがとう」

突如現れた謎の影によって、最上は回収された。

「あいつは！」

悪霊いっぱい飼ってたオカマ！

「全然気づかなかった……」

まさか悪霊使いが悪霊祓いの仕事にきてたとは。あーそういや、あいつの悪霊たち、俺たちで殆ど消してしまってた。新しい悪霊「ペット」探してたのか……いい悪霊「ペット」見つかってよかったな。

「その悪霊「ペット」、大食漢で餌「悪霊」用意するの大変だろうけど、頑張ってるよー」

心の中でエールを送りつつ、颯爽と去っていくオカマこと魔津尾を温かい目で見送る霊幻だった。

「……本当に……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

泣きじやくりながら、何度も何度も謝る。

浅桐みのりには、精神世界で彼を散々虐げ、傷つけてきた記憶が残っていた。彼女の心に重くのしかかる罪悪感。

私はあの悪霊と同じだった。

醜くておぞましい怪物と。

「……………めんなさい……………影山くん……………」

しゃくりあげながら、目の前にいる男の子に謝る。

口先だけじゃない、本心からの謝罪だった。

「いいんだ。もうわかったから」

壊れたラジオのように同じ言葉を繰り返す彼女を、茂夫はそつと制止する。

「人は変われるってこと。最上さんと浅桐さんが教えてくれたんだ」

あの精神世界で恐怖、絶望、悲しみ、怒り、色んな負の感情を感じた。でも同時に現実世界での人との繋がり、思いやり、優しさ、大切さ、感謝など温かい感情を再確認させてくれた。

「僕もみんなに変えてもらった。僕も誰を変えられるかもしれないってわかったから」

あのととき勇気が出たのも僕一人だけの力じゃない。

「こうやって……………会えてよかったよ」

浅桐みのりさん。

茂夫は笑う。

精神世界で、自分を虐めてた女の子に。

屈託のない笑顔で。

「ありがとう……」

彼女も笑う。

精神世界で、自分が虐めてた男の子に。

目を真っ赤に腫らしながら。

浅桐みのりから悪霊“最上啓示”は出て行った。

除霊の立役者だった“霊とか相談所”、資産家の浅桐氏からさぞ凄いい大金を貰ったと思いきや。

「師匠。なんで報酬を貰いに行かないんですか？」

そんなことはなかった。

事務所は相変わらず簡素な作りだし、テーブルの上に広がってるのは庶民御用達のハンバーガーチェーン店のセットメニュー。

客もない相談所で、霊幻と茂夫はのんびりおやつタイムを満喫していた。

それは茂夫が相談所に来だしてから変わらない、日常風景そのもの。

茂夫の質問に、霊幻はこともなげに答える。

「あんなに怪我人が出たんだ。成功とは言えんだろ」

本当、死人が出なかったのが奇跡だったな「依頼人の浅桐氏もなんとか生きてて現在入院中だ」

何よりローモブをあんな危険にさらしてしまった。

何故そうなってしまったのか。理由はわかる。

前世では脅威になる悪霊なんていなかったもんだから、今回もなんとかなるだろうと高をくくってしまったのが一番の原因だ。

悪霊なんて全部モブに任せて問題ない、大丈夫だろうと。

そうだ、前世の俺基準で危険具合を判断しちゃいけない。

悪霊を退治するのは“俺”でなく、モブなのだから。

よし次からは気をつけよう。

と、心の中で反省しつつ、期間限定メニューのベーコンチーズバーガーに思い切りかぶりつく。割と旨い。

「微妙な金は受け取らねえ方がマシだ。でないと今後も楽な方向に流れていくだろう」
プロである以上、常に仕事のクオリティは高くを心がけておかないとな。

と、頬に一杯食べ滓つけたまま、かつこいい言葉で締める靈幻に、悪霊「ずっといた」はニヤニヤとあくどい笑みを浮かべて言う。

「とかいって、責任追及されんのが怖えーんだろ」

そうそう、変に金取ったら、後で訴えられたときこちらが不利になる、て。

「違げーよ馬鹿ー！」

プロとしての心構えだ！

「ま、金でも権力でも力に溺れるとロクでもないことになっていくんだ。最上も自分の能力に飲まれたってことだな」

モラル、大事。

まあモブの場合、もうちよい自分を出した方がいいと思うけどな。

我慢ばつかしてストレス溜めると、限界超えて爆発するぞ。

「お前もさ。有名になつたり偉くなるよりは俺の手伝いでバイトやつてるくらいがちよ

うどいいバランスなんだよ」

俺も世界最強の超能力者目指したり、世界征服やったり、正義のヒーローになってみたり、色々やってみたが、そんな楽しいもんじゃなかったし。

「まあた勝手な事言ってるやがる」

騙されんなよ相棒と、馴れ馴れしくモブの肩を小突く緑の悪霊。

あんにやろう、ちよつとモブに信頼されたからって調子に乗りやがって。

モブに信頼されたエクボにジエラシー抱く霊幻だった。

なお実際は。

「エクボ近い」

食べるのに邪魔。

ポフン。

茂夫の力で外へ追い出される自称茂夫の相棒。

最上との戦いで多少エクボのこと信用するようになった茂夫だが、塩対応なのは相変わらずだった。

見渡す限り一面焼け野原だった。

ついでさきほどまでここに高層ビルが立ち並ぶ大都市が存在してたとは誰も想像できない程の荒廃した大地。

方々で火の手があがり、建物だった残骸が無惨に散らばっている。

その光景を見て、俺の口元が弧を描く。

全部、俺が壊した。

一歩進むごとに、纏う力のオーラは衝撃波のように弾け、周囲にあるもの粉碎し塵芥に変えていく。

あちこちで雷鳴が轟き、いくつもの竜巻が発生し何もかも飲み込む。

声が聞こえる。

痛みを訴え、誰かの名を連呼する人の声。

五月蠅い。

近くに転がってた車を浮かせ、声のしたところへ落とす。
ぐしやり。

静かになった。

晴れ晴れとした気持ちで歩き出す。

聞こえてくる雑音は全て処理しながら。

俺の行く手を阻むように、うじゃうじゃと獲物に群がる蟻のごとく無限に沸いてくる。

それは人だったり、悪霊だったり、よくわからないものだったり。

襲ってくる奴が人間なのか人外なのかどうでもいい、邪魔するなら排除するまで。

気色悪い怪物も、武装した人間も区別なく片っ端から超能力でなぎ払う。

血飛沫が、肉片が、断末魔が飛び散る。

襲ってくるのはそれだけじゃない。

空から戦闘機が、地から戦車。

一斉放射しかけてくる。

雨霞と降り注ぐミサイル、砲弾。

爆音が鳴り響き、周囲一体砂煙で何も見えなくなる。

何発、何十発、何百発打ち込まれたか。

朦々とあがる硝煙の中、現れたのは無傷の俺。

あいつらの攻撃は俺の髪の毛一本揺らすことすらできない。

サイコキネシスで空を飛んでる戦闘機をとらえ、容赦なく地に落とし、戦車の群も全方位に放った衝撃波で吹っ飛ばす。

中に人がいようといまいが関係ない、邪魔なやつは全部消してしまえばいい。

轟く爆発音、硝煙の臭い、鉄屑の山。

邪魔者は全て排除された。

両手を大きく広げ、荒れ狂う空を仰ぐ。

もう誰も俺の行く手を阻まない。

本当に、ああ俺は本当に。

「俺は一体何やってるんだ？」

最高にハイな笑顔と対照的に、出てきた声はどこまでも冷めたものだった。

「俺は一体何やってるんだ？」

そう自ら発した声で霊幻の意識は覚醒した。

パチリと瞼は開いてすぐに、むくりとその場から起きあがり、自分の右手をじつと見つめる。

「……」

力の気配は何も感じない。

「……夢か」

ここしばらく見ないと思ったら。

大きくため息を吐きながら、額に浮かんだ汗を袖でぬぐい取る。

汗でぐっしより濡れた寝間着が不快でたまらない。

まだ日は昇ってないのか、部屋は夜のように真っ暗だった。

しかし枕元の目覚まし時計は夜でなく、日の入り前の早朝の時刻を指している。

……もう起きて朝シャンするか。

二度寝する気分もねえ。

鉛のように重い体を無理矢理起こし、浴場へ向かう。

「はあ……」

最悪の目覚めだった。

朝からテンションだだ下がりと、仕事なんてやりたくねえ。

だが社会人になったのなら、そんな甘ったれたことはまかり通らない。

まして個人事業主なら尚更だ。

「ありがとうございますー！」

仕事とプライベートで気持ち切り替えるのは得意分野。

今日もニコニコ笑顔100%で客を見送る。

誰が見ても今の俺が不機嫌度MAXとは思えない。

完全に客がいなくなったのを確認してから、貼り付けた営業スマイルを解除し、どさりとそばにあったソファへ倒れ込む。

「やっと一段落ついた……」

朝一から客がきて、ずっと対応に追われ続け、今やっと一息入れることができた。寝ころんだまま壁時計の確認すると、時計の針は正午を指している。

もう昼か。

あと30分で予約の客がくる。

それまでに飯食わねーと。

昼飯用に買っておいたコンビニ弁当が冷蔵庫の中に入ってる。

疲労で強ばった肩をぐりぐりほぐしながら、特大のため息をつく。

立て続けにマツサージの客3人はなかなかにキツイ。

ただでさえ昨日は家で深夜まで心靈写真の加工「お祓いグラフィック」やってたから、その疲れも蓄積してる。

心身ともに絶不調だ。早く仕事終わらせて泥のように眠りたい。

そう思ってた矢先だった。

「随分お疲れのようだな」

俺しかいないはずなのに、声がする。

それは俺もよく知ってるやつの声。

億劫ながらも、ゆっくり上体を起こす。

モブの背後霊やつてる悪霊がふよふよ浮いていた。

普段モブに引っ付き回ってる悪霊が、モブ同伴なしに相談所へ顔出してるとは珍しい。

「なんか顔色悪くねーか？」

そういいながら緑の之魂は俺の顔を不躰にじろじろ見てる。

チツ、変なところで目ざといやつめ。

深夜遅くまでお祓いグラフィックやって、さらに嫌な夢のせいであまり寝れてないせいで、俺の顔には隈ができてる。

でかい隈はファンデーション「女子校潜入するため、制服と一緒に購入したやつ」で消したつもりだったが、完璧には隠せてなかったようで、悪霊はその微妙な変化に気づいたようだ。

「最近妙に客足が増えてな。おかげで心靈写真の加工とか家に持ち帰って残業だ。まあホームペーヅ効果が出たんだろうな」

大げさにあくびをした後、ニヤリと口の片端あげて笑みをつくる。

「知名度があがってる今が売り込みのチャンスだ。もつと依頼引き受けて〃霊とか相談所〃を有名にするぞー。ゆくゆくは最上みたいな人気霊能者タレントになるつてのも悪くないな」

そう言ったらおまえも霊とか相談所のマスコットキャラとして活躍してもらおう。キモカワキャラは女子高生に人気だからな。そんなときはギャラも期待していいぞー。

どうだ嬉しいだろーとニヤニヤしながら聞くも、エクボは黙り込んだままだった。

あれ、エクボのやつ怒らないな。

てつきり、上級悪霊の俺様をマスコット扱いするなー！ってキレると思っただが。「お前さんよお、わかってんのか？てめーの人生計画なんざ知ったこつちやねーが、シゲオをそれに巻き込むな」

声を荒げることなく、まるで子供を諭すようなエクボの物言いは、ただでさえ疲労、空腹、寝不足「+夢見の悪さ」のトリプルコンボで機嫌の悪い俺の癪に障った。

「はあ？なに言ってるやがる。ちゃんとモブの学校に支障の出ない範囲で仕事請け負ってるだろ」

つつけんどんに言う俺に間髪入れず悪霊は言い返す。

「放課後の時間とか、休みの日も、ほとんどここで潰されてるじゃねーか。あいつにも友達とのつき合いってもんがある。もっとシゲオのこと思ってたなあ」

「モブに友達？そんなのいるわけないだろ」

何やら悪霊が変なこと言ってきたが、俺はそれを一笑に付した。

これまでモブが俺にしてきた相談のほとんどは、人間関係の悩み関連だ。

それも友達と喧嘩したとかではなく、クラスに馴染めないだの、話についていけない、空気読めなくて相手を怒らせてしまったなどの、友達以前の人付き合いのことばかり。

最近部活始めたと言っただけだが、上手くやっていけるのかも疑わしい。

肉体改造部だぞ？筋肉0%のモブが筋肉100%の連中と楽しくやってるビジョン

が全く浮かばねえ。

さらに変なオカルト部の先輩に目をつけられてるって聞いている。あと彼女ともすぐ別れてるし。……今考えてみるとその彼女だって本当に彼女だったのかどうかも怪しいな。あれじゃね？ クラスの陰キヤと付き合う的な罰ゲームのターゲットになつてたとか。もう終わったことだし、詮索はしねえけど。とまあ、色々総合的に考えても、モブにまともな友達はいないはず。

だいたい本当に学校生活楽しけりや、俺にも色々報告するだろ？

でも俺はモブからそんな話聞いてない。

「……ああそうかよ。どうやら俺様の買いかぶりだったようだな」

苛立たしげに舌打ちした後、エクボは「靈幻」とただでさえ低い声をさらに低くした声で、凄むように告げる。

「シゲオの師匠という座に胡座かいてるとな、足掬われるぜ」

いつまでもシゲオがためーの都合のいい駒でいると思うなよ。

よくわからん忠告めいた言葉を俺に言い残し、悪霊はその場から煙のように消えていった。

「……フン、なんだよエクボのやつ」

モブとのつき合いは俺の方が断然長いんだ、最近モブにつきまとうようになった悪霊

にとやかく言われる筋合いはない。

と、悪霊にムカついても仕方がない、余計腹が減るだけだ。予約客がくる前に腹ごなし済ませないと。

急いでソファから起きあがり、冷蔵庫が置いてある給湯室へ向かおうとしたときだった。

ガチャリとドアが開く。

「あのー、予約した○○ですけどー、すみません予定より早くついちゃって……」
げ、もうきた。仕方がない、客優先だ。

「いらつしやいませ、ようこそ霊とか相談所へ！ いえいえ気になさらず、どうぞこちらへ」

あの雑魚悪霊の言う事なんて気にするな。

そう意気込み、満面の笑みで客を出迎えるも。

ぐるぐるー……。

あ、やべえ。

「今、変な音が」

「霊のうめき声ですね！ 霊能力者の私に威嚇してるんですよ！ この時間帯の霊は凶暴ですから！ ですがご安心ください、今世紀最大の霊能者であるこの霊幻新隆が、貴方に取

り憑いた悪霊を綺麗さっぱり退治しましょう！それで本題ですが、まずコース説明をー」

ぺらぺら話しながらも、心の中ではここにいない悪霊に悪態をつく。

くつそー、昼飯食い損ねたじゃねーか。

余計イライラしてきた。

これも全部、悪霊「エクボ」のせいだ。

後でモブにいいつけてやる。

それからも客足が途切れることはなかった。

「ウユニ塩湖から採取された非常に希少な岩塩で除霊効果に優れて……」

肩のこりを訴える客に暴走アロマ特急を施してる最中に、またも電話がかかる。これで一体何件目だ？

「おつと失礼。霊とか相談所……え？凍った豆腐の霊ですか？聞いたことありますねえ。お任せください」

時間指定は今から○時間後の夕方。

ちようどモブの学校が終わるころだな。

いつもモブには「急に呼び出すのやめてください」って言われてるからなあ……今日
は早めに連絡しよう。

そう思い、携帯の履歴からモブに電話かける直前。

“ あいつにも友達とのつき合いつてもんがある。もつとシゲオのこと思ってだなあ
”
悪霊の言葉が脳裏によぎる。

「……」

コールボタンを押すことなく、そのまま携帯を折りたたみ、ポケットにしまい込んだ。
「お待たせしました。除霊の続きをしますね！この岩塩に含まれる成分ですが実は除霊
効果以外にもー」

途中にしたマツサージ、もとい除霊を再開する。

凍った豆腐の霊の除霊とかいうふざけた内容の依頼だし、十中八九ガセだろう。俺
だけでもなんとかなるだろ。

そう判断した数時間前の俺よ。

「豆腐を見る度俺を思い出させてやろうかー!!」

正しい判断じゃなかったぞ。

まさか本物案件だったとは。

依頼人たちと共に、現場へ行ったら本当に出た。

うっそだろ、こんなときに限って出やがって。

「凍った豆腐の角に頭を打ち付けて死んだ男の霊出るといふ噂は本当だったとは……」

いやどんな霊だよ。

と、一人突っ込みしてる場合じゃねえ。

早くモブを呼ばないと依頼人たち「と俺」の命が危ない！

素早くポケットから携帯取り出し、履歴からモブヘコールする。

数コールも経たずして電話に出たモブに矢継ぎ早で話す。

「あ。モブ？ちよつと悪霊に手こずっててさ。いや俺一人でも余裕なんだが最近立て

込んでてな。力の放出は避けたいっていうか……モブ？」

いつもなら、ため息と一緒に「わかりました」と返してすぐ切るのに、電話の向こう

側は何も喋らない。

それどころか。

「今日は師匠……一人でやってくれませんか？」

「はっ。」

一瞬、モブが何言ってるのか理解できなかった。

「いきなり呼び出すの……いつもやめてほしいって言ってるじゃないですか」
急にどうしたんだこいつ。

「何言ってるんだ？ どうせ暇だろ？ 来れない理由があるのか？ こっちには困ってる依頼人があるんだぜ。待ってるからな。できるだけ早めに頼む」

そう言い終え、さっさと電話を切る。

「早く除霊してください！」

霊を見てガタガタ震える依頼人たちを安心させるため、自信たっぷりの笑顔で答えた。

「ご安心ください。急いで私の弟子を向かわせています」

後は弟子がくるまで時間稼いだ。

数十分後、無事除霊は完了した。

「いや〜助かったぜ。まさか凍った豆腐の角にぶつけて死んだ霊がいるとはなあ！ こりゃ迂闊に豆腐の角ぶつけて死ねなんて言えねーな！」

そう思わないか?と、隣にいるモブに話を振ろうとするも、隣には誰もいない。思わずその場に足を止め、後ろを振り返る。

「……………ん?どうした?」

モブは数メートル離れたところで立ち止まっていた。

「僕にだって学校やプライベートがあるんだからいきなり呼び出すのもうやめてください」

電話で呼び出すたび毎回言われるモブの苦言。

いつもなら軽く聞き流すところだが、この日の俺は虫の居所が悪かった。

「プライベートって……………せいぜい筋トレの部活ぐらいじゃないのか?」

他に誰と遊ぶってんだ、友達いなくせに。

「それかまたデート詐欺か何かに引っかかったのか?すぐ利用されんだから。成長しねえなあ。お前はよお」

今度はどんなカルト宗教勧誘受けたんだ。それともマルチ商法か?

「同級生と何やってたか知らんがそいつらはお前の理解者なのか?」

超能力もない、普通の人間がお前のこと理解できるわけねーだろ。

「こっちは人助けだぞ人助け!お前が俺を手伝うことには大きな意義がある!」

それが正しい超能力者のあり方。俺の元で超能力使って人様の役に立てることが今

のお前には必要なんだよ。

自分の欲望のままに力は使うのは絶対ダメだ。

気をつけなきゃいけない。俺が見てやらないと。

モブが“俺”にならないよう、ちゃんと見ておかないと。

他の奴らじゃダメなんだ。

「しかも俺はお前の師匠！お前が自分の力をコントロールできてるのは実は俺のお陰でもある」

俺だけがモブを正しい道に導いてやれるんだ。

超能力は使わずそのエネルギーを蓄積することもできるが、そうなった場合、己の体に溜まった膨大な力を自分でコントロールしきれず暴走する危険性がある。

こまめにモブを呼んで除霊させてるのにもちゃんと意味があるのだ。

ついでに俺も助かるし、互いにメリットがある、ウインウインじゃねーか。なのに何で俺の言うこと聞けない。イライラを通り越し、ドス黒い感情が胸の中に渦巻く。

「いいか。関わる相手を選べよモブ！除霊バイトができなくなるくらいだったら片方を切り捨てろ！」

だからついで口走ってしまった。

「どうせお前の事なんか大切に思っちゃいねえ。弱い人間を内心で馬鹿にして楽しんで

んだよ」

言っではいけない、最低最悪の言葉を。

「あ……」

気づいたときにはもう遅かった。

「違う」

初めて聞くモブの強い口調。

「馬鹿になんてしてない……」

モブの目は、俺をじっと見てる。

怒ったり悲しんだりといった表情は浮かんでない。

いつもと変わらないのっぺりした顔。

だがしかし。

「きつと霊幻師匠の言うことが正しいとは限らないんだ」

モブの目は雄弁に物語っていた。

俺への不信感を。

「あ……ミスったー」

「な……何言っただモブ……疲れてんだな？ラーメンでも食って帰ろうぜ……」
気まずい雰囲気をなんとかしようと、食い物で懐柔を試みるも。

「僕は馬鹿にされてもないし簡単に利用もされない」
そんなのが通用する段階はとつくに過ぎていた。

「師匠」

お疲れさまでした。

それだけを言つて、モブはスタスタ一人帰つていく。

俺に目もくれず。

しんと静まりかえつた廃墟の中。

ぎゅるるるー……。

盛大に鳴つた腹の音はどこまでも響いていったー

一人きりの霊とか相談所。

霊幻は一人頭を抱え悩んでいた。

モブの野郎今日は事前に約束してたのに……いよいよバックレやがったか。やはり昨日はちよつと嫌な感じで言い過ぎたか……。

茂夫が霊とか相談所にアルバイトとして働き出してから数年間。

「爪」での一件を除いて、これまで茂夫はバイトを休むことなどなかった「霊幻からの急な呼び出しにも茂夫は律儀に応じてた」

茂夫の変化に、霊幻は戸惑いと苛立ちを感じつつ、心の中で悪態をつく。

なんだよモブめ、薄情なやつ。

俺たち、一緒に都市伝説の事件解決したり、すごい悪霊と戦った仲だろ。

これが噂の反抗期ってやつか？

まさかモブ……このまま此処……辞めたりとか……。

頭によぎった一抹の不安に、霊幻は眉根をしかめ軽く頭を振るう。

あいつが俺以外に悩みを相談できる相手がいるはずがない。

そうだ、慌てることはないんだ。

俺と関わりを絶てばまた元の孤独に戻る。案ずるな。あいつは必ずここに戻ってくる。

そう自分に言い聞かせてる霊幻の思惑とは裏腹に。

「僕は今まで靈幻師匠の言葉に乗っかかり過ぎていた。それで全部ががうまくいくような気がしてなんか楽だったんだ」

「でも……それだけじゃよくないことに気付いたから。もう少し自分のやりたいことを考え直してみる」

件の弟子は己の師匠といったん距離を置くことを決めたのだった。

茂夫がバイトにこなくなつてから〇日が経つた。

全く靈感がない靈幻と違い、茂夫は靈感もあり除霊ができる超能力者。

茂夫がいなければ、靈とか相談所は存続できない。さぞかし所長である靈幻は困つてるーと思いきや。

「あゝ。憑き物が落ちたような気分です……」

客からの評判は上々。

靈幻一人でも、靈とか相談所は意外とうまく回っていた。

体の不調を訴えてた客も、靈幻とヨガをやつて「悪靈を祓う儀式と称して」心身共に爽やかスツキリ。

「また通つてもいいですか？」

晴れやかな笑顔で次回の予約して帰つて行つた。

よかつた……本物じゃなくて。

客がいなくなつた後、靈幻はホツと胸をなで下ろしながらも、広げたヨガセットを片づけていく。

でもそうだよな……。

ふと片づける手を止めて、相談所をぐるりと見渡す。

部屋の内装は4年前と殆ど変わらない。

そう、4年。

靈幻が靈能商売を始めたのは茂夫がくる前からである。

この家業は元々俺の身一つで成立してきたんだ。

今後のためにと実践的で便利スキルから偏執的な趣味スキルまで幅広く習得し続けてた靈幻は、世間一般で言われる“資格マニア”だった。

こんなの何の役に立つんだと、たまに我に返つて空しくなつたこともあつたが……いやあ、人生何が役立つかわからんもんだな全く！

今の状況は4年前のあの頃に戻っただけだ。

モブがいなくて困ることなんてあるのか？

今まで通り俺は自分の手に負えることだけ要領よくこなしていけばいいんだ。

霊退治は本物に任せればいいし。

そうだ、新羅万象丸がいるじゃねーか。よし面倒な案件はあいつに回そう。

肩が重いと悩む客にはマッサージ、気分が滅入って落ち込んでる客にはアロマとカウ
ンセリングなど臨機応変に対処し、客がいない暇な時間にはこっそりかつこよく塩を撒
く練習する。

そして今日は新しい宣伝ポスターをパソコンで作成していた。

慣れた手つきで自分の写真修正しつつ、すっかり相談所に来なくなった弟子に関して
深く悩まないようにする。

別にモブがいなくても俺はやっていけるのだと自己暗示をして。

そうだよ人件費「※時給300円」だって削れるしガキの思春期相談だって聞かずに
済む。

願ったり叶ったりじゃねーか。

一旦作業の手を止め、霊幻は大きく体を伸ばす。

時間は有限だしな。その分勉強したり見聞を広めるべきだ。

おー！なんかすげー前向きになってきたぞ！

ウキウキと気分があがり、パソコンで作業する手もカタカタと調子よくスピードアップしていく。

悪いなモブ。お前の計算外だろうが俺は全然悔しくないぞ。お前は今頃寂しがっているだろうがな。はははははは！

独りぼっちで寂しさの限界超えて”すみませんでした師匠。僕が間違っていました”とベソかいて謝りでもすりゃあ、俺だつて鬼じゃない。師匠として寛大な心で受け入れてやるさ！

しかし待てど暮らせど一向に、茂夫が相談所にやってくる気配も、霊幻の携帯に茂夫からの着信がくることもなかった。

調味市の繁華街をスーツを着た男性――霊幻新隆は一人ぶらりと散策していた。

今頃モブのやつひどく後悔してるだろうな。意地を張って気ままずくなってるかも

な。大人の俺は事情も察するし気にしてないというのに。

本当に、これっぽちも全然気にしてない!

どうみてもメチャクチャ茂夫のこと気にしてるが、本人はそのことに気付いていない。

自分は気にしてない、気にしてるのはモブ。

俺がいなくてモブはぼつちで可哀相。

そう思いこんでた靈幻だが。

「!」

前方に見知った姿——影山茂夫を発見した。

私服姿で友達数人と談笑している茂夫を。

思わずサツと俊敏な動きで物陰に移動し、茂夫たちから隠れる。

隠れた靈幻に気付くことなく、茂夫たちは通り過ぎていった。

友達と和気藹々と楽しげに歩く茂夫はどう見てもボツチじゃない。

可哀相なボツチどころかリア充、輝いていた。

馬鹿な!?!あのモブが楽しそうにしている!?!あんな友達がいたのかく!

啞然として言葉を失ってる靈幻に

「何隠れてるんだてめえ?」

いつの間にか現れた緑の人魂——エクボが声をかける。

強がってみせるけど本当は茂夫のことが気になって仕方ない靈幻に、エクボは懇切丁寧に茂夫の現状報告した。

「茂夫はお前の事まったく何も気にしてないみたいだしとても平和だな」

へつと悪い顔で笑うエクボをみて、靈幻はエクボの思惑を読みとった。

モブの力を利用してしようとしてるこいつにとつて、俺の存在は目の上のたんこぶ。

俺がいなくなれば、モブに取り入るチャンスが出来ると思ったのだろう。

緑のウンコの癖に生意気な。

いいだろう……売られた喧嘩は買ってやる！

「フン……お前はいいのかよエクボ？俺から遠ざかればモブはますます能力を使わなくなるぞ。お前はただの中学生の金魚のフンをこの先もずっとやっていくのかよ？そりゃ平和だな」

口喧嘩で俺に勝てると思うなよ！

「ぐっ……！」

凶星をつかれてエクボが怯む。

「モブの力利用して何かしたかったようだが残念だな」

バーカバーカ！

言葉が詰まったエクボをみて、靈幻はニヤリと笑いながらさらに畳みかける。

「何も起きない日常に身を置くことを選んだモブに利用価値はもうない！ただの中学生に引っ付いてせいぜい楽しく過ごすといー！その代わり俺は次のステージに行かせてもらうぜ」

モブが超能力使わない人生歩むなら、それでいい。

元々超能力者とは関わらない、“安全”な人生送るつもりだったんだ、清々するさ！
「ま……相変わらず元気だなにより、そんなギャグが言えるくらいなら心配ねえな」

靈幻の強がりに対し、エクボはそれ以上深く追求することはなかった。

「もう二度と会うこともないかもな」

それだけを言って、エクボはスーツと茂夫たちの方へ向かう。

小さくなつていく緑の人魂を見送りつつ、靈幻は小さく笑みをつくる。

「……ああ、そうだな」

くるりと反転し来た道を引き返す。

茂夫たちから背を向けて。

師弟ごっこはこれでお終い。

……終、わりだ。

「……」

アパートの一室で霊幻は一人黄昏れていた。

壁によりかかり、しばらくぼーつと虚空を眺め続けていたが、おもむろに立ち上がる。

「……ホームページの更新でもするか」

気怠げにあくびしつつ、デスクチェアに座り、パソコンの電源を入れ、マウス操作を始めた。

ホームページ更新ついでに、ネットニュースも漁る。

さてさて、今日のトップニュースは……。

「新人アイドルブログ炎上かく。ふくん」

どうやら、とある一定の人を小馬鹿にした言い方が問題になって炎上したらしい。ちよつとした失言で、よくもここまで人のこと叩けるもんだ。

ネット掲示板にずらりと並んだ罵詈雑言の嵐コメントに目を通しつつ一人思う。

世の中暇人が多いなー。俺も気をつけなければ……て、俺。すでに失言した後だった。人のこと言えねえ。

ガシガシと頭を掻きながら、別サイトをクリックする。

「そういやしばらくフレンドブックチェックしてなかったな。今はSNSでいつでも知人と交流できるから便利な時代だよな」

登録しただけでろくに使っていないけど。

「んーメッセージ来てるじゃん。放置してて悪かったな〜私生活が忙しくて……誰だ？あいつかな？高校の時の……」

沈んだ気持ちちが少しだけ浮上し、期待しながらクリックすると、画面いっぱいそのメッセージが表示された。

“ おめでとーございます！今日はあなたの誕生日です。 ”

パソコン画面の隅に表示してある日付は10月10日。

「そうか……すっかり忘れてたな」

今日、俺の誕生日だった。

誰かお祝いメッセージ送ってるかも。

そんな淡い期待を抱きつつ、詳細クリックした。

結果は。

“ 友達からのお祝いメッセージをみる「0通」 ”

「マジかよ」

そんな気はしてた。

呪いのメールが届いてないだけまだマシか。

「ん？メール」

メールボックスの中に、新着メールをみつけた。

差出人はー

“ 誕生日おめでとう。元気でやっている？お仕事の方はどう？まだインチキ臭い商売やってるの？お隣の小林家の長男の子は先月結婚したって聞いたわ。安定した就職活動に早めに切り替えて、頑張つて探せばまだまだ28歳なら間に合うと思うの。人生やり直すなら、そろそろ決断しなおしたらどう？健康には気をつけなさいね。これが母からのプレゼントです”

プレゼント？メールと一緒にくつついてる添付ファイルか？

拡大した画像ファイルの正体は。

“ ホワイトティー求人案内”

「……」

パソコンの電源を切りシャットダウンさせた。

そのままふて寝するつもりだったが。

「あゝら新隆ちゃんいらつしやい。かなり久しぶりじゃない」

思い切り酒が飲みたくなった。

「レモンサワー。サワー多めで」

カウンター席に座り、マスターに酒を注文する。

「お酒大丈夫なの？」

前世では超能力で毒無効状態にしてたから、どれだけ酒を飲んでも平気だったが、今の体は滅法アルコールに弱い。マスターも俺の酒の弱さを知ってるため、心配そうな顔でこちらを見てる。

「ああ」

もう仕事も入れてないし、人と会う約束もないのだ。俺が泥酔しようが誰にも迷惑かけないから問題ねえ。

「霊幻さんだ！ 霊幻先生が来たぞ！」

「先生！ 先生こっち座って！」

俺の姿を見るや否や、他の客たちが目の色変えて俺に話しかけてくる。

「この常連はマルチ商法やエセ宗教などに引つかかりやすい体質の者ばかり。そういった類の悩みや愚痴を誰かに聞いてもらいたい連中がここでストレスを吐き出していく」

そう。

「俺みたいな業者にとつては格好の釣り堀。弱い人間のたまり場だ」

一時期はここに通い続けて、客を確保していた。

今はりピーターもついてきたおかげで、ここに通う必要もなくなり、しばらく足が遠のいていたけど。

ほら早速。

「聞いてくれ靈幻さん！この前綺麗なねーちゃんに話しかけられて行ったら絵画の展示しててさ〜」

馬鹿な人間が俺に話しかけてきた。

「名画のコピーの展覧会に連れていかれてんだな。デート商法だ」

「相談を聞いて適当な助言をするだけでやたら慕われる」

ぺらぺらと喋ってる間にも人は集まってくる。皆一様に俺を先生、先生と連呼しどんどん悩み相談を持ちかけてくるのだ。

「俺にとつて友人……に近いのか？」

よくわからねーけど。

「……俺今日誕生日なんだ」

なんとなくそいつらに伝えてみる。

「おめでとう」

「先生おめでとうございまーす」

「おめでとー」

今日初めて祝いの言葉を貰った。

「誕生日だったら丁度良かった！今ね特別なルートから紹介されたいいい枕があつてね。

低反発でぐつつすり眠れて定価12万円が……」

目を爛々に輝かせながら、俺に枕を売りつけようとする女を無視し、ぐいと酒を呷る。

「新隆ちゃんまだ1杯でしょ？顔真つ赤よ。大丈夫？」

一気に飲み干し、ダンつとテーブルへ空になったコップを叩きつける。

「駄目だな……」

本当にこの体は脆弱だ。

毒どころかアルコールにも勝てないなんて。

「お会計」

さっさと会計を済ませ、店を出る。

全く、入る前より気分が悪い。

「逆効果だったな。誰とでもいいから会話しようなんて」

夜の繁華街を一人歩きながらしみじみ思う。

「俺って……本当に友達いなかったんだな」

昔も今も。

——気持ち悪い。

そのまままっすぐ家に帰るつもりが、吐き気に襲われやむなく裏路地へ移動した。

頭が割れそうなほど痛いし……もう無理。

わき上がる吐き気を抑えきれず、そのままげーげーその場で嘔吐し、胃の中空っぽにするも、胃のムカつきは収まらない。

すえたような臭いが鼻につき、さらに気分が悪くなる。

胸のむかつきもそうだが、ぐるぐる思考が悪い方へ悪い方へ向かっていた。

「この状況はまずい……まずい流れに乗ろうとしている……この俺が……」

落ち着け、気持ちの切り替えは得意だろ俺。

精神訓練だつて超能力研究したとき、散々やったじゃねーか。

「……………でもそも俺……………俺は……………何だ？」

『靈幻新隆』は超能力しか取り柄のない人間だつた。その超能力がなくなつて空っぽの今の俺はー？

ひどい目眩に襲われ、体がよろめく。

自分のアイデンティティがぐらついて、頭が可笑しそうになる。

ガラガラと何かが音を立てて崩れゆくような恐怖が襲う。

気持ちのやり場がなく、絶叫しかけたとき。

人は変わるんだ、チャンスさえあれば。

モブの言葉を思い出した。

喉元まで出かけてた叫びは寸で収まる。

瞳を閉じて、大きく深呼吸し、ぎわついた気持ちを徐々に収めていく。

そうだ、今がそのチャンスなんだ。

モブだつて自分を変えようと自らの意志で部活を始めた。

それなら俺も。

「俺もなるしかない……何者かに！」

俺も変わるんだ。

前世でも見つけられなかった、俺がなりたいたいもの。

一体何になりたかったのか、今でも答えはでない。

もう超能力者じゃないし、モブの師匠でもなくなった。

それでもなるんだ！

“ 霊幻新隆 ” が目指した何かに！

袖で口についた汚れをぐいと拭き取り、裏路地から表通りへ出る。

もう体はふらつかない。

ゆっくりとそれでも確実に一步一步進んでいく。

いつの間にか空は白み、朝日が昇っていた。

↓ 「続く」

ある詐欺師の話【下】①

「俺もなるしかない……何者かにー」

単独になり吹っ切れた靈幻は明確な変化を起こした。

まず彼が始めたこと。それは慈善活動だった。

悪の組織と戦ったり、世界の貧困問題解決するといった、かつて前世の“靈幻新隆”が「正義のヒーロー」としてやってきた、大規模なものではない。

それよりもはるかにスケールダウンした、とても小さくて地道な作業。

たとえば。

「公園もきれいになったし、次は河川敷をやるか！」

町の清掃を始めた。

「結構ゴミ落ちてるなあ……」ここが本日の心霊スポットです。今から除霊始めます
“つつと”

除霊「という名のゴミ拾い」の様子をネット公開したり

「このように相手が品物を売りつけてきた場合には、まずー」

休みの日を利用して、詐欺被害に合わないための無料講座や人生相談を始めたり。

どれもこれも超能力で何でも派手にパパッと解決したあの頃と違う。誰でもできるけど、誰もしたからない、地味で面倒な慈善活動。

前世の自分どころか、少し前の自分だってこんなこと、面倒くさがってやらなかっただろう。

だが今の俺は新しく生まれ変わった。新・霊幻新隆。

まずは俺ができることを一つ一つ、着実にこなすことから始めるんだ。

特別な力がなくても、俺は成功してみせる！

様々な活躍の場を広めつつも

「その依頼、この霊幻新隆が引き受けた！」

今まで通り精力的に依頼もこなしていった。

どんな依頼でも真摯に向き合い、依頼人の悩み相談もこれまで以上に丁寧で細やかな精神ケアをおこなう。

自分の力量では解決できなさそうな依頼だった場合。

「あ、もしもし森羅？そっちに紹介したい客がいるんだが」

口八丁手八丁で適当に除霊を誤魔化すのでなく、他の者に仕事を渡すようにした「代わりに森羅も霊と無関係な仕事を霊幻に回してくれるようになった」という嬉しいオマ

ケつき」

そのおかげか、霊とか相談所の評判は着実にあがっていった。

相談所にお礼の手紙や写真が届くようになり、

“「霊とか相談所」とつても良いです。

代表の霊幻新隆さんは本物の霊能力者です。

おかげで体が軽くなって、運も開けそう。”

“ありがたくて、涙が止まりません。”

こんな自分をだれも助けてくれなかったけど、霊幻さんに、ひよつとして私、恋しちゃったかもしれません”

このようなコメントが書き込まれるほど、「霊とか相談所」はネットの口コミサイトで高評価がつくようになった。

さらに霊幻新隆の名を世間に大きく広めるきっかけとなる依頼が舞い込む。

“超有名オンラインゲーム・ファンタジー地獄のプレイヤーキラーは正体が幽霊と噂されており多くの霊能力者が断念した難問依頼”

とある霊能力者はこう忠告する。

「聞いたことあるがやめておけ。我々の手に負えるものじゃない。システムの中にまで霊能力は届かない、だろ？」

つまりモブですら除霊する手段を持たない事案だったのだ。

霊能力は届かない？むしろ都合じゃねーか！

しかし霊幻は複数のアカウントで連日深夜までレベル上げと武器強化を繰り返し

「……レア素材またドロップしなかった……」

「やった……これでランキング二位以下は全部俺のキャラ独占……」

時間と体と金を犠牲にし極限まで強くした己のキャラたちでいざ幽霊退治！ 餌を餌に幽霊プレイヤーを囲い込み袋叩きを開始、そしてついに除霊を成功させた。

「す……す……い！ 本当に除霊できたんですね！」

霊幻に依頼を持ちかけた依頼人が思わず感嘆の叫びをあげる。

「一体どうやって……」

「霊能力者ですから……」

長く厳しい戦いだった……。

「くっ！ 課金しすぎて赤字か……」

肉体・精神・財布に深いダメージを負い、屍一步手前の状態の霊幻だが、心の奥底では確かな手応えを感じていた。

己の力だけでやり遂げたという達成感を。

数多の霊能力者が匙を投げた難しい依頼を一人で解決した霊幻。

この成功をきっかけに靈幻のことはどんどん話題になっていった。

“ 靈幻新隆はマジで本物！

オンライン幽霊を除霊した！”

ネット掲示板ではその話題で持ちきりとなり。

“ オンライン幽霊ついに除霊成功！

霊能力者は実在した”

新聞でも靈幻の功績が華々しく掲載された。

誰かが靈幻を調味市の兄などと呼び始めるとその知名度は加速し

「悪霊は人の心の弱さにつけこみますからね、特にストレス社会と言われる現代では——」

雑誌からのインタビュウを受けるまでになった。

霊能力者“ 靈幻新隆”。

今や調味市で彼の名を知らない者はいない。

今の“ 霊とか相談所”の“ 靈幻新隆”は——

知名度100%

さらに数日後……

霊とか相談所に、ある人物が現れた。

ビシっとしたスーツ姿の男性は、靈幻に己の名刺を差し出す。

「テ……テレビ!?!」

靈幻が受け取った名刺には

ゴステレビ デイレクター 敏腕太郎

と書かれていた。

まさかテレビ出演を依頼されるとは。

「そんなに注目されてるのか俺は……」

突然のスカウトに驚きつつも、同時にこれまで自分がやってきたことが世間に認められたようで心が満たされる。

超能力がなくても俺は認められたんだ!

「靈幻先生の噂をたまたま耳にしたプロデューサーが是非番組にと」

「全国放送か……」

テレビの影響力は計り知れない。ましてや全国放送など一気に有名人になること間違いないのである。

あのときは冗談のつもりで言ってたが……マジで俺、最上みたいな有名靈能者になれるかも?

「うまくテレビで人気を得られれば一気に靈能界の大物ですよ」

「どんな番組ですか？」

「霊能力が本当に実在するか検証する企画もので、なんと一時間の生放送！」

「生放送……」

生放送という単語を聞いて思い出される過去の苦い思い出。

“正義のヒーロー”というメッキを剥がされ、己の醜い本性が露呈したあの放送事故は、今でも鮮明に覚えている。

今の自分ならあのとときのような事故は発生しないから大丈夫だと思うけど、やっぱり遠慮したい気持ちのほうが大きい。

「……」

押し黙る霊幻に、ディレクターは熱心に説得を続ける。

「是非参加していただきたいのです！今話題沸騰中のイケメン霊能力者、その実力は本物か!?もちろん、ギャラは弾みますよ〜」

どうですか霊幻先生。興味ありませんか？

ニコニコ笑顔で聞いてくるディレクター。

「……」

万一何かハマした場合、その光景は全国のお茶の間に映し出されてしまう。しかしテレビに出れば霊幻新隆の名は全国に轟き〜俺は“有名”になれる。特別な人間に。

「先生は顔もいいし芸能界デビューだって夢じゃありませんって！」

「……」

このまま地道に活動し続けても、これ以上たいして名声は得られないだろう。もつと有名になるには、博打に出ることも必要だ。

「……わかりました。お引き受けしましょう」

迷った末、霊幻はテレビ出演のオファーを引き受けることにした。

アドリブとハツタリなら俺の得意とするところ。

これまでの除霊だって、それで乗り切ったようなものだ。

多少の失態程度、俺の対応力があればなんとかなる。

前世のときのような失態をまたやらかすほど、今世の俺は馬鹿じゃない!!

「いやー除霊も何もこの子取り憑かれてないよね？演技じゃん」

やらかしました。

霊幻には勝算があつた。

たとえ生放送でもこういう番組には台本がある。仮に除霊失敗しても司会者が上手くフォローし、観客たちも温かく拍手してくれるだろうと。

しかし現実は違つた。

悪霊に憑かれた子供なんて最初から存在しない。

子役にそれっぽい演技してもらつただけであり、出演した霊能力者がその仕込みに気づけるか否か、それを確認するというのがテレビ側の目的だつた……建前上は「実際は浄堂麒麟が仕組んだ、霊幻を徹底的に潰すのが狙いの八百長番組」

そう、霊能力が全くなく、アドリブとはつたりで乗り切る霊幻にとつて「怪奇探偵……霊能力は実在するのかスペシャル」はこの世で一番出てはいけないテレビ番組だつた。

それに気づかず、延々とインチキ除霊し続けてしまつた時点で、霊幻の命運は尽きたも同然。

番組の思惑、浄堂の悪意に気づいた時にはすでに手遅れだった。

なんとか必死に弁解する霊幻だが、前半30分間、悪霊も憑いてない子供に対し、無駄な除霊をやつてたせいで、何を話しても説得力皆無。

しかも最悪なことに霊幻の予想と裏腹に、浄堂麒麟も司会者や他の出演者たちも霊幻を一切フォロウしないどころか全員、霊幻をまるで犯罪者のように糾弾したあげく笑いものに仕立て上げた。

記憶の中では二回目、今世では初めての全国生放送。

かつこよく決めてファンを作るどころか、30分間訳の分からない変な除霊やつてたインチキ詐欺師という印象を、全国の視聴者たちに植え付けてしまった。

有名になるという望みは確かに叶った――悪い意味で。

「霊幻大変な事になつてんな……」

「霊幻さん……何か秘策があるのかな」

と彼のことを心配したり

「あの人が詐欺師なわけないだろ」

と彼を信じる者もいたが、それは一部分の人だけ。圧倒的大多数の人間は。

「昨日の見た？怪奇探偵」

「見た見た。笑つた」

「公開処刑って感じ？」

彼をインチキ霊能者だと嘲笑した。

霊幻が出演した番組動画は瞬間にネットで拡散され、ネット上で面白可笑しく扱われ、大炎上。

これまでの“調味市の兄”と呼ばれてた敏腕霊能者のイメージから一転、
霊幻新降はインチキ霊能者だと世間に認識されてしまった。

「くそー！ハメられた！あいつらなんて鬼畜な……一瞬の視聴率の為に俺を使い捨てにしたのか……？あのタヌキジジイー！」

一体俺に何の恨みがあるってんだ！

アパートの自室で一人、霊幻は頭を抱える。

テレビから流れるニュース特番では、自分の特集が組まれており、コメンテーターが
霊幻新降はインチキ霊能者ではないかと意見を言っていた。

「とりあえずこれ以上炎上が拡大しないように工作しないと……」

カタカタカタ。

“ 霊幻は優秀だぞ。オレ除霊してもらったから分かるけど、肩とか腰とかすげーかる

くなつたし一氣に楽になつたもん”

ネット掲示板に援護コメント書き込むも。

“コイツ靈幻じゃね?”

「がっ!バレてる!」

秒で自演バレた。

“は?ちげーし。オレはあくまで客観的なことを言つたまでだ。客観的に言わせてもらうがー”

反論コメント送るも、返つてきた反応は。

“犯罪者”

“オジロスナギツネ乙”

“詐欺師はどっかいけ”

“犯罪者の自覚ある?”

“靈幻みてるく?おまえ病気だよ”

どれもこれも靈幻を責めるものばかりだった。

さらに悪いことに。

“レイゲン、卒業写真キターww”

個人情報も流出した。

誰だ流したやつ！卒アルの写真ってことは学生時代、俺のこと嫌ってたやつか？心当たりが多すぎて誰か分からねえ！

「上等だコラ……努力のどの字も知らねえようなクソガキ共に俺が負けるかあー！」
メラメラと闘志を燃やし、ネット掲示板で日々レスバトルを繰り広げた。

しかし霊幻の奮闘も空しく、悪徳霊媒師、その悪評は各メディアに尾ひれを着けて拡大され、3日もすれば世間が作り出した醜悪な霊幻像はほぼ完成していた。

「馬鹿な！こんなの真実じゃねえ！よくもこんなデタラメな設定で塗り固めやがって……」

部屋に散乱した週刊誌に載ってた“霊幻新隆がやってきた悪行の数々。

どれもこれも身に覚えのないことばかりだった。

多くの客から大金を巻き上げ騙した極悪人って、いったいどこ情報だ、霊とか相談所は業界最安値だぞ！

被害者の会結成って、被害者どこから現れた?!

これまでとってきたアンケートでも顧客満足度高かったし、何よりうちはクレームが少ないのが自慢だつーの！

学生時代の“霊幻新隆”はクラスで浮いてて嫌われ者だった？それは事実だ間違っていない！

くつそー、ろくに情報の裏取りもせず好き放題書きやがって……！名譽毀損で訴えてやる！

「というわけでこの俺をインチキ呼ばわりする輩を黙らせるために証人になってくれ」
誕生日以来通ってなかったバーへ顔を出し、そこにいた連中たちに協力を仰いだ。

常連客を証人にした場合、どうせ俺が洗脳したただのなんだの言いがかりをつけられるのがオチ。

となれば仕事以外、プライベートで付き合いのあるやつらに協力してもらおう必要がある。

連中からは慕われてたし、俺の擁護も快くしてくれるだろう。

そう計算していたが。

「……おい。いつもの鬱陶しさはどうした？」

その場にいた誰も彼もがまるで親の敵かと言わんばかりに、こちらを睨んでいる。

「……出て行ってちょうだい。私達はもう騙されたいから」

おいおいマスターまで。

もう騙されてるじゃねーか世間のデタラメ話に。

なんて軽口叩ける雰囲気でもない。

「……………そうかよ」

皆の冷たい視線を一身に受けつつ、靈幻はバーを後にした。

あれだけ相談に乗ってやってたというのに。

……………本当、薄っぺらい関係だったんだな。

さてどうしたものか。

夕焼けに染まった道を一人歩きながら、靈幻は考える。

風評被害バラまいた連中を黙らせるには、俺が誠実に商売してる靈能者だという確たる証拠が必要。

そのために身の潔白を証明してくれる人を探してるというのに。

「……………こうなったら話題が風化するのを待つしかないか……………」

それまで霊とか相談所は一時休業だ。

この状況で客がくるとも思えないし、来たとして冷やかしかマスコミしか来ないだろう。

何か大きな話題が起これば、俺のことなんてすぐ忘れれると思うけど。

誰か世界征服でもやってくんねーかな。

総理大臣誘拐したり、テレビの電波ジャックして世界征服宣言とか、ぱーっと派手にやっつてほしい。

誰かとすれ違うたび「あいつ靈幻じゃね?」「うわ、よく平気で外歩けるな」「詐欺師」「犯罪者」なんて陰口叩かれたり、道端で井戸端会議してる主婦たちからひそひそされるのも、いい加減うんざりだ。

ガキンチョたちも面白がって石投げてくるし。流石にそれは危ないから石なげたくソガキ共にはちゃんど鉄拳制裁して説教したけど。おかげで暴力靈媒師という不名誉な渾名が追加された。

人の噂も七十五日。

それまで大人しく二ヶ月半って長いな。それまで貯金持つか?

貯金いくらあったっけ?と考えてた靈幻だが、ふと前方に何かを見つめる。

「なんだよこれ?待ち伏せしてんのか?」

自宅のアパート周辺に、人だかりができていた。

よくみれば、リポーターっぽいやつがマイクで何やら実況していて、それをカメラマンが撮影してる。

マジかよあいつら、俺の住所まで特定してやがって。

善良な一般市民追い回して何が楽しいんだか。

「いたぞ！ 霊幻新隆だ！」

「待て！」

霊幻の姿を見つけたマスコミたちは目の色変える。

あつという間に霊幻を取り囲んだかと思えば、口々に喋り出す。

「あなたには説明責任があると思いませんか！」

「会見を開く考えは!？」

パシヤパシヤと焚かれるフラツシユの光が猛烈に眩しい。

そもそも許可してないのに勝手に撮るな。

いやそれよりも。

「は……………？ 会見って……………」

霊幻の困惑を余所に話はどんどん進んでいき、ついに会見開くことが決定してしま
う。

「記者会見を行う場所は××スタジオの□□、日時は△日の○時！ 来なかったらどうなる
か……………わかりますね？」

事態は霊幻が想定してたよりはるかに大事になっていた――

電気もついてない、薄暗い部屋の中。

ベッドに寝つ転がり、何も無い天井をぼーっと眺め続ける。

つけっぱなしのパソコン画面には。

“大変そうだね。母さん記者会見での謝罪文考えたから。困った時はそのまま読みなさい。これに懲りたらもう霊能なんたらなインチキ商売は卒業してまっとうな職につきなさい。お父さんもあんまり口には出さないけど、やっぱりあなたのことが心配なのよ。一度実家に帰ってきなさい。最近全然帰ってきてないでしょ。ちようどいいからみんな一度家族会議しましょう。母さんは味方だよ”

長々と綴った母からのメール内容が映っていた。

ベッド脇には、添付ファイルに入ってた謝罪文を印刷した紙が散乱してる。

「……はあ」

陰鬱なため息をついた後、緩慢な動作で上体を起こした。

食器棚からガラスコップを取り出し、ウォーターサーバーの水を注ぎ始めるも、ふとした拍子で、霊幻の手からコップが滑り落ちる。

反射的に手を伸ばす。

コップが手に触れる数センチ前で。

落下してたコップとこぼれた水が宙に浮くビジョンがパツと鮮やかに浮かんだ。あまりにもリアルな想像のせいで、錯覚してしまう。

あと少しで掴めるはずだった手の動きが止まったことにより、ガシャン。

水の入ったガラスのコップは床に落ち割れてしまった。

散らばったガラス片、床に広がる水たまり。

「……」

掃除するわけでもなく、ただ漫然とコップだったものを見続ける。

遠くで微かに聞こえる郵便配達のバイク音。

「……あーあ。夜が明けちまう」

いつの間にか空は白み、朝日が昇り始めていた。

俺は何をやっているのだろうか。

○月×△日午後○時

ついにその時はやってきた。

「来た！」

「靈幻氏が現れました」

一斉に焚かれるフラッシュの光で目がチカチカする。

「眩しい……やべー。言葉のやり取りなら勝機があると思って用意してたのに頭が真つ白になっちまった」

一対一の対談ならまだしも、こんな人数相手に上手く立ち回れるだろうか。

「落ち着けー。まずは記者達になるべく好印象を……」

笑顔を浮かべようとするも、うまくできない。

いやこの場合、笑顔を見せたらマズいのか？もう何も考えられねー、とりあえず挨拶しねーと。

「こ……このたびは集まっていたき……」

挨拶終わったらとりあえず謝罪をー謝罪？謝る？何で俺が？

というか。

「なんで集まってんだ？」

土壇場でめんどくさくなるのはよくあることだ。

そもそも何で俺は記者会見なんかやってるんだろ。

世界どころか町すら破壊してないのに。

アホくさ。

「なんだその態度は！」

「馬鹿にしてんのか！」

「あなたが記者会見やるって言ったんでしようが！」

まさか霊幻がそんな発言するとはおもわなかったのだろう、一瞬あつげにとられた記者たちだが、すぐ我に返り銘々霊幻を責め立てるも、責められてる当人は非常に冷静だった。

「あんたらが自宅まで付きまとうからだ。会見をやるって言わされたようなもんだ」

芸能人ならまだしも、一般人相手にやりすぎた行為であることは、記者たちも自覚はあつたらしい。不機嫌そうな表情を浮かべるも、そのことに対し反論することはなく黙り込んだ。

別の記者が挙手し、質問を投げかける。

「あなたの詐欺行為についていくつかお聞きしたいのですが」

そう話を続けようとする記者を、霊幻は途中で遮った。

「ちよつと待てよ。詐欺って俺の商売の話か？俺に霊能力がない事を証明できる人間が

「ここにいいのかよ？もしくは詐欺行為を証明できる被害者は？」

ざっと見た限り、周りにいるのは記者ばかりで、霊能力者や被害者らしき一般人の姿はどこにも見あたらない。

おおかた、この会見で俺を徹底的に追い込めば、証人や被害者がいなくてもボロを出すど踏んでたのだろう。爪が甘いな。

「被害を受けたと言っている人物が何人も……」

「はいはい。自称被害者ね」

「なぜそんな言い方するんですか！」

ひどくご立腹した様子で、記者が声を荒げる。

あなたには人の心がないのですか！と糾弾する声に、霊幻は淡々と答えた。

「真実が確定していないから。その間俺はまだ自称霊能力者でいられる。犯罪者じゃない。発言には気を付けていただきたい」

推定無罪の原則だ。記者ならそれくらい知ってるだろ？

「……」

霊幻の警告とも言えるその言葉を聞き、記者はそれ以上何も言うことなく引き下がった。

目の前にいる霊幻が一筋縄ではいかない人物だと悟ったのだろう。

先ほどまでの何が何でも靈幻を責め立てようとする雰囲気はなくなったものの、代わりにピリピリとした空気が漂う。

やつらの目が変わった。

徹底的に俺を追いつめていくつもりなのだろう。

ここからが本番だ。

「では質問です。あなたには靈能力がありますか？」

ここで「はい」と答えればあの炎上した番組のことをここぞとばかりに持ち出し俺を責めるだろう。かといって「いいえ」と答えれば俺は完全にインチキ靈能力者になってしまう。最適な答えは。

「ノーコメントでお願いします」

「なぜ答えないんですか？」

「ないって返事でしか解決しない質問だ。靈感がないあなた達ではあることを証明できない」

もし「ある」と答えても記者たちは絶対納得しない。堂々巡りになるだけだ。俺を追いつめたいなら確固たる証拠を用意しておくべきだったな。この場に靈能力者を呼ばなかった自分らを恨め。

「この場を屁理屈で乗り切るおつもりですか？先の生放送を見る限りアドリブが得意の

ようですが」

ニヤニヤと小馬鹿にしたように笑う記者に対し思わず「チツ」と舌打ちが出る。さつきからこいつら、俺のこと煽りまくりやがって。

俺の平常心奪って、失言とろうって魂胆見え見えなんだよ。

「あ？今舌打ちが聞こえましたか？」

「いいえ。ただのマイクテストです」

苛立てばあいつらの思うつぼだ。

考えろ、冷静になれ、相手の思考を読み。

大丈夫。いつもみたいに相手を論破すれば問題ないはず。この場を乗り切るんだ。

超能力がなくても、俺には「言葉」という武器がある。

質問タイムがはじまった。

「いつ頃から靈感商法を始めたんですか？」

「4年前くらいです」

飽き性な俺にしては長くやってるもんだ。

「それ以前は何を？」

「会社に勤めてました」

年収そこそここの会社に。

「霊能力と関係ある業種ですか？」

「いえ。まったく」

そもそも霊能力と関係ある業種って何だよ。

「過去の依頼内容はどのようなものが？」

「肩が重いと心霊写真とか」

大抵は悩み相談が多いけど。

「成果はありましたか？」

「解決はした」

リピーターもいるし。

「その中で印象に残っているものは？」

「都市伝説退治」

最上の件をのぞけば。

「依頼人とぶつかったことはありませんか？」

「ない」

俺の口八丁手八丁で丸めこんでる。

「高額な塩や数珠を売るといったことは？」

「ないですよ」

そんなことすれば犯罪になるだろ。

「インターネット上で学生時代の情報が流出していますが」

「どうでもいい」

過去の俺がどうであろうと俺は俺だ。

と、ずっとまともな質問が続いてたおかげか、少しだけ気が緩んでしまった。

「卒業文集では将来についてこう書いてあります。何かになりたい」

まさか個人情報さらし出す馬鹿な記者がいるとは。

“ 何かになりたい ”

それは。

今世でも前世でもずっと求め続けてたものだった。

「なぜ靈感商法に手を染めたのですか？」

底意地の悪い笑みを浮かべ、記者は畳みかけてくる。

「なぜって……」

それまで立て板の水のごとくすらすら答えてた霊幻が急に言葉が詰まる。

俺はなぜ霊能者として生きているんだ？儲かってないし面倒事も多い。

当時の俺は、超能力や霊が存在していることを知らなかったはずなのに、なんで俺はわ

ざわざその職業を選んだ？

飽きて会社辞めてとりあえず思い立って借りた事務所。雑誌の広告に着想を得て始めた雰囲気だけの商売……それでも“霊とか相談所”という看板で仕事してれば、いつか本物の超能力者や霊能力者が現れるのではないかと心のどこかで期待してた。でも一向に現れなくてーあの日、そうモブと始めて会ったあの日。本当はとづくにやめようとしてたんだ……。

だからモブが超能力を見せたとき、驚きと同時に嬉しかった、この世界でまた超能力者に出会えたことが。

超能力者のモブと一緒にいれば、見つかるかもしれない。

“霊幻新隆”がずっと求めてた何かにー俺はなりたかった。

結果がこのザマだ。俺はあれから何も変わっていない。

超能力がなくなつて、必死に努力してきたけど、それは使えなくなつた超能力の代用としてのスキル。

俺の本質を変えるための努力ではなかった。

前世のときからずっと、中身は“俺”のまま。

超能力のことだつて口だけのアドバイスだけで、超能力者じゃなくなつた俺がモブにまともな指導ができるはずもない。

除霊の仕事だけさせて俺はあいつをただ利用してきただけの形になってしまった。

あいつの青春、一番足を引つ張ってるのは俺だったんじゃないか？

あの時酷い事言っちゃったな。あいつは変わりたいのに困り込もうとしてしまった。わかってたはずだ。直接本人から話を聞かなくても。モブが以前よりも明るくなり、自分の意見も言えるようになったのは、

友達や部活の先輩のおかげだつて。

なあ……モブ。見てるか？

テレビの向こう側にいる人たちにじゃない、たった一人に向けてメッセージを送ろう。

もう俺はテレパシストじゃなくなった。思うだけでは何も伝わらない。

だから。

声に出して伝えるよ。

「成長したな。お前」

成長してなかったのはー俺だった。

プツン。

街全体が夕焼けで赤く染まっていた。

閑散とした街中を霊幻は一人歩き続ける。

いつもならマスコミ関係者が昼夜問わず、霊幻を追い回してるが、今、霊幻のそばに彼らはいない。

騒動の後始末に襲われ、こちらを気にしてる余裕がないのだろう。

何せ、生放送中に謎の地震が起こり、さらに映像機器の類がすべて宙に浮くという奇怪現象、とんでもない放送事故が起きてしまったのだから。

霊幻は歩く。

階段を上がり、歩道橋を渡る途中で霊幻はピタリと足を止めた。

「お前……何で来たの?」

今日呼んでないのに。

霊幻の斜め後方には。

「なんとなく」

喧嘩別れして以来、ずっと顔を合わせてなかった茂夫が立っていた。

茂夫と一緒にエクボもいる。

「……」

「……」

互いに目を合わせることなく、その場に佇む。

「早くこの場を離れようぜ。しばらく駆け回るぞあいつら」

エクボはそう二人に声をかけ、「見つかったら面倒だぞ」と急かす。

悪霊の言葉に従うように、茂夫が動きかけたとき。

「……お前……知ってる?」

霊幻は茂夫に尋ねる。

いつもの堂々とした大きな声と違う、掠れが混じった小さな声で。

「何をですか?」

「俺の正体。ネットとか雑誌とか見てねーの?」

茂夫に背を向けたまま、問いかける。

強く握りしめた靈幻の拳はひどく震えていた。

そんな靈幻の様子に気づいてるのか気づいてないのか、茂夫は小さく微笑みながら答える。

「そんなの知ってましたよ。最初から」

何でもないことのように。

「！」

靈幻にとって思いもよらない言葉だった。

そうか……最初から俺の正体、知ってたんだな。

「僕の……師匠の正体は……」

心臓が早鐘のように早く打ち、呼吸が浅くなる。

靈幻は強く瞼を閉じ、断罪を待つ。

1秒、2秒、3秒。

ためをつくってから、茂夫は伝えた。

己の師匠の正体を。

「いい奴だ」

モブにそう言われた瞬間。

“ありがとう!”

唐突に、満面の笑みを浮かべる名も知らぬ女の子の顔を思い出した。

“俺”が「正義のヒーロー」を目指すきっかけになった、とても小さい些細な善行。

ああなんだ。そうだったのか。

ずっとわだかまっていた気持ち解け、スーツと軽くなっていくのを感じる。

なりたかかったのは、世界最強でも、世界の支配者でも、正義のヒーローでも、有名人でもない。

あれだけ反則じみた超能力を持っておきながら、“俺”がなりたかったものはとてもシンプルなもの。

“ 靈幻新隆 ” はー” いい奴 ” になりたかったんだな。

目頭が熱くなり、鼻がツンと痛い。

「……腹減ったな。ラーメンでも食って帰るか」

「はい。……あ、そういうえば師匠誕生日おめでとうございました」

「……おう」

「来年はケーキ用意しますね」

「……そのときはクリームたっぷりのやつ頼むな」

「はい」

夕焼け色の街を二人肩を並べて歩き、その師弟をふよふよと緑の人魂が追う。

久しぶりにモブと食べたラーメンは。

やたら目に沁みて食いにくかった。

バラエティ番組の生放送中でインチキ除霊が暴かれたと思つたら、同じく生放送のテレビ会見で起きた謎のポルターガイスト現象。

結局“霊幻新隆”はただのインチキ詐欺師なのか、本物の霊能力者なのか。

その後、彼は表舞台に出ることはなくなつたため、その真偽が明らかになることはなかつたというー

世界は理不尽で満ちている。

記者会見から○日後。

客もいない閑散とした事務所で。

「後はここを修正……ちよつと削りすぎたか。ならここをこうして」

なにやらブツブツ独り言しながら、パソコンで作業する霊幻の姿がそこにあった。

あれだけ世間を騒がしたのなら、しばらくほとぼりが収まるまで霊とか相談所を一時休業すると思いきや、なんとこの男、店を閉めることなく通常営業している。

「あれだけ炎上したのに、普通に仕事やってるてめーの神経がわからねえ」と、ある悪霊は心底呆れた顔で言うのを無視し、問題の霊能者は心霊写真の加工作業に勤しむ。

その霊幻のいるデスクから少し離れた受付には。

「……」

霊とか相談所のバイト、影山茂夫、その人がそこに座っていた。

一時期は師匠である霊幻から離れた茂夫だが、マスコミ騒動の一件以降、また相談所へ通い始めている。

静かな事務所で客がくるまで各々時間を潰す。

それがいつもの霊とか相談所の日常風景だが、その日はいつもと少し違っていた。

「何そわそわしてんだよモブ」

霊幻は作業する手を止め、訝しげな顔で茂夫に聞く。

何故か弟子はしきりに体を揺らし、局地的ポルターガイスト「NOT超能力」起こしていた。トイレなら我慢せず行けて。我慢しすぎて膀胱炎になったらどうする。

「いや……空いた時間で少しでも運動しようと思つて」

「貧乏ゆすりじゃないのか……」

また何で急にそんなことを。

霊幻の疑問に答えるように、エクボが話す。

「あいつマラソン大会が近いんだよ」

「マラソン大会か。俺はよく仮病使つてたな」

毎年、マラソン大会くるたび、どう担任を言いくるめようと知恵を振り絞つたものだ。たまに言い訳が通用せず、仮病使ったペナルティとして余計に走らされてたなあ。懐かしい記憶である。

「10位以内に入って意中のツボミちゃんに告白するんだと」
「!!?」

なん……だと……?」

あのモブが好きなたに告白?それもマラソン10位以内とか目標立てて?

マジで?

それなら。

「……お前しばらくバイト来なくていいぞ」

「え?どうしてですか?」

突然の霊幻の言葉に、茂夫は驚き聞き返す。

これまで急な呼び出しを受けたことは数え切れないほどあったが、逆にこなくていいと言われたのはこれが初めてである。

「どうせ当分客も来ないし」

パソコン画面には、ぎっしり予定が詰まったスケジュール表が映ってたが、霊幻はそのことに触れることなく、茂夫に向かってニヤッと笑う。

「それよりジョギングとかして慣らした方がいいな。よし着替えろ」

「え?」

「本番と同じコースを足に覚えさせるんだ」

何事も下準備は大事だ。

モブのために一肌脱いでやろう！

面倒くさがりな俺に珍しく、やる気をだしたもののー

「ほれ！足上げろ靈幻！」

「うっせえ！」

想像以上に走り込みはきつかった。

軽く走っただけで、バテバテのへろへろである。

うっせだろ、もつと走れると思ってたのに、こんなにも俺の体なまっつてのか?!

「俺だつて……こんとこ運動不足だつたんだよ！」

いっとくが普段ならもつと走れるんだからな！

世間にバツシングされてた期間、迂闊に外出歩けなかったし！

マラソン大会仮病使つてよくサボつてたが、数少ない参加した大会では割と上位に食

い込んでたんだぞ！

「声だせ声！」

半死半生状態の俺に容赦なくエクボの怒号が飛ぶ。悪霊のくせに熱血スパルタ指導かよ！

モブの手前、なんとか歯を食いしばり走り続けるも、もう無理、限界だ。
「そこで一旦お茶するか……?」

公園のベンチ前で一旦立ち止まり、茂夫に声をかける靈幻。

お前も疲れただろ?とさも休憩は茂夫のためと言わんばかりの口調だが。

「まだ1kmぐらいですよ師匠」

ぜえはあと荒い呼吸を繰り返す靈幻と違って、茂夫は全然息など切れておらず、まだまだ余裕。

もうちよつと頑張りましょうよと、弟子に氣遣われる師匠だった。

……成長したな。お前。

茂夫とのランニングを終え、自宅に帰った靈幻、自分のふがいなさを痛感し、こつそり筋トレやランニング始めるも――

「……」

やりすぎて腰を痛め、三日坊主で終わった。

こうして茂夫は周りのサポートを受けつつ、マラソン大会に向けて、着々と準備を進めていった。

毎日休まずマラソンの距離分走り、友達や部活の先輩から色々なアドバイスを受けたりと、必死に自分にできる最大限のことをしやにむに努力し続ける。

全ては好きな子に気持ちを伝えるため！

こうして茂夫はマラソン大会当日まで○日間、死にもぐるいで頑張り続けた――

一方その頃、霊幻はというと。

「うーん、どうすっかなあ」

一人きりの事務所、パソコン画面と睨めっこしていた。

画面に映ってるのは、霊とか相談所のスケジュール表。

ほとんどの日にちが予約で埋まっている。

これら全てが霊幻一人で対処可能な、マッサージ、写真加工、人生相談、その他諸々便利屋的な感じの依頼なら問題ないのだが。

知名度が上がったせいとか、ここ最近舞い込む依頼は皮肉にも本物案件が混ざっている割合が高くなってる。

何の力も持たない一般人が“悪霊”や“呪い”を祓えるわけがなく、さらに受けた依頼が本物かどうか見極める術がない。

以前ならそれでも問題なかった。

電話でピピッと一本、最終兵器モブを呼び出せたら全て解決したのだから。

しかし今回はそうもいかない……と、なるとやっぱり、モブの代わりが必要だな。

いつもならエクボが代行してくれることが多いが、あいつにはモブのサポートに回してもらおう。悪霊だけであいつ、悪いやつじゃないし。

森羅もあいつはあいつで霊能力者として働いてるから、霊とか相談所の助っ人として呼び出すのは難しい。

他に頼める奴……モブと同じように除霊ができる超能力者……あいつらに頼んでみよう。

一人は快くきてくれそうだが、もう一人は難しいか？

いや、モブのためと説得すれば協力してくれるはず。

よし。

行動方針が決まった霊幻は携帯でどこかへ電話をかけはじめた。

「あ、俺だけど、今時間大丈夫か？実は――」

翌日。

助っ人に頼んだ彼らは約束してた時刻通り、霊とか相談所に姿を現した。

「おうお前から助かったぜ。今日はよろしくな」

霊幻が呼び出した彼らとは――

「兄さんのためですよ。練習に集中してもらいたいのです」

「影山君の代理だからね。しっかりと働きますよ」

影山律と花沢輝気だった。

霊幻に対しスンと真顔な律と爽やか笑顔を見せる花沢。

両極端な二人だな「俺への態度が」

何気にこの空間、顔面偏差値高い「俺含めて」

これは女性の集客率アツプも期待できるぞ。

「あ、そうだ霊幻さん、この間はありがとうございました。おかげで助かりました」

「役に立ったならよかった。また何か困ったことあったらいつでも頼っていいからな」

「はい！」

親しげな様子で会話する二人に、律は一人首を傾げる。

霊幻さんと花沢さん、なんでこんなに仲いいんだろう。

兄さんという接点はあるけど……。

律の不可解そうな顔をしているのに気付いた花沢が、照れくさそうにしながらも霊幻と親しくなった経緯を説明する。

「爪での一件以来、僕のこと何かと気にしてくれてね。生活のこととか超能力の指導とか色々助けて貰ってるんだ」

「霊幻さんが？」

日常生活ならまだしも、超能力のことも？

怪訝な表情を浮かべる律に、花沢は尊敬100%の顔で力説する。

「流石影山くんの師匠だけあって、貰ったアドバイス、どれも的確で勉強になるんだ！あとこの本も凄い参考にさせてもらってる」

そう言いつつ、持参してきたリユックから花沢が取り出したのは――

「……漫画？」

本の表紙と二人の会話から察するに、超能力者バトルものらしい。

「話も面白くてついつい読みふけっちゃってき、続き借りようと思って」

「テルに言われて自宅から持ってきたぜ。そうそう、このシリーズのスピノフの作品

あるけど、それも貸そうか？」

「いいんですか？ありがとうございます」

「……」

何か言いたげな様子で俺を見る、もとい睨んでる弟くん。

いや本当に参考なるんだって。漫画だと視覚的イメージしやすいから役立つんだよ。決して騙してるわけじゃないんだ。頼むから弟、そのゴミでも見るような目で俺を見るな。

いかん、これを機に弟と仲良くなる俺の作戦が……こうなったら仕事で名誉挽回、弟の中にある胡散臭い詐欺師“霊幻新隆”のイメージを払拭せねば！

コンコン、ガチャツ。

「あの……やってますか？予約してないんですけど……」

ナイスタイミング！

「ああ！今ならすぐ！どうぞお座りください。よし。じゃあさつそくお茶をお出しして……あれ？あいつは？」

俺の仕事ぶりを一番見せたい弟の姿が見あたらない。

まあ、事務所のどつかにはいるはずだ、俺のかっこいい姿、とくと見よ！

「あの……恋愛相談もやってるって聞いてきたんですけど……」

「お願いできますか？」

恋愛相談。

彼女いない歴〇年、恋愛未経験の霊幻にまともなアドバイスなど土台無理だろうと思いきや。

「成程……サッカー部だからスパイクをプレゼントしようと思ってるのか。でもあまり高価なものだと気持ちより先に金銭的な価値・印象が先行してしまうしそれならまず友人関係から……」

なんと霊幻、スラスラと彼女に対し、適切な恋愛アドバイスを送っていた。いやーあのとき恋愛テクニックス本、片っ端から読み漁って必死こいて勉強した甲斐あったな「※4話「上」参照」

たとえ自身に恋愛経験なくとも、今の俺は知識やテクニックスなら恋愛上級者だと自負できる。

「というわけでミキさんは何も焦っていきなり告白する必要はないと私は思います」「はい！ありがとうございます！すごく参考になりました」

晴れやかな笑顔で相談者の子が立ち上がりかけたとき、付き添いの子が口を開く。

「あの。アンケート書いてないんですけど私も相談いいですか？」

「ええもちろん。あなたも恋愛に関する？」

「はい。好きな相手は塾で会う他校の子なんですけど」

ほうほう。なるほどなるほど。

「で、塾の帰りとかにも一緒になったりするんですけど告白すべきでしょうか？」

これもティーン雑誌の恋愛相談コーナーに載ってた読者質問で見たことある。

確か雑誌の回答は。

「……そのケースならすぐに告白してもいいかもしれませんが。話を聞いた感触だと相手もあなたを気になっているのは間違いない。告白すれば十中八九うまくいくはずですよ」

必要なのはあなたの勇気だけ！頑張って！だったな、うん。

付き添いの子も俺のアドバイスに納得したらしく、なるほど。わかりました。ありがとうございますと頭をさげる。

こうして女子中学生2人の恋愛相談を見事に解決してみせた俺。二人が帰った後、満足げに一人頷く。

我ながら100点満点、パーフェクトのアドバイスだった。

どうだ弟！これで俺のこと少しは見直しただろ？

ドヤ顔で律の方へ振り向けば。

ギロリ。

まるで兄の敵とでも言わんばかりの鋭い目で睨まれた。

何故だ。

しかも。

「チッ」

今、あからさまに舌打ちしたよねこの子。

弟の不機嫌モードは閉店時間までずっと続き、態度が軟化することはなかった——
何故だ「※大事なことなので二回言いました」

など紆余曲折ありつつも、時は流れていき——

○月×日。塩中マラソン大会当日。

この日の天気は快晴、降水確率10%、絶好のマラソン日和だった。

塩中のマラソン大会は、近くにある運動公園を貸し切って開催しているため、保護者を始め色んな人たちが気軽に見学できるようになってる。

「ガンバレー！」

「もう少しだぞであともう一踏ん張り！」

等と生徒たちに温かい声援を送る近隣住民の方々もいれば、我が子の晴れ姿を熱心にビデオに収める保護者もいたり。

中には――

「おい。あと1kmちよつとだぞ。足動かせ」

生徒と一緒に走る「一時」保護者も。

茂夫と併走してる靈幻に、エクボは若干引き気味に言う。

「靈幻……本気のスタイルだな」

「見るな」

靈幻の格好はいつものスーツ姿でなく、タンクトップに短パン。

マラソン選手がごとのガチ装備である。

言っておくが、ただ応援のために走ってるだけじゃない。

これもちゃんと意味があつてのこと。

「ラストスパートのペースメーカーになってやろうと思ってたんだが」

マラソンとは選手同士の駆け引きが重要になるスポーツ。

どこまで力を温存するか、いつ勝負に出るか。

いわゆる“場の空気を読む力”が必要となってくる。

そのへん壊滅的なモブの手助けしてやろうと奮起したがいかんせん。

「トップ争いの連中が速すぎる」

それ以前の問題だった。

「だいぶ差をつけられた。全力疾走しても追いつけるかどうか……」

少しの距離、霊幻は茂夫の隣を走るも、途中でペースダウンしてそのまま茂夫を見送

る。

「俺はここまでだ。最後まで一緒に走ったら不審者として通報されかねん」

「自覚はあるんだな」

うっせーよ。

「カウントしてたんだが現在74位」

去年の順位が300人中290位だったのを考えれば、目を見張る成長ぶりだ。部活でコツコツ筋トレと走り込み頑張った成果がちゃんと出ている。と誉めてやりたいところだが今回はそうもいかない。

「モブにしちやあ大健闘だが入賞するにはあと64人抜かす必要がある」

ただでさえマラソンとは最初のスタートダッシュで勝負の殆どが決まってしまう。

今から10位以内に入るのは普通に考えて絶望的な状況だ。

「成程……タクシー拾うか？」

「まあそれもちよつと考えたけど……」

単純に順位を繰り上げたいただけなら、それもアリだろう。

悪霊の案に靈幻は一瞬同調するも、すぐに首を横に振る。

「馬鹿言え。見ろよあの顔。まだきつと諦めてないんだ」

靈幻が見つめる先には、ゴールへ向かって走り続ける茂夫がいた。

いつ倒れてもおかしくないほど、へろへろ状態なのに、決して足を止めることなく、必死に前へ前へと愚直に進み続けている。

俺がいなくても大丈夫だな、よし。

「さてと。俺も戻るか」

はー、疲れた疲れたと、体を大きく伸ばし、軽いストレッチする靈幻に、悪霊は訝しげな顔をする。

「最後まで見ていかないのかよ」

「これからちよつと野暮用あつてな。後よろしく」

「へいへい」

悪霊と会話を交わした後、霊幻は運動公園を後にした。

一旦事務所に帰り、本気スタイルからいつものスーツに着替える最中、ふと壁時計が目に入る。

時計の時刻は〇時×分。

「おっと、もう出ねえと」

慌ただしく着替えを済ませた後、どこかへ電話をかけていく。

「××ビル前にタクシー一台」

店の戸締まりを済ませ、外へ出ると既にタクシーが止まっていた。急いでタクシーに乗り込むと、運転手が尋ねる。

「どちらまで？」

「〇〇まで頼む」

運転手に告げた名前はとある会社の名。

×分後、目的の会社までたどり着いた。

「予約されていた霊幻様ですね。お待ちしておりますどうぞ奥へ」

すぐに奥の部屋へ通され、担当の人がやってくる。

ニコニコ感じのいい笑顔を浮かべ、霊幻に一礼した後、持ってきたパンフレットを机の上に広げる。

パンフレットには。

「それでお客様、どのようなリフォームをご希望でしょうか？」

色んな部屋のビフォーアフター写真が掲載されていた。

夜、腰痛で眠れず、布団の中でうんうん唸ってる俺は、天啓のようにひらめいたのだ。

そうだ、事務所をリフォームしよう、と。

なんとなく雰囲気とノリで始めた霊能商売、内装にこだわることなく、必要最低限の家具しか置いてない殺風景な事務所だった。

すぐに辞めると思ってたこの商売も、気付けば開設して4年以上。

知名度もあがり、客も増えたのだ。

いつまでも初期アバターみたいな内装ではいけない。

ここは心機一転、リフォームしなくては！

思い立ったら即行動がモットーな霊幻新隆、翌日にはネットでリフォームのことを調

べ、リフォーム会社へ相談予約していた。

そして今日がその相談日。

リフォーム内容は、既にネット等で大まかに決めてたこともあり、リフォーム計画は滞りなく進んでいく。

予定よりも早めにプランが決まり、またちようど担当も手が空いていることもあつて、そのまま事務所まで足を運び下見してくれる算段となつた。

「いやあ、まさかあの有名な霊幻先生の担当になるとは。そうだ、よかつたら今度、事故物件の除霊、頼んでもよろしいですか？」

「ええもちろん！今世紀最大の霊能力者“霊幻新隆”にかかれば、悪霊なんてイチコロ！新築のごとくピッカピカの綺麗にリフォームしてみせましょう！」

「おお、それはなんとも頼もしい！まあ今回は霊幻先生の事務所を我々がリフォームしますけどね！」

「ハツハツハツ!!」

タクシーの中で、二人の笑い声が木霊する。

連日の走り込みによる疲労で霊幻の体は重かつたが、それと反比例するように霊幻の心は浮き足立ち軽かつた。

タクシーの中ですっかり意気投合したりリフォーム業者と共にタクシーから降りた霊

幻は上機嫌で指さす。

「あそこがうちの事務所なんです……」

と、言い掛けたところで気付いた。

黒い煙、真つ赤な炎。

「……燃えてる」

指さした方向には、絶賛炎上中の霊とか相談所があった。

既にネットで炎上したというのに、今度は物理的に炎上とはこれいかに。

それまで夢と希望で膨れてた気持ちが一瞬で萎む。きつと今の俺、オジロスナギツネみたいな顔になつてるに違いない。

前世で俺、何か悪いことした？

あーうん。すげーしてたわ。因果応報か……。

ぼんぼん。

誰かが俺の肩を叩く。

振り返つた先にいるのは、リフォーム業者。

不幸のどん底にいる俺を慰めてくれると思いきや。

「修復工事も承つてますので、どうぞご利用ください！」

商魂たくましいなオイ。

結局、リフォームの件は白紙となり、後処理済んだら後日また会社に来てくださいとだけ言つて、業者は乗ってきたタクシー使つてさつさと帰つてしまった。

なんと薄情な。

一人残された俺は燃え続ける事務所を為すすべもなく見続ける。

ああ、徹夜して修正した写真のデータが……。

遠くで消防車のサイレンが聞こえる。

誰かが通報してくれたのだろう。

炎の勢いからしてこれは……消防車が到着しても事務所の全焼確かか。

この後、警察と消防から事情聴取受けると思つたら憂鬱だ。

ただでさえマラソンで疲れてるといふのに。

帰つて寝たい。

心身と共に疲弊してた霊幻だが、集まつてる野次馬たちの中から、気になる会話を聞き取つた。

「○○で爆発騒ぎだつて」

「マジ？ 確か×も×」

「俺は□□で火事が起きたって聞いたけど」

短時間の間に続けざま爆発、火事騒ぎなど通常ではあり得ない。

火事の原因、漏電か何かと思ってたがもしやー

霊幻がそう考えかけたそのときだった。

爆発音がどこかで響く。

「また爆発?」

「どうなってるんだよ」

新たに聞こえた爆発音にその場にいた人たちがざわめき出す。

非常事態に慣れてないのだろう、人々の顔は焦りや不安の色が滲み出している。

同時多発テロ?どこぞのアホな超能力者が世界征服し始めたとかじゃないよな?

しかしここに居続けるのも危険か。

テロ行為は人の集まる場所、街の中心部で派手にやることが多く、今俺がいるのは、間が悪いことに人の行き来が多い繁華街。

テロに巻き込まれる危険性がある。

スチャ。

「あ、○○タクシー××ビル前に1台よろしく」

面倒事に関わる気など毛頭ない。

荒事は警察に任せ、一般人の俺は安全な場所「自宅」へ避難させてもらおう。タクシーの手配を済ませ、電話を切った直後。

再度爆発音が轟く。

今度は近い、いや近すぎるー上か？

上空を見上げると、何か黒いかたまりが勢いよく吹っ飛んできて、数メートル離れたガードレールに激突した。

凄まじい破壊音が鼓膜を震わせ、衝撃の際に舞い上がった砂煙で周囲一帯は見えなくなる。

突如起こったアクシデントに、その場にいた人たちは口々に悲鳴をあげ 辺りは大混乱。

逃げようとする者もいれば、好奇心で近寄ろうとする者などが入り乱れ、押し合いへし合いの大騒ぎである。

「ギャハハハ!! おいおい、第七支部幹部って聞いてたけど、たいしたことねえじゃねーか！」

徐々に晴れゆく砂煙の中、姿を現したのは、腕に刺青が入ったガタイのいいスキンヘッドの男だった。

凹んだガードレールの前にある黒い塊に向かって嘲っている。

「……ハッ、そりやこっちの台詞だ。様子見してたがもういい。本気出してやる」
もぞりと黒い塊が動く。

よく見るとそれは人で、モヒカン頭の男だった。

むくりとその場から起きあがったかと思えば、ぐいと袖で垂れた鼻血をぬぐい取り、ギラギラと好戦的な眼差しでスキンヘッド男を睨む。

互いに拳を構え、じりじりと間合いを詰めていく。

この一撃で決まる……！

一触即発、張りつめた空気の中、先に動いたのは――

「対超能力者ドロップキック！」

スキンヘッド男でもモヒカン男でもない、第三者だった。

目の前の男以外、周りなど全く眼中になかったスキンヘッド男は、靈幻の放った不意打ちドロップキックをもろに受け、その場に倒れこむ。

突然の展開にファイティングポーズとつてたモヒカン男の目が点になる。

「人の多いところで超能力使ってドンパチするな！人様に迷惑だろーが！」

飛び蹴りを一発お見舞いし、すくつとその場から起きあがった靈幻はビシつと二人

「二人はダウンしてる」に向かって指さし一喝する。

「やるなら人のいないグラウンドキャニオン、サハラ砂漠あたりでやれ！あ、でも北極南極

はやめとけよ？氷河崩れて地球温暖化加速するから」

「お、おう？」

何言ってるんだこいつ。

モヒカン男の目は如実にそう語っていた。

「て、よく見たらお前、爪で会ったやつじやねーか。まだ組織から足洗ってねーの？働

く職場はちゃんと考えろとあれほど」

「はあ？んなもんとつくに辞めー」

「余所見してんじやねえよ!!」

二人の会話を遮るように、吼えるような男の大声が響く。

声のする方に振り向けば、仁王立ちしてるスキンヘッドの男。

げ、もう復活してる?!

「ハハハ！馬鹿め、隙だらけだぜ!!」

そう高笑いしながら、スキンヘッド男が拳を大きく振りかぶったときだった。

「隙があるのはそつちだ」

プシュツ

……バタン。

さらに現れた乱入者の手によってスキンヘッド男は、あつけなく昏倒した。白目を剥

いたまま、ぴくりとも動かない。

「全く。何やつてる誇山。あまり派手に動くなと言っただろ。これじゃまたすぐに追っ手がくるぞ」

メガネをかけたスーツの男で、彼の顔は苦々しげだった。深いため息つきながら、今し方スキンヘッド男に吹き付けた小さい香水ボトルを胸元のポケットにしまい込む男に、モヒカン男——誇山は不機嫌そうに顔をしかめる。

「わーつてるって、桜威。さっさとバックレ——」

「ちよつと待てよお前ら」

その場から立ち去ろうとする二人に、靈幻は呼び止める。

それまで超能力者たちにはしか目がいつてなかった桜威だが、靈幻が声をかけたことで、ようやく認識したらしい。

「靈幻?!なぜここに」

と驚いたように目を見開く。

「なぜも何も、ここ、俺の事務所近くだし。桜威だっけ?元氣そうで何より。社会復帰はうまくいつてるか?」

「……ふん。見ての通り、順調とは言えんな」

靈幻の軽口に対し、桜威は皮肉げに答える。

ブラック会社あるあるだな。所属してるときは捨て駒扱いなのに、いざ退職となったら難癖つけて会社に縛り付けようとする。

転職活動邪魔するのは、立派な法律違反だぞ。労基にチクってやる。

先ほどの爆発音は「爪」の仕業、と考えると。

「悪いが霊幻、貴様と長々と世間話する気はない。俺たちに関われば無関係の貴様もー」

「無関係じゃない、っていったら？」

くいと親指あげて、霊幻は背後で燃えてるビルを指さす。

「あれ、俺の事務所」

おそらくこいつらみたいに「爪」の連中が俺に襲撃かけたのだろう。爪の支部一つ壊滅させたのだ。奴等が俺を抹殺対象に見ても不思議ではない。おおかたターゲットの俺がいなかったことに腹を立てた襲撃者が嫌がらせで放火したところか。まったく、なんてやつらだ！

「で、お前ら。行く当てはあるのか？」

「……」

ふいと顔をそっぽ向け喋らない誇山と、眉間に皺を寄せ沈黙を貫く桜威。

予想通りか。

「ちよつと待つてろ」

そう言つて、靈幻はどこかに電話をかけはじめた。

かけた電話相手は――

「あ、もしもし？俺だけど」

覚醒ラボという超能力研究機関の創設者、密裏賢治。

テル経由で彼と知り合い、ちよくちよく連絡取り合つてたが、全く。

「爪」が動いた。至急子供たちを例の場所へ避難させてくれ」

保険かけておいて正解だった。

「それとそつちに何人か追加で保護よろしく。ああ、子供じゃない大人の超能力者数人。

うーんまあ知つてる顔だろうな。ちよい驚くかもしれないんが問題ない。合い言葉は

「塩」「ラーメン」で。え？醤油がいい？じゃあそれで」

そう言つて携帯を切つた後、靈幻は何でもないように二人に声をかける。

「話をつけた。行くぞ。ついてこい」

「は？」

誇山は怪訝そうな顔してるのにも構わず、靈幻は言葉を続けた。

「他の連中も襲撃受けてるんだろ？そいつらにも、今から俺がいう住所の所に来るよう

伝えてくれ。合い言葉は「醤油」「ラーメン」」

タイミングよく呼んでたタクシーが到着する。

「ちよ、おい待てよ！」

「靈幻、お前正気か？敵だった俺たちを匿うなど」

何やら二人が言ってるが、そんなの些細な問題でしかない。

「どっちみち俺たちは「爪」に狙われてんだ。それなら集まって行動したほうが安全だろう？お前らは安全な場所確保、俺たちは戦力増加。双方ともにメリットがある。それに」

二人に向けて靈幻は大胆不敵に笑う。

「もう「爪」に戻る気もないだろ？」

あつけらかんと言つてのけた靈幻に、二人はそれ以上何も言えなくなり黙り込む。

「ほら乗れよ」

そう言い、扉が開いてるタクシーの後部座席へ促す。

「……どうするよお桜威」

眉を下げて困つたように、コソコソ小声で隣にいる桜威に聞く。

「……ついていくしかあるまい。靈幻の言うとおり双方利点がある。どのみち俺たちだけで対処するのにも限界だ」

諦めたように息を吐く桜威だが、内心では靈幻の豪胆さに感嘆していた。

この男、ただ者ではない。

一度殺されかけたというのに、それを気にするどころか、仲間を引き入れる。もしやこいつ、ボスを超える器の大きさ——

「あ、タクシー代は割り勘だからな！」

……いや、そんなに器大きくないな。

桜威の霊幻評価は最高値から少し下降修正されたのだった。

密裏賢治が所有する隠れ家。

それは巧妙にカモフラージュされ、一般人ではまず見つけることができない。霊幻は事前に聞いてた情報を頼りに、隠された入り口を見つけ、幾重もの扉をくぐり抜ける。

最後の扉を開けた先で、隠れ家の持ち主が満面の笑みで霊幻を出迎えた。

「やあ霊幻くん久しぶり！テレビの会見みたよ！いやーあんな凄い力があつたなんて、皆が君のこと慕うわけだ！どうだい僕の覚醒ラボに——」

「あーその話はまた今度な」

長くなりそうな密裏のスカウトをサクツと避わしつつ、霊幻は用件を切り出す。

「来て早々悪いが、車借りていいか？」

「いいよ。車種の希望は？」

「スモークウインドウ付きなら何でもいい」

「ならこれかな？はい」

ずらりと壁にかかっている大量の車のキーから、密裏は一つ選び出し、ポンとあつさり霊幻の手の上に置く。

渡されたキーのエンブレムは、当然のように高級車メーカーのものだった。

「……」

数秒ほどキーを凝視してた霊幻だが、くるりと誇山と桜威の方へ振り返る。

「今から町に戻ってモブを拾ってきてくれ」

テルはこの場所を知ってるが、モブは知らないからな「※テルには爪に襲撃されたらここに避難するよう伝えてある」

弟もモブのそばにいるだろうから一緒に拾えるし。

「モブ？影山茂夫のことか」

「そ、俺の弟子。居場所ならモブの携帯についてのGPS機能でわかる。お前の携帯に情報送るからそれで追ってほしい」

「んん？その二人つてもしかして」

霊幻の背後にいる二人に気づいて、密裏のにこやかな顔は消え、厳しい顔になる。

「……」

加害者と被害者の予期せぬ再会だった。

誇山はポリポリと頬をかきながら、視線をどこかに泳がす。

その誇山より顕著な反応を見せたのは桜威だった。

彼は直接覚醒ラボを襲撃したこともあり、密裏と目を合わせようとしない。

気まずい雰囲気の中、突如霊幻が大声で話し出す。

「いやあ、実はここにくる前、爪に襲撃されてさあ」

「ええ、大丈夫だったかい!？」

どこか怪我とかは？と心配げに聞く密裏に、霊幻はひらひらと手を振る。

「このとおりピンピンしてる。まあ事務所は燃えちまったが、偶然居合わせたこいつらに助けってもらったんだ」

「は？」

「お、おい？何を言ってるー」

偶然出くわしたのは事実だが、助けたわけではない。

そう否定しようとする二人に構わず、霊幻はさらに大きな声で話を続ける。

「それで話を聞いたたら「爪」を抜けて奴らとは敵対してるんだと。他にも仲間が何人かいて、そいつらもちちらに合流予定だ。人数は多い方が安心だろ？」

「靈幻くんの恩人なら信用できるしいいね！わかった、子供たちには僕から説明しておくよ！」

二人を警戒してた密裏だが、靈幻の話を聞いて、あつさり態度を軟化させ、バタバタと足早に部屋の内へ駆け込む。

密裏が奥へ引つ込んだのを確認してから、靈幻は二人に向かってニヤリと悪い顔で笑う。

「俺の恩人ってことにすれば、お前らの立場も悪くならないだろ。つーことで頼んだぜ

“ 恩人 ”

ポンと桜威の肩に軽く叩いた後、小声でこそこそ囁く。

「……実は俺、ペーパーなんだ。こんなでかい高級車で市街地回るとかマジ無理」

頼む、俺を助けると思って！

パンと両手を合わせて、頭を下げて頼む靈幻に、二人は複雑な顔で見合わせるも、同時に諦めたようにため息をついた。

この流れで断れるわけがない。

「……人使いが荒いな」

と苦笑しつつも、桜威は霊幻から車のキーを受け取った。

「じゃ、モブのことよろしくな」

「お前は行かないのかよ」

一緒にくると思い込んでた誇山がそうたずねるも、霊幻は首を横に振る。

「おまえら、超能力はあっても、コミュ力は低そうだし仲介役必要だろ？」

覚醒ラボ側と第七支部側、双方に顔が利くのは俺だけだ。

ここに俺が残るのが正しい判断。

モブを探しに行きたいという私情は挟むべきではない。

「……おまえ」

誇山が何か言い掛けるも、桜威が制する。

「……必ず連れてくる」

霊幻にそれだけ告げて、桜威は「行くぞ」と誇山を連れていった。

二人を見送った後、霊幻は自身の携帯画面を確認する。

タクシーに乗ってる間、モブに着信を入れてみたが――

“着信・新着メールなし”

「……」

大丈夫。あいつは無事だ。

パチンと勢いよく携帯を閉じ、靈幻は奥へ向かった。

部屋の奥には既に先客がいた。

サイコキネシスト、星野武史。

パイロキネシスト、朝日豪。

テレパシストの双子、白鳥大地・白鳥海斗。

超直感を持つ女の子、黒崎麗。

この覚醒ラボに所属する超能力者の子供たちで、皆一様に不安げな表情を浮かべていたが。

「靈幻さん「大先生！」」

靈幻の姿を見るや否や、皆の表情は明るくなり、わっと駆け寄る。

安全なシエルターに避難してるとはいえ、やはり心細かったのだろう。

「密裏さんから話聞きました！爪に襲われたって」

怪我とか大丈夫ですかと不安げに聞く黒崎に、靈幻は笑って答える。

「なーに、この通りかすり傷一つ負ってないよ。俺を誰だと思ってるんだ」

爪のアジト一つ潰した男だぞ？とおどけたように言う霊幻に、彼のことを特に信奉してる星野と朝日が目を輝かせる。

「流石霊幻大先生！」

「だから言っただろ黒崎！霊幻大先生は凄い人なんだ、あんな奴らに負けるわけないってー！」

「テルから聞いてるぞ。お前たち、超能力の特訓頑張ってるんだってな？」

「はい！テルさんの指導で、あれから僕たち強くなりました！」

「爪との戦いだって役立ってみせます！」

息巻く星野たちに、霊幻は微笑ましげに笑う。

実際、彼らの成長は目を見張るものだった。

「おう、頼りにしてるぜ」

霊幻の言葉に、二人はパアツと顔を明るくさせ、「はい！」と元気よく返事する。

先ほどまで、この場に広がっていた緊張した雰囲気はすっかり消えていた。

和気藹々としてる中、

「霊幻くん。例の彼らが来た」

部屋の隅で監視モニターを確認してた密裏が、こっそり霊幻に耳打ちする。

きたか。

「じゃ、迎えに行つてくる」

二人の会話を聞いてたのか、白鳥兄弟の兄がおおずとおおずと声をかける。

「あの、僕たちもついていきましようか？。完全に心を読むのは無理だけど、嘘をついてるかどうかの判断なら」

協力関係といつても、相手はこの覚醒ラボを襲った「爪」だったものたち。裏切つて奇襲してくるのを危惧してゐるのだろう。

「心配してくれてありがとな」

裏切りの可能性は0とはいえないが、桜威たちの様子からして、その可能性は限りなく低い。

何より今必要なのは嘘を見抜く能力でなく――

「大丈夫。大人に任せとけ」

――信頼だ。

コツコツと革靴の音を響かせながら、廊下を進んでいく。

俺一人で彼らを迎えに行ったのは、向こうに余計な勘ぐりをさせない意味もあった。テレパシストなんて連れてきたら、こちらが信用してないと暗に言ってるようなものだし。

その点、無能力者である俺なら、超能力者特有のオーラも発さないし、相手を警戒させない「まあそれを逆手にとって奇襲・不意打ちするのが俺の常套手段だけど」

敵は中学生相手でも本気で殺しにかかる頭のイカれた連中だ。

こちら側の超能力者は全員中学生の子供ばかり。

だからこそ彼らが必要だった。彼らに対抗できる超能力者、子供たちを守る大人が。

相手に信用してもらいたいなら、まずはこちらから誠意を見せる。

ビジネス、営業における鉄則だ。

交渉術なら俺の得意とするところ。

「あー靈幻だ！みてみてつっちー、本物の靈幻！」

絶対にー彼らをこちら側へ引き込む。

ピタリと足を止め、愛想良く声をかける。

「よくきたな、おまえら。歓迎するぜ」

目の前には、かつて戦った連中が勢ぞろいしていた。

「お久しぶりです霊幻先生！」

出会い頭、野太い声で体育会系みたいなノリで、直角90度でピシッとお辞儀する大柄なスーツ男。

誰だ？

「こんなやついたっけ？」と一瞬考え込むも、すぐに男を思い出す。

「ああ、お前、最新CG映像の！」

「コスプレ衣装してなかったから気づかなかった。」

「邑機です。先生のおかげで俺、目が覚めて……ありがとうございます！」

「肩パットから卒業できてよかったな」

「はい！今は霊幻先生を見習って、この力を社会のために役立てる方法を探してるところです」

「いい心構えだ。わからないことあったら何でも言えよ」

就活の相談なら任せろ。内定荒らしの異名を持つ俺だ。どんな会社の面接も成功させてやる。

「はい！」

元氣よく返事を返す肩パットもとい邑機。

連中の中で直接対面し、会話をかわしたことがあるのはこの邑機だけ。

後は初顔合わせとなる。

その場にしゃがみ込み、先ほどから俺の名前を連呼しながら興奮してる赤毛の女の子に声をかけた。

「一応初めましてになるのかな？お嬢ちゃん」

「お嬢ちゃんじゃなくて無飼！テレビで靈幻いっぱい出てるのみたよ、すっごいね！」

「そうかそうかーテレビでかー。俺もすっかり有名人だなー。よし、特別にサインやろう」

「いらなーい」

速攻で断られた。数年後にプレミア出ても知らんぞ。

がつくし肩を落としながらも、立ち上がる俺に大柄な女性が声をかける。

「アツハツハ、振られたねえ色男。私は鎚田。アンタが“師匠”かい？」

俺のことを師匠を言う奴は一人しかいない。

「モブと知り合いか？」

「女を殴る男は世界一モテないって師匠が言ってた”そういつて私と頑なに戦いたがらなくてね”

当時の戦いを思い出したのか、どこか懐かしげな様子で目を細める。

モブのやつ、そんなことしてたのか。

よしよし、師匠の教え守ってえらいぞモブ。

紳士的対応こそ女性にモテる。

この調子で頑張れば、将来モブも女にモテモテな男に

「まあ、私のこと「おばさん」って言ったのは許せないけどね！」

……なるのは厳しそうだ。

モブ……おまえてやつは。

年上の女性には「おばさん」じゃなくて「お姉さん」と呼ぶよう教えておくべきだった。

「そんなわけで、ここにくる前からアンタのことは割と印象よかったが、実際ここにきて確信したよ。霊幻、アンタは信用できる男だつて。超能力者数人相手に物怖じしない度胸も気に入った！」

スツとこちらに手を差し出す。

「こちらこそ。短い間だがよろしくな」

迷いなく彼女の手をとり、握手する。

彼女の手は無骨でたこだらけで固かった。

「つつちーだけずるい！ボクもボクも！」

そうやって俺の手を取るなり、ブンブンと上下に元気よく振り回す。

「ほら、お前も。握手は挨拶の基本だ」

「は、はいー!」

緊張した面もちで差し出した邑機の手をぎゅつと握ってやる。

よし、良好な関係で協力体制に持ち込めた。

三人と握手した後、ずっと気になってたことを槌田に聞く。

「で、その床に転がってるオッサンは?」

槌田の足下にはもう一人いた。

「入り口でウジウジしていつまで経っても入ろうとしなかつたら、私が引きずってきたんだよ」

「べ、別に俺はそんなんじや……」

「寺蛇、アンタねえ……気まずい気持ちは皆同じだつーの! いい加減腹括りな!」

「だ、だつてよお」

俺、あいつらに色々、だの、ブツブツ独り言を漏らし続ける。

顔に似合わず繊細だなこいつ。

全く仕方ない。

その場に膝をついて、ポンポンと男一寺蛇の肩を叩く。

「そう、気に病むなって。俺たちもお前らのアジト潰したんだ、気まずいのはお互い様だ

ろ？過去のことは水に流して仲良くやろうじゃないか。頼りにしてるぜ」

ニカツと笑いかけながら、彼に向かって手を差し出す。

「……フ、フン。そう言われちゃ仕方ねーな。どうしてもというなら少しは協力してやる」

寺蛇はそうぶつきらぼうにいいながら、差し出した俺の手を掴み、立ち上がる。

「これで全員か？」

「誇山と桜威をのぞけばそうだね」

「追っ手は？」

俺の問いに、 邑機が答える。

「俺の分身と無飼の人形で周辺一キロ索敵したが、「爪」らしきものはいませんでした」

「そういえば桜威たちはー？中にいるの？」

ひよこつと奥をのぞき込む仕草を見せる無飼。

「誇山と桜威にはちよつとおつかいを頼んでな。あいつらが戻ってくるまで、ひとまず中で待つててくれ。万が一、爪がここを襲撃してきた際は、子供たちを最優先で守ってほしい」

「俺にガキのお守りを任すとかいい度胸じゃねえか」

アアン？と凄んでみせる寺蛇に

「幸い食料など必要物資は揃ってるから、数日籠城できる。何か不足なものがあるなら言ってくれ」

俺は意に介することなく、槌田たちに説明を続けた。

「無視すんな！」

「ここにくるまで襲撃受けて、けっこう疲れたからね。ちと休ませてもらうよ」

「ジューズ飲みたい！」

「霊幻先生つて霊能力者ですよ？実は俺、そっちの道も考えていて」

「休息できるうちにしてた方がいいしな。大きめのソファあるからそこで横になるといい。ジューズ？冷蔵庫に色々あるから好きに飲んでいいぞー。なんだ、この職業に興味あんの？それならー」

和やかに談笑しながら、奥へ進んでいく霊幻たちに、ぽつんと置いて行かれる寺蛇。

暫しその場に立ち尽くしてた彼だが。

「ま、待てよー！」

俺を置いていくな！と慌てて後を追いかけるのだった。

無事、第七支部の連中と協力関係となり、覚醒ラボの子供たちと対面させた。

最初はギクシヤクしてた双方だが、俺が間に入って取りなすことで、互いに会話するようになり、かなり打ち解けた雰囲気になる。

どれくらいの間が経っただろうか。

突如鳴り響いた俺の携帯に、一瞬にしてその場が静まりかえる。

着信相手は“桜威”。

「桜威からだ」

そう全員に伝えつつ、スピーカー機能ONにして、着信をとる。

「もしもし?」

報告かSOSか。

「お前の弟子を保護した。今から戻る」

よかった。

割とすぐに見つけたな。

時計の針を確認する。

「そつちからここまで○分後くらいか?」

「……いや、それより早く到着する」

と、どこか強ばったような桜威の声と共に、誇山と思われるわめき声が聞こえてる。

揺れる、だの、落ちる、だの。ギャーギャー騒がしい。

「……OK。把握した」

まあ、空飛んだほうが、地上走るよりずっと速いもんな。

そういやあの二人、サイコキネシストじゃなかった。

空中飛行は初体験だったか。

「頑張り」とだけ伝えて、携帯を切った。

切ったのと同時に、モブの無事を知った周りからワツと小さな歓声があがる。

「あのガキが仲間になるなら心強いな」

敵になると恐ろしい限りだが。と悪役のように含み笑う寺蛇に、心の中でピシッと突っ込む。

いやモブも弱いからね？過信すんな。

桜威の言っていたとおり、電話があつてもまもなくして、モブが隠れ家に到着した。

「モブ。無事か？」

昼間、モブと一緒に走ったのが随分昔のように感じる。

「師匠……」

俺の姿を視認したモブは、ふらりと俺の元へ歩みゆく。

「僕の家が……家族が……」

これほど追いつめられた顔してるモブの顔は久しぶりにみる。

モブの家で何かあったのか？

何より……弟の姿が見あたらない。

てつきりモブと一緒にだと思ってたのにどういうことだ？

詳しく事情を聞きたいところだが、精神状態が不安定なモブから聞き出すのは……。

「茂夫の代わりに俺様が状況を話す」

俺の躊躇いにいち早く察知したエクボが、その場にいる皆に、これまでの経緯を語った。

マラソン大会が終わった後、影山家で何が起こったのかを。

燃えさかる家の中で見つけた“ものたち”も。

エクボは家で見つけた3つの焼死体は本物でなく、偽物だと説明した。

……。

「成程……エクボ。ちょっといいか？」

ちよいちよいとエクボを手招きし部屋の隅まで移動して、モブに聞こえないよう小声でそつとたずねる。

「ダミー人形つてのは咄嗟の嘘なのか？」

「……！」

俺の確信めいた問いかけに、エクボはわかりやすく動揺する。

凶星か。

心を読む能力がなくても相手の一挙一動、注意深く観察すれば、隠し事してるかどうかの見分けはつく。「逆にいえばそれだ相手に集中してないとダメだが。あのタヌキジジイ、いつか泣かす」

「……まったく根拠がないわけじゃないが……」

悪霊はちらつとモブの方へ視線を向けつつも、ボソボソと歯切れ悪く言う。

エクボが言ったことは全くの嘘じゃない。

理論上ダミー人形つくることは可能だ。0から生命を作り出すのは無理にしても、見た目人間そっくりの物体なら、それこそ冷蔵庫の食材で簡単に作り出せる。

だが。

現時点でその超能力者が見つかっていない以上、影山家にあつた焼死体がダミー人形だと100%証明することはできない。

「お前も冷静じゃなかったんだな。嘘がバレたら一生モブに恨まれるぞ」
それか溶かされるな。

「……」

俺の指摘に、エクボは黙り込む。

エクボ自身、それは百も承知だろう。

恨まれてもいい覚悟で嘘をついた。モブを守るために。怒りと憎しみで我を忘れ暴走しかけたモブのために。

全く。テントウ虫のくせに無茶しやがって。

仕方ないな本当。

「モブ。お前の家族は……俺も無事だと思うぞ」

その嘘——俺も乗っかってやるよ。

「奴等はまだ向かう途中だったんだろ？事情を知る何者かが事前に救出したってことだ。火を付けて偽装工作し襲撃対象から逸らしたんだ」

自信たっぷりと言い切り、モブの不安を一蹴する。

「よかったな」

そう言つてモブに笑いかけたら

「あ……」

モブの表情が穏やかになり、ぐらりと体が傾く。

倒れる前に受け止めると、肩越しにスウスウと規則正しい寝息が聞こえる。

そうだよな。ここ連日走り込みしてたし、今日なんてマラソン大会だったんだ。

「安心するなり爆睡したぞ」

呆れたようにモブの顔をのぞき込む悪霊をシッシツと追い払う。

あんまモブに近づくな。悪夢みたらどうする。

昏々と眠り続けるモブを近くのソファに寝かせ、落ち着いた所でエクボが口を開く。

「今度はそつちの話聞く番だ。この集まりはどういう風の吹き回しだ？こいつら爪だろ？」

エクボの疑問ももつともだな。

俺も数時間前までこうなるとは想像もしてなかった。

「私達第七支部のメンバーは組織を抜けたのさ。中学生のグループに壊滅させられて自分達の愚かさに気付いたんだ」

「今は新しい人生をスタートしようとしているところです。霊幻先生に倣って超能力を社会のために使う道を探しています」

「しかし組織は裏切り者を許さねえ」

「いつか襲ってくるだろうとは思っていたが対応は存外早かったな」

「各個同時多発的に襲撃が成された……そして直感した。本部に対抗するにはこちらにもリーダーが必要だと」

「そしてこいつらが俺の元に集まったわけだ」

フンと胸張って威張る霊幻に「お前ちよつと黙ってる」エクボは冷ややかな目で突っ込むも、他の超能力者は違っていた。

「テレビやマスコミを翻弄する霊幻先生を見て天才だと思った」

そう邑機が霊幻を評価したのを皮切りに

「物事を大局的に見極め動かすことができる男だ」

など口々に霊幻を持ち上げる発言があがる。

「不安だこいつら……」

という顔してるなこの悪霊。

いや確かに戦力的には頼りないけどさあ。

「テルさんは大丈夫なんですかね……」

「ああ。さつきメールがあつて大丈夫だつて」

星野の心配に対しさらつと答える黒崎。

俺にもメール届いた。

なんか顔面ポコポコで腫れ上がってる「爪」の構成員と思われる男と笑顔でピースサ

インしてるテルの写メ付きで。

……テルって結構ヤンチャなんだな。

「よし、送信完了」

携帯を操作し、満足げに花沢は頷く。

「それにしても凄いな……影山くんは当たり前として、第七支部の人たちもいるのか

……流石靈幻さん。彼らを仲間に引き入れるなんて」

よっこいしよと男を担ぎ上げ、念動力を発動させ駆け出す。

仲間が待つてる隠れ家まで。

楽しげに鼻歌を歌いながら。

テルからメール届いて○分後。

「や。みんな大集合だね」

モブに続いてテルもやってきた。

「爪」の構成員というお土産付きで。

「馬鹿め！何をしようと俺から情報を得ることは不可能だ！」

と、最初は威勢良かった構成員だが。

ガポガポガポ……。――

「ボ……ボスは強力な超能力者をスカウトするために世界を回っていたんだがついに必要な戦士が揃ったと言ったんだ〜！」

尋問「という名の拷問」に屈し、構成員はあっさり自白した。

テルが水責めに凄い手慣れてる感があるが、気にしないでおこう。

しかし世界征服のため、世界中から超能力者集める……なんか聞いたことある話だなあ。

「お前らまさかこの話聞いてもまだ我々に刃向かう……」

「どうします？ 霊幻先生」

「フン。黙ってるわけにもいかないだろう」

なおも喚き散らす「爪」の構成員を威厳たつぷりで見下ろしながら男の処遇を決めた。

「警察に通報しよう」

集めた強い戦士とやらがどんな超能力者か、また程度の実力かどうかわからんが、
俺“ クラスの超能力者じゃない限り、この国の戦力、警察 自衛隊で十分制圧できる。
弱い俺たちは、安全なこのシエルターで、事態が収まるまで身を潜めるのが一番だ。

霊幻がそんなことを考えてるとは露知らず。

「本部の奴等はなかなか攻めてこないな…」

「こつちから乗り込むにしてもこの人数じゃな」

「僕と影山君がいれば千人力だよ」

「どつちにしろあの子が起きてからだね」

他の超能力者たちは爪と戦う気満々だった。

密裏が用意したご馳走に皆が舌鼓を打つてるとき。

“我々は超能力者結社・爪である。今超能力で電波を支配している。これは我々のほんの一部に過ぎない”

“我々の力はあらゆる兵器にも勝る。下手な抵抗はしない方がいいと忠告しておく”

“我々は超能力で世界を征服し全ての無能力者を支配下に置くつもりだ”

“その第一手としてまずはこの国を解体する！新しい世界が始まるのだ。楽しみにしているがいい”

という、「爪」のボスによる世界征服宣言がテレビ生中継されたのだが――

「ローストビーフばかり食うなよモヒカン！一人三枚までだからな！」

「靈幻先生に謝れ誇山！」

「うるせえなおい！」

テレビをつけてなかった靈幻と愉快な仲間たちは、その放送を見逃すのだった――

↓
「続く」

ある詐欺師の話【下】②

——これは夢だ。

彼と会話した前世の記憶。

“ 何故あのようなことを？電波ジャックして全世界に向けて世界征服宣言など”

“ 一回目は地味すぎたからその反省”

“ 一回目？”

“ ○日前に全人類の精神支配して洗脳した”

“ …… ”

“ 誰も気づいてないし、空しくなつてすぐ解除したけど。やっぱりこういうのはさ”

“ 派手にやった方が面白いだろ？”

……ああ。

世界は理不尽で満ちている。

煌びやかな装飾で飾られた大ホール。

贅の限りをつくした豪華な空間には、大勢の人間が埋め尽くしており、集まってる人全てがその場に跪き頭を垂れている。

老若男女、一見共通点がないように見えるが、この空間にいる者だけが気づくだろう。

ここに居る全員が“超能力者”であることを。

そして“超能力者”なら理解するだろう。

玉座から傲慢な態度で彼らを見下ろす“俺”がこの中で最も強く圧倒的な力を持つ存在であることに。

何これ。

なお床にひざまづいてる連中全員、肩パット付きのマントで黒ずくめの格好している。

誰だこんな痛々しい厨二スタイルさせたの。

“超能力最高！霊幻様万歳！！”

バカの一つ覚えのごとく、同じことを何度も何度も繰り返し叫び続けている。

マジで何だよこれ。

ラリつてる奴らをよくよく見てみると、ひれ伏してる連中の中に知ってる顔が混じってた。

覚醒ラボの子供たち、元第七支部メンバーなどなど。

どいつもこいつもどっぴり洗脳されたがごとく、明らかにイツちやつてる様子で俺や超能力を礼讃している。

“ 霊幻様！ 霊幻様！ 霊幻様！”

ドドドンドドドーンー

彼らの叫びに合わせてどこかで太鼓が鳴ってる。

そしていつの間にか部屋の壁は大スクリーンになっており、映像が流れていた。

“俺”が前世でしかした“黒歴史”の数々が。

生まれ持った超能力を自制することなく好き放題やりたい放題に使い、社会の役に立つどころか、何度も世界を破壊し人類を滅ぼしかけた最低最悪のー

ーろくでなしの人生記録。

目を閉じようにも、瞼が下りない。

耳を塞ごうにも、手が動かない。

全身蠟で固められたように、身じろぎ一つできず、ただただ玉座に座り続けていた。前世の所業を延々と見せつけられる。

ドドドンドドドーンー

太鼓の音は鳴り止まない。

“ 師匠 ”

ドドドンドドドドーン

こちらへ振り返ったモブの顔は。

“ 何やってんだアンタ ”

真つ黒に塗りつぶされていた。

「……」

バネが弾けるようにベッドから飛び起きる。

目に飛び込んだのは、ホテルのごとくシンプルにまとまった一人部屋。

俺のアパートじゃない？

ああ、そうだ、今は密裏の隠れ家にいるんだった。

急に起きたためなのか、夢の内容はすつ飛んでおりほとんど覚えてない。

最後にモブが出てきたような？

いつたいどんな夢だったのか気になるどころだが、今の俺は予知夢も見れなくなった無能力者。

特に意味のない夢だろうし、忘れたままでもいつか。

なぜか太鼓がずっと鳴り続けてただけは覚えてるけど……て、あれ？

ドドドンドドドーンー

まだ太鼓の音が鳴ってる。

いやこれは太鼓じゃない。

ドドドンドドドーンー

ドアのノック音だ。

叩く音は鳴り止むどころか一層激しくなっていく。

「何だようるっせえな……」

頭に寝癖つけたまま、不機嫌オーラ全開でドアを開く。

騒音の犯人は邑機だった。

こちらが文句を言うより先に、邑機は血相変えて叫ぶ。

「霊幻先生、大変です！至急ロビーにきてください！」

ロビーには既に人が集まっており、全員真剣な顔でテレビを見ていた。

なんだなんだ、「爪」が起こしたテロ騒ぎの件がニュースで流されてるのか？

全員の視線を辿るように霊幻はテレビへ目を向ける。

テレビには壮年男性が傲岸不遜な態度で朗々と演説する姿が映っていた。

“我々は超能力者結社・爪である。今超能力で電波を支配している。これは我々のほんの一部に過ぎない”

“我々の力はあらゆる兵器にも勝る。下手な抵抗はしない方がいいと忠告しておく”

“我々は超能力で世界を征服し全ての無能力者を支配下に置くつもりだ”

“その第一手としてまずはこの国を解体する！新しい世界が始まるのだ。楽しみにしているがいい”

男がそう高らかに宣言した直後、映像は途切れ終了する。

“ー以上の映像は昨晩の〇時に流れたものですが、政府の見解によればー”

テレビの中でアナウンサーがニュースを読み上げ、そのニュースに対し専門家やコメ

ンテーターが意見を言い合ってるスタジオの様子が流れていた。

「何コレ？」

状況がイマイチ掴めてない靈幻に、隣にいた花沢が険しい顔で説明する。

「爪」が電波ジャックして”世界征服宣言”をしました。どの報道番組もこのニュースばかりです」

「……マジで？」

超能力で世界侵略するとか、“俺”以外にやるやつなんていたのかよ。

本当にコレ、現実で起こってる？

念のため自分の頬を掴み、思い切り引っ張って確認する。

捻った頬は痛かった。

弱くてニューゲーム4・下②

前代未聞の電波ジャック&謎の超能力者集団による世界征服宣言。

テレビや新聞はもちろん、ネットでもこの話題でもちきりだった。

……これだけインパクトあるニュースなら、俺のことなど世間様も忘れるだろう。やったぜ。

と、ほくそ笑んでる場合じゃねえ。

口元を引き締め、ごほんとか咳払いをする。

「確認だが……あの男が『爪』のボスってのは間違いないな？」

霊幻の問いに対し、かつて「爪」に所属してた桜威が答える。

「ああ。俺たちは直接ボスと戦ったから見間違いないよもない」

桜威の言葉に、他の元爪メンバーたちが一様に頷く。

いい年した大人が仮面も覆面なしでそのままテレビで世界征服宣言するとかこいつの身内可哀想。

子供とかグレて反抗期まっしぐらだろ。

“俺”みたいに正体不明の方がかっこいいと思って、世界征服宣言は別のやつにやらせて顔出ししないのが正しい判断……正しいも何も世界征服してる時点でアウトだつ

た。いやそれより気になるワードが聞こえたんだが。

「ボスと戦った？」

一体どうということだよ。

「爪」のルールだ。超能力者はボスと戦う機会が与えられ、ボスに勝利すればトップ交代だ。ただし敗者はボスの手によって俺たちみたいに“傷”をつけられるがな」

なるほど。顔の傷はそういうことだったのか。

「今のボスは交代したやつ？」

「……いや。「爪」を創設して以来ずっと「ボス」は「ボス」のままだ」

今まで誰もボスに勝利した奴はいない。

苦々しげな表情でそう告げる桜威。

へえ。ボスは他の超能力者と比べて飛び抜けて強いのか。

わざわざ自分と戦わせるくらいだ。

よほど自分の力に自信があるのだろう。

……フツ。俺が無能力者で命拾いしたな爪のボス。

昔の俺だったら強いやつと戦える！と嬉々としてカチコミ行って「爪」の乗っ取りしてたぞ。まあ今なら超能力持ってもやらないけど。

世界征服、かっこ悪い。

再度テレビに映ってるボスの顔を見る。

高級スーツを違和感なく着こなした奴はまさにTHE・エリート。

こいつー

俺の直感「NOT超能力」が告げている。

こいつー

性格悪いな!! 「決めつけ」

“俺”と同じ匂いがプンプンするから間違いない。

何より俺のシックスセンス「NOT超能力」が囁いてる。

こいつと会ったが最後、物理的にも精神的にも俺は死ぬ、と。

ぜったい関わりたくねえ!!

「まさか「爪」がテレビ乗っ取って「世界征服宣言」するとは」

「次はいったい何するのか」

「くそ、次に奴らは何するのかわかれば、こっちも対策が練れるってーのに」

と、その場にいた全員が「爪」の次なる行動が読めず困り果てる中。

“世界征服宣言”したら、次にやるのはやっぱ“アレ”じゃね?」

霊幻だけは違っていた。

そう、ここにいる者たちのなかで唯一霊幻だけは彼らの行動を理解し先読みできる。

“霊幻新隆”は“世界征服”経験があるのだから。

「大勢の人間に自分たちの力を誇示できて、なおかつこの国の根幹を揺るがすシンプル

で効果的なやり方」

近くのテーブルに置いてあったテレビのリモコンをひよいと持ち上げ、めまぐるしく番組を変えていく。

組織での“世界征服”には直接関与してなかったが、千里眼と側近の部下からの定期報告で知っていた。

“世界征服宣言”した後、彼らが次にやった行動を。

料理番組、ドラマ、ワイドショー、天気予報。

どれも素通りしさらにチャンネルを変え続ける。

そして――

ある番組に変わった瞬間、リモコン動かしてた霊幻の手がピタつと手が止まる。

その番組とは“女性の社会進出を考える”をテーマにした講演会で、講師として総理大臣が呼ばれていた。壇上で“これからの日本経済には女性の力が云々”と演説しており、テレビ画面の右上端には「LIVE」の文字が浮かんでる。

至って普通の講演番組だった。

「初めまして総理。私夕べ世界征服を宣言した爪の一員です」

前触れもなく突然見知らぬ男が壇上に姿を現し。

「本日は総理を誘拐しに参りました」

その場にいる全員に向かって総理誘拐宣言するまでは。

「バンゴ」

予想は的中した。

テレビ放送中に乱入し総理や大統領を誘拐したり暗殺するのは「世界征服」の様式美みたいなもんだよな。

漫画にもそんなシーンあったし。

テレビでは謎の男がSPの攻撃をひよいひよいといとも簡単に避けていく光景が流れる。

男の目はずっと閉じられており、たまに目が開いても、その瞳は普通でないため、おそらく視力がないのだろう。

それにも関わらず、SPたちの攻撃を回避できている理由は至って簡単。

奴は周囲のものを感知し先読みする力を持つてる。

そしてわかったことがもう一つ。

この男……テレポーターだ。

伊達に前世で超能力極めてない。

男がああ場に突如出現したのがテレポーターによるものだと瞬時に看破した。

テレポーター。

車や飛行機といった交通機関を一度も利用しなかったくらい、前世では使いまくってお世話になった超能力である。

テレポート、マジ便利。

モブも瞬間移動使えてたら、特殊技能ってことで時給アップも検討したんだけどなあ。

あ、男と総理消えた。

完全他人事で誘拐劇を見てた霊幻とは対照的に。

「!!」

テレビで総理と男の姿が消えた直後、超能力者たち全員が何か気づいたように反応する。

「近いー!」

最初に動いたのは花沢だった。

念動力を発動させ、瞬時に外へ飛び出していく。

近い?

ああ、なるほど。あの男が飛んだ先、たまたま俺たちのいる隠れ家に近い地点だったのか。

て、いやこれマズいだろ?!

「誇山、桜威、テルを連れ戻せ！」

テルがああのと戦闘始める前に！

奴は感知&先読み能力と瞬間移動を駆使する近接戦闘タイプ。

「早く！テルが殺られる!!」

並の超能力者にとつて奴は初見殺し。対策なしで勝てる相手ではない。

「あ、ああ」

靈幻のただならぬ剣幕に圧され、誇山と桜威は花沢の後を追っていく。

「槌田、邑機、寺蛇も行ってくれ！こっちの人数が多ければ奴の方から撤退する！」

男の目的は「総理大臣の誘拐」。不必要な戦闘は避けるはずだ。

「残りはあいつらが帰ってくるまでここで待機！絶対外に出るな!!」

下手すれば総理大臣と一緒にそのまま誘拐される危険がある。

それだけは避けなければ。

○分後、桜威たちがボロボロ状態のテルを抱えて帰ってきた。

遅かったか。

「「テルさんー」」

気を失ってるテルの元へ子供たちが心配そうな顔で駆け寄っていく。

みた感じ、テルの体は五体満足揃って大きな外傷はなし。

本気で戦わなかったのか、もしくはあの能力者が感知、回避に特化してて、身体能力自体は普通の人間レベルだったのか。

どちらにせよ助かった。

「テルをそのソファに寝かせてくれ。密裏、救急箱」

「そう霊幻は密裏に指示しつつ、テキパキと花沢の容体を確認していく。

「骨と神経に異常なし、怪我は打撲……テルならすぐ完治するな」

「超能力者は人よりも自己治癒力が高い。

「体の怪我はそれくらいか。後は……熱出てるな……」

「持ってきたよ」

「サンキュー。えーつとあれは……あつたあつた」

「ぺたり。」

「これでよし。しばらく休ませたら復活する」

花沢の額に冷えピタ貼った霊幻は、そばで心配げに治療を見守ってた子供たちに説明する。

「よかった……」

黒崎が安堵の息を漏らし、他の子らもまた同じく胸をなで下ろす。

全く、友達を心配させるとは。

テルのやつ、後で説教だな。

きゆるー……。

と、その前に何か食おう。食える時に食わねば後々後悔する。

他の連中にも声かけようとするも、子供たちはテルのそばに付き添ってその場から動く気配がなく、一方大人組も険しい顔で何やら話し合つて、とても気軽に飯を誘えそうにない。

仕方ない、一人で食うか。

昨日は肉ばっか食つてたし、麺が食いたいな。

パスタ、うどん、ラーメン、よしラーメンにしよう。

すぐ食べられるカツプ麺で決まりだ。

後は任せたと密裏に花沢を預け、霊幻は歩き出す。

厨房へ向かつて。

たっぷりお湯を注いだカップ麺携えて戻ってきた時にはすでにテルは目を覚ましていた。

さすがピッチピチの中学生、回復が早いな。

ソファに腰掛けてる花沢の姿を遠目で確認した後、霊幻は皆の輪から外れた場所、バーカウンターの一席に座る。

選んだカップ麺はスタンダードの塩味。

目の前のカップ麺をじーっと見つめ今か今かと待つ霊幻の姿からは、緊張感というものがまるで感じられない。

本来なら実力ナンバー2である花沢の敗北は由々しき事態だというのに。

霊幻 やる気 0%。

一方霊幻を除くメンバーたちは。

「「……」」

完全お通夜状態だった。

“超能力組織・爪が調味文化タワーに踏み込み立てこもったとの情報が入ってきました

た”

話す者は誰もおらず、ただテレビの音声だけが部屋にむなしく響いてる。

緊迫した様子で実況するアナウンサーの声に被さるように、プロペラが回る旋回音が耳障りに響く。

へりから撮影された映像は、いつもの調味市の町並みで、平和そのものに見えるのが、よりいつそう不気味さを感じさせた。

“ 豚骨市で連れ去られた矢部総理大臣も同建物に監禁されている可能性があり……

”

つけっぱなしのテレビから流れる「爪」に関する報道ニュースはどれもこれもよくな
いものばかりである。

「……誘拐実行犯はテレポーター……空間を飛び越える能力者だった」

重苦しい空気の中、最初に喋ったのは花沢だった。

神妙な顔で花沢が対峙した男の情報を伝えると、密裏も男に関しての情報をさらに付
け加え説明する。

「しかも報道によると人の動きを先読みできるらしい！」

「なんだ。ずるいね。一人でそんな反則能力併せ持つ者がいるのか」

密裏の言葉に槌田は苦々しげな表情で吐き捨てるように言う。

動きを読まれる上に、テレポートで神出鬼没に現れる能力者。

そんなチートな敵といたたいどうやって戦えというのだ。

他の能力者たちも樋田と同じ気持ちのようで、全員が全員、難しい顔をしている。

そのテレポーターだけでも厄介だというのに、他にも現代機器を自在に操れる能力者、600の構成員、そして「爪」のボス。

対してこちらの超能力者は10人にも満たさず、頼みの綱である影山茂夫はまだ目を覚ましてない。

さらに追い打ちとばかりに悲報は続く。

“臨時ニュースです。先ほど午前〇時×分、特殊部隊が突入しましたが作戦は失敗したと政府から発表がありました。調味文化タワー周辺には絶対近づかないでください。テロリスト集団が闊歩しており大変危険です。繰り返します。先ほど午前〇”

険しい顔でニュースを読み上げるアナウンサーの声をBGMに、テレビの映像がヘリの上空映像から、地上映像へと切り替わる。

「そんな……」

目に飛び込んだ光景に黒崎は息をのむ。

それはあまりにも衝撃的な映像だった。

昨日までは特段異変なかったはずの町並みが、テロリスト集団の手によって変容して

いる。

ピサの斜塔のごとく傾いたビルの壁には無数のヒビが入っており、ほとんどの窓が割れていた。

壊れてるのはビルだけじゃない。

へし折れた電柱、ひっくり返った車、ひしゃげたガードレール。

道路のアスファルトが剥がれ、地下の水道管が破裂したのか、道のあちこちで冠水しており、瓦礫の山ができていた。

「なんなんだよこれ……」

まるで大地震が襲ったような町の惨状に星野が独り言のように呟く。

念動力者である彼だからこそ、テレビに映ってる光景を信じられずにいた。これら全て“念動力”によって破壊されてるなんて脳が理解を拒んでいる。

「俺達じゃどうにもできないよ……」

星野の隣で朝日が乾いた笑いをあげる。

いくら訓練で強くなったといっても、自分たちと彼らとでは強さの次元が違う。

超能力とはこんなにも凶暴なものなのか。

覚醒ラボの超能力者たちが初めて見る“超能力の恐ろしさ”に戦慄を覚える中、桜威は後ろを振り返り問いかける。

「どうする靈幻?」

先ほどから自分たちの会話に入らず静かな靈幻に。

奴ならこの状況を打破できる起死回生の策を持つてるやもしれない。

そんな期待を込めて、靈幻に話を振ってみる桜威だったが。

「ずずずー。」

期待の男は我関せずとばかりに、一人カップ麺を啜っていた。

うん、美味い。

三つ星シエフの豪華なオードブルもいいが、やっぱり食べ慣れてるものが一番だな。

「おいおい!カップ麺食ってる場合かよ。当事者意識が低いんじゃないか?」

危機意識力がまるで感じられない靈幻に、誇山は顔をしかめて声を荒げるも、怒鳴られた当人は全く意に介さなかった。

持ってた割り箸で誇山をビシッと指さしながら言い返す。

「何言ってるんだ。当事者じゃないだろ」

そもそも前提からして間違ってる。

俺は「爪」と戦うためにここへきたわけじゃないぞ。

「俺達はヒーローってわけでもないし危険だ。警察や自衛隊に任せた方が賢明だ」

「爪」の連中は本気で世界征服を考えてない。

これから自分たちが支配するはずの町を後先考えず破壊してる点からして奴らの計画性のなさが露呈してる。

連中の目的はただ一つ。

ただ自分たちの力をひけらかして、周りに自慢したいのだ。

新しい玩具を貰って得意げになってる子供のよう。

“超能力を持ってない人間など生きるに値しない！我々”選ばれた特別な人間“がこの世界を征服し支配すべきなのだ！”

“俺”の部下だった“あいつら”のように。

いまずぐ世界が減ぶとかいう崖っぷちの状況じゃあるまいし、放っておいても地球は大丈夫だろう。

「なんだい！怖気づいたの？」

憤慨する無飼に靈幻は冷静な口調で淡々と諭す。

「あんなの相手に俺達に何ができるってんだ？」

「それは……」

無飼自身、理解してるのだろう。

靈幻が言ってることは至極正しく、間違っていないことに。

「俺の回答はこれだ。解散！」

「モブがいればとも思ったが危なさすぎる」

となれば無能力者の俺がとれる行動はただ一つ。

「沈静化するまで身を潜めるしかない……」

安全第一だ。

仮に「爪」がこの国を支配できても奴らの野望はそこまで。

世界征服など他の国々が黙っていない。

普段いのみあい、仲の悪い国同士でも共通の敵ができれば一致団結する。

どれだけの力を持つていようが所詮人は人。

世界全てを敵に回せば終わる。

“俺”みたいに。

……。

パキッ。

霊幻の握つてた割り箸が折れるも、そのことに気づく者は誰もいなかった。

「霊幻さん……でもそれが正しい判断だ」

敗北したことがよほど堪えたのか、自信家の花沢には珍しく弱気で霊幻の意見に賛同し、覚醒ラボの超能力者たちもそれに追従するように暗い顔で何も言わない。

その一方で。

「あたしは行くよ。逃げ続けるぐらいならこっちから仕掛けてやるさ」

無謀と知りつつも、あえてそれを選択する者もいた。

鎚田が言ったのを皮切りに。

「僕も行く!」

「俺もだ!」

無飼や誇山も「爪」への戦いの意志を示す。

誇山の隣にいる桜威も無言で頷き、邑機も彼らと同じだった。

「この戦いは自分の存在価値を見出すチャンスなんです」

かつて「爪」に所属してた彼らのことだ。

連中と戦うことがこれまで自分たちがしてきたことの罪滅ぼしも考えてるかもしれない。

そんなの——死んでしまったら意味ねーのに。

「好きにしろ……」

連中の決意は固い。

俺がどうこう言ったところで意見を変えないだろう。

これから「爪」は支配地域を広げるため、いくつか部隊を編成して侵攻を始めるはず。

そうなった場合、この隠れ家が「爪」に見つかるのは時間の問題だ。

支部メンバーたちと別れた後は、すぐさまモブたち子供組を連れて安全な場所へ避難しよう。

冷静にこの後の行動を考える霊幻だが、その考えを中断させるように、己の携帯から着信が鳴る。

一体誰からだ？

依頼ではないだろうさすがに。

町が破壊されているのは悪霊のせいじゃありません、テロリストの仕業です。

「もしもし？あゝ火災保険のー」

電話の相手が保険会社からとわかった瞬間、霊幻は笑顔になる。

もしものときに備えて保険に入るのは大事だ、人生において。

己の生命保険はもちろん、事務所にも保険はかけていた。

今回の火事にバッチリ対応した火災保険に。

毎月高い保険料払った甲斐があった。

調味市で「爪」が暴れてる限り、霊とか相談所の営業再開は難しい。

事務所も燃やされてるし。

会社勤めなら何かと手厚いサポートがあるかもしれないが、“霊とか相談所”は俺が

事業主の完全なる自営業。働かなければ収入はゼロである。

そんな中頼りになるのは万一に備えた保険から下りてくる多額の保険金。これさえあれば暫く仕事しなくても生きていける。

この保険金が俺の生命線、大事な命綱なのに。

「……………え？出火原因が特定できないと保険金が支払われない？」

なん……………だ?!

下りた保険金で事務所再建する俺の計画が！

「灯油やガスの痕跡がない？当たり前でしょ！超能力ですよ超能力！こんなの初めてだ？知りませんよ！ちよつと待つてくださいよ……………何のために保険に……………！」

必死にこちらの窮状を訴えるも、保険会社も前例がないので無理ですの一点張りで電話は切れた。

ツーツーツー

無機質な音が受話器越しに聞こえるのみ。

……………。

プツッソ。

「お前から……………もう戦う意志は固いんだよな？」

嫌なときには逃げたっつていい。

だがしかし。

「気が変わった……要望通り俺が司令塔になってやる！」

人生、嫌でもやらねばならないときもある。

保険金がなければ、霊とか相談所”は再建できない。

なんとしても、なんとしても絶対——

「勝つぞ！」そして放火の実行犯を保険会社に突き出してやる！」

霊幻 やる気 100%

第三者から見ればこれは奇妙な集まりに見えるだろう。

大人、子供、男、女、超能力者、無能力者。

一見何の共通点もない彼女らが雁首を揃え、真剣な顔でテーブルの上に広げられた地図をのぞき込む。

霊幻は手に持つてるマジックの底で地図のとある部分をコンコンと叩く。

「まずはおさらいだ。敵の本拠地は調味文化タワー。ボスはタワーの頂上、展望台にいると推測される。そして」

黒マジックで地図に記載されてる調味文化タワーの文字に丸く印をつけ、その丸より

さらに大きな円をぐるりと描く。

「タワーの周辺は爪の構成員たちが常時巡回していて、容易に近づくことはできない」

円の縁に、小さな×を連続で書き込む。

「敵はこいつらだけじゃない。テレビの電波ジャックし報道ヘリや電子機器に干渉できる能力者に、テルが戦ったテレポーター。他に何人か厄介な能力者がいる可能性もある。さらにボスの詳しい能力は不明、と」

あらためて口に出して言うと、えげつない戦力差である。

「一点集中でこいつらの包囲網を突破してタワーまで一気に攻めるのは？」

槌田の提案に花沢が首を横に振る。

「突破に時間かかれば増援がきてしまう。そうなったら終わりだよ。僕たちの戦力じゃタワーに到着するまで全滅は確実だ」

仮にタワーまでどり着けたとしても、その頃には皆、力を使い果たしてボスと戦える状態ではないだろう。

「だったらやることは決まってるじゃねーか」

声を上げたのは寺蛇だった。

「やること？ なんだよそれ」

訝しげに聞く誇山にニタアと悪人全開の笑みで答える。

「奇襲だ」

クッククックと毒蛇の不気味な笑い声がある場に響き渡った。

「二手に分かれて、一方が陽動で引きつけてるうち、残った方が奴らの背後から不意打ちで奇襲し挟み撃ちで仕留める。どうだ？ いい作戦だろ？」

俺様を褒め称えろとふんぞり返る毒蛇に、桜威が感心しきりに声をあげる。

「……なるほど。フツ、流石だな毒蛇。卑怯で姑息な手を考えさせたらお前の右に出る者はいまい」

「おい」

「まあ基本方針はそれだな。戦力差がある以上奇襲は必須だ。ただし奇襲する対象はタワーを警護する連中”じゃなく”

トントんと調味文化タワーの文字を叩いた後、大きく×をつけた。

「タワーにいるボスだ。直接「爪」の本陣を叩く」

霊幻の宣言にどよめきが走る。

「正気か？ そもそもどうやってタワーへ侵入する気だ。タワーの周囲区域は国の特殊部隊も退ける鉄壁の守りだぞ」

「地上はな。攻めるのはー地下だ」

上空から全員一斉攻撃という手も考えたが、空中飛行できるのはテルしかいないから

なあ……。

「前に下水の除霊仕事請け負って、地下に潜り込んだことあるが、複雑に入り組んで担当のガイドと地図なしじゃ確実に迷う。おそらく連中も完全に掌握してない。地上より警備は薄いはずだ」

「でもそれは僕たちも同じじゃないかい？ここに用意してる地図は全部普通の周辺マップだし、誰も地下の構造なんて知らないよ？」

いくら手薄といつても、中で迷って時間かかってしまうなら意味がない。

密裏の指摘に靈幻は軽く頷き同意する。

「確かに俺たちも下水の経路は知らない。でも」

ニヤリと口の端をあげて靈幻は笑った。

「正しい道を選ぶことはできる」

靈幻の言葉を聞いて、朝日があつと何か気づいたように声をあげた。

「……！そうか、黒崎さんの超直感！」

皆の視線が一気に黒崎へ集まる。

「わ、私、ですか？」

突然注目され、困惑を隠せないでいる黒崎に靈幻は「黒崎」と名前を呼ぶ。

彼女の目をまっすぐ見据えて。

「地下に入ったたら地図も目印もない。黒崎、お前の超直感だけが頼りになる」

本来なら黒崎をはじめ、子供たちには安全な場所へ避難してもらい、「爪」との戦いは大人組だけで仕掛けたというのが霊幻の本音だった。

しかしこの作戦は黒崎の超直感がなければ成功しない。

苦渋の判断だった。

「嫌ならちゃんと拒否してくれ。相手は危険なテロリスト集団だ。怖い思いをするかもしれない。嫌なときは逃げたって」

「やります！」

霊幻の言葉を途中で遮り、黒崎はハッキリと自分の意志を伝えた。

強い覚悟のこもった声で。

毎日コツコツ自分の直感力の精度をあげる努力をしてきた。

町を破壊した超能力者たちと戦うなんて怖いけど、一人で戦うわけじゃない。

私の力で皆を助けてみせる！

意気込む彼女の肩をポンと誰かが叩く。

「黒崎さんならやれるよ。あれだけ一緒に訓練してきたんだ。君の力は依然と比べものにならないくらい成長してる」

肩を叩いたのは花沢だった。

僕が保証するよと、黒崎に満面の笑みを向ける。

間近で見えるイケメンの爽やか笑顔に、黒崎の顔はみるみる間に赤く染まっていく。

「は、はい。頑張ります……!」

「お、面白くねえ……」

何やらしい雰囲気の花沢と黒崎の二人をムスツとした表情で遠巻きで眺める朝日と星野。

わかるよ。おまえらの気持ち。

その怒りパワーは是非とも「爪」との戦いにぶつけてくれ。

「チームを二つに分けるぞ。地上で敵の陽動を担当するチーム、地下からタワーへ侵入しボスを討ち取るチームだな。陽動係は地上で派手に暴れて敵をひきつける。暴れるといっても敵と直接戦う必要はない。何か連中の目をひくものー」

視線を宙にやり、考える霊幻に邑機はおずおずと意見を出す。

「俺の分身みたく、車を何台か飛ばして攪乱するのはどうでしょう?」

「それいいな!よし採用。この中でサイコキネシス使えるのは……テルと星野か」

「すみません霊幻先生、車浮かせるのは俺、ちよつと無理です……」

「と、なると実行者は僕一人になるね。車を複数飛ばす、か」

花沢の眉間に皺が寄る。

車という大きな物体を浮かせるには、相当のエネルギーを消費する。

しかもただ浮かせるだけではない。中に人がいるよう上手くコントロールしなければならぬのだ。繊細なコントロール、集中力、スタミナが要求される。

「難しいか？」

無理そうなら他の案考えるぞ？と氣遣う靈幻に、花沢は静かに首を横に振る。

「……いえ、なんとかやってみます」

難しいミツシヨンだが靈幻さんが与えてくれた名誉挽回のチャンス、必ず期待に応えてみせる！

「……フン、仕方ねえ。おい小僧。一人じゃ大変だろう？俺も手伝ってやる」

ありがたく思えよと寺蛇が尊大な態度で花沢に声をかける。

寺蛇の申し出に花沢は

「……………ありがとう。助かるよ」

「おい！台詞と顔が全然マッチしてねーぞ！」

完全な棒読みで寺蛇に対し嫌そうな顔を隠そうともせず、そう言い切ったのだった。

一体何やつたらテルにここまで嫌われるんだよ。

地上班はテルと寺蛇の二人か。残りのメンバーは……。

「星野、朝日もテルのサポートに回ってくれ。それと白鳥弟も。白鳥兄は黒崎と同じ地

「下班だな」

白鳥兄弟はテレパシストの双子。

離れていても互いの居場所を把握することができる能力は、生きたGPS機能である。

敵の能力によつて携帯使えないこの状況下では非常に役立つ。

「残り全員も地下チームだ。地下班に戦力を集中させる。チーム分けは以上だ。何か意見あるやつはいるか？ ないならこれで決定だ」

霊幻の決めた人選に異を唱える者は誰もおらず、全員、真剣な表情で大きく頷き了承した。

自分の命を犠牲にしても、この戦い勝つてみせる。

そんな気持ちを含めて。

だがそんな彼らに対し、霊幻は予想外の言葉を口にした。

絶対に死ぬな、死ぬくらいなら負けて帰つてこいと。

司令塔にあるまじき発言に皆が困惑する中、霊幻は吐き捨てるように言う。

誰かの犠牲で得た勝利の価値なんて糞以下だ、と。

「俺たちは正義のヒーローじゃない。ちよつと超能力が使えるだけの一般市民だつてことを忘れるな。命を賭けて町を救う使命も「爪」を倒す義務もない。無様でかつこ悪く

てもいい、生き残ることを第一に考えろ」

金は大事だが人命最優先。保険金は別方向でむしり取る。

「死んだら負け、何もかも終わりだ。来世があると思うなよ!!」

……もしこの場に霊幻の事情を知る者がいたらこう突っ込むだろう。

記憶ありで転生したやつが何言ってるんだ。

作戦開始〇分前。

ロビーには全員集まっており、各々準備を済ませ用意万端。

そんな彼らの前に霊幻は作戦内容を口に出し、最後の確認を行う。

「いいか。車には誰も乗るな。作戦の第一段階は敵陣営の攪乱だ。それがデコイだと気づかれるまでなるべく時間を稼いで陽動しろ。その後の行動はテル、お前に一任する」

合流が望ましいが、無理に戦おうと思わなくていいからなと、花沢に釘をさしつつ、皆

の顔を見渡しながら言葉が続ける。

「地上はあくまで陽動だ。下水から本陣に接近しボスを倒す。統率を失えば一人一人は大した脅威にならんだろう」

「爪」の連中が好き勝手に暴れてるのは、「ボス」という大きな後ろ盾があるからこそ。虎の威を借りる狐でしかない。

「連中は超能力の万能感に酔いしれて、思考がおざなりになってる。それがあいつらの弱点だ」

バンツと勢いよくそばの壁を叩きながら、霊幻は叫んだ。

仲間たちの士気を鼓舞するように。

「どれだけ強力な超能力者も所詮人間だ！意識外からの攻撃に弱い、どんな手を使ってもいいから隙をつけ!!」

弱者には弱者なりの戦い方がある。

巨大な象相手に蟻は無力かもしれない。

だがしかし。

蟻に急所を噛まれたら象だって痛い。

簡単に踏み潰せると思うなよ。

「作戦開始!!」

超能力者たちがいなくなり、がらんどうになった隠れ家。

残ってるのは密裏と今も眠り続けてる茂夫、そして。

「つーか、お前はここにいていいのか?」

霊幻の3人だけだった。

眠ってる茂夫のそばで、霊幻は暇そうにあくびしている。

「俺が行ってどうするんだよ。それにモブが起きた時に状況説明できる人間が傍にいた方がいいだろ」

「とかいって、ここに残ったのは自分一人だけ安全に逃げるためじゃねーの?」

悪霊の煽りに霊幻はムツと顔をしかめる。

「バカ言うな。モブが起きたら一緒にタワーまで行くつもりだ」

この状況で一人だけ逃げるなんて、俺はそこまで人でなしじゃない。

「それにしてもこいつ本当にずっと寝たきりだな」

寝る子は育つと言うがちよつと寝過ぎじゃねーか？

「疲れてた程度じゃこんな寝ないぜ……」

……しかしこうも無防備に寝てる顔みてる、落書きの一つでもしたくなるな。

「おーい。早く起きないと顔に落書きするぞー」

そう言いながら霊幻はツンツンと茂夫の頬を突くも、茂夫が起きる気配が全くなかった。

30分経っても起きなかつたら落書きしよう。

「このまま待機し続けるつても暇だな。しりとりでもするかあ？」

「アホか。誰がするかそんなもん」

「はいエクボの負けー」

「この野郎……」

など悪霊と愉快な会話してる霊幻の元に、隣の部屋で隠れ家のセキュリティチェックしてたはずの密裏が、息をきらして飛び込んでくる。

「霊幻く、先生大変です！防犯システムが侵入者を感知しました！」

げ、マジかよ。

素早く茂夫の方へ視線を走らす。

霊幻の瞳に昏々と眠り続けてる茂夫の姿が映り込む。

「ど、どうします?！」

相手は超能力者、セキユリティ破ってここにたどり着くのも時間の問題だろう。

直接ボスを倒すのがこちらの作戦なのに、先にこつちの司令部が潰されそうというのは皮肉な話である。

とはいえこのまま黙ってやられるわけにはいかない。

「慌てるな。こんなこともあろうかと策は練つてある」

頭エスパーな連中の思考は手に取るようにわかる。

俺の機転と対応力があれば切り抜けられるはず!

「俺に任せとけ!!」

自信満々に言い放つ霊幻に密裏は「流石霊幻くん!」と期待100%の目を向けるも、
霊幻のことをよく知ってたエクボは違っていた。

「本当に大丈夫かい?」

靈感も超能力も使えない一般人が超能力者たち相手にどう戦うと言うのだ。

不安しかない。

密裏に隠れるよう指示しつつ、茂夫を背負って身を隠す霊幻を眺めつつ、悪霊はやれ

やれと言わんばかりにため息をついた。

……仕方ねえ。いざとなったら俺様が助けてやるか。

幾重にも張り巡らされた嚴重な防犯セキュリティも、超能力の前では無力だった。「爪」の部隊は念動力で破壊しながらズンズンと奥へ進んでいく。

一同がある部屋に入った途端、ひたりと立ち止まる。

その部屋は厨房だった。

曇り一つなくピカピカに磨かれたシンク台に、ずらりと並んだ調理器具。

「間違いない。あの中だ」

彼らの視線の先にあるのは業務用冷蔵庫。

冷蔵庫のサイズは大きかった。ー中に人が隠れられそうなほどに。

「ビビってプルプル震えてんのかあ？オラア！出て来いや！」

そう叫びながら男たちは、乱暴に冷蔵庫を蹴る。

ガンガンと容赦なく蹴り飛ばし、それに耐えかねたのか冷蔵庫の扉がゆっくりと開いていく

中から現れたのは。

「参った。降参するよ」

学ランの少年を背負ったスーツ姿の男だった。

「俺は超能力者じゃない。感知できるならわかるだろう?」

ピリついた空気に気にすることなくスーツ姿の男——靈幻は男たちに話し出す。

「後ろのこいつは超能力者だが夕べから目を覚まさないんだ……病院に連れて行かせてくれ」

頼むお願いだと訴える靈幻に、男たちは不信感を抱いた。

言葉通り、この男からは何も感じない。

しかし超能力者と一緒にいる時点でこの男がただの一般人でないことは明らかである。

「怪しいな。何か武器を持ってるんじゃないか?身体検査しろ」

「武器なんて持ってないですよ……」

「内ポケットにも何か持ってるな?」

男の内ポケットの膨らみに目敏く気づいた男たちの一人が指摘するも、指摘された当

人は動揺することなく非常に落ち着いた様子で

「ああ……香水です。接客業なもんで」

ポケットから取り出した香水スプレーを男たちの眼前に突き出し。

「いい香りですよ。ほら」

プシュツ。

彼らの顔に吹き付けた。

霧状に広がったそれを彼らが吸った瞬間、バタバタとその場に倒れ込む。

男たち全員倒れ伏し、立ってるのは霊幻のみ。

フツ、作戦通り。

どうだ見たか俺の本気！と得意げに鼻を鳴らす霊幻の前に、見えないモード「強」で姿を消してたエクボがすうと現れる。

「上手くやったな。なんだよソレ」

「強烈な眠気を誘う呪いがこもってるらしい。以前あのメガネから拝借したもんだ。こんな形で役に立つとはな……」

あのときの俺グッジョブ。

よしこれでここは安全にー

侵入者たちを眠らせ、気を緩めかけた霊幻の頭上に影ができる。

「雑魚かと思つたらやるじゃねえか。んじゃ次はこの柴田様が相手だ」

ぬつと現れたのは身長180近くある霊幻より一回りも二回りも大きい男だった。

やつべ、まだ仲間が残つてた。

しかもなんかすげー強そうなんだが?!

「でけえー……」

何食つたらそんなにデカくなるんだ。

こいつも超能力者なのか? 誰だよ超能力者はひよろいやつばかりで筋肉ムキムキなやついないとか言つたやつ。

「いぐぜ」

筋肉隆々の腕を天高くあげ、霊幻目掛けて振り下ろそうとしたその瞬間。

プシュツ。

……バタン。

霊幻の噴射した呪いによって柴田はあえなく昏倒した。

「強そうだったが馬鹿で助かつた……」

まさかそのまま突つ込むとは。頭エスパーで脳みそ筋肉だところなるのか。

……モブもこうならないよう、筋トレだけじゃなく勉強も頑張るようアドバイスしておこう。またも一人でなんとか切り抜けた霊幻に、エクボは呆れたように突つ込む。

「お前の悪運の強さは何なんだ。きつとロクな死に方しねーぞ」

既に一回ろくでもない死に方してるから二度目はない！「キリツ」……ないよな？

「居場所がバレちまつたよ。どうするんだ？」

「とりあえずタクシー拾って……」

皆と合流する。そう霊幻が言いかけたときだった。

呪いの直撃受けたはずの柴田がいつの間にか復活し、仁王立ちしている。

「なんだ!? 眠ったんじゃないのかよー」

即効性で一度眠らせたら1時間は起きないって聞いてたのに！

「てめえのおかげで覚醒しちまつたよバカヤロウー」

そう霊幻に怒鳴る柴田はどう見てもまともな状態ではなかった。

目は白目を？いており、顔中にピキピキと血管が浮かび上がっている。

霊幻は瞬時に悟った。

あ、コレ無理だわ。俺の弁舌通じないやつ。

下手に刺激したら速攻ミンチにされる。

「あゝわかつた……今度はマジで降参します……」

顔をひきつらせ、アハハと愛想笑いする霊幻。

目を見ながら、そーっと静かに後ろに下がりつつ距離を置いてー

熊と遭遇した時の対処法を思い出しながら、ゆっくりと後退しかけた時だった。

「バカ！逃げろ霊幻！」

エクボの叫びとほぼ同時に柴田が動く。

霊幻の顔面めがけて飛んでくる柴田の拳。

顔に直撃コースのパンチだったが、ろくに足下を見ずに後ずさった拍子に霊幻は躓きよろめいたため、その攻撃は空を切った。

ついさつきまで頭があった場所に柴田の腕が突っ込み、そのまま背後の壁を貫通する。

轟音と共にコンクリート壁にドでかい穴が開き、パラパラと破片と埃が落ちていく。

あ……つぶねえ！俺の頭、パーンと破裂するところだった！

つくづく悪運が強い男である。

しかし危機はまだ去っていない。

霊幻が体勢を崩したせいで、背中に背負ってた茂夫は放り出され、ごろごろ床に転がってしまう。

「モブ！」

慌てて茂夫を回収しようとする霊幻の前に柴田が立ちはだかる。

「サイコステロイド！普段から念心波を筋肉に送り調整しながら筋肉を……」

「わかったからそのまま寝てろ」

再度スプレーを噴射した。

これだから超能力者ってやつは、すぐ楽しようとしゃがる！

なんだよサイコステロイドって！超能力でズルしてんじやねーよ！

横着せず普通に筋トレしろ！モブを見習え！

霊幻の内なる声に反応したのかしてないのか。

「——！！」

確かに呪いは直撃したはずなのに、柴田は昏倒することなく、それどころか獣のような咆哮をあげ大ハッスルしていた。

「理性だけ飛んでんじやねえかよ」

まさかこいつもモブと同じ寝ぼけて超能力暴走させるタイプとは。

話が全く通じそうにない。こうなったら力でねじ伏せて大人しくさせるしか……できるとかこれ？

「余計パワーアップしてんじやねえかよ！」

さらに事態が悪化し、どうすんだこのバカ！と怒鳴るエクボに「うるせー、俺は悪くねえ！」と怒鳴り返す。

とにかくなんとかしないとモブが危ない！

「うんざりだが俺がおびき寄せる……って来ないのかよ！」

囿となるべくその場から駆け出した靈幻に目をくれることなく、柴田は床に転がって茂夫目掛けて突進していく。

超能力者に反応してるのか?!

「モブ！起きろ！」

靈幻の叫びとほぼ同時にバーサーク状態になった柴田が雄叫びをあげながら茂夫に向かつて拳を振り下ろす。

ペしやんこにされる！

そのときだった。

突如茂夫が覚醒し、まるでアクション俳優のごとくその場から華麗なバク転し、柴田の渾身の一撃をギリギリで回避した。

いや回避だけはない。

柴田の首目掛けて強烈な回し蹴りを食らわし、さらに体を回転させもう一発、同じ場所に拳をたたき込む。

間一髪のところ、エクボが茂夫に憑依したのである。

「焦ったがこいつは別に悪霊じゃねえ！人間だった！」

エクボの力で茂夫の体は身体強化されパワーアップしている。

やりすぎた！と一瞬慌てるエクボだったが。

地面に着地する前に、空中で柴田にがしりと足首を掴まれる。

掴まれた箇所からミシリと嫌な音を立てるのをエクボは確かに聞いた。

「前言撤回。こいつ人間じゃねえわ……」

ヒク……とエクボ「体は茂夫」の口の端がひくつく。

攻撃が全く効いてないとか悪霊より化け物だろ。

茂夫の足を掴んだままぶんぶんと勢いよく振り回し始める。

「やべえこれ……受け止める霊幻……」

こんな筋肉お化けに全力で壁に投げつけられたら……最悪の想像が二人の脳裏に浮かぶ。

「おう！こっちは男子バレー部仮入部経験者だ。軽く頼む！」

受け止めるべく、レシーブの構えをとる霊幻だったが。

「……!!」

想定してた落下点とは全然違う、霊幻の頭上遙か上へと飛ばされそのまま壁に激突した。

バレー部じゃなくてサッカー部のゴールキーパー体験すべきだった畜生！

「エクボ！モ……モブの体は!?」

顔を真っ青にし、うずくまるエクボ「茂夫」の元へ駆け寄る霊幻。

「骨折れてないか?!内臓は?!待ってる、今救急車呼ぶから、そのまま動かず」と普段沈着冷静な霊幻に珍しく、半パニックに陥っていた。

そんな霊幻に対し、エクボは「落ち着け」と宥めつつその場からすくつと立ち上がる。軽く体を動かし確認し、エクボは大きく息を吐いた。

「危ねえ……大丈夫そうだ」

「ほ、本当に?」

「ああ。靴がすっぽ抜けたおかげだ」

投げ飛ばされる寸前、偶然茂夫の靴が脱げたおかげで、激突の勢いが弱まったらしい。

「だが今ので確信した!この勝負100%勝てん!」

くるりと柴田に背を向けてーエクボは全力で走り出した。

向かった先は壁に開いた大きな穴。

「あんなデカブツに捕まってたまるかい!」

穴の縁に足をかけ、思い切り跳躍し外へ飛び出す。

柴田もまた獣のような唸り声をあげつつ、豪快に壁をぶち破ってエクボを追っていた。後

後のことはエクボに任せるしかない。

死んでもモブを守れよ。

エクボも柴田もいなくなり、その場に一時の平穩が訪れる。

辺りが静かになったことで、それまで戸棚の中に身を隠してた密裏が、ひよっこり顔を出す。

「お、終わったかい？」

「ひとまずの脅威はなくなつた。が、ここに留まるのも危険だな」

また連中が襲撃してくるかもしれない。

「床に伸びてるこいつらふん縛つて、警察に通報しといてくれ。その後ここを離れて安全な場所へ避難するんだ」

「靈幻先生は？」

「タワーへ向かう。そこでモブやテルたちと合流する」

司令塔は司令塔らしく、最後まで作戦に付き合うとするか。

蟻一匹見逃さない敵の嚴戒態勢の中、单身乗り込む靈幻新隆。

敵は超能力を操る危険なテロリスト集団、果たして彼は無事仲間たちと合流できるのか、

霊幻新隆の決死の潜入劇が今始まるー!!

と、いうのを想像していたんだが。

「……普通にたどり着いたな」

特にドラマティックな展開やスリリングな体験もなく、あっさり目的地付近に到着した。

奴らの警戒対象は国の部隊や自分たち以外の超能力者であって、俺みたいな一般人は完全ノーマークなのだろう。

たまに見つかっても、道に迷った一般人の振りして不意打ちの呪いプッシュ一発で問題なく解決した。「なお霊幻が敵と遭遇しなかったのは、霊幻が無能力者で敵の感知に引つかからなかったのと、花沢たちが敵をあらかじめ掃したおかげである」

タワーまであと少し、頑張れ俺。

歩きっぱなし「途中までタクシーで後はずっと歩き」で疲れ出した自分に叱咤しつつ、
霊幻は歩き続ける。

タワーに近づくとにつれ、町の崩壊がひどくなっていく。

「……」

破壊された町並みを横目に進む靈幻の顔は歪んでいた。

自分の町を破壊されたことによる怒り？ 悲しみ？

いやどちらの感情でもない。

内の激情を押さえ込むように、ギリリと齒を食いしばる。

ああ、そうだ。これと同じ光景、“俺”は散々つくつてきた。

「爪」の所業を目の当たりにするたび、否応なく突きつけられる。

「爪」は“俺”そのものだ。

ああ、本当に。

「……胸くそわりい」

心底不快だと言わんばかりに舌打ちしつつ、靈幻はタワー目指した。

爆音がどんどん大きく聞こえる。

……俺が到着するまでに、決着ついていますように。

霊幻の願いもむなしく、タワー前にたどり着いた時、戦いはまだ終わっていないかった。いや、正確に言うなら終わりかけていたのだろう。

花沢をはじめとする超能力者たちが軒並み地面に倒れ伏しており、その中で悠然と立っている人物が一人。

「フフフ……面白い！はたしてどちらの能力が上か勝負です！」

テレビに出てた例のテレポーターである。

彼は不敵な笑みを浮かべ、タワー入り口を陣取って通せんぼうしており。

「フフフー！正面から迎え討ってあげましょう！」

自信満々に両手を大きく広げ、高らかに宣言していた。

一体どんな状況なのか、きたばかりの俺にはさっぱりわからんがとりあえず。

「正当防衛ラッシュュ!!」

厳密に正当防衛と言えるかわからないが、とりあえず正当防衛と叫んでおけば問題ない!!

怒濤のラッシュを全身に受け、男はあえなく吹っ飛んだ。

全部クリーンヒットしたらしい。ラッキィー。

テレビじゃ能力者じゃないSPからの攻撃も避けてたが……さてはこいつ、反射速度あげるため、超能力者以外の気配全部遮断してたな？

目が見えないのにそんな博打やるなど愚の骨頂。

大方、自分の脅威になるものは超能力者だけと思いきんだのだろう。

浅はかな奴め！

しかし超能力者とは総じてタフな存在。

もう一回正当防衛ラツシユ追加したいところだが、これ以上は過剰防衛になるか？

いやでも見た感じ、テルたち怪我してるの明らかにこいつの仕業っぽいし……。

〔思考時間2秒〕

よし殴ろう！

特に恨みはないが、弱らせておいて損はない。

どっちが悪人なのかわからないようなこと考えながら男——島崎に近づこうとする

霊幻に、待ったの声がかかる。

「師匠。その人かなり強いですよ。危険だから離れてください」

このテンションの低い声は。

声のする方へ振り返り、霊幻は軽い調子で声をかけた。

「よおモブ。無事だったか」

モブのそばにはエクボも浮かんでいる。

エクボも生き残ってて「？」よかったよかった。

周りでダウンしてたテルたちも満身創痕ながらも続々とその場から起き上がり、こちらに集まってくる。

数的にも戦力的にもこちらが圧倒的有利なこの状況。

さて敵はどう出るか。

自爆は止めろよ。俺が死ぬ。

「……やっぱりやめだ。割に合わない。降参します」

男が選んだのは徹底抗戦でなく、降伏だった。

まあそれが正しい判断である。

このまま戦闘続行しても、超能力者であるモブたちはともかく、感知できない俺からフルボッコされる未来しか見えない。

「お？えらくあつさりしてるな」

引き際わきまえてるといふか何というか。

「世界征服の意気込みはどこ行つた？」

こいつらが世界征服ガチ勢でなく、エンジョイ勢つてのは端からわかつてたけど。

「本気なのはボスだけです。私は楽しければなんだっていいんです」

皆でワイワイ馬鹿騒ぎして楽しむ、それ自体は悪いことではないだろう。そう。

「楽しければいいだつて？それで多くの人に迷惑をかけたのか。ふざけるな」
誰かに迷惑をかけることさえしなければ。

普段おっとりしてゐるモブが珍しく語気を荒げ、テレポーターを睨み付ける。

モブにとって奴がやった行為は許しがたいものなのだろう。

超能力で人を傷つけることを何より恐れてゐるモブにとって。

「！」

茂夫の怒気に当てられ、島崎は一瞬体をびくつかせー

「逃げやがった！」

テレポーター使つてその場から姿を消した。

追跡できないのは残念だが、調子乗つて痛い目みたわけだし、これからは大人しく生きるだろう。

敵は撤退し、後に残るのは半死半生の超能力者たち。

ある者は地面を這いつくばりながら、またある者は仲間を貸してもらいながらも、続々と霊幻たちの元へ集結していく。

集まった仲間達の中には。

「兄さん……」

ずつと行方不明だった律もいた。

「律！大丈夫？」

弟の姿を見つけるや否や、茂夫が駆け寄って行く。

心配そうに声かける兄に律は小さく笑いかける。

「うん。父さん母さんも安全な場所にいるよ」

「そっか……師匠やエクボの言った通りだ」

僕の家族は無事だった！

茂夫の顔から笑みがこぼれ、兄の笑顔につられて弟も笑う。

感動的な兄弟の再会を少し離れたところで見守る悪霊と霊幻。

隣にいる霊幻にエクボはニヤニヤしながら軽口を叩く。

「俺様達も肝を冷やしたな！」

「黙ってろよ」

あのとキモブに言った話が実は何の確証もないただの嘘だったなんて、わざわざ暴露する必要なんてない。

これは悪霊と俺、二人だけの……墓場まで持つてく秘密だ。

「さて……残るはラスボスだけだな。星野君たちがみんなを救出してる頃だし合流して

突入しよう」

敵は強大な力を擁する超能力者。

先ほどの戦いで大分力を消耗してしまったけど、影山くんを主力にして、僕たちがサポートに回ればいけるはず。

そんな花沢の考えに對し。

「駄目だよ。みんな怪我だらけじゃないか……僕一人で行くから」

茂夫の決断は真逆のものだった。

「な……影山君！何を言ってるんだい！」

「爪」の首領と一騎打ちなんて危険すぎる！

花沢の制止する声に同調するように律も声をあげた。

「僕も行くよ！仲間が先に突入してるんだ」

普段の茂夫なら二人に押し切られる形で不本意でも同行を許していただろう。

だがしかし。

「駄目。厳しいこと言っていると足手纏いなんだ。ごめん」

このときの茂夫は違っていた。

目の前の二人に對し、キツパリと容赦ない言葉を返す。

花沢や律をはじめ、他の超能力者たちも黙り込み、顔を俯かせる。

“足手纏い”

その言葉が皆の心に深く突き刺さった。

でも言い返すことはできない。

実際その通りなのだから。

それ以上茂夫は何も言うことなく、皆に背中を向けて歩き出した。

「爪」のボスを倒すべく、タワーの中へ。

茂夫がタワーへ入る前に、霊幻は自分の隣に浮かんでた悪霊にこっそり耳打ちする。

「エクボ。頼むぞ」

「わかってるよ」

スーツと緑の人魂が音もなく飛行し、茂夫の後をついていく。

悪霊以外、彼の後を追う者はいなかった。

「……」

「影山くんを一人で行かせて良かったんだろうか……」

夕焼けに染まったタワーを見つめながら花沢がそんな独り言を漏らす。

彼がタワーに突入した時にはまだ日が高く空は青かったというに未だ彼は戻ってこない。

「あんなに自分の意志を表に出した兄さんは初めて見た」

「僕にはあれが辛そうに見えたよ。元々は先頭に立つタイプじゃないはずだ」

さらに茂夫が超能力を人に向けたくないことを花沢はよく知っていた。

そんな彼にボスと戦うという責務を背負わせるなんて。

彼の帰還を待つてる間に下水ではぐれた残りの仲間達や、別の超能力者たちとも合流を果たしていた。さらに幸運なことにレジスタンスを名乗るグループの中には治療能力が使える者がおり、現在負傷者たちは彼に治療してもらってる状況である。

「万全とはいかないけど、ある程度戦えるまでには回復したんだ。僕としてはあともう少しだけ待つても影山くんが戻ってこないようなら突入したいところだけど」

大きく息を吐いた後、花沢は意見を仰いだ。

「どう思いますか？ 霊幻さん」

静かにタワーを見つめ続ける霊幻に。

「……モブは傍から見れば頼りないが強い力をもっている」

「バカげた出力の念動力だろ？」

誇山の言葉に靈幻はソレは違うと首を横に振る。

「そんなものはあいつの持つてる特徴の一つに過ぎない」

モブは「俺」みたいに超能力使えるだけの空っぽなやつじゃないんだ。

「あいつが本当にすごいのは人に感情を伝えられるところだ。それはどんなに取り繕った言葉より響く」

“ いい奴だ ”

あの日、モブが俺に伝えてくれた言葉のように。

口先だけのろくでなしな俺とはまるつきり正反対。

不器用な性格で何事も要領悪くて鈍くさいけど、まっすぐ自分の感情を想いを相手にぶつけることができる。

それがモブの人間味、強さなのだ。

……まあだからこそ、自分の本心じゃない嘘をつくことが苦手で、周りの空気を読むのが壊滅的に下手くそという側面もあるけど。

長所と短所は表裏一体なり。

「モブが抱く感情が相手に伝わりさえすれば……あ？」

上空から何かがひらひらと降ってくるが見える。

一体何だと目を凝らすと、それは見覚えのある緑色。

「どうした!?大丈夫か!？」

ぺらっぺらになったエクボだった。

一体何がどうなればペーパーエクボになるんだよ？

いやそれよりも。

「モブは？」

上から落ちてきたのはエクボだけだった。

「わからねえが結構やばそうだ……敵は躊躇なく茂夫を殺す気だったぞ……」

「チツ……!」

俺の直感「NOT能力」は当たっていたか。

これだから力に絶対の自信がある超能力者は手に負えない。

他人の命を虫けらのように思ってるやがる。

しかしそうなると思が変わってくるな。

いくらモブが自分の感情を伝えることが強みだといっても、肝心の相手が馬耳東風で

は意味がない。

……やるしかない、な。

「さく、メガネ！ちよつといいか？」

「あ？いや待て何故言い直した」

「アイデンティティは大事だろ？それより」

桜威に向かって手を差し出す。

「アジトで使つてた豆鉄砲あつただろ？アレ貸してくれ」

「豆鉄砲……」

己の持つ最大威力の武器を豆鉄砲扱い……。

いや確かにアジトでは全くといっていいほどこの男には効かなかったが。

「……後でちゃんと返せよ」

貴様には壊されたり没収されたり散々だからなと渋々呪玩エアガンを霊幻に手渡す。

「サンキュー」

じゃあ、ちよつくら行つてくると、まるで近くのコンビニへ行くような気軽な調子でタワーの中へ入ろうとする霊幻の腕を掴む者がいた。

「霊幻さん！アンタ正気か?！」

この場にいる超能力者たちの中で唯一霊幻が無能力者だを知ってる律である。

超能力者でも危険だというのに、何の力もない普通の人が行けばどうなるか火を見るより明らか。自殺行為だ。

行かせまいと強く腕を握る律に、靈幻は小さく笑う。

「律」

無能力者である俺が行ったところで事態は何も変わらないかもしれない。

それでも行かなければ。

だって俺は。

「モブ一人に危険なこと全部任せるなんてー」師匠「失格だろ？」

「靈幻さん……」

何か言いたげに口を開くも、律はそれ以上何も言わず、掴んでた手を離した。

「心配ありがとな。まあ大丈夫さ」

悪運は強い方なんだ。とカラカラ笑いながら、自由になった手でくしゃりと律の髪を撫でた後、靈幻はタワーへ向かって歩き出した。

皆には散々自分の命を大事にするよう言った癖に、当の本人が特攻覚悟で突っ込むとかダブルスタンダードもいいところだろう。

でもさ。

二枚舌は詐欺師の特権だろ？

町の中央にそびえ立つ調味文化タワー。

塔の展望台から望む調味市の町並みは絶景で、地元民や観光客から愛される観光名所である。調味市に住む者なら一度はこのタワーに登ったことがあるだろう。

休日はもちろん、平日も人が多く賑やかな場所だが、テロリストに占拠されてる現在、辺りに人の姿はなく不気味なまでに静まりかえっていた。

一般人はおろか、「爪」のやつらもないとか、タワーのセキュリティどうなってるんだよ。

ガバガバってレベルじゃねーぞ。

侵入されることを想定してないのか、もしくは容易く振り返り討ちできると高をくくって

るか。

まあこつちとしては楽に潜入できて助かったからいいけど。

一階から途中までエレベーターで昇り、後は展望台まで続く階段を上がるのみ。

破壊音と共にタワー全体が振動するのを感じる。

下手したらこれ、倒壊もあり得るな。

モブを回収したら速やかに撤退しよう。

風穴の開いた壁を通りかけたときだった。

「う、上は危険だよ」

誰かが霊幻に声をかける。

声のする方へ振り返ると、壊れた壁の近くで男が体育座りしていた。

ボサボサ頭と無精ひげ、さらにどてらの格好をしており、手にはビニール傘を後生大

事そうに握っている。

「あ。テレビに出てた人だ」

霊幻の顔を見て、男が少し驚いたような顔をした。

総理大臣とも会ったし今日はなんか凄い日だと乾いた笑いをあげる男を霊幻は警戒

する。

こいつも「爪」の超能力者か？

まずいな。今はモブ救出が最優先、余計な戦闘はしたくない。速攻で眠らせるか？

懐に忍ばせてる香水スプレーに手を伸ばそうとする霊幻だが、男はその場から立ち上がることなく座り込んだままだった。

「テレビでアンタの能力を見た。かなり強い念動力だったけど、社長には勝てない。影山くんだって今頃」

モブのこと知ってるのか？

この男とモブの関係性が気になるところだが今は置いておいて。

「この先にモブがいるんだな？」

霊幻は階段先を見据える、

いつの間にか断続的に続いてた音が止んでいた。

本格的にやべーなこれ。急がなければ。

待つてろよモブ。

今いくからな！

展望台目指してまっしぐらに駆け出す。

「殺されるぞー！」

背後から聞こえる制止の叫びを無視するように。

あらゆる攻撃を弾き返すバリアも、全てをなぎ払う力も今の俺にはない。

まあでもあれだ。

人生、死ぬ気でやったらなんとかなるだろ。

「このガキの師匠を名乗るだけはある。くだらん師弟コンビだ」

なんとかならなかった。

階段を駆け上がり、展望台にたどり着いた霊幻がみたものは。

見知らぬ赤髪の少年が床にぐったりと倒れてる姿。
そして。

「この程度で私に説教していたのか？冗談だろう」

少年と同じく瀕死状態の茂夫の頭を掴みながらさせせら笑う「ボス」の姿だった。

モブ……!!

今ほど力のない自分を恨んだことはない。

でも同時に——今ほど力がないことに感謝した。

モブの前で人殺しせずに済んだことに。

……冷静になれ霊幻新隆。

俺の目的はこいつを倒すことでなく時間稼ぎ——モブが逃げられる時間をつくることだ。

短絡的に動けば勝機はない。

どうすればモブを助け出せるか。それだけを考えろ。

おもむろに桜威から借りたエアガンを構え、ボスに狙いをつける。

そして。

「動くな。弾は入ってるぜ」

ボスに銃口を突きつけ、霊幻は宣戦布告した。

突然の乱入者に驚いたのか、靈幻を見た瞬間。

「……………」

ボスは目を大きく見開くも、すぐに平静な態度に戻る。

「桜威の呪玩か。私には脅しにもならんぞ」

まあそうだろうな。こんな玩具で勝てるとは思ってない。

あくまでこいつは目眩まし、威嚇用だ。

俺の武器は超能力でも玩具でもない。

「し…………師匠…………」

「おう。モブ」

よかった。喋れる気力はあるみたいだな。

待ってろよ。すぐ逃がしてやるから。

ボス目掛けて何発も発砲するも、銃弾は全てボスの張ったバリアで全て弾き返される。

くそ、やっぱり効かないか。

「お前からは何の力も感じない。引っ込んでいた方が身のためぞ」

ボスは嘲笑しつつも、掴んでた茂夫を足下に投げ捨てる。

うっせえわ。

俺だって本当は引っ込んでいたかったつーの。

モブを逃がすためにもまずは邪魔なバリアを剥がさねーと。

「……おい。生きてるかモブ」

床に倒れ伏せてる弟子に、霊幻は声をかける。

「お前ひとりで行かせるなんてどうかしてたな。非日常的な状況で思考力が落ちてたみたいだ」

黒歴史と対面するのが嫌で、ボスのことはモブに任せて俺は逃げた。

……その結果がこれだ。

「師匠として情けない」

危うくお前を死なせるところだった。

「よく頑張った。帰りにたこ焼きおごってやる」

特別にスペシャルトッピング付きだぞ。

「後は師匠に任せろ」

「……師匠だど？」

ボスのこめかみがピクリと痙攣する。

私の力すら見えていないお前が？と嘲笑するボスに対し、大袈裟なまでに肩をすくめてため息をついてみせた。

「はあ……皮肉なもんだ。俺から言わせりや見えない力しか見えてない可哀想な奴だ
よ」

本当。昔の俺見てるようだ。

「どういう意味だ？」

「人が持つ優れた力つてのは超能力だけじゃないってことだよ」

「……」

今一瞬もの凄い顔したぞこいつ。

どんだけ超能力至上主義なんだ。視野が狭いぞ！

「お前を倒す方法もざっと思いつくだけで4通りあるわけしな」

「……ほう？試してみるといい」

「そんな気はもうない。代わりに俺から頼みが一つ」

ニイと口の片端をあげて軽薄に笑ってみせた。

「仲間に入れてくれないか？」

俺を警戒するまでもない小物に見えるように。

ボスに俺のことを自分が助かるなら何でもやる小悪党だと思わせる。

「私に何の得がある？」

「そこに倒れてる弟子も外の連中も俺ならうまく説得できる。十分メリットになるだ

ろ」

なんなら上手く言いくるめて全員「爪」に引き入れようか？

喋りながらも霊幻は歩き出す。

ボスの元へ向かって。

「私を倒す方法とやらも聞いておこう。本当にあるのならな」

「超能力以外のあんたの知らない力について教えよう」

歩みを止めず、バリアの間合いに入りこむ。

「まず一つ目。超能力者が最も警戒すべき人間の力。それは……」

バリアは発動しない。そのままボスの懐へ入り込み――

「腕力だよバカ！」

ボスの顔目掛けて思い切り殴りかかった。

予備動作もない完全不意をついた奇襲攻撃。

拳はボスの顔に直撃、完璧に決まった、と思ったのに。

目の前のボスは触れた瞬間、形が崩れぶわりと霧散する。

分身?! 一体いつの間?!

唾然とする霊幻の背後から嘲りの声が出た。

「このガキの師匠を名乗るだけはある。くだらん師弟コンビだ」

……ああ。

世界は理不尽で満ちている。

「私を……まで不快にさせるとは……」

ひたひたと霊幻に近づき、壁まで追い詰め逃げ場をなくす。

「いやいやあの……だから……話を……やめ……」

対話大事！暴力よくない！

必死に説得を試みるも、ボスはそれに反応することなく。

霊幻に向けて手を翳し、高出力のエネルギーを発射した。

あ、これ死んだわ。

凄まじい爆発に呑み込まれる中、怒濤のように記憶がフラッシュバックする。

それは今までずっと忘れていた――

“何故あのようなことを？電波ジャックして全世界に向けて世界征服宣言など”

――“俺”が二回目の世界征服を開始した頃の記憶だった。

“一回目は地味すぎたからその反省”

“一回目？”

“○日前に全人類の精神支配して洗脳した”

“……”

“誰も気づいてないし、空しくなつてすぐ解除したけど。やっぱりこういうのはさ”

愉しげに笑う“俺”は。

“ 派手にやった方が面白いだろ？”

目の前にいる男と同じ目をしていた。

……なあ。一体、何の冗談だよ。

激しい爆裂音と共に、周囲一帯が炎に包まれる。
高密度なエネルギー攻撃。

直撃すれば超能力者でも無事では済まないだろう。
ましてバリアも張れない普通の人間なら尚更。
何もかも焼きつくされ骨すら残らない。

この場にいた誰もが靈幻の死を確信したときだった。濛々と立ちこめる煙の中、人影が現れる。

「間に合った……今度は俺も勇気を出してみたよ。社長！」

階下にいた男―ボスの部下、芹沢だった。

全力でボスの放った攻撃を受け止めたのだろう。

額に脂汗滲ませながら、骨組みだけしか残っていないボロボロの傘を握りしめている。

その芹沢の背後には呆然とした表情で立ち尽くす靈幻がいた。

……マジかよ。

いや、今はそれについて考えるべきではない。

グツと握り拳をつくり、混乱する思考を強制的に終了させる。

助けてくれたこいつには悪いが、力の出力で言えばあいつの方が強力だ。

絶望的な状況は変わらない。

「芹沢……完全に裏切ったか」

自分の前に立ちただかる芹沢に、ボスは忌々しげに吐き捨てる。

「ならばお前も……」

冷たい眼差しで芹沢を睨み、後ろにいる靈幻ごと抹殺しようとしたときだった。

「……もういい。もう話さなくていい」

ボスの背後でゆらりと茂夫が立ち上がる。

それまでの弱々しかった姿とはまるで違う。

口調もまるで別人のように変わっており、顔つきも荒々しいものになっていた。変化はそれだけではない。力が見えない霊幻にも感じる事ができる。

「最後に一つ教えてやる。人の気持ちかわからない奴は……まあいい。たまには怪我して学べ！」

茂夫の周りに、膨大なエネルギーが渦巻いていることに。

モブ 怒り 100%

「モブがキレた……」

時給300円という安すぎるバイト代で散々こき使っても、その300円すら払わず現物支給と称して野菜の種渡ししても、女装させて女子校潜入任務など無茶ぶりやらせても、さらにモブの友達を悪く言っても、ついぞ俺にキレることなかった温厚で人畜無害代表みたいなあのモブが!!

……大人しい奴がキレると怖いというのは本当だったな。

「芹沢さん。師匠達を連れてここから避難して」

危ないからと静かな口調で告げる茂夫のただならぬ迫力に圧されつつ、芹沢が「わ、わかった」と頷いた瞬間だった。

「制裁が先だ！」

背後の茂夫を無視して、ボスが霊幻たちへ突っ込んでいく。

右手に圧縮したエネルギー弾を作りだし、躊躇いなく人に向かって力を発射した。

「!!」

すかさず茂夫は霊幻たちの前に高速移動し、皆を守るためにバリアを展開する。

それは非常に強固なバリアで荒れ狂う炎と衝撃波を完全に防ぐ。

しかし強大な力同士のぶつかり合いの余波は凄まじく、霊幻たちはその場に踏みとどまることができなかった。風圧に負けて勢いよく後ろへ吹っ飛ばされてしまう。

塔の外側へ。

風を切る感触、吹き付ける風の音、遙か下に見える地上風景。

ああ。懐かしい感覚だ。

前世ではよく空を飛んでいたなあ……て、現実逃避してる場合じゃない！

今世でもなんとか空飛べないか色々やったけど「台風の日に傘で飛ぼうとした」こんな形で空は飛びたくなかった！飛んでるといふより落下してるし！

必死に水泳ならぬ空泳で落下速度を遅らせようと奮闘するも意味は全くなかった。無慈悲にもどんどん地面に近づいていく。

まずいまずい、マジでヤバイって！潰れたトマトエンドは回避したい、誰でもいいからヘルプミー!!

切実なる霊幻の願いが地上に届いたのか。

地面に激突まであと少しのところ、突如霊幻の体に何かがしゅるりと巻き付き、さらにそれらは霊幻と同じように落ちてきた芹沢や少年を次々にキャッチしていった。

これはくねくねと同じー植物の蔓？

霊幻たちを受け止めた植物たちはゆっくりと地面に下ろした後、するすると拘束を解いた。

し、死ぬかと思っただぜ。

まさか人生二度目の触手プレイを経験するとは……俺って実はエロゲのキャラだった？

いや誰得だよ。

どうやら地上にいた超能力者たちの中に植物を操る能力者がいたらしい。

誰だか知らんが助かった！

しかし一難去ってまた一難。

「危ないー！」

誰かが上を指さしながらそう叫ぶ。

声につられて皆がタワーへ目を向けたときだった。

塔の上で何かキラリと光る。

まずい……！

「全員回避！バリアは駄目だ！」

アレはバリアを貫通するぞ！と霊幻は周囲の超能力者たちに大声で警告する。

「死ぬ気で避けるー！」

霊幻の叫びを合図にしたように、タワーの上から地上にいる霊幻たち目掛けて、次々

と攻撃が降り注ぐ。

特定の誰かを狙っての攻撃ではない。

地上にいる人たち全員ターゲットにした無差別攻撃だった。

素早く動ける者たちが近くの人を抱えてその場から退避する。

さつきまで人がいた場所の地面が抉れ瓦礫が瞬間蒸発していく。

逆らったやつはみんな死ぬ！って癩癩起こしたガキかよ?!

幸いにして、上からの攻撃はすぐに止むも、地上にいた全員の目がタワーに釘付けとなる。

耳障りな金属音と共に、調味タワーが根元から折れたのだ。いや、折れたという表現は間違いだろう。

タワーは折れたのではなく――

「おいおいマジかよ……」

誰かが唾然としたように呟く。

なんと周りの地面ごとタワーは浮かび上がったのだ！

上へ上へと上昇し、元のタワーより高い上空までたどり着くと、ようやく動きが止まる。

これ以上周りに被害が出ないように、モブが自分たちのいる場所を上空に移動させたのだらう

なるほど考えたな。上空なら俺たちに気にせず思い切り戦える。

まして片方は周囲に人がいようと全く気にせず戦闘する大馬鹿野郎だし。

遙か上空に浮かんでる調味タワーを見つめながら、霊幻は人知れず嘆息した。

……本当。――大馬鹿野郎、だ。

世界最強クラスの超能力者同士の戦いは常識を超えた規格外、まさに異次元の戦いだった。

双方共に内なる膨大な力を解放して、凄まじい激闘を繰り広げる。

上空で二人の姿が見えたかと思えば激しく衝突し何処に消えていく。

一体どちらが優勢なのか。

目を細めて確認しようとするも地上からでは上空で何が起こってるか目視できず、今二人がどうなってるのかサツパリわからなかった「さらに言うとうと靈幻は力のオーラが見えないので他の超能力者たちより状況把握ができていない」

くっそ全然見えないな。

千里眼があればモブたちの様子がわかるんだが……て、何だアレ？

崩壊した建物や瓦礫が上空で集まったと思ったら、子供が作る泥団子のごとく合体し奇妙な球体になったのだ。

「何がどうなってるんだ？」

上空に浮かぶ巨大な現代アートっぽい何かに目を凝らす靈幻に側で浮かんでたエクボが「俺様に聞くな」とにべもなく答える。「ペラペラ状態から復活した模様」

「ちよつとエクボ、見に行つてこいよ」

「できるかアホ」

チツ、使えねーな！……一番使えないのは俺だけだ。

今の俺は二人の戦いを見届けることしかできない。

果たしてどちらが勝利するのか。

……嫌な胸騒ぎがする。

ただの杞憂ならいいんだが。

「勝てなければ逃げろ……お前が背負ってる責任なんか何も無いんだぞ……モブ！」

二人の戦闘は激しくなる一方で、終わる気配は全くない。

世紀の超能力対決を固唾を吞んで見守っていた人たちは、ある異変に気づいた。

「なんだあれは？」

二人が戦闘してると思われる場所から突如、謎の巨大な光柱が出現し、薄暗くなった周囲を照らし出したのだ。

それはまるでオーロラのごとく揺らめき、神秘的な美しさがあったが、何故か異様な不気味さを感じさせる。

あの光は一体何なのか。

誰もが状況を理解できず困惑する中。

「嘘……だろ……?」

一人だけその光を信じられないと言わんばかりに凝視する者がいた。

霊幻にとつてそれは見慣れた懐かしい光。

超能力の源——エネルギーの光だった。

通常エネルギーは人の内部に蓄積されており、エスパーでもない限りそれを認識することはできない。

ノーマルである自分がその光を視認できるということは、そのエネルギーが体外から放出されてるということになる。

なんでエネルギーが外へ、それも大量に溢れてるんだ?……まさか。

最悪の想像が頭をよぎった瞬間、霊幻の背中がぞわりと粟立つ。

……いやいやいや。あいつは仮にも世界最強を自称する超能力者だぞ?

未熟なエスパーなんかじゃない。

そんな初歩的なミスなど犯すわけが——

「逃げて!!みんな!!逃げて!!」

茂夫が非常に焦った様子で叫びながら、皆のところに飛んできた。

「あの人は力を出しすぎて自滅しました!残ったのは膨大なエネルギー!多分爆発が起

きます！それも大爆発が……」

あああああ何やってんだあほんだらー!!

こんな町中で自爆とか最つ悪のバッドエンドじゃねーか！

「僕らじゃ防げないってことだね……急ごう！」

状況をすぐに理解した花沢が仲間達にそう声をかけて走り出し、他の超能力者たちも爆発に巻き込まれないよう避難を始める。

霊幻もまた彼らに続いて駆け出すも。

……ぶっちゃけこれ、走って逃げても間に合わない、だろうなあ……。

前世で超能力研究が趣味だった霊幻は、視認できるエネルギー量からおおよその爆発規模を予測できてしまい、既に人生諦めムードだった。

あのエネルギー量が爆発したら周辺一帯一帯調味市まるごと消滅するだろう。

爆心地に近い自分たちも巻き込まれてジ・エンド。

そうならないためにもあれの爆発を止めないといけないがどうやって？

あの質量の爆発は“俺”レベルのバリアでないと防げないだろう。

ここにいる超能力者たちはもちろん、モブのバリアでも無理だ。

……いや。止める方法が一つだけあったな。

爆発が起きる前に元凶を消し去る。

でもそんなことは普通の人間である俺にできないし、並の超能力者にも不可能だ。人を蒸発させるほどのエネルギーを擁する超能力者でないと。

走りながらも考えを巡らす霊幻に、エクボが血相変えて叫ぶ。

「あれ!?!おい! 茂夫はどこ行った!?!」

「あ!?!」

エクボの慌てた声に霊幻は思わずその場に足を止め、周囲を見渡す。

モブが仲間より先に安全地帯へ逃げているとは考えにくい。

となれば考えられるのはただ一つ。

モブはボスのところに行った? 一体何のために?

どくと大きく心臓が波打つ。

「まさかモブー」

脳裏でモブと“俺”の姿が重なった。

駄目だ駄目だ駄目だ! それだけは絶対!

モブにそんなことさせてたまるか!!

光に向かって駆け出そうとする霊幻の前にエクボが立ちはだかる。

「何やってんだ！気でも狂ったのか!？」

「どけよエクボ！モブがそっちにいるんだ、早く行かねえと！」

「超能力者でもないドノーマルのためーが行ったところで何になる!？無駄死にするだけだ!!」

違う、俺だって!!

ギリつと歯を食いしぼりながらも、行く手を阻む悪霊を力の限り睨む。

エネルギーさえあれば超能力は使えるんだ！

モブがエネルギーを貸してくれたあのときのように!!

……あ。

「……そうだ。どうして今まで気づかなかったんだろ……」

「ああ?」

この体はエネルギーがないだけで、器そのものは“俺”だ。

それは支部で俺がなんなく超能力使いこなせたから間違いないだろう。

そう、かつて無尽蔵なエネルギーを貯蔵してた“俺”の器ならあのエネルギー量、わけなく収納できるはず。

俺がああのエネルギー全て吸収すれば爆発は止められる！

解決法は見つけた！

急いであいつらの元に行こう！

やる気十分でエクボ越しに光柱をみたときだった。

「あ……」

遠方に見えるエネルギーの光を見て、霊幻は固まる。

超能力に詳しい霊幻だからこそ気づいてしまった。

あのエネルギーが臨界点を超えて爆発直前であることに。

今から全速力で走ったところで間に合わない。

「はは……何やってんだろうな……俺……」

乾いた笑いが口から漏れ出る。

何故もつと早く思いつかなかったのか。

理由はわかる。

“俺”は自分に備わった力を自分のためだけに使い、また自分を守るために全てを拒絶し弾き返すバリアを常に張って生きてきた。

だからこそ“霊幻新隆”である俺には。

力を譲渡したり、他人の力を受け入れるという発想が根底からなかった。

「おい一体どうした!?!しっかりしろ!くそ、こうなったら無理矢理憑依してー」

“ 靈幻新隆 ” はいつもそうだ。

“ 俺 ” が死ぬ直前、モブへの失言、テレビの記者会見。

どうでもいいことはすぐに気づく癖に、肝心な大事なことはいつだってー

「駄目だ、もう間に合わねえ!!」

気づいたときにはいつも手遅れ、だ。

エネルギーは一際強く瞬き、焼きつくような光を迸らせー

大爆発した。

超能力とは理解の範疇を超えた、常識で計れない不思議な力である。
ああ。そうだ。

超能力とは常識の範疇を超えた、不思議な力であり、人の感情そのもの。

人の感情は時に――思いもよらない奇跡を起こす。

膨大なエネルギーはついに爆発した。

爆発の衝撃は凄まじく、既に爆心地から離れてる場所にいた霊幻たちにも強烈な爆風が届く

爆風で体がよろけさせつつも、霊幻はモブがいるであろうエネルギーの場所へ必死に顔を向ける。

白い光柱は既になく代わりに——禍々しい色の巨大なキノコ雲が発生していた。

「モブ……!」

霊幻の顔が絶望の色に染まる。

あの爆発に巻き込まれたら、バリア張っても助からない。

爆風が収まり、巨大キノコ雲が消滅していく。

砂煙の霧が晴れ、徐々に爆心地一帯が露わになるも。

「あ……う……なんだありゃ?」

目の前に広がる光景は霊幻の予想斜め上をいつていた。

普通、爆発の後にできるのってクレーターだよな?

あまりにヘンテコな光景に思わず浮かんでた涙が引つ込む。

エネルギーが爆発したであろうその場所には。

謎の超・超・巨大な木がドーンとそびえ立っていた。

いやなんでだよ。

俺の涙返せ。

可笑しい現象はそれだけではなかった。

謎の巨木へ釘付けになってた花沢たちがふと己の異変に気づく。

「傷が治ってる……?」

ボロボロになった服はそのままだが、「爪」との戦闘で負った怪我が跡形もなく消えていた。いや怪我だけではない。

「桜威、顔の傷が消えてるぞ!」

「そういう誇山だつて」

「つつちーの傷もないよ!」

「どうなってるんだ?」

顔の傷跡まで綺麗サツパリ治っている。

どんな凄腕の治癒能力者でもこんな大人数の怪我、まして古傷まで消すなんて芸当は不可能である。

一体何が原因なのか。

考えられる理由はただ一つ。

「……あの爆風を受けたから?」

もしかしてモブのやつ……エネルギーを変質させたのか?

破壊から再生という特性に。

だとしたらーあぁ、なんてことだ！

「モブたちの救出に行くぞ！」

周りにはいる者たちに向かって霊幻は叫んだ。

「あの爆発したエネルギーは、破壊でなく、再生の性質だった！それならあの爆発に巻き込まれてもモブたちは生きているはずだ！」

「それは本当ですか霊幻さん！」

「あの中に親父が!？」

「ボス、無事なの？」

わらわらと霊幻の元に人が集まってくる。

もう敵味方関係ない。

「アレの正体がわからない以上、全員で行かず、人数絞ってー」

「中に入るなら懐中電灯とかシャベルとか」

「近くにコンビニあるからそこから調達してー」

全員、「救出」という共通の目的のため一致団結し動いていた。

……ああ。世界は不条理で矛盾だらけだけどー同時に面白く不思議なもので満ちている。

「ありました！反応が二つ！」

懐中電灯である箇所を照らしながら、誰かが叫ぶ。

一見すればただの分厚い緑の壁にしか見えない。

「とにかく掘るぞ。手分けして探すんだ」

照らされた植物の壁周辺を一齐に掘り進めていく。

各々シャベルなど掘り進める道具で、中にいるであろう二人の救出にとりかかる。

全員、汗だくでへとへと状態になり始めた頃。

「いた！大丈夫ですかボス！」

先に見つかったのは「爪」のボスだった。

爆発の衝撃によるものなのか、裸状態ではあったが彼は生きていた。

穴の中から「爪」の仲間総出でボスを引っ張り出す。

誰かが用意してたバスタオルで彼の体に被せる。

「社長！」

芹沢に肩を借りながら、ボスはよろめきつつも外に向かつて歩き出す。そのボスの後を心配そうな顔で他の者達がついていく。

途中彼らは未だ見つかからない茂夫を探す靈幻たち一行の横を通り過ぎる。

必死に掘り進める花沢と律の側で掘る手を休めて彼らを眺める靈幻。

刹那、「爪」のボスと靈幻、二人の視線が交差する。

二人の距離は縮まり、そして――

お互い言葉を交わすことなく、すれ違った。

「爆発の元になったボスが生存してるなら、影山くんも無事なはずだ！もう一息だ、頑張ろう弟くん！」

「はー！」

「おい靈幻、てめーもサボってないで手動かせ！」

エクボが痺れを切らしたように叫びながら、ペシンと靈幻の頭を叩く。

「うっせえな、わーってるよ！」

頭を叩いた悪霊に悪態つきながらも、靈幻は視線を戻し作業を再開する。

ほどなくして、茂夫も見つかった。

無事茂夫を救出し、木の空洞から脱出する霊幻一行。

既に辺りは暗く、上空には月が昇っていた。

今日は色々あったし、早めに寝るのが一番だろう。

「お前から俺ん家に来るか？ちよつと狭いけどなんとかなるだろ」

一時保護者としてモブたちを野宿させるわけにはいかん「影山家の家は全焼して現在ない状態だ。放火の主犯が言うには「三日で建て直すから待つて欲しい」とのことらしい」

親切心100%で宿の提供を試してみるも。

「露骨に嫌そうな顔すんなよ〜」

案の定、弟には全力で嫌がられた。

兄のモブは「師匠の家に行くの、初めてだ」とちよつと楽しそうだというのに。

弟の俺への反抗期、いつになったら終わるんだよ。

「テルもくるか？」

「あ、僕は大丈夫です」

「そうか？まあ気が変わったら来いよ」

友達とお泊まり会ってのも楽しいぞ！……俺は経験ないけど。

「じゃあ帰りにコンビニ寄って弁当買うか」

「その前に学校寄ってもいいですか？」

「こんな時間にか？」

「部室に代えのジャージがあるはずなので」

ああそうか。家が全焼してるなら着替えとか全部ないのか。

家燃やされると大変だなー……て。そういや事務所も全焼してた!!

結局放火の実行犯も捕まえてないし、保険金どうやって手に入れるか。

……。

……。

……。

まあ、なんとかなるだろ。

ひとまず今日はぐっすり寝て、明日になってから考えよう。

花沢と別れ、霊幻たちは塩中の校内にいた。

へえ。ここが噂の肉体改造部の部室……。

興味津々で部室を見渡す。

ダンベルなどのトレーニング器具が置かれており、消し忘れたホワイトボードには“一週間の筋トレメニュー”の文字が並んでいた。

肉体改造部という変な名前だが、部室は割と普通で安心したぞ「筋肉隆々のボディビルダーの写真がベタベタ貼ってるカオスな空間を想像してた」しかしサイズ大きいのもあるな。

今時の中学生ってそんなデカいやついるのかよ。

これとか俺も着れそうだ。

何気なくジャージを手取る霊幻の背後で。

「ジャージ泥棒ー!!」

野太い男の大声が炸裂した。

ビクン!!

「し、心臓止まったく……」

「ん？影山兄弟じゃないか。こんな時間に何してるんだ？」

「あ、武蔵部長」

声の主は茂夫がよく知ってる人物だった。

「実はー」

かくかくしかじか。

「成る程な。いや、ダンベル取りに来たところだったがびっくりしたぞ」

「すみません……こちらも驚きました」

俺も。心臓発作で死ぬかと思った。

「事情はわかった。ちよつと待っててくれ」

そう言いながら武蔵部長はスチャと携帯を取り出し。

「あゝもしもし。実は……」

どこかに電話をかけ始めた。

そして数十分後。

「いや……どうして肉改部の皆さんが集まってるんでしょうか？」

何故か部室に肉体改造部のメンバーが勢揃いしていた。

「僕達はこれから……」

律がそう言いかけたとき。

「これより肉体改造部3泊4日の強化トレーニング地獄合宿を開催するー!!」

武蔵部長が高らかにそう宣言した。

なぜに!?

「いや僕達は」

律の言葉を遮って部長の目がカツと見開く。

「困った時こそ助け合いだろう！」

「いや……ほんとに疲れてまして……」

「ああ広い布団で寝た方がいいだろう！」

「別に狭くていいので……」

「俺のばーちゃん家ならみんなを泊められるぞ!!」

「食べ物も自給自足でいいトレーニングになる! 90分もジョギングすればすぐ着く!

さあ行こう!」

部長の雄叫びにつられて他の部員達も吼える。

だ、駄目だこの人たちに何言っても通じない!

「れ……霊幻さん助けて……」

口から先に生まれた詐欺師なら上手く説得してくれるはず……!」

そんな期待を持ちながら霊幻に助け船求める律だが。

「よかったな。頑張れよお前ら。俺はタクシーで帰るわ」

頼みの霊幻はにこやかにスススとその場からフェードアウトしていった。

霊幻 逃げ足 100%

霊幻ーー!!

律のただでさえ低かった靈幻への好感度はさらに降下した。
夜道に気をつける！

「準備運動は済ませたか影山兄弟！さあ出発だ!!」

体格のいい部員達が狭い部室の中ひしめき合ってるせいで、逃走は不可能。
逃げ場はもうどこにもない。

「うわ〜!!」

夜の学校に律の悲鳴が響き渡った。

一方、自宅に戻った花沢はというと。

「忘れてた……」

「爪」に襲撃されメチャクチャになった部屋の前で呆然と立ち尽くしていた。
ガラスの破片が散乱し足の踏み場がなく、とても寝れる状態ではない。

「靈幻さん家泊めてもらえばよかった……」

……今からでもいいかな？

ポチポチ。プルルル……。……。

「……すみません霊幻さん。やっぱり僕も泊めてください。爪に襲撃されてたの忘れてて……え？影山くんたち部活合宿に？」

思いもよらない霊幻の言葉に花沢の目が丸くなる。

今日一日「爪」との戦いで疲弊してるはずなのに、自分を鍛えるのに余念がないなんて、やっぱり影山くんは凄い！

霊幻から泊まりの了承を得た花沢は電話を切った後、笑みを浮かべる。

「僕も頑張らないとね」

彼に負けないようもつと努力しなきゃ！

「僕も参加してみたいけど他校生じゃ無理か」

あ、そういえば霊幻さん、最近トレーニング器具買ったって話してたから、それを借りて筋トレしよう！

霊幻さん、超能力の特訓いつも手伝ってくれるし、ランニングとか筋トレも同じように付き合ってくれるよね！

影山くんの師匠だから凄いキツイのも平気だろうし！

花沢の頭の中で肉体改造部の筋トレメニューに引けをとらないハードスケジュールが組み上がっていく。

霊幻さんと一緒にトレーニング！楽しみだなあ。

ルンルン気分で泊まりに必要なものをリュックに詰めていく花沢。

首尾良く肉体改造部3泊4日の強化トレーニング地獄合宿の回避に成功した靈幻だが、どのみち筋肉痛になる運命は変わらなかった。

かくして。

長い長い激動の一日は終わり、夜は更けていくー。

その後「爪」のボス“鈴木統一郎”は自ら出頭し、テロリスト集団「爪」は瓦解した。「爪」によって破壊された町も政府が自衛隊を派遣する等、尽力つくしたおかげで順調に復興は進む。

町の中心地には相変わらず謎の超巨大な木が鎮座したままだが、調味市は概ね元の平和な日常へ戻っていったー

弱くてニューゲーム

青空が見える昼下がり。

“ 霊とか相談所 ” は営業再開に向けて従業員総出「といっても所長とバイトとマス

コットの三人だけが」で準備にとりかかっていた。

さして広くない事務所の床には段ボールの箱がいくつか並んでおり、それがより空間を手狭にしている。

「へへ。火事の原因、放火じゃなくてただの漏電だったのかよ」

「ああ。ネズミが配線かじつたらしくてな。おかげで火災保険も下りたし新しい事務所
で再スタートだな」

放火疑って悪かったよ「爪」組織。

いや別に謝らなくていいか。

疑われるようなことやってる方が悪い。

疑わしきはとりあえず一発殴るが俺の信条だ。

「にしても……まだ殺風景だな」

段ボールの荷物が片付いてないのはまだ仕方ないとして、もう少し事務所に彩りが欲しいところである。霊とか相談所は誰でも気軽に相談ができるアットホームな雰囲気
がモットーだし。あ、そうだ。

「モブ。あれやってくれ」

そういう指さしたのは新たに買ったばかりの観葉植物だった。

霊幻の言わんとすることに気づいた茂夫は「はい」とそばにあった観葉植物に力を注

ぐ。

スルスルと成長していく植物を見てるうち、茂夫の頭でカチリと何かが嵌まって動いた。

「あ……学ランの穴……思い出した……」

“ほらバイト代”

そう言つて師匠に渡されたけど、そのままにしてたんだ。

「ポツケに入れてたの……プロッコリーの種だ」

「プロッコリー？て、アレは?」

まさか……!

二人同時に外にみえる謎の巨大植物を見る。

一度確信持つてしまえば、もうそれにしか見えない。

謎の巨大植物の正体はー超・超・超! 巨大なプロッコリーだったのだ!!

「師匠あれつて……」

どうしよう……と冷や汗流す弟子の隣で師匠の靈幻はフツと小さく笑う。

慌てるな我が弟子よ。こういうときはなー

「ま……見なかったことにして一旦忘れよう」

未来のことは未来の俺たちに任せるのが「精神衛生上」正しい判断だ。

町中に巨大ブロッコリー生やしたらどんな罪になるのかとか考えたくない。

今世は前科なしの善良な一般市民として生きるって決めたんだ。

警察に捕まってたまるか！

……ま、なんとかなるだろ、たぶん。

生えたのがブロッコリーでまだよかった。

これで巨大化させたのが虫や動物などの生物だったら被害はさらに大きくなっていただろう

……実際前世で……その……黒いアレを○ジラ並にデカくして……後が凄く大変だったし……うん……これ以上思い出さたくねえ……。

○キブリ、マジこわい。

今も普通サイズでも超ビビるくらい、完全俺のトラウマになっている。

あの時の“俺”よ。何故Gを巨大化させた。

「にしても遅いなあいつ……」

一度連絡入れてみるか？と携帯で連絡入れるより先に、がちやりと相談所の扉が開く。

「お来たか。入れよ」

霊幻に促され、相談所にやってきた人物は。

「影山君。先日はどうも」

「爪」の幹部の一人だった男、芹沢だった。

それも襦袢という個人的な格好でなく、群青色のスーツを身にまとっている。

「スーツ……?ここで働くんですか!？」

なんだよモブ、その驚きよう。

悪い男に引つかかった女友達が今度は別の悪い男と付き合い始めた話聞いた女子の
ような反応しやがって。

「うん。あの後霊幻さんが誘ってくれたんだ。俺にもできることがあるって……それに
……組織が迷惑をかけたし償いも兼ねて……」

「オウーうちは善良な社会づくりに貢献できるからピッタリだぜー!」

これからよろしくな!と笑いかける霊幻に。

「ははははい!頑張ります!」

芹沢はカチンコチンに強ばった顔で返事した。

「もうじき依頼人が来る。その前にこれだな。そのままじゃ仕事にならん」

客商売の基本は身だしなみから。

ニヤリと笑いながら霊幻が手にしたもの、それはバリカンだった。

「お。すげえな」

相談所の床にこんもりと剃られた髪の手がでできる。

「ま〜ひとまず客商売できる身なりにはなったか」

しかし剃り甲斐のある髪だったな。

モコモコ羊の毛刈りしてるようで面白かったし、またバリカンさせてほしい。

「きやきやきや客商売!?!お客さんが来たら俺はどう動けば!?!」

いや落ち着けて。お前一応会社「※テロ集団」で働いてただろうが。

「前の会社では?」

「とりあえず敵意を感じたら傘で殴れって指示だったんで……」

「なんだそりゃ」

なんとというアバウト命令。

行き当たりばったりな世界征服といい、強い超能力者は性格が大雑把になる法則でも

あるのか?

「ま〜うちも大体同じ。後わからないことがあったら先輩に聞いてくれ。モブ。研修期間が終わるまでいろいろ教えてやってくれ」

喜ベモブ。先輩ができたぞ。

肉体改造部に一年はいないって言ってたし、モブにとって人生初の後輩だな。

「よろしくお願ひします!・影山先輩!」

「え……あ……よろしくお願いします」

ビシッと礼儀よく茂夫に頭下げる芹沢につられて、茂夫もわたわたと頭を下げる。うんうん、二人の仲が良好なのはいいことだ。

会社辞める理由第一位は職場の人間関係だからな。

給料の低さで辞める人間は意外と少ない。

……い、一応芹沢にはまともな賃金出すつもりだぞ？

再就職先がブラック会社とか不憫すぎるし。

「すいませ〜ん」

お、新生・霊とか相談所の記念すべき第一号のお客様ご登場だ。

「あくど〜もど〜も。散らかってすみません。そちらにおかけください。芹沢。お茶をお出しして」

「お……おとおおお茶？す……すみません淹れたことが……」

え、芹沢ってボスの護衛だったのにお茶出したことないの？

そう不思議に思っって首を傾げたとき。

“ 本日は〇〇産のコーヒーです ”

一瞬、前世のとある光景が頭をかすった。

……ま。会社「組織」によって違うか。

芹沢の社会復帰への道は遠い。

「だめだこりゃ」

お茶を淹れることすらままならない芹沢に、エクボが呆れの声をあげる。

まあ、気長に付き合っていこうじゃないか。

俺だってマシな人間になるまで、とてつもない労力と時間がかかった。

それこそいっぺん死んで人生やり直ししないといけないくらいに。

「早速先輩の出番だな。モブ、芹沢に茶の淹れ方教えてやれ」

相談所の片付けに新人教育。

これから忙しくなりそうだ。

世界征服を企む超能力集団は壊滅し、町に平穏な日常が戻った。全焼した事務所も無事再建できて俺もハッピー皆ハッピー。

さらに新たなメンバーが加わったことにより、“霊とか相談所”の戦力が大幅アップした。

もうどんな敵が相手でも負ける気がしない！

妖怪でも神様でも宇宙人でも超能力者でも何でもかかってこいや！

全部まとめて相手にしてやるぜ！

モブと芹沢、おまけのエクボが！！

どんとこい超常現象！！

弱くてニューゲーム「完」
…?

ある霊幻新隆の話①

前回のあらすじ

霊幻「芹沢が淹れた茶、濃すぎて客が噎せてた」

世の中には未だ科学では解明できない怪奇現象が確かに存在する。
人々はそれらと出くわしたとき、為す術もなくただ恐怖の闇に突き落とされてしま
う。

そんな混沌とした闇に一筋の光を射すべく、日々戦い続ける者達がいた……。
人々は彼らをこう呼んだ。

“ 霊能力者 ” と。

そしてー

怪奇現象は悪霊の専売特許ではない。

常識から外れた不可思議な力を持った人間もまた確かに存在する。

人々は彼らをこう呼んだ。

“ 超能力者 ” と。

これは “ 霊能力者 ” を自称する “ 超能力者 ” だった男の物語であるー

弱くてニューゲーム

万物は流転する。

かつて古代ギリシヤの哲人ヘラクレイトスが遺した言葉だ。

この世にあるすべてのものは、絶え間なく変化してとどまることがない。

秋から冬へと移ろいゆく季節しかり、街のシンボルだった調味市タワーの代わりにそびえ立つ超巨大プロッコリーしかり。そして――

「今から重要な仕事を任せる――頼んだぞ芹沢」

「は、はははい頑張りますー!」

靈とか相談所もまたしかり。

長らく靈幻とバイト（弟子）の茂夫の二人で細々やってきた事務所に新たな従業員が入った。

芹沢克也。

超能力集団“爪”に所属していた男だったが、紆余曲折あつて現在靈とか相談所で働いている。

重要な仕事……いったい何をするんだろう。

“爪”にいた頃はボスの指示で『敵意を感じたら傘でぶん殴る』という荒っぽいことをしていた芹沢。

固唾をのみ身構える芹沢に対し、靈幻が差し出したのは。

「予約客がくる前にトイレ綺麗にしといてくれ」

掃除道具一式だった。

「そ、掃除ですか」

重要な仕事が掃除？

困惑した表情で洗剤やブラシの入ったバケツを受け取る芹沢をみて、靈幻はコホンと軽く咳払いする。

「接客業において清潔感は大重要だ。便所が汚いと客のリピーター率が下がるデータがあるくらいだからな。何よりー常に部屋の浄化を心がけなければ”やつら”が湧いてくる。それはなんとしても阻止しないといけない」

「やつら……（確かに悪霊や呪いといった類いは淀んだ負のオーラを好む。常に空間を清潔を保つことは霊能商売において重要なんだな……）わかりました」

「ああ、頼んだぞ（本当、油断するとすぐ発生するからな……ごきげん）
やつらは恐ろしくて危険だ。」

世界を滅ぼす力を持っている。

……黒……群れ……うっ、頭が……

ガチャ。

「お疲れ様です……て、何してるんですか師匠。」

学校帰りの茂夫が扉を開いて真っ先にみえたもの。

それは己の師匠が机に突っ伏したまま、うんうん唸つてるといふ珍妙な光景だった。

「……ちよつと手強い呪い(前世の記憶)湧いたからセルフ除霊しててな……どうしたモブ。なんだか浮かない顔してるぞ」

「(僕より師匠の方が顔色悪いと思うけど……)実は今日学校でこんなアンケートもらつて……」

そう言つて茂夫が見せた紙は靈幻にとつて見覚えのあるものだった。

“ 進路調査アンケート ”

「へえ懐かしいなそれ。俺も学生時代にこういうの書かされたなあ」

将来のことなんて前世でも今世でも具体的なビジョンなくて適当に書いたような

……何書いたっけ? うーん………忘れた!

「ま、お前はよかつたな。将来の働き口が確保できてて」

「はい?」

「ここだよここ。転職だろお前の？はははははは」

霊幻的にはこの後茂夫が“そうなんですかね？”と首をかしげつつ“じゃあ就職決まらず困ったときはお願いします”なんて冗談交じりの軽い返事をするのを待っていたが。

「あの。これアルバイトじゃないですか」

霊幻が考えるよりずっと茂夫は真面目に将来を考えていた。

時給300円でたまに現物支給にもなるし。正社員で働くにはちよつと……

……もうテレパシストじゃないのにモブの心の声が聞こえた気がする。

確かに時給300円の将来性のない職場には就職したくないよな。

て、いかんいかん。所長の俺が霊とか相談所の未来悲観してどうする。

「いいやわからんぞ。将来的には正社員を数名抱えた立派な事務所になる可能性もある」

あと美人秘書もいたら最高だけどな。まあこんな胡散臭い職場で働きたいなんて物好きな美人秘書なんて現れないだろうけど。

「将来ですか……」

茂夫は少し考え込んだ後、おもむろに口を開く。

「霊幻師匠って中学の時からこの相談所をやるうと思ってたんですか？」

「あ？んなわけないだろ。どんな中学生だよそれ」

こんな怪しい仕事やるうなんて考える中学生いたら世も末だ。

詐欺師の素質あるぜ。

「じゃあ何でやるうと思ってたんですか？」

「えっ！なんでってそりゃ……」

前の仕事が平凡でつまらなかつたから。

なんて馬鹿正直に言えるわけもなく。

「あれだ。ある時……自分には希有な特殊能力があるって気づいたんだが……ちよ
どその時の仕事もだいたい究めちまつてさ。新たなことに挑戦しようと思つたんだ
よ」

師匠っぽく適当に誤魔化した。

実際は希有な特殊能力どころか力全て失つただけだな。

ノー超能力ライフ慣れるまで大変だった……（遠い目）

「仕事も究めて自分で事務所も開いて……やっぱり師匠はすごいですね」

「……………まあな！」

人間頑張ればなんとかなるもんだ！

ギー……ガチャ。

「トイレ掃除終わりました」

「おう。つていちいち全部の報告しなくていいからな」

「は……はい！」

まだ仕事に慣れてないのか上司である靈幻に少々ぎこちない様子の芹沢だが、ふと茂夫の存在に気づき、掃除道具持ったまま、ぺこりと頭をさげた。

「茂夫君。お疲れ様です」

「あ。どうも」

芹沢につられて茂夫も頭をさげる。

従業員同士の挨拶を交わした後、時計確認した靈幻がもうこんな時間かと小さく呟く。

「そろそろ依頼人が来る。いいか芹沢よ！正式採用されたからといってもお前はまだホヤホヤのルーキーだ！」

声を張り上げビシッと芹沢を指さす。

「俺の客対応をよく見てノウハウを学ぶんだぞ」

「は、ハイ！」

ふふんと偉そうにふんぞり返る靈幻に対し緊張した面持ちで威勢良く返事する芹沢。そんな二人を見て

(師匠の方が年下なのに)

心の中で突っ込む茂夫だった。

コンコン、ガチャ。

「失礼しまーす……予約してた○○ですが」

ノックの音と共に人が中に入ってくる。

それは約束の依頼人であり、げっそりとやつれた様相した中年の男だった。

男は陰鬱な表情で靈幻たちへの挨拶もそこそこに、持参してきた紙袋から何かを取り出す。

「旅先の古物商で見つけた置物です。思い返せばこれを手にした時から嫌な事ばかり起きてる気がしてまともに眠れません……」

そういつて男がテーブルの上に置いたのは、手のひらサイズの薄汚れた埴輪の置物だった。

「顔色も悪いと言われるようになったし……霊視していただけますか!？」

「かしこまりました。うん。ほうほう。ん?」

呪いの品を手にとって隅々まで確認し気づく。

あ。底に値札貼つてら。

500円。

(やつす)

「ちなみにいくらで購入されました？」

「8万円です」

(たっか)

高額転売かよ。ボロい商売してんな。

たく、こちとら経営カツカツだというのに。

内心ため息吐きつつ、埴輪をテーブルに置く。

値札の500円といい、年季の入った曰く付きつてわけじやなさそうだ。

おそらく依頼人の思い込み、気のせいだろう。

「私が確認したところ霊的なものは一切……」

病は気から。

適当に洗って綺麗にすれば大丈夫だろう。重曹で汚れ落ちつかない。

汚れ度合いを確認しようとして軽い気持ちで再度霊幻が置物を手を取ろうとしたとき

だった。

「師匠。その置物それ以上触らない方がいいですよ」

思いもよらない弟子の忠告に靈幻の手が止まる。

「あ?」

怪訝な声をあげる靈幻を尻目に茂夫は真顔で置物を凝視していた。

「怨念っていうのかな。いろいろ嫌なものが渦巻いてますけど。多分このままにしておく結構危ないと思います」

え、このワンコイン埴輪、そんなにヤバいの?

再度置物をじーつと観察してみる靈幻だが、今世では靈感ゼロなので当然禍々しい気配など一ミリも感じ取れない。

ただの埴輪だ。

「……やっぱりお祓いしておきましょう。一旦上のカフェでお待ちいただけますか」

すぐさま己の言葉を撤回した靈幻は依頼人を一時避難させ、相談所には三人だけになった。

「モブの見解はわかった。で、芹沢。お前はどうか?」

「俺ですか?」

靈幻から急に話を振られ一瞬戸惑うも芹沢は置物をチラ見しながら己の意見を述べる。

「俺から見てもかなり凶悪な置物にしか見えませんが……」

芹沢の返答に靈幻は「はーやれやれ」と言わんばかりに大げさなまでに深いため息を吐く。

トイレ掃除とかどうでもいいことは律儀に報告するのに、一番報告してほしいところでも何も言わず黙ってるだけとは全く。俺が呪われて死んだらどうする。

「芹沢よ。なぜそれを言わずにポーツと見てた？」

「え？」

「もし俺が本気で呪いに気づいていなかったら大問題だったぞ」

「え!?!」

「お前が俺の間違いに気づくどうかテストしてたんだよ」

「なっ!?!」

この人は俺を試すためにこんな危険なものに顔色一つ変えず平然と触ってたというのか……!

靈幻の胆力に驚嘆しつつ、これが自分へのテストだと知り愕然とする芹沢。

「じゃ、じゃあ俺は……」

所長の真意に気づくことができなかつた。

これではテスト失敗、辞めさせられる……!?!

青ざめる芹沢を落ち着かせるように靈幻はポンと軽く肩を叩く。

「ま、ルーキーだからここは大目に見よう。今から挽回してみるか？」

「！」

「一人で祓ってみろ」

「は……はい！」

よしよし。自然な流れで芹沢一人に除霊させるよう誘導できたぞ。

こいつの実力わからんからな、頼むー即戦力であつてくれー！

心の中で念じてる靈幻をよそに芹沢は真剣な顔つきで置物に向かつて手をかざす。

数秒後。

「やりました」

芹沢が除霊完了の報告するも。

……全然わかんねえ！

今世ではただの一般人でしかない靈幻にはどうなったか何も視えない。

ただの埴輪だ。

「どうだ？モブ」

ちゃんと除霊できてるか？と隣にいる弟子にこそつと耳打ちして確認する。

「綺麗に全部消えましたね。芹沢さんの力強いですよ」

モブのお墨付き即戦力やつたぜ。

「力は申し分なし、まあ及第点つてとこだな。いいか芹沢。情報の共有は重要だ。報告・連絡・相談！ほうれんそうと覚えておけ！」

「は、はい！」

よかつたこれで挽回できた……と胸をなで下ろしつつ芹沢が自分で除霊した置物へ再度目をやるも。

「あつーさっきの衝撃で……」

ポツキリ折れた埴輪の腕がテーブルの上に転がっていた。

「お……俺のせいで8万円の置物が〜！」

バリア張ったり物を動かす力はあつても、壊れた物を元に戻す力は持っていない。

直せないとすれば弁償する他ないが……。

芹沢の頭の中でグルグルと諭吉のお札が回る。財布に8万なんて大金入ってない、すぐさまお金を用意するには。

「ちよつと消費者金融つてきまーす！」

「待てー！」

半泣きで部屋を飛びだそうとする芹沢を霊幻が制止する。

「安心しろ。俺がなんとかする」

こんな安物、接着剤使うまでもない。

霊幻がおもむろに懐から取り出したるはコンビニのツナマヨおにぎり。
敵かな顔で指に米粒をいくつかひっつけ、埴輪の腕と本体もってー

「米粒ビッグバーン！」

全力でくつつけた。

“ 米粒ビッグバーン ”

米粒の潜在能力を最大まで解放する霊幻の必殺技である。

少しの静寂の後。霊幻がゆっくり手を離すとー

「な！直ったー!!」

米粒の力でピツタリくつつき、綺麗に直った埴輪がそこにあつた。

(す、すごい、超能力使わず……！)

この瞬間芹沢は霊幻の底知れない実力に感動し世界の広さを知つたという。

(ご飯粒って接着剤の代わりになるんだ……)

ついでに現代っ子の茂夫もちよつと感動した。

おばあちゃんの知恵袋は偉大である。

その家はまさしく“悪霊が棲まう家”だった。

「私は……間違ひなく悪霊に取り憑かれています。これまで多くの霊能力者に掛け合つてみたが誰も悪霊を祓うことはできなかつた……」

鼻をつく悪臭が周囲に漂う中。

陰気な顔した男がぼそぼそと事情を話していく。

「ふむ……なるほど……私が思うに確実にいると思われま……」

周囲をチラチラ気にしながら話を聞く霊幻。

ぞわぞわと鳥肌が立ち、冷や汗が止まらない。

姿は見えないが気配を感じる……！

目の前に広がる異様な光景。

男の周りを囲うように、ゴミ袋の山が積み上がっていた。

「やはり！あなたに依頼してよかった！」

ペアッと明るい表情を浮かべる依頼人とは対照的に靈幻の顔は強ばりひきつっていた。

これまで靈とか相談所は数多の悪霊を退治し呪いも浄化した実績がある。

また仕事を選ばない（ただし人を呪う依頼は除く）ことにも定評ある靈幻だが。

この依頼に関してのみ、靈幻は引き受けたことを後悔していた。

（ゴ……ゴキブリ怖えー!!）

まさか依頼人の家がゴミ屋敷だったとは！電話の時点でわからなかった、失策！

「ちなみに……具体的にどのような原因でそう思われたのでしょうか？」

どこだ、いったいどこにいる……!?

依頼人の話を真摯に聞いてるようにみえて、靈幻の意識は完全に別のほうにいつていた。

「まず肩が重いのと金縛りにあいます。歯磨きしてるのに虫歯になったのも奇怪」

なんで今の俺超能力使えないんだ！

超能力あつたら今すぐバリア張ってガードしてるのに！

「おそらくバイトをクビになったのも悪霊のせいだ。女性社員の尻などなでていないの

に言いがかりで……」

カサカサっ

(ひっ！)

「たまに手の甲をかすめるだけだったのに……」

依頼人の後ろ横切った！ああっ、カーテンにも！

「悪霊のせいで恋人にも逃げられました」

俺も逃げたい。

「……ほう……恋人が……」

他の霊能力者たちが除霊失敗したのもこんなゴキブリ大量発生してるゴミ屋敷に長時間滞在できなかつたのが原因だろ絶対。

「ええ。若くていい子だったんですが金欠だと言ったら態度が急変して……まるで悪霊だ」

これが彼女です。と見せられた写真には。

「私の事タイプだと言ってたはずなのに……」

「……」

露出度の高い服に派手な化粧をした女が写っていた。

「ああ！異常に抜け毛が増えたのもありますね。まるで誰かにむしられてるかのよう

に」

「そうですか……（フサフサに恨みあるハゲの悪霊の仕業とかか？）ところでこのゴミの山は……」

「ゴミじゃない！私の財産だ！バリアーのようなものですね。囲まれてると安心して眠れるんです」

「ゴミ屋敷住人あるある。ゴミをゴミと認識しない。」

「バリアーですか……ん？」

ふと手元に写真立てが転がっていることに気付く。

「この写真は……」

何気なく手に取ろうとし。

「おぉーっ!!」

悲劇は起きた。

い、い、今つ、手にあ、あ、あああア、！

「昔の写真ですね。やんちゃしてた頃の」

て、手を洗いたい、消毒、消毒ー！！

心の中では泣き叫んでるが依頼人の手前、取り乱すわけにもいかない。

必死に平静を装いつつも、隣に居る弟子と一緒に改めて写真を確認する。

愛用のバイクと共に写る目の前にいる中年男の面影が残ってる若い青年。
なお青年の髪は。

(元々……)

既に後退していた。

かさ……かさ……かさ……

「……」

無言のまま、すくつとその場から立ち上がる靈幻に、横にいた茂夫と芹沢（靈幻と一緒にきており、芹沢は熱心に依頼人の話をメモしてる）が何事かと顔をあげる。

「お前ら……お客の話聞いててくれ……」

そう二人に指示する靈幻の顔色はまるで悪霊に憑かれたかのようにひどく悪かった。

かさ……かさ……かさ……

「俺は……強力なお祓い道具を取ってくる……」

今の俺は弱い。

やつら相手に丸腰は危険すぎる……！

「うっ……」

もう無理……吐きそう。

かさ……かさ……かさ……

「わかりました」

こくりと頷き了承する二人。

決して二人を見捨てて俺一人だけ逃げるわけじゃない。

あいつらならバリア張れるし、なんなら念動力で触らずに退治できるから放つても大丈夫だからだ。俺は二人の力を信じてる。

待つてろよ悪霊（ゴキブリ）たち、今世紀最大の霊能力者、霊幻新隆様が一匹残らず駆逐してやるからな……！

「670円が2点」

「540円が1点」

某有名コンビニ店。

大量の殺虫剤、駆除アイテム購入する霊幻の姿がそこにあった。

「あらっしましたー」

やる気ない店員の声に送られ、コンビニを出た霊幻。

『悪霊は奇麗な部屋が大の苦手だからな。これで……』

またあのゴミ屋敷に入るのは気が滅入るが……。

はあ……と陰鬱なため息を吐きつつも、これも仕事だと気持ち切り替え、前を向いたときだった。

「ん？な……何だこれ？」

霊幻はようやく異変に気付く。

それまで至って普通の景色だったはずなのに、周囲は妙な霧が充満し、あちこちで人々が倒れていた。

一体何が原因かときよろきよろ見渡し。

「おいおいおい……ゴミ屋敷の方か!？」

それはついさつきまで霊幻がいた家の上空。

得体の知れない謎物体がおどろおどろしく渦巻いている。

なんてことだ、まさか本物も潜んでたのかよ、やっぱり汚い空間は悪霊の温床になるんだな！……相談所の掃除、手を抜かないようしっかり芹沢に言い聞かせておこう。

『お前も頑張るなよ〜』

どこからともなく声が聞こえてくる。

「悪霊の子分か!？」

身構える霊幻をよそに、視えない何かは囁く。

『そんなに頑張るなよ。もう休もうよ』

「くっ……!」

耳元でしゃべるな!ゴミ屋敷から発生した悪霊なんてばっちい!

こうなったら。

膨らんだコンビニ袋の中に勢いよく手を突っ込みー

「ダブル水素水ー!ミストー!」

(水に溶解した水素ガスの力で悪霊の攻撃を防ぐ霊幻の必殺技である)

二つの水素ガスを同時噴射しながら、360度回転すれば水素バリアの死角なし!

しかしこの水素バリアは有限、長時間保たない。

ガス欠になる前に早くモブたちと合流しなければ……!!

霊幻はフィギュアスケートの高速スピンのごとく華麗にクルクル回りつつ、全速力で

依頼人の家へ向かったー

「な、なんとかガス切れる前にたどり着いた……うつぶ」

回りすぎて気持ち悪い……。

「てかこれだけ事態悪化してるのになんでモブと芹沢は除霊してない？ 全く、何のために二人置いていったと思ってるんだ！」

能力者が二人もいれば大丈夫だろと思ってたのに！ 俺の部下なら気を利かして先に除霊しとけっつーの！

そう一人憤ってる霊幻に対し。

ゴキブリ怖さで真っ先に逃げた人が言えた立場かよ。

そう突っ込める人は残念ながらこの場にいなかった。

「悪霊の悪霊による悪霊のための……」

外に居る悪霊の影響なのだろう。

元々陰気だった男がさらに暗く、異様とも言える暗鬱な雰囲気纏っており、また男の口から飛び出すのはもはや愚痴ではない意味不明な言葉だった。

「おいお前らー！何やってるー！」

襖を勢いよく開け、どうみても異常としか思えない依頼人を放置したまま、ぼけーつとして二人に対し力の限り叫ぶ。

「あつ師匠。帰ってたんですか」

「帰ってたんですか、じゃねー！」

お帰りなさいとのほほんと出迎える二人の腕を引つ張り外へ連れ出す。

「見ろー！悪霊が出てきちゃってんだよー！」

そう言つて靈幻が指さした先には、上空でとぐろ巻いてる異形の化け物がいた。

「あつ。ほんとだ。こんなに大きいのに取り憑かれてたんですね」

気がつかなかったなと緊張感0%で巨大な悪霊を見上げる茂夫の横で。

「いえ……あれ多分この人の生き霊だと思えます」

芹沢がかぶりを振つて訂正する。

何十年も心の内で燻つてた鬱憤が本体である依頼人にも影響し、その結果依頼人の魂は悪霊へと変質してしまつたのだろう。

「どつちでもいい。（前世の）俺じゃ力が強すぎて周りに被害が出ちまう（ところだった）。お前ら頼むぞ」

今回の依頼は本気のCコース、本物はもちろん、家に居る悪霊（ゴキブリ）たちまと

めてぶっ飛ばせ！

「はい」

二人の超能力者は空に浮かぶ巨大悪霊に向かって同時に力を放出する。

一人は巨大超能力組織No. 2の実力者であり、もう一人はそのボスを倒した世界最強超能力者。

その二人が放った力の威力は凄まじかった。

あっさりと上空の悪霊を消滅させるだけでなく、激しい力の奔流はそれ以外のものも容赦なく破壊する。

竜巻のごとく屋根を吹き飛ばし、さらに部屋を陣取ってたゴミ袋の山全て巻き上げ、どこかへ飛ばしていく。

「おお」

力の波動が収まり、ひとしきり落ち着いた後、霊幻が感嘆の声をあげる。

「この部屋こんなに広がったのか」

夕日に照らされるその部屋はどこまでも広く、開放的だった。

すつきり。

無事、悪靈（ゴキブリ含む）は退治した。

「どーもありがとうございました！」

靈幻たちに勢いよく頭をさげて礼を言う依頼人。

「おかげでこれからの人生前を向いて生きていけそうです」

心の内に溜まっていた鬱屈した感情が物理的（？）に奇麗さっぱり浄化されたことに

よって、最初のと看とは別人のように明るくなっていた。

「それはよかった」

ニコニコと愛想良く相づち打つも、靈幻の心中は穏やかではなかった。

「しかし……屋根が大変なことになってしまつて……」

チラつと靈幻が視線を向けた先には、屋根が吹っ飛び吹きさらしとなつた家。

除靈のため不可抗力とはいえ、家を半壊してしまつたのだ。

手痛い出費になるだろう。

ただでさえ新しい従業員雇つて財政状況厳しいというのに！

数十万、いや百万以上？くっ、賠償費いったいいくらだ……!?と戦々恐々な霊幻だが。

「ああ。まあ親が保険に入ってくれてたんで大丈夫です」

ネガティブ思考全て取っ払われ、ポジティブ思考になつてる依頼人は太っ腹だった。

(ほっ……)

助かった……。　「やはり頼りになるのは保険ですね(保険大事！俺もかけてて助かったし)ではこれも保険代わりに」

ススーッと自然な流れで名刺を渡す霊幻。

この家が再びゴミ屋敷になつてるといふぞつとしない話だが、そのときはあれだ。

有能な上司は部下達を信頼して現場に送り出すもの、モブたちに行かせて俺は一人留守番するから問題なし！

「ふう……ん？」

笑顔で依頼人と別れた後、あー疲れたと愚痴る霊幻だったが

「ううっ……」

背後でえづく声に気付いた。

何事かと振り返ると、振り返った先で芹沢が顔色悪く口元を抑えていた。

「どうした芹沢？気持ち悪いのか？」

芹沢が吐きそうになつてるのも無理もない。

あんなゴキブリまみれのゴミ屋敷に居続けたんだ、体調悪くならない方が可笑しいのだ。

水素水ミストでもかけてやれば多少は落ち着くか？

残量はまだあつたはず……あ、しまった、買ったグッズはあの家に全部置いてきたんだつた！

また買うか？でも意外と高いんだよなあ水素水……と悩む靈幻だったが、芹沢が暗い原因はゴキブリではなかつた。

「他人事とは思えない……俺も同じです……30年も生きてきて何も持つてない……」
依頼人と同じように己の人生を悔いていた。

そういやこいつ、爪に入るまでは引きこもりだつたつて言つてたな。

「いちいち客に影響受けてたらもたねーぞ。人生まだ折り返してもいねーだろ」
生きてりやこれからいくらでもやり直しはきく。

「これまでを後悔してるなら早めに気付けばラッキーじゃねえか。なあモブ」
そばにいる茂夫に同意を求める靈幻だが。

「僕も……今は他人事には聞こえない……」

茂夫もまた芹沢と同じくどんよりと暗い顔していた。

「お前も!」

なんでだモブ! 14歳で人生悲観するのはいくらなんでも早すぎるぞ!

「僕は……たまたま大きな失敗をしてないだけでいつかその瞬間が訪れるかも……想像すると自分の道を選ぶのが怖くなりますよ……」

「お前……そんなこと考えてたの? (ああ……ちょうど進路決めの季節だったな)」

来年受験生だから余計悩んでるんだろ。

まだ中学生なんだからそんな深刻に考えなくてもいいと思うけどなあ。

たとえ失敗したとしても、その後挽回すればいいだけの話だし。

「芹沢さんは大丈夫だと思います。あそこで働くといろんな人の話が聞けるし勉強になるから。でも……僕は……」

そう言ったときり茂夫は顔を俯き黙り込む。

なんともいえない沈黙が三人の間に広がる中。

「……よし! 今からラーメン食いに行くか!」

重苦しくなった空気を変えようと、霊幻がつとめて明るい声で言う。

「今から、ですか? 師匠」

「腹が減ってるからそんなネガティブ思考になるんだよ。ほら芹沢も突っ立ってないで早くこっちこいよ、置いてっちまうぞ」

「は、はいー！」

相談所の所長らしく部下二人を強引に行きつけのラーメン屋へ連れて行き。

「喜べお前ら。今日は好きなだけ食っていいぞ。トッピングも自由に選んでいいからな」

二人のメンタルケアのため、尽力を尽くした。

「え、いいんですか？いつもトッピングはチャーシュー2枚までって煩いの」

「じゃ、じゃあ……お言葉に甘えて……」

一人は訝しげに、もう一人はおずおずと。

各自それぞれ注文を決めていく。

「おう、ジャンジャン頼めよー」

依頼人に弁償費払わずに済んだおかげで懐はあたたかい。

たまにはこうして従業員たちにサービスしないとな！

ハっハっハっと余裕綽々な様子の靈幻は忘れていた。

バリバリの現役運動部（？）に所属してる男子中学生と働き盛りの30代男の食欲の恐ろしさを。

11時間後。

「ごちそうさまでした！」

美味しい物をお腹いっぱい食べ、満ち足りた表情してる茂夫と芹沢。

霊幻の目論見通り二人のメンタルは無事回復したが。

「……」

代わりに霊幻のメンタルと懐はダメージ受けた。

……トツピング。

チャーシュー2枚までにしとけばよかった。

霊幻 後悔100%

それから数日後のことだった。

「いろいろ考えたんですけど……僕の将来の進路希望は霊とか相談所じゃないと思つて」

茂夫が霊幻にそう告げたのは。

どこか思い詰めた様相で茂夫がやってきた時刻は夕方の〇時ちよつと過ぎ。

外の窓からオレンジの西日が差し込んでいる。

霊とか相談所に通い出してから数年。電話で呼び出される等特殊な場合を除き、茂夫は小学生から中学生になるまでずっとこの時間にいつも相談所に来ていた。

夕日に染まった事務所の中。

「……そうか」

霊幻がそう小さく呟くのと同時に机の下で霊幻の指がぴくりと動く。

「ここは居心地がいいし霊幻師匠に何でも相談できるけど……それが当たり前になると僕はこのまま年齢だけが大人になってしまふ気がするんです」

霊幻の目をまっすぐ見つめながら茂夫は己の率直な想いを伝えた。

「すみません霊幻師匠。将来ここに就職する約束できません」

「……」

相談所に沈黙がおりる。

茂夫から直接就職の件を断られ、靈幻もさぞ落胆あるいは動揺すると思いきや。

「はあ……モブよ。あんなのは冗談に決まってるだろ」

靈幻の表情は意外にも穏やかで落ち着いていた。

「これからやりたいことなんていくらでも見つかる」

苦笑しつつも、靈幻は茂夫に語っていく。

「この前聞いたよな。なんでこの相談所開いたかって。あん時はああ言ったがほんとはな。前の会社に飽きてただだの思い付きでこの相談所を始めたんだ」

靈とか相談所を始めた本当の理由を。

「最初は1年くらいで飽きてやめようかと思ってたんだけどな」

靈幻の脳裏に当時の記憶が蘇る。

殺風景な相談所、積み重なった煙草の吸い殻、一人だけの孤独な時間。

「丁度その時……」

そして――

靈幻の口元が緩む。

「ま、紆余曲折あつて現在に至るってわけだ」

「……」まで続くとは思わなかったけどなど肩をすくめてみせる。

「最初は単なる思いつきだったけど今はやりたいことになったって言っても嘘じゃねー

な」

超能力使えない不便だらけの人生だけど、案外そんなに悪くない。

「とにかく。やりたいことなんて別に仕事じゃなくていいしお前はお前の好きなように生きればいいんだ」

かといってただ感情の赴くままに好き勝手して周りに迷惑かけるのは駄目だけだな。

まあモブは“俺”じゃないし、そのへんの心配は不要か。

「靈幻師匠……はい！」

靈幻の話を聞いて心のつつかえがとれたのだろう、茂夫の顔は生き生きしており、とても晴れやかだった。

「ありがとうございしました！」

靈幻に一礼し、元氣よく事務所を出て行った。

……て。

「え……？まだ営業終わってないのに……」

モブがここにきてから1時間もたってない。

「戻ってくるの……か？」

帰ってこいモブ。このままだとお前……

今日のバイト代……ジュース一本も買えないぞ。